

マイ「艦これ」「みほ2ん」(第2部)

しろっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

く敏感な人にしか分かり得ない艦娘の気持ちく

事件は、お盆の秘書艦の軽い思い付きから始まった！

艦娘が墓参したり地上で戦車と戦闘。あげく逃げた深海棲艦との対話など、あり得ないこと連打！ ついには師匠が？

ピンキリすべて異色。もお付いて逝けないっぽい「みほちゃん」第二部！

※補足：2017—05より大規模改訂を開始。以下改訂しました。

第70話〈日向乱心〉改2

旧 第66話〈一蓮托生・日向乱心〉

第71話〈イツシヨ・ケンメー〉改

旧 第67話〈起床（浮上）〉

第72話〈艦娘よ永久に：終結〉改2

旧 第68話〈志士よ永久に：終結〉

改訂作業は9月で完了しました。

「暁, tinami, pixiv」にも同一内容を展開。

鳥取県西部の美保湾に面した「美保鎮守府」Ⅱ「みほちゃん」に着任した提督（オリ主）が、艦娘と共に敵に立ち向かう話。マイ「艦これ」「みほちゃん」（第一部）の続きで「美保鎮守府：第二部」略して「みほ2ん」。

ネタバレや細かい伏線を気にしない方は第一部を飛ばして、こちら

から読み始めてもOKです。前作に続き作者（オトナ）の「艦これ」ゲーム状況を設定に反映。

この小説はエロも残酷もない。艦娘も真面目一本（多少ツンデレ気味）。たまにギャグ入ります。

基本的に作者の馴染み艦娘がメイン。前半は夕立、後半は日向が活躍。オリ主以外にも独自の登場人物（人間）や独自設定の秘書艦1、独自駆逐艦1、独自妖精1あり。苦手な方はご注意ください。

ヘイトではありませんが根底に「靖国」等の軍国主義肯定表現があります。オトナの事情に、ご注意ください（笑）

★お願い（注意）★

この作品は「艦これ」の二次創作です。物語内の艦娘を除くすべての内容に実在あるいは実在したすべての組織、艦隊や艦艇、歴史上の人物、メカニズムや機械類などは、現実のものとは無関係にフィクションです。それを理解のうえ、お楽しみください。架空のものにも拘らず、ご意見をされても、そもそもが実在しないモノです。一切お答えや対処は出来かねます。

目次

第1話〈艦娘の故郷〉(改2)	1
第2話〈ぼいぼい〉(改2)	6
第3話〈珍道中の始まり〉(改2)	12
第4話〈解放感っぼい〉(改2)	17
第5話〈母親〉(改2)	21
第6話〈意外と夕立も〉(改2)	27
第7話〈軍用車で出発〉(改2)	32
第8話〈遭遇の十字路〉(改2)	36
第9話〈共同墓地〉(改2)	40
第10話〈一緒に靖国〉(改2)	46
第11話〈基地のある街〉(改2)	50
第12話〈5分間〉(改2)	53
第13話〈武運長久を〉(改2)	57
第14話〈攻撃待機〉(改2)	60
第15話〈強襲〉(改2)	63
第16話〈市街戦と盾〉(改2)	67
第17話〈自由と憎しみ〉(改2)	70
第18話〈犠牲〉(改2・1)	74
第19話〈彷徨う艦〉(改2)	77
第20話〈形勢逆転〉(改2)	80
第21話〈艦娘の絆〉(改2)	83
第22話〈潜伏と青空〉(改2)	89
第23話〈損傷と静寂〉(改2)	93
第24話〈ぜかまし〉(改2)	97

第25話	〈島風と反撃〉(改2)	100
第26話	〈要撃〉(改2)	105
第27話	〈空母機動部隊〉(改2)	109
第28話	〈憲兵と陸軍〉(改2)	113
第29話	〈バカな司令官〉(改2)	118
第30話	〈準備の裏に〉(改2)	122
第31話	〈新緑と赤面〉(改2)	126
第32話	〈瑞雲〉(改2)	131
第33話	〈炎天下〉(改2)	134
第34話	〈敗残兵〉(改2)	138
第35話	〈針のムシロ〉(改2)	143
第36話	〈海軍の兵士〉(改2)	147
第37話	〈暖かい手〉(改2)	150
第38話	〈偽善者〉(改2)	154
第39話	〈天国か地獄〉(改2)	157
第40話	〈海岸道路へ〉(改2)	162
第41話	〈タフガール再び〉(改)	165
第42話	〈波状攻撃〉(改)	169
第43話	〈決断〉(改)	175
第44話	〈日向の涙〉(改)	180
第45話	〈対抗意識〉(改)	186
第46話	〈Hey、提督ウ〉(改)	192
第47話	〈姉妹艦〉(改)	197
第48話	〈帰還報告〉(改)	201
第49話	〈思い出と確信〉(改)	206

第50話	〈寛代の変化〉(改1. 2)	209
第51話	〈墓参前騒動〉(改)	215
第52話	〈電気羊の夢〉(改2. 2)	221
第53話	〈お盆休暇〉(改2. 2)	229
第54話	〈用意周到〉(改2. 2)	237
第55話	〈侮れない艦娘〉(改2)	243
第56話	〈大和撫子〉(新)	248
第57話	〈龍田さんの想い〉(新)	253
第58話	〈艦娘と浴衣〉(改2)	257
第59話	〈艦娘の志〉(改2)	260
第60話	〈平和なひと時〉(改2)	264
第61話	〈浴衣娘〉(改2)	269
第62話	〈艦娘の剛と柔〉(改2)	274
第63話	〈喧騒と旧友〉(改2)	279
第64話	〈盆踊り会場〉(改2)	283
第65話	〈星空とベンチ〉(改2)	287
第66話	〈因縁の戦い〉(改2)	291
第67話	〈まつりごと〉(改2)	295
第68話	〈昨日の敵は今日の艦娘〉(改2)	300
第69話	〈お袋の味〉(改2)	306
第70話	〈日向乱心〉(改2)	312
第71話	〈イツショー・ケンメイ〉(改2)	316
第72話	〈艦娘よ永久に：終結〉(改2)	323

第1話〈艦娘の故郷〉（改2）

「艦娘って、帰省するののか？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第1話 〈艦娘の故郷〉（改2）

美保鎮守府の朝。私は執務室に居た。

「今朝も良い天気になったな」

書類を置いて事務作業を中断した私は軽く腕を伸ばす。それから立ち上がって執務室から美保湾を望んだ。開け放った窓からは緩い風が流れ込んでいる。

昨日は、まさかの港湾内での激戦。鎮守府の全員が徹夜だった。それでも敵を撃退したから良かった。

結果的には呉や神戸、舞鶴の作戦参謀たちも巻き込んでしまった。そんな彼らも昨日のうちに全員無事に所属の鎮守府へ送り出した。個人的には舞鶴との間にあった誤解が解けて良かった。

ついでに彼と北上との確執も

「……まあ、解決されたのかな？」

私は苦笑した。

「そういえば、あいつの」

私は頭に手をやって思い出す。彼の兄……軍で医師をやっているという人物が気になった。問題児なのだろうか？

「まあ良いや。それは追々調べていこう」

私は頭を振った。せつかく良い気分なのに面倒なことは御免だ。

「やて……と」

私は再び机に戻る。

実にバタバタした数日間だった。挙句に戦闘か……。

それでも昨日のドンパチ分の軍令部に出す報告書は秘書艦の祥高

さんと一緒に突貫工事で片付けて昨日のうちに提出した。その後は特に軍部からも内容への物言いは付いていない。だから今朝は気分的にもホツとしているのだ。

今朝から埠頭では重機の音が響く。昨夜攻撃されて破壊した南埠頭を修理しているのだ。美保鎮守府で特定契約している地元の土建業者が入って工事をしている。一部は昨日から早速入って貰った。埠頭さえ元に戻れば直ぐにでも艦隊運用が再開出来るわけだ。

そもそも昨日みたいに港湾内で戦闘を、おっ始めたら施設だけでなく艦艇にも多少の被害が出ていたはずだ。でも艦娘は本人たちが鎮守府内で逃げ回れば何とかなる。実際、昨日の艦娘への被害は皆無だった。

「そうか艦娘には、そういう利点もあるんだ」

私は自分で納得した。そう思うとなぜか得意そうな、あの青年将校の顔が思い出された。艦娘は不思議な存在だな。

一昨日の彼とのやり取りにも、すっかり応対してくれた祥高さん。彼女は、さつきから戦闘やら、その後の艦娘の着任処理の調整で鎮守府内を走り回っている。

本当にタフな秘書艦だと思う。それでいて文句も言わない。彼女は、どちらかといえば寡黙なタイプだ。こういう部下は指揮官としては助かる。

私は机の上を見た。そこには祥高さんが置いた『南埠頭修繕工事計画書』というファイルがある。計画によれば今週中には埠頭の基本工事が完了する。

「一週間……」

私は壁の暦を見た。気が付けば8月だ。時の流れは速い。お盆を前にして美保も若干は気温が下がってきた。朝晩も涼しい風が吹く。

実は私の母親には美保への着任のことは手紙で伝えてある。軍隊の司令職といえれば世間的にも認められる立場だ。だから多分、喜んでくれたことだろう。

「しかし実は艦娘の司令でした……なんてね」

私は苦笑した。この説明は実際に面倒そうだ。そもそも艦娘とい

う存在が、まだ世間的に、あまり認知されていない。機密までは行かないが、海軍省もまだ積極的に一般国民に宣伝はしていない。「知る人ぞ知る」といったところか。

まあ艦娘は置いておいても、母親は私が地元に戻って来ていることは知っていても、こちらの細かい状況は分かり難いだろう。

そういえば私の父も空軍の操縦士だったが、今思えば彼も謎が多かった。やはり軍事機密か？

「まあ軍人なんて、そんなものだ」

私は自分に言い聞かせるように呟いた。だいたい艦娘自体が謎めいているからな。

ちよつと集中が途切れた私は、ポーつと壁の暦を見ていた。

「あ、よく見たら来週は、もうお盆か……墓参の季節だな」

私も実家の墓参なんて、もう何年もご無沙汰だ。帰省もロクにしなかったから。でも、せっかく地元に着任しているんだ。今年くらいは墓参り行くべきかな？

……そこで、ふと思った。

「艦娘は、お盆に帰省とか、するのかわ？」

いやそれ以前に、艦娘の素性や生い立ちについては、まったく知らない。そもそも艦娘は普通の人間じゃないから分かるはずも無いかわ？」

「戻りました」

秘書艦の祥高さんが書類の束を抱えて執務室に帰ってきた。私は今の疑問を彼女に尋ねてみた。

「戻って早々変な質問だけど……艦娘って帰省するのかわ？」

書類を整理していた彼女は、その手を止めると一瞬、考えた。

「帰省という概念が当てはまるかわかりませんが……強いて言えば海軍工廠とか造船工場でしょうか？」

「あ、そうか」

納得したような、良く分からないような。

「もつとも休暇に自分の造船所とか生まれ故郷へ足を向ける艦娘は、ほとんどいないでしょうね」

彼女は苦笑する。

「やっぱりそうなんだ」

彼女らは生まれた時点で既に一人前だ。人間的な幼少時代とか親戚や血縁すらない。だから「故郷」という郷愁も湧かないか。

「ただ……」

祥高さんが続ける。

「出生地よりも自分たちを鍛えてくれた戦場や鎮守府、同じ部隊内での艦娘同士の共通の戦歴そのものが彼女たちの心の故郷となり得ますね」

祥高さんは淡々と続けた。それって、まさに「軍人」そのものだな。やはり彼女たちは生まれながらにして戦うべき宿命を背負っているのか。フム、妙に納得した。

「で……司令は帰省されますか？」

いきなり祥高さんに切り返されて、こっちがビックリした。

「あ、いやあ……」

何故か頭に手をやってシドロモドロになってる私。

彼女は続ける。

「内規では私たち艦娘と違って司令は疲労回復のため休暇も認められています」

……それは、まるで辞典を読んでいるみたいな言い方だな。

「居場所の確認と……常に通信可能な環境下であれば日数をまとめて休暇取得することも可能です」

「え……」

直ぐに、あの駆逐艦の寛代を連れまわした自分の姿が想像できた。「いや私の地元は直ぐそばだ。改めて、そこまでする必要もないだろう」

(だいたい、あんな小さな子を連れて地元をウロウロしたら、どこで誰に見られるか分からない)

私は妄想を膨らませた。地元の知り合いに出くわして「お嬢様ですか?」……なんて聞かれた日にゃ、どう応えるんだ? 恥ずかしい。いちいち説明するのも億劫(おっくう)だ。

だが祥高さん、いきなりカットインしてくる。

「司令が否定されても現在のお立場上、護衛艦を必ず一人以上、随伴して頂きます」

「え?」

思わず妙な声が出た……何か、話が勝手に進んでいないか?

「えーっと、護衛艦必須?」

頭が付いて来ない。私は妄想の世界から強引に現実に戻された感覚だ。

「そうなるよ、祥高さんとか大淀さん以外の?」

今度はキリツとした二人を引き連れる光景が妄想された。やめてくれ。

(どうせなら、ちよつとボーつとした艦娘が良いな)

そう思ったら彼女が追撃してくる。

「ご安心下さい。私たちが地上で行動する時は艤装が装着出来ません。ですから原則的に護衛役には駆逐艦以上、軽巡級以下の艦娘が同伴します」

どんどん、話が進む。あれあれ?

(祥高さん、もうあなた作戦参謀になったら良いよ)

「軽巡以下で強い娘……」

嫌な予感しかしない。天龍とか龍田さんだと別の意味で輪をかけて、ややこしくなりそうだ。堪らず私は立ち上がると再び美保湾を見た。大山が綺麗だ。

私が窓の外を見ながら一人で悶々していると名簿を見ていた祥高さんが顔を上げた。

「司令、夕立がお勧めです」

「へ? ……夕立い?」

居たんだ、そんな艦娘。あれ? どっかで聞いたことはある。

第2話〈ぼいぼい〉(改2)

「善は急げっぼい」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

・第2話〈ぼいぼい〉(改2)

「夕立?」

私の問いに祥高さんは応える。

「はい。戦闘能力は高いですし何よりも、この子は敵を恐れませんが護衛艦としては最適です……ただ」

彼女は話を止めた。

「ただ?」

なんだ? 気になるな。

「彼女は、とても独特の喋り方をするので司令のご親族には少し誤解を招くかも知れません」

「何だ、そんなことか」

私はホッと安心すると同時に、それなら最初からもつと、まともな艦娘にして欲しいなと思った。

しかし私の思いとは裏腹に彼女さんは続ける。

「でも基本的に夕立は前向きで悪い娘ではありません」

いや艦娘たちが良い娘ばかりだ……ってのは十分、知ってる。

「そんなに『推し』なのか?」

ニコニコして内線を取る彼女。

「まずは、呼びましょう」

「ちよ、ちよっと!」

有無を言わさず、彼女は夕立を呼び出した。

「結局もう、呼ぶのか?」

「はい、善は急げと申します」

……ちよつと違うよな。

(コンコン)

「どうぞ」

祥高さんが返事をする。

(あああ、もう来ちゃったぞ)

私は変な汗が出てきて帽子を取った。

やや長身でスラっとした金髪の少女が入ってきた。

「失礼します……ぼい？」

「ぼいっ？」

そうか、これが口癖か。

「初めまして司令。私が夕立です……ぼい」

敬礼した彼女は金髪に学生服のような軍服を着ている。

しかもよく見ると、この艦娘は目の色も黒じゃなくて緑色だ。

「もしかして君はハーフか？」

つい聞いてしまった。彼女はニコニコして返事をする。

「ううん、違うっぼい」

バカな質問をした私。思わず苦笑した。帝国海軍の艦娘だから日本人だよ。

夕立は後ろに腕を組んで祥高さんと私を交互に見ながら言った。

「もう、実家へ行くっぼい？」

「ええーっと……あれ？」

私は祥高さんを振り返った。

「彼女には、どこまで話を通っているんだ？」

「司令が墓参をする可能性があるので実家まで護衛をして下さいと伝達してあります」

平然と応える彼女。もはや影の作戦参謀だな。

「昨夜のゴタゴタがありますから、さすがの敵も恐らく今日なら攻めて来ないと思われれます」

「ええ？ そうか？」

しかし、そんな都合の良い解釈が果たして深海棲艦の連中に通用するののか？

私が怯（ひる）んでいると祥高さん、なおも畳み掛けてくる。

「幸い司令のご実家は境港市内と伺っております。万が一、敵が来て

も直ぐに、ご対応頂けるでしょう。問題はありません」

「そりや確かに不可能じゃあないけど」

(何、仕切ってんだよ?)

「善は急げっぽい」

止める間もなく夕立が元気に手を上げた。

「では」

祥高さんも決定したように言う。やれやれ……結局、押し切られたような気がする。

それでも若干、抵抗するように私は質問する。

「だが行くとしても準備が」

「既に軍用車も下に準備されています」

「は?」

……結局、こうなるのか。腹が痛くなってきた。

「今日の運転手は日向さんをお願いしました」

「日向?」

私が素つ頓狂な声を出すと彼女は不思議な表情をした。

「何か問題でもありますか?」

「いや……無い。むしろ適任すぎる」

私は苦笑した。

そういえば日向が運転する姿なんて初めてだ。もつとも彼女は航空戦艦だから戦闘機も同時多発的に操れる。運転なんて軽いだらう。つくづく艦娘は器用だな。

祥高さんは言う。

「無線担当として寛代ちゃんも同行しますが……宜しいですね?」

「やっぱり」

「は?」

「いや、なんでもない」

私は慌てて取り繕った。

まあ二人つきりじゃないから仮に境港で幼馴染とかに出会っても問題ないか。日向と夕立もいるから他人が私たち一行を見ても妙な誤解は招かないだろう。

祥高さんは内線で車庫に連絡を居れた。既に日向と寛代が準備出来ている。手回しが良いな。

「では、ご案内しましょう」

祥高さんが立ち上がる。

「ああ」

私も制帽を持って立ち上がった。半ば強引だが彼女のやっていることに無駄はない。冗談抜きで作戦参謀みたいなものだ。こうなったら大人しく従うしかない。

その時、祥高さんがカギ付きのロッカーを開けて何かを差し出した。

「使い方は、ご存知ですよね」

それはホルスターに入った南部の拳銃だった。

「念のために」

「そうだな」

私は受け取ると上着を脱いでホルスターを装着した。

車庫に降りると日向と寛代が軍用車の前で敬礼をした。

「日向、運転を担当します」

「寛代……無線」

「ああ」

やや無愛想に返事をした私だったが、この二人は気にしないタイプだな。

私は後部座席に座った。夕立が同じく後部座席の私の隣に座った。改めて彼女を横から見ると、すごくアカ抜けた娘だ。山陰の田舎じゃ、こういう明るいタイプの子は絶対に見かけない。オマケに金髪に青い目。外人さんだよ。

しかもその短いスカート。ちよつと気を付けて欲しい。考えるまでもなく艦娘って何故？ ……スカートの丈が軒並み異様に短い娘ばっかりなんだ？

前から疑問だったが……まあいい。今さら誤解されても困るから基本的に無視だ。仏像のように無関心、無視でいこう！

そんな私のギコチ無さに気付いた夕立がこつちを見た。

「司令、どうかしたっぽい?」

「いや、何でもない」

意外と人を見ているんだな。さすが護衛艦。

鳳翔さんが昨日から必死で洗濯してくれたから私の制服もパリツとして、きちつと仕上がっている。これは気分が良い。満点! だな。

「司令、格好良いっぽい」

「そうか?」

観察力は良いし反応も良いんだが……どうもこの子の台詞は最後に「ぽい」が付くからウソっぽくなるよな。

軽く後ろを振り返った日向が言う。

「司令、発車致します」

「ああ、頼む」

「行ってらっしゃい」

笑顔の鳳翔さんと落ち着き顔の祥高さんが鎮守府玄関で手を振る。

軍用車は車庫を出てロータリーを回る。

えつと……車庫から直接、通りに出れば良いのに何故、わざわざ鎮守府正面玄関を回って出るのだろうか?

必然的に暇そうな艦娘たちが出てきて、

『いつてらっしゃい』

……という、大げさな『お見送り』になる。第六駆逐隊の面々や島風が、派手に手を振っている。恥ずかしい。

まあ艦娘たちも殺風景な鎮守府内では、お祭り騒ぎとか、ちよつとしたイベントくらい欲しいんだろう。そう思えば、これも司令官の義務なのか?

つい口走る。

「私を墓参に押し出したのもイベントか?」

「ぽいっ」

金髪をなびかせながら夕立が不思議な表情をしている。

「いや何でもない」

せつかく祥高さんがお膳立てしてくれたんだ。あまり疑うのは悪

い。

それにイベントだとしても司令の仕事だと割り切れれば意義もあるだろう。そう思うと少し気分が楽になった。いつのまにか腹痛も治まっていた。

軍用車は鎮守府の敷地を出て幹線道路へ向かう。私は流れる松林を見ながらふと別の考えが湧いてきた。

敵がもし、どこかから、この状況を観察していたら？ 私たちは果たしてどうなるのだろうか？

なにしろ私の着任から作戦参謀の視察まで早いうちから情報を掴んでいた連中だ。やっぱ私が墓参に出たら……狙われるかな？

私は改めて襟を……というより胸に手を当てた。そこには祥高さんが出掛けに渡してくれた拳銃が入っていた。物騒だが仕方ない。敵に狙われたこともあるわけだし今も常に敵が見ているという意識は持つべきだな。

それに日向と寛代……いずれも索敵能力は高そうだ。信頼している。

第3話〈珍道中の始まり〉(改2)

「銃口を私に向けるなって！」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第3話〈珍道中の始まり〉(改2)

今日の美保は良い天気だ。

日向の運転する軍用車は埋立地から幹線道路に入った。その交差点では右に曲がる。大山の反対側にある高尾山(島根半島)へ向かって北上する。

島根半島の緑と晴れた青空が見事な対比を見せる。

「もう夏だな……軍用車で走るには良い季節だ」

ところが車内では突然、夕立が自分のホルスターから拳銃を取り出した。彼女はニコニコと言う。

「ねえ司令って、これの撃ち方、知ってるっぽい？ 私こういうの初めてっぽい」

私はギョツとした。

「おいバカ危ないって！ 車内で無闇に拳銃を取り出すなっ！」

「ぽい？」

首を傾げる夕立。

「だから、さり気なく銃口を私に向けるなよっ、止めろっ！」

金髪の夕立が蒼い瞳の笑顔で銃を持って……お前は暗殺者か？
思わず鳥肌が立った。

すると前で運転している日向がバックミラー越しに落ち着いた口調で諭(さと)す。

「夕立さん、今はしまつて下さい。危ないですから」

「ぽい」

夕立は軽く舌を出しながら拳銃を自分のホルスターに戻した。

「やれやれ肝が冷えたよ……つたく」

ホツとした私は彼女に言った。

「ここは海の上じゃないんだぞ」

「海の上ならイイっぽい？」

……呆れた。

「相手を選べ。私を狙うな」

すると運転席から日向が答える。

「夕立さん？ 実際には、それを使うことは無いですよ。敵が来たら銃なんて使っている場合じゃありませんから」

私は彼女に言った。

「日向は意外と冷静だな」

同じ艦娘でもこんなに違うものか。彼女は微笑んだ。

「ご安心下さい司令……いざとなったら私たちが司令の盾になります」

落ち着き払って平然と言う。さすがにギョツとした。

「おいおい、怖いこと言わないでくれよ。お前の、その姿勢は見上げたものだが」

「そうだね。日向は、いつも腰に刀、持ってるっぽいしい」

大きな瞳をクリクリさせて夕立が返した。

「そうか、日向はいつも腰刀差しているな」

そう言いながら私は彼女の腰刀が改めて気になった。

「それって、やっぱり、いざとなったら本気で抜くのか？」

ところが私の問いには答えず日向は言った。

「この車には今、軽機関銃も積んでいます。もし敵が来ても相手が重戦車で来ない限りは大丈夫でしょう」

「え？」

思わず後ろの荷台を振り返った。

「ぽいっ」

夕立も振り返る。金髪が風に流れる。

「ぶへっ」

コイツの髪の毛が口に入った。私は手のひらで風になびく金髪を

払いながら荷台を覗く。確かにシートに包まれた無骨な物体があった。

髪の毛を逆立てながら夕立が喜々として言う。

「相変わらずスゴイっほい！ 夕張が作ったんでしょ？ これ」

だが私は気になった。

「いや、これって確か試作品だろ？ ……実際に敵に撃ったことあるのか？」

「……」

誰も反応がない。

「何だ、やっぱり撃ってないな」

まあ形だけでも準備万端整ってはいる。そりゃ機銃があれば心強いが、一番良いのはそれを使わないことだ。

取り敢えず、この珍道中の間は平穩無事に済んでくれることを祈るばかりだ。

やがて軍用車は幹線道路から少し小さい県道に入った。公園の脇を走りながら私は日向の言葉を思い出した。

(重戦車でも……って?)

まさか、その機関銃を街中でぶっ放すんじゃないだろうな？ 曲がりなりに私の地元だ。それだけは避けたい。

艦娘って日向みたいな落ち着いた娘でも、どこかしら「戦闘バカ」みたいな雰囲気がある。敵が本当に来たらマジでぶっ放しそうだしちよつと怖い。

しかし今日は索敵に強い寛代もいるし。仮に敵が空から襲ってきても今度は直ぐに分かるだろう。

そこまで考えた私は傍と気づいた。

「待てよ」

「ほい？」

夕立が、のん気に反応する。

「敵って、まさかホントに戦車、持っていないよな？」

私の言葉に日向が応える。

「……それは分かりません」

「でもお」

あつげらんとした夕立。

「あつても、おかしくないよね」

そりや怖いって。

この狭い境港で地上戦？ ……想像したくないぞ。

「ねえねえ、敵の地上部隊ってホントにあるのかな？」

「さあ……噂では、あるようですが」

夕立の言葉に答える日向。

艦娘たちが会話をしている間に軍用車は、どんどん市街に入る。

ふと日向が聞いてくる。

「ところで司令の、お墓はどちらですか？」

私は傍と考え込んだ。

「ええっと、境港の役場の傍って言う記憶しかないんだ」

実はここ十数年、参ってない。そもそも境港にあるのは母方のお墓。なおさら記憶がボヤける。

「……そうですか」

淡々と答える日向。

すると急に夕立がカットインしてくる。

「ねえねえ、司令の実家に先に行って聞いちゃったほうが早くないっほい？」

なるほど確かに。

「それは良いな、夕立」

妙案だな。思わず褒めてしまった。

「えへへ」

頭に手をやりながら意外にも照れ隠しをしている彼女。

それを受けて日向も聞いてきた。

「では、これから司令のご実家へ向かいましょうか？」

「うむ、そうだな」

そう応えた私だったが何年も戻っていない実家へ、いきなり行くのは抵抗がある。

もちろん私が海軍にいることは親も知っている。しかし息子は良

いとしても、いきなりセーラー服を着た女の子（軍服に見えぬ）を3人もゾロゾロ連れて戻ったら母親もビックリだろうな。

「本当に宜しいですか？」

念を押すように聞いて来る日向。

「ああ、ここまで話が進んだら腹をくくるしかない」

私は帽子を被り直した。

改めて日向が尋ねる。

「ご実家は、どちらででしょうか？」

「えっと境港の駅に近い郵便局の通りだ。場所は……説明し難いな」とすると彼女は助手席を見た。

「寛代さん、分かりますか」

「……」

彼女は黙って頷いた。なるほど索敵に強いこの艦娘は地図で私の実家の情報まで持っているようだ。やはり重宝する。連れて来て正解だったな。

「まさか祥高さんは、ココまで見越していたのかな？」

それが本当なら彼女は軍師だ。

夕立が言う。

「いきなり実家へ行って、留守っぽくないっぽい？」

変な日本語だな。私は応える。

「ここは田舎だからアポ無しで突然訪問しても誰かは居るだろう」

「そうなの？」

そうか、夕立は人間の文化は知らないよな。

「ああ、そういうものだ」

軍用車は高尾山を間近に見ながら、どんどん旧市街へ入って行った。

第4話〈解放感っぽい〉(改2)

「海の上ばかりっぽい」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第4話〈解放感っぽい〉(改2)

後部座席に私と並んで座っている夕立は、さつきから軍用車の外に、その長い金髪をなびかせている。このご時勢、こんな地方の町に金髪の少女なんか居ないから、その分、彼女は異様に目立つ。

時おり通り過ぎる通行人も金髪を棚引かせる夕立に気付いて目を丸くする。そりゃそうだ。軍用車から金髪ガールが顔を出しているんだから。

「ぽいぽい、楽しみっぽい」

人目を、はばかりることなくリズムミカルに鼻歌交じりの夕立。

「何だか嬉しそうだな」

「ぽいっ？」

この語尾には、いちいち脱力しそうになるが……彼女のニコニコしている姿を見ると髪の毛が目立つくらいは、まあ大目に見てやろうかと思うのだ。

しかし、こつちは久しぶりの実家訪問で緊張しているのに、こいつは、のん気で羨(うらや)ましいな。

そんな私の気持ちを察したのか夕立は片手で金髪を押しさえながら眩くように言った。

「私、毎日、訓練と作戦で海の上ばかりっぽいんだ……だから、たまには陸地も良いっぽい」

本当に嬉しそうな笑顔……そうか。それが彼女たちの現実か。

「そうだよな」

私も同意した。

艦娘にだって感情がある。同じような訓練を繰り返すばかりの日々が延々と続けば夕立だって嫌というか、その代わり映えの無い景色には飽きるだろう。

人には帰る家があり故郷もある。そこに様々な思い出を宿すことが出来る。だが艦娘はどうだ？ 工廠や工場だけでは、彼女たちにとって決して故郷足り得ないのだ。

彼女たちに、たまの休日があっても自分が戻る場所は結局、鎮守府しかない。そこでいつ果てるとも知らずに年中、戦いに明け暮れるのだ。

だから今回のように公的な大義名分でもなければ陸（おか）に上がっていつもと違う景色を眺める時間もない。

私はふと着任時の視察で外出した際に、港を興味深く眺めていた寛代の姿を思い出した。考えてみれば同年代の少女なら多少は出かけて遊んだりする年頃だろう。

だが、それを犠牲にして、ひたすら戦うのが艦娘なのだ。

艦娘って何だ？ そもそも敵って何だ？ 分からない事だらけだ。

この長い戦争の意味など誰も分からない。だが彼女たち艦娘にとつての、この戦争の意義は、いったい何だ？ 私は急に考えてしまった。

軍用車は順調に走って県道から旧市街地へと入った。道路は急に狭くなり碁盤の目のようにゴミゴミしてくる。

「……」

寛代は助手席で黙って道を指差している。

「……」

日向は、それを見ながら黙々とハンドルを回し続けている。二人とも基本的に無口でジェスチャーゲームをやっているみたいだ。絶妙なのか違うのか？ よく分からない。

車は順調だから取り敢えず、うまくいっている……のかな？

夕立は、さっきからずっと金髪を振り乱しながら外の景色を見てる。

つい私は彼女に声を掛けた、

「境港なんて大して珍しい物も何もない町なんだけどな」

「ぼい？……でも楽しいっぼい」

夕立は笑って応える。その屈託の無い返事に私は苦笑するばかりだ。

なるほど彼女は陸の上……鎮守府の外の世界が珍しいのだろう。普段の彼女が鎮守府から出る機会があっても、そこは大海原だ。水平線の彼方まで何も無い。それに比べたら変化のある町並みの方が珍しいのも仕方がないか。

寛代が示した狭い路地に軍用車が入る。突然そこに私には見覚えのある景色が広がった。あつと思う間もなく、こじんまりとした平屋の前で軍用車が停まった。

既にかなり髪の毛がボサボサになっている夕立。何だか金髪の鬼婆にも見えるんだが。それは、まったく気にせず陽気に身を乗り出す彼女。

「こっつぼい？」

「ああ、こっこだな」

ついに実家へ来てしまったか。急だけど誰かいるのかな？

髪の毛を直しながら目を大きく見開いて首をかしげている夕立。

「司令の実家って言うからあ、もつと大きいかと思つたっぼい」

「別に司令だから実家大きいとは限らないよ……ま、私の父親は空軍の軍人だったけどな」

「……！」

私の発言に、なぜか車内の全員の視線が一斉に、こつちを向いた。

「何だよ、その反応は？」

海軍の提督の父親がもと空軍の軍人だと、そんなに珍しいのかよ！

「ぼい？」

夕立のそれは力が抜けるって。いや、私だけでなく全員が脱力したような……。

でも、お陰で、今の私への艦娘たちの視線も消えたからホツとした。艦娘って人間には当たり前前のことでも妙な反応をすることがある。

正直、戸惑う。

人間の血縁関係とか習慣に関することは彼女たち艦娘には分かり難い世界だ。だから過剰反応したり無反応（無視）だったりするのは致し方ない。

取り敢えず皆の妙な反応は無視だ。私は、おもむろに車を降りた。ジワジワと聞こえるセミの声が夏らしさを強調する。朝晩は過ごし易くなったとは言っても日中のアスファルト上は暑い。

髪の毛を直した夕立も私に続けて「よいしょ」と言いながら車の反対側から降りてきた。

「あれ？」

振り返ると運転台に鎮座している日向。

「お前は来ないのか？」

彼女は、すまし顔で答えた。

「私と寛代は念のため、ここ（軍用車）で待機しています」

寛代も同様らしく頷いている。

「あ、そうなの」

……さすが日向、用心深い。こんな狭い街中には敵の重戦車も来るわけがないと思うが。まあ男子一人と女子三人で、いきなり実家に押しかけるよりは良いか。

「ぽおい」とか言いながら、眉間にしわを寄せて、しつこく髪の毛を押しさえている夕立。無頓着に髪の毛を車外に放出し続けるからだよ……つたく。

「おい、行くぞ」

私は彼女に一声掛けながら実家の玄関前に立った。

「実家か……本当に懐かしいな」

玄関脇の木からセミの鳴き声が響いていた。その声は私の緊張感を煽っているようだった。

「しかし、まだまだ残暑は厳しいか」

私はハンケチで汗を拭って少しでも落ち着こうとしていた。

第5話〈母親〉(改2)

「あれ?やっぱり靴は脱ぐっぽい?」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第5話〈母親〉(改2)

私は実家の玄関脇に立った。相変わらずセミが鳴いている。夕立は私の斜め後ろで飛び跳ねた自分の髪の毛を気にしていた。

「やっ」

彼女は無視して呼び鈴を押そうとした私はハタと考えた。

「自分の実家なんだから、そのままドアを開ければ良いか?」

思わず真剣に考えてしまった。本当に久しぶりの実家だからな。

そんな私の姿に夕立は不思議そうな顔をした。

「何かトラブルっぽい?」

心配した彼女は私の顔を覗き込む。

「いや、何でもない」

思わず引いた。お前の長髪を、またくわえる訳にはいかない。

「久しぶりの実家だからな。ちよつと敷居が高くなるんだ」

私は苦笑した。

「敷居?」

復唱する夕立。

「えっと……気分的に入り辛くなることさ」

「ふーん」

自分の実家の前で悩む男なんて、艦娘も不思議に思うのだろう。

「じゃ、帰る?」

おい、そう来るか?

「いや……このまま帰ったら祥高さんに悪いだろう?」

「あ、そうっぽい」

理解したか。

「何しろ艦娘を三人も連れて出ているからな。形だけでも実家訪問しなきゃ」

「じゃ、私がノックするっばい？」

「こいつめ意外な提案をしてくる。さすが艦娘、実家訪問という今回の『ミツシヨン』を、あくまでも遂行しようとしているな。」

「いや大丈夫……」

私は彼女をチラツツと見て気付いた。夕立って結構、背が高いんだな……そんなことを思いながら私は入口に近づいた。

すると、いきなりドアが開いた。

『ガン！』

「痛あつー！」

目から火花が散って頭がガンとした。一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。意識が遠退く。

「ぽいっ！」

その声で何とか正気を保った。

「痛てて」

額を擦りながら顔を上げると、いつの間にか開いたドアの反対側に夕立が立っていた。とっさに身をかわしたらしい。

「おい護衛艦夕立！ 役に立たってないぞー！」

思わず小言。イザとなったら盾になるという日向の言葉が泣くな。

当然、家の中から顔を出したのは母親だった。

「玄関先で誰の声がするかと思ったわ」

「ぽいっ、似てる！ 似てるう」

夕立が私の母親の顔を見て飛び上がってはしゃいでいる。

「やめる恥ずかしい」

痛みを堪えつつ夕立を制する私。

そんな私たちを見て母親は怪訝（けげん）そうな顔をしていた。

「何だ、お前？ 帰って来ちよった（きていた）だか？」

「うん、ちよっとね」

手紙書いたんだけど……忘れたのか？

それでも私は、少し反論したくなかった。

「母さん、人の気配を感じたらさ、ドアを開ける前に確認くらいしてよ」

言いつつ私は気付いた。自分が短気なのは母親譲りだったのか……なるほど納得した。

母親は言う。

「ああ、悪かったわ。まあ、せつかく来たんなら上がれや」

彼女はドアの反対側に立っている夕立の存在に気づいた。

「このハイカラな人は誰あだ？ お前の彼女か」

首を傾（かし）げている夕立。いつの間にか髪の毛も整っていた。

「いや、あの」

……誰がこのご時勢、司令の軍服で女性を連れまわすんだよ！ まあ昔はそういう豪傑な司令長官も居たらしいけどね。

しかし、この「艦娘」は母親には理解不可だろう。じゃ部下？

ちよつと変だ。なら同僚？ うーむ会社員じゃあるまいし。

取り敢えず私が海軍ってことは母親も知っている。えい、面倒だ！

「護衛の……隊員だよ」

「隊員？」

母親は目を丸くした。

「たいそうな御身分になったなあ」

明らかに信じてない、お母さん。

「まあ、いい。早よ入れ」

彼女は扉を大きく開いた。

「うん」

しかし母親の前だと、いくら司令という位置があつても親子の関係に戻るんだな。夕立の手前、さすがに少し恥ずかしい。

でも人間的なプライドなんか、艦娘（夕立）は気にしないようだ。彼女は、さつきからだだニコニコしているだけ。この調子だと簡単に挨拶だけして、お墓の場所を聞いて済みそうだな。

私たちは母親に続いて玄関に入る。実家は一軒家だ。中に入ると木造家屋の香りと独特の雰囲気包まれた。

「……ああ、懐かしいな」

ちよつと感傷に浸つてしまう。やつぱり、ここは私の実家なんだ。少々固まっている私を見て母親が促す。

「早よ上がれ」

「うん」

私は靴を脱いで廊下になると振り返った。

「おい、お前も上がれ」

私の動作を見ていた夕立は言った。

「あれ？ やつぱり靴は脱ぐっぽい？」

「そうだよ」

少し意外だった。そうか鎮守府では滅多に靴を脱がないか。

「ふーん」

そう言いながら夕立は靴を脱ぐ。

何だか本当に何も知らない人に物事を教えているような感覚だ。こういう一般人の日常生活を、この娘は知らないんだ。

廊下で立ち止まった母親も不思議そうに見ている。

「何だ？ やつぱりハーフか？」

「うん、そんなところ」

適当に応える。

廊下を歩き出したとき、私たちは仏間の横を通った。

「そうだ、挨拶するときな」

母親が促した先には我が家の先祖代々の仏壇が置いてある。私は夕立を手招きして仏間に入った。

「なあに？ これ」

当然だが夕立は仏壇なんて初めてだろう。鎮守府にあるのは神棚だし。あれだって毎日手を合わせているのは私と祥高さんくらいだもん。

「神社っぽい？」

惜しい。

「仏壇だよ。何ていうか、鎮守府の神棚の親戚みたいなものだ」

我ながら乱暴な例えだ。

とりあえず私は畳にひざまづく線香を手向け手を合わせた。夕

立もそれに続いて見よう見まねで線香を捧げる。

およそ、こういうものとは縁の無さそうな艦娘が仏様に手を合わせる光景は、まさに前代未聞だな。それでも、この姿を見ると『お盆』という実感が湧く。

暫く手を合わせていた夕立は顔を上げてこつちを見る。

「もう良いっばい？」

「ああ上出来だ。さ、奥に行くぞ」

私は夕立を手招きして廊下を進んだ。

私と彼女は実家の居間に通された。そこは8帖で床の間がある和室だ。私たちは座卓を囲む座布団に座った。

実家は大して豪華ではないが居間には空調が入っているから涼しい。

「すごい、涼しいっばい」

「ああ」

このご時勢、贅沢だな。父親の軍人年金か？ 両親は意外と良い暮らしをしているようで安心した。私も親不孝ながら、ほとんど仕送りをしたことがない。親だつて、とつくに私の仕送りなんか当てにしないだろう。

「はあ」

制帽を脱いだ私は両腕を背中のように伸ばして、ちよつと天井を仰いだ。そういえば、この和室の雰囲気とか懐かしいな。しばらく建具の木目をジツと見つめている私。

「あれ？ こんなに狭かったんだ」

「……ほいっ」

私の独り言に反応する夕立。そういえば母親も、ちよつと小さくなったように感じる。

お茶道具を持ってきた母親は、湯飲みにお湯を注ぎながら言う。

「お前から手紙もらったときは信じられなかったけど。でもその格好見ると……本当に、出世したんだなあ」

「……」

そうだよ。ろくに仕送りもしない親不孝者が分不相応な位置にい

るわけだ。手紙も今回、初めて書いたし……。罰当たりな人事かも知れない。相変わらず実家では口数が少なくなる私だけだ。少しソワソワしている夕立も今のところ大人しくしている。取り敢えず助かるぞ。

母親は私と夕立に、お茶を出しながら言う。

「お父さん仕事に行ってるから。夕方まで戻らんよ」

「あ、そう」

軍人とはいえ元空軍だからな。海軍の私と夕立では、父親も居心地悪いだろう。

やがて母親は台所に戻ると、お菓子を持ってきた。夕立は軽く会釈をした。若干『ほい』が出ているが不自然さはない。良いぞ、ここまでは。

「……」

お茶を置いた母親は、しばし沈黙。うつ、ちよつと間が持たない

(汗)

外からは相変わらず、セミの音が響いていた。

第6話〈意外と夕立も〉(改2)

「皆が居るから、ちっとも寂しくない」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第6話〈意外と夕立も〉(改2)

セミの声と妙に効いた空調が何故か緊張感を高める。

母親は私たちの対面の座布団に座った。自分のお茶を入れながら、まじまじと夕立を見ている。

「まさか、お前(司令)の彼女かと思ったけど、さすがに若過ぎるよなあ。アンタ(夕立)もやっぱ海軍さん?」

「ほ……あつ、はい」

少し硬く答える夕立。「ほい」って言いかけたな。

母親は続ける。

「最近の海軍さんもハイカラだねえ。アンタの格好は女学生っぽいし。ハーフの隊員さんまで居るんだねえ」

女学生っぽいハーフか。まあ、かろうじて日本語喋ってるし。そうでなかったら、ほぼ異星人だよ、きつと。

「ほい?」

油断していたら夕立が呟いた! 母親に釣られたな?

その『ほい』という言葉で母親は改めて夕立の顔を見た。それ以上、墓穴を掘るなよ夕立……私はそれを誤魔化すように母親に質問した。

「今日、急に帰省したのは、実は墓参りしようと思ってるね。新しい赴任先が直ぐ近くの海軍基地だから。ホラうちのお墓……役場の傍だよね?」

突然、饒舌(じょうぜつ)になる私。我ながらワザとらしい。

母親は、ちよつと訝(いぶか)しがりながら答えた。

「役場の近く、寺の前の通りから共同墓地に入るだかん」

「ああ、あの井戸とか地藏さんの山の向こう側だよね」

何となく記憶が蘇ってきた私。

ふと見ると夕立はリボンを揺らしながら首を傾げている。ベロ出したら、まるで犬だよ。冷や冷やする私の思いとは裏腹に母親は時計を見ながら続けた。

「今日は、お母さん時間あるから。お前が良ければ一緒に行くか？」

ご先祖さんにも成長した姿を見せたいし」

「そ、そうだね」

私は安堵した。良かった。何とか誤魔化せたかな？

ちよつと落ち着いた私は日向たちのことを思い出した。

「お墓って近いよね？」

「歩いたら……ちよつこお（すこし）距離がああな（あるな）」

「今日は軍の車で来ているからサ、それで行こうよ」

「え？」

今度は母親が少し驚いている。やはり息子が海軍の司令官だと信じ切れていないのだろうか？ やれやれ……。

堪りかねた夕立がまた「ぼい？」を発していたが母親には聞こえなかったようだ。まったく思わずこつちが「ぼい」って言いたくなるよ。

「まあ、お前がそれで良いなら……ちよつこし奥から線香、取って来うわ（くるよ）」

母親は立ち上がった。

「うん」

私が奥へ入る母親の後姿を目で追っていると……

「ぼいー」

夕立か。思わず振り向くと彼女は、いきなり正座を崩して足を投げ出していた。

そして手で顔を扇（あお）ぎはじめた。

「何だよ？ その落差は……がっかりするな」

「もお、疲れたっぼい」

「そうか」

だが直ぐに私は慌てた。

「おい、変に脚を立てるな……お前のスカートの上！ 短いんだからさっ」

「ぼい？」

自覚なし。

「危うく……」

そう言いかけて止めた。

『見えそうだったぞ！』 ……なんて本人を前にして言えないよ。

「無視、無視！」

私は慌てて夕立と反対側の壁を見る。傍から見たら極めて不自然な行動だな。

「疲れるけど」

彼女の声に、恐る恐る顔を上げる私。

夕立は相変わらず、のん気に手で顔を仰いでいる。この部屋は空調が効いてるんだが。

「もしかして緊張したか？」

彼女は扇ぐのをやめて、こつちを見た。

「でも、こういうのって初めて」

その澄んだ瞳で見つめられると、ちよつとドキツとする。

「なんか面白いっぼい」

私は心臓の動悸を誤魔化すように、おもむろに腕を組んだ。

でも夕立って意外に能天気なようで、それなりに母親に気を遣ってくれていたんだ。

思わず声が出た。

「ありがとうな」

「ぼい？」

こちらを見る彼女。そんなに、つぶらな瞳で見るなよ。

「あまりジツと見つめるな。何って言うか……」

私も恥ずかしいとは言わない。

「……」

固まったように、こちらを見詰めている夕立。間が持たない。苦し紛れに、私は言った。

「そうか、お前には姉妹艦は居ても家族は居ないんだよな」
「そうっばい」

ふっと寂しそうな表情をみせて視線を反らせた夕立。

「……あ、悪かった」

家族のことは拙いか。

でも彼女は直ぐに髪の毛の先端をいじりながら続けた。

「司令とか皆が居るから……ちっとも寂しくないっばい」

「あ、ああ……そうか」

私も配慮が足りなかった。

「済まなかったな、夕立」

反省。

「でもお前は、きちんと気は遣ってくれるし意外にしっかりしてるな」
「ぼい？」

またそれか……ちよっと拍子抜けするけど見直した。艦娘も見かけで判断してはいけない。

もつとも彼女たちは戦場で射撃の複雑な計算を瞬時にしたり分刻みの作戦行動に加わったりする。艦隊作戦行動、即ち団体行動だ。一人の油断が全体の命取りになる。気遣いくらいは出来て当たり前か。やがて母親が戻ってくる気配がした。夕立は、慌てて姿勢を戻した。その姿は微笑ましかった。

「何だ、夕立も可愛らしいところあるんだな」
今度はストレートに言えた。

「……」

初めて恥ずかしそうな表情をした夕立。思わず仰け反りそうになる。

「待たせたなあ」

墓参道具を抱えた母親が入ってきた。

「うん……行こうか」

私は帽子を持つと膝を突いて立ち上がった。

夕立も遅れて立ち上がったが、足がしびれたらしい。

「ぼい」っと言って少しよろめいた。

彼女は髪の毛を押さえながら恥ずかしそうに舌を出して苦笑いをした。それを見た母親も笑顔になった。

「ははは」

私は軽く笑った。何だか、こういうのも、たまには良いかも知れない。

実家の軒先の風鈴が、チリンと風に鳴っていた。

第7話〈軍用車で出発〉（改2）

「女性の隊員さんも良いなあ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第7話〈軍用車で出発〉（改2）

私たちは玄関ドアを開けて外に出た。

夕立が玄関から見える家並みを見て言う。

「ここは小さな町っぽい」

「ああ、境港の旧市街だよ」

少し考えた彼女はチラツと振り返る。

「そつかあ、ここって司令の故郷っぽい？」

「そうだ」

ちやんと覚えていたか。

私の実家は表通りから少し入り込んだ場所にある。家の前は舗装されているが小さな路地で、そこに鎮守府の軍用車が停車していた。もともと境港市には空軍の基地があるから市内では、ちよくちよく軍用車を見掛けることがあった。だから街の人にとって珍しいものではないだろう。

しかし、さすがに細い路地で軍用車は場違いな印象を受ける。近くの住民や通行人が珍しそうにチラ見している。

私たちが近づくと直ぐに日向が降車して敬礼をした。

「待機中、異常ありませんでした」

「ご苦労」

私も敬礼を返す。

「ほお」

背後から声がした。

私と夕立が振り返ると花束を持った母親だった。

「なんだ、すごい車だな。へえ……こつちも女の隊員さんか」
やはりそこに関心が行くか。

「日向と申します」

軽く会釈をする日向。母親も頭を下げている。軍人に対する市民の尊敬は大きい。それが女性であつてもだ。

やや軽い感じの夕立では女学生に見られたかも知れないが日向は落ち着きがあるし品性と貫禄がある。まさか祥高さん、こうなることも見越していたのかな？

「で、どこに乗おだ？」

母が言う。

「あ、後ろに。寛代」

私がいかけると寛代が直ぐに車を降りて座席をずらした。

「……」

無言だが機敏だ。

続けて夕立が、さつと皆の前に出て言った。

「お母様は後ろの座席の真ん中がいいと思いますので私、先に乗りますね」

素早く気を利かせる夕立。「済みません」と軽く頭を下げながら先に乗る込む。ポイント高いぞ。

これは些細なことだが母親は感心している。

「女性の隊員さんも良いなあ」

……『ぼい』は何処へ消えたんだ？ と、私はどうでもいい点が気になった。この期に及んで私も、のん気だ。

母親は軽く会釈しながら

「お世話になります」

と、夕立の後に続いて後部座席に乗り込んだ。

「では」

「ああ」

私は日向と軽く敬礼をした。私が後部座席に乗り込むと助手席側の寛代が座席を元の位置に戻して乗車した。

周りを確認してから日向が最後に乗り込んで言った。

「よろしいですか？」

振り返りつつ彼女はエンジンを始動させる。

ドルルウ！ ……と、軍用車のデカイ音がする。そして遠慮なく真つ黒い排気ガスが出てディーゼル特有の香りが漂う。

もちろん軍関係者は慣れている。ただ一般人の母親は実際に乗ってみて想像以上の雰囲気には驚いたようだ。目を丸くしてキョロキョロと見回している。

「すごいな」

「うん、ちっちゃいダンプみたいなものだから」
すると夕立が言う。

「乗り心地は良くないと思いますから、何かあったら私にしがみ付いてもイイですよ」

また気の利いたことを言う。ポイント加算。

ふと気付くと軍用車の音で近所の人々が窓や通りから顔を出していた。そこには私も知った顔も見える。

「さすがに、ちよつとこれは恥ずかしいな」

私はさり気なく制帽を深くかぶった。

「出発します」

日向はシフトレバーを操作して、ゆっくり車を発進させた。

ガールと猛獣のような雄たけびを上げながら軍用車は走り出す。音もすごいが振動もすごい。いつもは気にしなかったけど民間人(家族)を乗せるのは初めてだ。改めて気を遣ってしまう。

もしかして母親をこれに乗せたのは失敗だったか？ ちよつと後悔した。でも母親は意外に「ほう、ほう」と言いながら半オープン式の軍用車内を珍しがっている。

車は路地から幹線道路へ出る。道行く人の何割かの人は、こちらを注目する。やはり軍用車なのに私以外は女性ばかり、というのが珍しいのだろう。

そんな街の雰囲気を見ながら母は言った。

「面白いな、この車」

「そうっ？」

意外な言葉。

「軍用車なんて滅多に乗れるモンじゃないけんな。みんなに自慢できるわ」

母親のその言葉に私は苦笑した。なるほど彼女らしい……昔から好奇心は人一倍強かったから私が心配するほどでもなかったようだ。

すると急に夕立が首を傾げながら、いつもの決め台詞を炸裂させた。

「ほい？」

これは軍用車の騒音と風を切る音のお陰で母親には、まったく聞こえていないようだ。やれやれ、動いてしまえは何とかなるものだな。

軍用車はガルガルと唸りながら表通りを疾走し続けた。

第8話〈遭遇の十字路〉（改2）

「司令！ どうかされましたか？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第8話〈遭遇の十字路〉（改2）

今日も好天で徐々に気温が上がる。境港は抜けるような青空だ。ただ軍用車つてのは街中だとエンジン音が乱反射して、よけいにするさい。

運転している日向も大きな声で叫ぶように言う。

「とりあえず役場へ向かいますか？」

すると母親が後ろから身を乗り出す。

「すぐ大通りの十字路があるけんな、それを通り過ぎて役場の手前のパン屋の角を右だわ」

日向も大きな声で答えた。

「わかりました」

何だか戦闘以外で大声を出す日向っていうのも新鮮だな。

「……」

彼女だけでなく助手席の寛代も母親の言った情報を確認しているようだった。

夕立は相変わらず髪を押さええながら黙って窓の外を眺めている。いい子だ。そうやって大人しくしていれば普通の女子っぽいんだけどね。

「ぽいっ？」

そう思ったとたん夕立がこっちを見る。私は苦笑い。この娘も感度は高いようだ。

軍用車が市内の十字路を過ぎる頃、私も落ち着いて外の景色を眺められる程度に気分が落ち着いた。

「この大通りも、ぜんぜん変わらないんだね」

角の銀行の建物を見ながら私は横に座っている母親に問いかけた。

「だなあ。でも寂（さび）れたわ」

確かに私が小さかった頃の境港の街は、もう少し賑やかで大きかった気がする。

今回の着任時に見た米子駅前と比べても現在の境港は全体的に小さい印象だ。

それは私が多少とも『成長』したからだろうか？ ……いや、人間的な内容は全然、伴ってはない。

騒音の大きい軍用車内では必然的に口数が減る。淡々と車は進んでいく。私は車窓から自分の左手に見える歩道を何気なく見つめていた。この境港には特に高い建物はない。幹線道路脇でも、ほとんど3階がいいところだ。時おり空き地や畑が目立つ程度で閑散としている。

いくつかの路地を通り過ぎると突然、妙なものが目に留まった。この真夏の暑い最中に厚手の黒っぽい服を着た妙な女性がいた。その服のせいか彼女の白い肌がことさら目立つ。

「ん？」

……その女性の妙に長い髪？ 次の瞬間、私だけ時間が止まった。

『まさか？』

間違いない。一瞬すれ違った瞬間に顔を上げたその女性と私は目が合った。その瞳には見覚えがある……

『まさか深海棲艦？』

彼女は不敵な笑みを浮かべてた。ただ不思議なことに今回も鳥肌は立たなかった。

『こんな陸上にまで？』

『なぜ？』

一瞬でアレコレ考えた。しかし実際には瞬く間だったろう。軍用車は、その路地を一瞬で通り過ぎた。だが私には十数秒……いや、もっと長い時間を感じられた。昨日の戦闘に続いて暑くなった今日まで……『わざわざ、ご苦労！』というところか。

祥高さんの『敵は出て来ない』という予想は外れたわけだ。たまた深海棲艦らしき『女性』はストーカーの真似事をしているだけかも知れ

ない。あるいは『偵察』か？

この暑さと異常事態に私の頭の中は混乱で一杯になった。

「……参るな」

「あそこ」

……という寛代の言葉で悶々としていた私はハッと我に返った。

混乱している間に軍用車は数百メートルは走つたらしい。寛代は幹線道路の右側に見える赤い看板……自販機のある小さなパン屋を指差していた。

それを見て、運転している日向が応えた。

「了解」

「ほい」

「なんだよ夕立。その合いの手は」

「？」

母親も不思議そうな顔をしていた。

だが私は、さっきの女性……深海棲艦らしき人物を見た衝撃を引きずって、ただ一人、座席で固まっていた。

シフトチェンジをした軍用車は、そのパン屋の手前で減速した。田舎道だから道幅は広いのに信号は無い。対向車が居なければOKだ。

日向はハンドルを右に回し直ぐにパン屋の角を右折させた。運転している彼女も助手席の寛代も、さっきの女性には、まったく気づいていないらしい。夕立は反対側の座席から外ばかり見ている。

でも日向はハンドルを戻した後で私の異変に気付いた。彼女はバックミラー越しに尋ねてきた。

「司令、どうかされましたか？」

「いや」

私は否定した。本名でなくても親の手前だと役職で呼ばれるのは結構恥ずかしいものだな。

ところが『司令』という言葉に反応した母親がカット・インして来る。

「お前が司令かあ」

噛み締めるように言う彼女は嬉しそうだった。もし何事も無けれ

ば、私はこの場で『親孝行が出来た！』という気分になったことだろう。

しかし残念ながら、さっきの女性が気になって、それどころではない。

とはいえ日向が私の様子を気に掛けてくれたのは嬉しく、また心強かった。私は心の中で日向に『ありがとう』と唱えていた。

艦娘に支えられる……上官と部下という立場であれば軍隊としては当然のことだが、改めてそのことを実感するのだった。

第9話〈共同墓地〉（改2）

「ここでよく従兄弟と遊んだな」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第9話〈共同墓地〉（改2）

日向が運転する軍用車は役場傍の大通りから再びゴミゴミとした細い路地へ入る。

「この街って、建物イロイロあるっぽい」

夕立が興味深そうに言う。

「そうだな……人の街って言うのは何処もこんな物だ」

日向が坦々という。

なるほど戦艦でもある日向は経験も豊富そうだが、夕立はさほどでもないのか。

「夕立は普段は、あまり出歩かないのか？」

私が聞くと彼女は言った。

「うん……だいたい、お休みの日は鎮守府に居るっぽい」

その返事はちよつと意外だった。でも艦娘はそんなものかな？とも思った。

「へえ……」

母親も反応する。夕立が普通の女子と思ったのか、そうでないと感じたのかは微妙だが。

市街地とはいえ細い路地に軍用車でガラガラ言わせて乗り入れるのは多少、気が引けた。

それでも少し走ると、ようやく正面の当たりに広い墓地が見えた。

「あれか」

その手前の右側には瓦葺の大きな寺が見えてきた。

「その寺に駐車場があるけえな。車はそこへ停めればええけん」

母親が指示した。

「はっ」

日向が応える。

軍用車は墓地の手前のT字路を右折すると、直ぐ側にある寺の敷地内へと乗り入れた。広い駐車場には既に数台の車が入っている。その空いた場所に車を停めてエンジンを切る。

「ぽいー」

……と言いつつ、先ずは夕立が自分の側から外に降りた。

母親は相変わらず夕立の挙動に不思議そうな顔をしている。

「やっぱりハーフだな？」

「……うん」

私も適当に答える。

母親は夕立のことを『ハーフの帰国子女』か何かだと思っているようだ。面倒だから、そういうことにおこう。

私は助手席の寛代が降りるのを待つて「ちよつとゴメン」と言いながら母親より先に車を降りた。それから助手席のシートをズラして母親が降り易いようにした。

「はいアリガトね」

母親が降りる。それを確認した寛代は再び車に戻った。

それを見て母親は言った。

「アンタも来んだ？」

「いや、軍の決まりで全員が降りたらいけないんだ」

私は説明した。その言葉に母親は「へえ」という顔をした。運転席の日向もまた母を見て頷くように会釈をした。母親も軽くお辞儀を返した。

寺の境内にある木々にはセミがたくさんいてジワジワ鳴いてた。私は額の汗をぬぐいながら言った。

「私と、この子……夕立が一緒に行くから」

「それじゃ、しようがないな」

母親は自分より長身の夕立を見上げるようにして言った。

「結局、アンタ日本人？」

まだ言うか。

「ほ……ほい」

夕立の表情がこわばっていた。おいお前、冷や汗かいてないか？
「ぼっ。」

分かったから

「……じゃ、行こうか？」

これ以上、夕立を放置するとデツカイ墓穴を掘りそうだ。私は半ば強制的に言葉を遮った。

軽く頷いた母親を先頭に私たちは駐車場を出ると、路地を横切って共同墓地へと歩き始めた。

夕立が周りの墓石を見ながら興味深そうに聞いてくる。

「ねえねえ、これ皆いんな、お墓なの？」

「そうだ」

そっか、この子は鎮守府から外にあまり出ていないのなら共同墓地なんて、なおさら見聞きする機会も少なかったのだろう。

「何だか黒くて真っ直ぐで臙装に似ているっばい」

「……ああ」

そういう着眼点か？

「クールっばい」

「……」

一体どこから、そういう発想が湧くんだらうな。

「まあ夏に墓石に抱きつけばいろんな意味で涼しいだらうけど」

誰も受けなかった。

共同墓地に入って最初の広場に井戸ポンプがあった。墓参に来た人が代わる代わる水を汲んでいる。

母は墓参道具の袋から、やかんを取り出した。

「今朝一度な、母さんが墓には参つとるけん。この花を捧げたら線香だけ上げればええだ」

軽く井戸の枝を動かしながら母親は、やかんに水を汲み始めた。

「ぼっっ。」

母を不思議そうに見ている夕立。

「お墓参りするのは簡単に掃除をしてから線香を上げて手を合わせるんだ」

私は説明した。

「……ぽい？」

分かってないな。

「イイよ、墓の前に着いたら、もう一回説明するから」
今はまだ分からなくても良いか。

「行くか」

水を汲み終わった母親を先頭に共同墓地の奥へ向かう。

「じゃ、こっちだ」

私も夕立に声をかけると母親の後から付いて行く。

共同墓地を見ていると小さい頃の記憶が蘇ってくる。

「そういえば小さい頃は、よくこのお墓で遊んだな」

前を歩く母親が頷く。

「従兄弟のイクちゃんが近くに居（お）ったけんな（いたからな）」

改めて見ると、この墓地も狭く感じる。

「ココも狭かったんだな」

「ぽい？」

不思議そうな夕立、無理もない。

お盆が近いから共同墓地の他のお墓にも、たくさんの方が参っている。時々、私たちの姿を見て敬礼をする退役軍人らしき老人がいるのは少々、困った。いちいち返礼をしなければならぬ。こんなことから私服で来た方がラクだったな。

やがて目的の場所、母方の墓前に着いた。母親は手際よく花の水を取り替えている。それから余った水を墓石の上からかけている。

夕立はその動作を不思議そうに、でも興味深く眺めていた。

「お水かけるっぽい、洗っているの？」

「いや……『先祖』は霊界で喉が渇くらしい」

理屈は分からないが。

「ふーん……」

ちよつと思案している夕立。

「それって、死んだ人っぽい？」

「……そうだが」

いきなり何を聞くんだ？

「それ、分かるっぽい。私も戦闘中はスツゴク喉、渴くんだ……」

真顔で答える夕立。妙にリアルだな。

私たちの会話を聞いていたのだろう。母親は夕立の顔をチラッと見て呟くように言った。

「アンタやっぱり本当の兵隊さんなんだナ……」

疑ってたのか？

……だが夕立も微笑んで応える。

「ハイ」

何だろうか？ その笑顔に母親も表情が緩んでいる。夕立と何かが通じたような印象だ。

それから母親は持参した墓参道具の中から線香の束に火をつけた。線香独特の煙が立ち上る。着火したことを確認した母親は立ち上がり、私と夕立に小分けにした線香の束を渡してくれた。

「これ」

「うん」

それから先ずは母親が無言で墓前で手を合わせた。何かをブツブツ言っていた。多分、私のことを祈っているのだろう。

それから母親は私たちを振り返った。

「ほら、続けて」

恐らく墓参は初体験の夕立。私は逐一、説明をしながら一緒に線香を捧げて手を合わせた。

海軍の制服の私も目立つ。加えて地味な田舎町だ。金髪リボンにハイカラな女学生風の制服の夕立の姿は、とても目立つ。共同墓地に参っている周りの『地味』な人たちがチラチラと私たちを見ているのを感じる。

しかし夕立は、そういう視線は、まったく気にしていない。そういうところは鈍感なんだ。羨ましい。

改めて見る夕立は腰から拳銃のホルスターを下げているし物騒だよな。まあ私たちの姿を見れば軍関係者だということくらいは理解

してくれるだろう。憲兵さんだって街でも、よく見かけることだし。さっきの深海棲艦には、かなり驚いたけど。いつも前触れのように感じる私の胸騒ぎも無い。寛代からの緊急連絡も入らない。今のところ、敵が襲ってくる気配は無いのだろう。

逆に不気味な感じもするが……それでも私の心は凧(な)いでいた。故郷での墓参のひと時は静かに過ぎていくのだった。

第10話へ一緒に靖国〈改2〉

「仮に夕立と私が結婚でもしたら、一緒に入ることもあるかな」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第10話へ一緒に靖国〈改2〉

私と夕立が手を合わせ終わると、母親が再び墓前に手を合わせた。

「息子が海軍の提督になりましたよ。ご先祖様、頼りない息子かも知れませんが、どうぞお護りください」

私は祈る母の姿を見ながら思った。

確かに私は頼りない。何の取り柄もない。それが、いつの間に美保鎮守府の司令に着任したのだ。

着任当初は艦娘という慣れないシステム相手に不平不満も出た。しかし考えてみたら感謝すべき出会いにも思えてきた。

「感謝？」

信心深い祖母に言われて機械的ではあったけど小さい頃から神棚には良く手を合わせていた。やはり神様かご先祖様が何か導いたのだろうか？ この墓参で単純に、そう思えるようになった。

母親は立ち上がった。

「さあ、帰るか」

「ぽい」

夕立の言葉に母親は微笑んだ。妙な反応にも慣れたらしい。

墓参道具をまとめた母を先頭に私たちは墓前を離れて駐車場へと歩き始めた。

母親は私にふと呟いた。

「うちにも、こんな娘が居たらなあ」

「えっ！」

驚く私。(お母さん、それはどういう意味ですか?)

後ろの夕立を見ると……

「あれ？」

少し離れている……と思つたら、どこかで摘んだらしい小さい花を
持った夕立が後ろから少し慌てたように駆け寄ってきた。

「何だ？・花？」

艦娘とはいえ基本的な精神構造は少女なんだな。

彼女は私の隣に並んで言った。

「ねえねえ、お墓って人が死んから作るんでしょ？」

「そうだが……」

「お墓って、どうやって使うの？」

矢継ぎ早に聞いてくる。

「うーん、まあ日本じゃ火葬して小さくして入るといふか」

艦娘には説明し難いな。

「入る……？ それって家っぽい？」

「ん、まあ、そうだな」

どうしたんだ？ 急に。

「司令も死んだらそこに入るの？」

「うーん、どうかな。その時になつてみないと正直ワカラナイな」

急に目をキラキラさせる夕立。

「私たちも入るっぽい？」

ちよつと引いた……けど、反射的に応えた。

「えつと……お前や私が、もし戦死したら一緒に靖国だな」

「ヤスクニ……わあ！ それ楽しみっぽい」

なんだ？ その満面の笑みは。ホントに楽しいのか？

気のせいか前を歩く母親もビクツとしていた。

なおも途切れない彼女。

「ねえねえ、もしも私たちが戦場じゃないところで死んだらどうなる
っぽい？ さつき出会った元軍人の、お爺さんとかみたいに」

「そうだなあ、鋭い質問だ」

私は歩きながら考えた。

「もしも平和な世の中になったら、やっぱり、ここかな？」

多分、艦娘は入らないだろうけど。

「ふーん」

分かってているのかなあ？ 夕立よ。

そのうち私たちは共同墓地から出た。道路を横切りながら彼女は言う。

「もしもお」

まだ来るか？

夕立は手にした花びらを、一つずつちぎっている。

「私も、こういうお墓に入ること……」

歩くのが少しずつ遅れている。

「……あるっぽい？」

この言葉にはギョツとした。思わず私も立ち止まった。

夕立は少し上目遣いに、こつちを見ている。

「艦娘が普通のお墓？」

それは想像を絶する世界だ。だが考える必要はあるな。

「もし、仮に……」

私はアゴに手を当てた。夕立は少し神妙な表情でこちらを見つめている。手にした花は、いつの間にか皆、散っている。

……あ、ひらめいた！

「仮に夕立と私が結婚でもしたら、一緒に入ることもあるかな」

半分、冗談。半分本気。

「家族なら艦娘であつても可能だと思う」

「ぼい？ 一緒？ ええ、怖いっぽい」

「なんだ、怖いのか」

私は苦笑した。考えて損をした気分だ。我ながら名回答だと思つたのだが。

「さすがに夕立には理解を超越するよな」

「でも、ちよつとわかるっぽい……」

「え？ マジ？」

分かるのか？ 夕立……こつちのほう意外だった。

先を行っていた母親は駐車場に到着していた。私たちの歩みが遅いからこちらを振り返っている。

少し、風が出てきた。寺にある木がサワサワと音を立て始めた。

第11話〈基地のある街〉（改2）

「お前も軍人さんらしくなっているなあ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第11話〈基地のある街〉（改2）

駐車場まで戻ると日向と寛代も待っていた。日向は母親を見ると直ぐに降車して墓参道具を荷台へ入れようとしていた。

真面目で静かな二人だ。墓参の間は何もせずただジツと私たちを待っていたのだろう。

これが青葉だと取材とか言って何処かに行ってしまいそうだ。そういう点での確な人員配置だったか。僅かな時間とはいえ、ずっと待機してもらったのは悪い気もした。

日向は私が近づくと直ぐ敬礼をした。

「報告します。待機中、異常なし」

「うむ、うむ苦勞」

私も敬礼を返す。

お盆なので駐車場には何人かの一般の人たちも居て私たちのやり取りを見ていた。敬礼を直ると日向は運転台へ戻る。

私は席を空けた寛代の横に立つと夕立と母親が先に乗り込むのを待った。私が最後に乗り込むと寛代が椅子を戻し助手席に乗り込んだ。

車内で母親が私に聞いてくる。

「お前、すごいなあ」

「え？」

「お前も軍人さんらしくなっているなあってことだ」

母親のその感想は、そのまま境港の街の人たちの眼差しにも思えた。ここは昔から基地と共にある街だ。墓参中も私たちの存在が街の人たちに安心感を与えている。そんな印象を受けた。

「ぽん」

笑顔で発する夕立の謎の反応にも、いまは納得が出来る。来るときに道端に居た深海棲艦らしき女性は気になったが、その後の墓参中にも何事もなかった。あれは敵の偵察だったのか？

もしあれが深海棲艦だったとしても大井（仮）ではないのか？ 連中にだって同じような風貌の『女性』はたくさん居るだろう。

索敵の寛代も反応せず黙っている。しばらく敵襲もないだろうか。私を取り留めのない思考を膨らませていると

「司令、お出しますか？」

日向が淡々と確認してくる。

「……ああ、頼む」

「では」

エンジンが起動した。

周りの市民は、みんな期待の眼（まなこ）で、こつちを見ている。ちよつと恥ずかしいな。

「出します」

「ぽい」

夕立は、さつきからハイテンションだ。このまま無事に実家経由で鎮守府に戻れば良い。

だが軍用車が、お寺の駐車場から路地へ出たときに私は見た。

この暑い中に、あの厚手の黒っぽい服を着た『女性』が通りの向こうに立って居たのだ。

その刺すような視線を感じて急に鳥肌が立った。

「えっ？」

さつきとは様子が違う。

「まづこい」

これはきつと何かヤバイ。寛代も何か察知したのか急にキョロキョロし始めた。

「どうかしましたか？ 寛代さん」

ハンドルを回しながら日向が聞く。

「ぽいっ？」

夕立も何かを察知したか？ 空を見上げている。

「なんだ、どうした？」

お母さんまで……

そのとき町中にサイレンが響き渡った。空襲警報だ。

「よりによって、こんな時に」

私は呟いた。

第12話〈5分間〉(改2)

「怪我とか大丈夫なのか?」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第12話〈5分間〉(改2)

町中に空襲警報が鳴り響く中、寛代は眩く。

「敵機、小型と中型。機影は5機、境港に向けて飛行中」

日向が大声で聞く。

「司令、引き返しますか? お寺には防空壕があります」

「そうだな」

……と言いかけた途端、軍用車は急ブレーキをかけた。

「ぼいー!」

夕立が叫んだが直ぐに母親の身体を押さえてくれていた。

「どうした?」

私は慌てて車外を見る。

目の前の道路に、あの『女性』……深海棲艦(大井・仮と、しておく)が立って居た。

「あいつか?」

彼女は道路のど真ん中で、私たちの行く手を遮るように立っていた。

「陸(おか)の上で、ご苦労なこったな」

私は言った。

しかし、あれが昨日のアイツだとすると?

「怪我とか大丈夫なのか?」

思わず言ってしまったが、敵に対しては余計な心配だろう。

私たちから数十メートル以上離れているそいつは何か言ってきた。

「シンパイスルナ」

……直接、空中を伝わって聞こえてくる声ではない、何だろう?

「オマエタチトハ、カラダガ、チガウ」

それは頭の中に直接、響いてくる。あれか？ 『念話』ってやつだろうか？

道路の上で偉そうに腕を組んでいるが……今の彼女は、さっきまでの暑苦しい上着を脱いでいた。だから、その白い肌が否応（いやおう）にも目立つ。

「なんだあれ？ 別の外人さんか？」

母が普通に聞いてくる。そうか、敵の問い掛けは母親にも伝わっていたのか。

私は言った。

「お母さん、あれが海軍の敵だよ！」

「へえ……そんな悪い人には見えんな」

それは鋭い。

実際こうして街中で出会うとアイツもさほど『悪』っぽく見えない。不思議だが。特に、この深海棲艦は正体不明ながら、そんな印象なのだ。

母の感想を聞いたのか知らないが『彼女』の刺々しい雰囲気は少し緩んだ。

「キノウノカリハ、カエシタ」

「かり？」

私は答える。

「ハカマイリチユウハ コウゲキハ、ヤメサセタ」

「ほう、それは親切な……」

というか妙に義理堅いやつだな。

あれか？

「昨日の赤城さんの攻撃のことか」

私が呟くと、そいつは軽く頷いている。敵とのやり取り……不思議な感覚だな。

しかし、こう妙に人間臭いところが、この深海棲艦の厄介なところだ。我々が戦うべき相手なのに敵愾心が萎えてしまう。単純な悪者なら楽に闘えるんだが……。

「それで、どうするつもりだ？」

私は改めて彼女に問い掛けた。対話が出来る相手なら、その意図や目的を確認して戦闘を回避出来るかも知れない。

すると、その深海棲艦は片手を私たちの方へ向け、手のひらを広げて見せた。

「ゴフンダケ、マツテヤル。ソノアイダニ、ミンカンジンハ、ニガセ」

民間人って……私は母親を見た。まさか？

「……敵に塩を送るつもりか？」

私は肩をすくめた。こういう『温情』がある敵だとはな。ますます戦い辛い。

「どうしますか？」

一連のやり取りを聞いていた日向も聞いてくる。

私は言った。

「5分……取り敢えず戻れ！」

「了解！」

日向はシフトチェンジしてバックギヤに入れると母親に言った。

「お母様、揺れますので気をつけて！」

直ぐに軍用車は後退しながら加速する。夕立の金髪が車外になびいた。

「ほいっ！」

だから、お前の叫び声には何の意味があるんだよ！ 一応、軍人だろっ。

「口を閉じて、舌を噛みますよ」

後ろを振り返りつつ、そう言った日向。ある程度のところで正面を向き直ると彼女は急ハンドルを切って軍用車は路地で勢いよく180度ターンをした。

「おええ」

「誰だっ！」

さっきから、うるさいのは一人だ。

「……つたく夕立か？」

寛代も母親も黙っているが。

「……」

だが夕立は賑やかな台詞とは裏腹に私の母親の身体は、しっかりと押さえてくれていた。そこは任務を果たす軍人らしかった。

第13話〈武運長久を〉(改2)

「死ぬんじゃないよ、ぽいチャン」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第13話〈武運長久を〉(改2)

空襲警報が鳴り響く中、軍用車は一路、墓地へと急行する。

日向が聞く。

「全員、無事ですか？」

私は母親を見て言った。

「ああ、大丈夫そうだ」

しかし母親は、この状況でも、まったく恐れていないのは意外だった。さすが軍人の妻だ。

そう、私の父親は空軍のエースパイロットだった。エースというのは、あくまでも噂だ。ただ、その割には出世もせず最後は地上勤務していた。

そこは、当時まだ若かった私には解せなかった。ただ今では人間関係でいろいろあったのかな？ ……と想像するのみだが。

来た道を逆走している軍用車は共同墓地に近づく。前の方に、お寺の近くにある市民公園が見えた。墓参の市民が逃げ込んでいる。

それを見た母親は言った。

「ここでええわ、下ろしてごせ(下さい)」

日向が何か言いかけると母親は続けた。

「ここにも防空壕はああけん。寺まで回ると時間がないけんな。あんたらも早く準備せんといけんが？」

日向はハツとして何かを悟ったように「はい」とだけ応えた。彼女は直ぐにミラー越しに私に視線を送る。

私は言った。

「よし、公園前で停車だ」

「はい」

私の指示で軍用車は公園の入口で停まった。寛代と私に続いて母親は下車した。

降りた寛代は、しきりに頭に手を添えて周りを気にしている。恐らく索敵モードに入っているのだろう。鎮守府と通信をしているのかブツブツ言っている。

ボックスから軍手を取り出した日向と夕立は車から降りると車体側面のフックを外して手早く軍用車の幌を畳み始めた。

私も後部から荷台へ回って例の包みを開いた。その中には黒光りする軽機関銃があった。

「これか」

「では司令、後は私たちが」

日向の言葉に私は下がった。彼女は夕立に声をかけて手際よく包みの下にある銃座を引き起こして、そのまま一旦地面に据えた。

母親は準備をしている夕立に声をかけた。

「ぽいチャン、元気だな」

「ぽい？」

いきなり『ぽいチャン』と呼ばれた夕立は驚いて振り返った。

母親は言う。

「うちにも、この子(司令)の下に死んだ娘がいてな。生きてたら、ちようどアンタくらいの歳だわ」

「ぽ……」

夕立は、その言葉の意味を直ぐ理解した。私に死んだ妹がいたことは知っていた。ただ生まれる前に母親が病気をして流産したのだ。

母は続けた。

「死ぬんじゃないよ、ぽいチャン。そしてお前も」

母親は私のほうを見た。

「アンタらの命は、お国のものだ。ムダに散らすじゃないで」
そして真剣な顔で私に敬礼した。

「武運長久を」

私も思わず答礼した。

堪りかねた夕立は顔をクシャクシャにして母親に抱きついた。

「お母さん！」

母親も無言で夕立を抱きとめた。

しかし寛代が叫ぶ。

「来るよー！」

その場に緊張が走った。夕立は直ぐ母親から体を離すと私に並んで敬礼をした。

夕立は泣くのを堪えながら言った。

「行って……来ます」

「ああ、行つといで」

既に日向は軽機関銃の準備を終えて運転台に向かっていた。私たちも母親と別れて直ぐに軍用車に乗り込んだ。

私は後部座席に、夕立は車内中央に据えられた軽機関銃の銃座に立った。さすが艦娘は軍人だ。単に可愛らしいだけの制服だったのが今は彼女と機銃がしつかりマッチしていた。

母親が叫んだ。

「必ず生きて帰りな、ぽいちゃん！ さっ、早く！」

いつの間にか敵機の低い爆音が遠くから聞えていた。

「出ます」

日向はシフトレバーを操作する。幌を取った軍用車は黒煙を吐きながら公園の前を発進した。

「来たー！」

寛代が叫ぶと遠くの空に黒い点が幾つも見えた。お台場だろうか？ 高射砲の発射音と共に空に弾幕が張られていく。

ふと振り返ると母親はまだ敬礼をしていた。

やや俯（うつむ）いて唇をギュツと閉じている夕立。金髪を振り乱して泣いているようにも見えたが気のせいかな？

第14話〈攻撃待機〉（改2）

丈の短いスカートがヒラヒラして

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第14話〈攻撃待機〉（改2）

空襲警報が鳴り響く。遠くからは高射砲の発射音が断続的に聞こえ、美保空軍基地からも迎撃機が上がっているのが見えた。

日向は大声で報告する。

「今回、敵の目標が司令官である可能性が高いですが現状は警戒しながら鎮守府へ向かって宜しいでしょうか？」

「そうだな、それしか有るまい」

そのとき寛代が何か呟き、日向が頷いた。

「秘書艦より伝言。今のところ美保湾に敵の艦隊は見られず航空機のみです」

私は応える。

「そうか、それじゃ暫く広い場所を避けて慎重に戻れば大丈夫か？」
「あと……」

日向自身が何か通信を受けたようだ。暫くブツブツやり取りをしてから私に言う。

「鎮守府の艦娘たちも、まだ出撃は見合わせて居るようです」
「そうか、例の協定か……海軍は様子を見るだけか」

美保鎮守府として敵が航空機のみの場合、空軍の要請がない限りは艦娘たちも迎撃出来ないという不文律がある。陸軍、空軍に続いて後から美保に設立された海軍の部隊としては国土防衛のために『先輩』基地の顔（メンツ）を立てないといけない。これは、じれったい。

もちろん我々海軍が直接攻撃を受けた場合には無条件で反撃が出来る。やれやれ、こんな約束事は時間の無駄だと私たちは思っていた。

「偉そうなこと言っても、陸軍や空軍じゃ、効果的な反撃も出来まい」
もちろんそんなことは公に口が裂けても言えない。

夕立が銃座から呟く。

「ええ？ 反撃出来ないっぽい？ ……んー残念っぽい」

「……って、何が残念だよー！」

狙われているのは私の可能性が高いんだぞ。

思わず小言でも言っただろうと思っただけ振り返ろうとした……が、夕立の太ももが目に入った。慌てた私は首をすくめた。

そうだ！ 夕立は後部のスペアタイヤに腰掛ける形で銃座で構えの姿勢を取っている。うかつに振り返れば、彼女の丈の短いスカートがヒラヒラしているから……そこから先は禁止。

日向も私の硬直具合を気にしたのか？ バックミラー越しにチラチラとこちらを見ている。ごめんな日向、お前は、こういう感度低いよな？

遠くからは敵機の攻撃音、そして高射砲が破壊される音や空軍機が落ちるような音が聞こえた。多少、時間稼ぎになっただろうが結局は、陸軍の高射砲も空軍の迎撃機も根本的に役に立たない。敵機は無傷のまま、どんどん弓ヶ浜上空に接近している。

日向が言う。

「やはり、このまま鎮守府に戻るの危険です。市街地から迂回して必要ならどこかに退避しましょう」

「ああ」

すると夕立の声。

「ねえねえ市街戦？ コレ撃って良いっぽい？」

撃つな！ ……と言いかけて、また硬直。眩しい太ももがチラツと見えた。やれやれ、私はいったい誰と戦っているのやら。

日向が寛代から何かを聞いている。

「司令、このまま行くと鎮守府まで丸見えになります」

「だろっうな」

記憶を手繰（たぐ）ると共同墓地から海沿いの幹線道路へ出る道は山も林もない。もちろん大きな建物もないから狙い撃ちだ。

日向が続ける。

「この先は見通しの良い平地が続くので敵の地上部隊からも攻撃される危険性があります」

私は腕を組む。

「そうだな。下手したら敵の重戦車が来る可能性もあるわけだ」

「ええ？ 重戦車？」

夕立は嬉々としている。おいおい。

冷静な日向は続ける。

「鎮守府へ戻るのはいち早くあきらめて港の旧市街地方面へ退避しましょう」

「分かった」

夕立が口を挟む。

「やっぱり市街戦っぽい？」

「夕立は、どうしても話をそっちへ持って行きたいようだな？」

私は前を向いたまま半分怒鳴った。

「ええ？ だってえ」

恐らく夕立は後ろで口を尖らせているだろう。

私は呟いた。

「どうしても艦娘って戦闘になると生き生きするんだろうな？」

だが、そうは言いながらも、まてまて。私も頭に血が上ったかも知れないと思ったので、落ち着こうと深呼吸をした。

「はあ……まあ、仕方ないか」

艦娘も兵士である以上、戦うことが使命だ。そこは咎めても始まらないよな。

第15話〈強襲〉(改2)

「だれだよメロンって……ああ、夕張さんか」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第15話〈強襲〉(改2)

空襲警報で人通りの無くなった道路を、ひたすら港のある旧市街地方面へ向かう軍用車。こうなつてくると空からでなくても、かなり目立つ。

おまけに金髪で長髪という、ただでさえ目立つ夕立が後ろの銃座で構えているから強烈だ。オマエは馬賊か、大道芸人か？ ……つて感じだな。

そんな夕立が言う。

「敵さん、来ないねえ……つまんないっぽい」

「来なくて良いよ！」

思わず反論……する間もなく、幹線道路沿いの大きなビルの陰から、いきなり敵機が顔を出した。

「え？」

「うわー！」

ハツとする日向と私。いや、向こうの敵機もビックリしたに違いない。相手からも一瞬、慌てている雰囲気伝わってきた。

「突破します！」

日向はアクセルを踏み込んだ。すかさず夕立は敵機を目掛けて軽機関銃を連射した。

「ポイイイー！」

およそ銃を撃つには似つかわしくない叫び声を上げて銃を撃つ夕立。バリバリという音と共に機銃が火を噴き、葉莖が当たり一面にバラ撒かれる。キンキンという金属音が響く。

オマエは撃つときも叫ぶのか？ いや、それ以前に、この軽機関銃は敵機に効くのか？

頭を伏せながら私には着任当日、弓ヶ浜で寛代と二人で敵機に追い回された、あの忌まわしい記憶が蘇る。・

だが私の心配とは裏腹にボガンという鈍い音と共に地響き、そして衝撃波が来た。

「まさか？」

頭を抑えながら振り返ると、直上の敵機が粉碎されていた。

こんな機銃で？ ……というのが正直な感想だ。

バラバラと敵機の破片が降り注ぐ中を軍用車は速度を上げ、敵機の爆発現場から遠ざかる。

私の疑問を察したように日向が応える。

「見た目は小さいですが艦娘の機銃と同等の威力があります」

良く知っているな。日向も実はメカには詳しそうだな。

敵機の大きな破片は後方でそのまま幹線道路に落下してガシャンという大きな音を立てた。その他の破片もまた周りの建物に落下して、カンカンという金属音が響く。

ある程度、落下する敵機の破片からの安全な距離をとった上で一旦、道路脇に車を止めた日向。

彼女は肉眼で後ろを確認しながら続けた。

「実は、この機銃での地对空射撃は今回が初めてです」

「ぽい、すーぽいぽい！」

撃った夕立本人も感心している。

「艦娘が撃ったことと併せて至近距離から射撃したことも威力を高めたと思います」

日向は冷静に分析している。

……ということは、例えば私が遠くから撃っても、ほとんど効果がないということか。

夕立は、なおも喜んでいる。

「ぽい！ やっぱリモロンちゃんの仕事？ すーぽいぽい！」

私は軽く帽子を持ち上げて夕立を振り返らずに正面を向いたまま言った。

「だれだよメロンって…ああ、夕張さんか」

本人が居ないと言いたい放題だな。まあ、夕張さんもメロン程度では怒らないだろうが。

しかし喜んだのもつかの間。

「まだ来る」

寛代の一言で全員がハツとした。

「もう港が近いが、どこかに隠れるところがあつたかな……」

私は大きく見える高尾山を見ながら呟いた。

夕立がホルスターを気にしながら言う。

「日向の言つた通りっばい。こうなつて来ると、もう拳銃どころじゃないっばい」

「ソレは言えてるが敵もこっちも極端だよな」

私は帽子を被り直す。まあ、艦娘が絡むと何事も派手になるな。

夕立の声が続く。

「ねえ司令、さつきから固まっているっばい。どつか打つたっばい？」

「いや……」

相変わらず私は正面しか見ていられない。

「痛いっばい？」

夕立なりに心配してだろう。私の背中に手を当てて様子を見てくれる。

「おい、ダイジョウブだつて！」

気持ちは有り難いが……恥ずかしいのと振り返るのが難しいので困惑する。

「ねえ、ひよつとして破片が当たつたっばい？」

夕立は銃座を降りて私の真横で片ひざをついた。彼女の太ももにスカートがチラつと見えて……さすがに、これはヤバイヤバイ。私は余計に硬直した。

敵の攻撃よりも私が夕立の今の姿勢を直視する方が違う意味での流血惨事になりそうだ。

「良いよ、何とも無い」

私は手を振りながら帽子を深く被つて誤魔化した。

「ぼいっ？」

しかし……さっきの母に対するサポートや、私への心配ぶり……夕
立も意外と優しいんだな。

「では、出します」

寛代と状況を確認していた日向は車を発進させた。軍用車は、旧市
街へと入って行く。

第16話〈市街戦と盾〉(改2)

「さあ、ステキなパーティしましょう！」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第16話〈市街戦と盾〉(改2)

軍用車は旧市街の小川沿いを走っていた。敵に追われていなければ私も故郷の懐かしい景色を、ノンビリと楽しみたいところだが、そうもいかない。

それに今、私の右手の方に夕立のスカートがヒラヒラして、うかつに振り向くことも出来ない。妙な緊張感で私の方が吐きそうだな。

前にいる寛代と日向は退避できそうな場所を探しているようだな。私は言った。

「この先に商店街のアーケードがあったはずだ」

「アーケード……なるほど」

日向も頷く。

「なあに？ ソレ？」

夕立が聞いてくる。

「屋根のある道路だ。あそこなら少なくとも上空からの目隠しにはなる」

そのときドドドという低音と共に敵機が背後から迫ってきた。黒い機体が2機、急速に接近。

夕立は「ぼい！」と言いながら反射的に体を前方に移動した。入れ替わるようにして銃身を後方へと回す。必然的に夕立は前の座席の間に体を挟まれる格好になった。

「まずいー」

いや、敵ではなく私の目前での夕立の太ももとスカート……私は慌てて制帽を押さえて夕立と反対側から後方を振り返った。

次の瞬間、車の両サイドに稲妻のような閃光が走った。眩しい、目が眩んだ。

同時に左側の民家の軒先が砕かれ、右側の小川の水は蒸発して白煙（水蒸気）が上る。一瞬……それらがスローモーションのように見えた。直ぐに衝撃波が来るが、日向は煽られつつもハンドルを立て直す。

「艦娘に負けず敵も派手だな」

いや夕立の派手さを思えば敵のことも言えないか。

「撃つっぽいー！」

言うが早いか機関銃を連射する夕立。

その言葉で私は慌てて片耳を塞いだ。直後、前後のシートに上手く身体を固定した夕立が射撃を開始。発射音と同時に排出される葉莢が車内外にバラバラと飛び散る。一部が容赦なく私にも降りかかる。

さすがに今度の敵機は、さつきより距離もある。また走行中の車体からの射撃では安定性が悪い。揺れる車内から必死に見上げると敵は警戒して直ぐ二手に分かれ後方の視界から消えた。

「簡単には当たらないな」

私が言うと

「チッー！（ドン！）」

片足を床に踏みつけて夕立が舌打ちしている

「え？」

……おいおい、ちよつと怖いぞ。意外な反応だな。

「曲がりますー！」

そう言いながら日向はハンドルを切った。私は慌ててサイドの手すりを握る。

車はブレーキ音を立てながら高速で右折して駅前通り（商店街）に入った。

今度は前方のアーケード上空に黒い敵機が現れ、ゆっくりと間合いを詰めて来た。

「しつこいな」

「つかまっていて下さい」

日向はそう言ってシフトダウンすると急加速した。

敵機は、また閃光を放ったが、それは後方へ飛び去り車は高速のまま

まアーケードに突入。

「アーケードか懐かしいな」

……と思う間もなく直ぐに停車した。敵機は私たちが出てくるのを待ち構えているのか、上空で不気味に旋回する音が聞える。

日向は寛代に確認を取る。数秒、やり取りがあつた後に日向は私のほうを向いた。

「司令、秘書艦より入電。司令と寛代の二人はここアーケードでの下車を……ただ最終判断は司令に一任とのことですよ」

いきなりで驚いた。だが、さすがは作戦参謀（祥高）だな。躊躇（ちゆうちょよ）している暇はない。

「分かった」

私の言葉で直ぐに助手席の寛代が下車する。続けて私も降車した。この提案が何を意味しているか……私には直ぐに分かった。艦娘たちも同様だろう。

彼女たちは私の囿（おとり）すなわち盾だ。

日向と夕立は黙ってこちらを見ていたが直ぐに敬礼をした。私と寛代も下車したその場で敬礼した。

敬礼を直ると日向は微笑みながら言った。

「司令、何かあれば先に靖国でお待ちしております」

「さあ、ステキなパーティーしましょう！」

夕立も髪をたくし上げた。

だが私は釘を刺すように言った。

「いや、二人とも必ず生きて戻れ。これは命令だ！」

『ハッ』

二人の返事と共に軍用車は急発進した。上空には敵機の飛行音が響いていた。

第17話へ自由と憎しみ〈(改2)〉

「ワタシハ、コノ国ヲニクム」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

：第17話へ自由と憎しみ〈(改2)〉

軍用車はアーケードの出口で一時停止して体勢を立て直す。夕立は機銃を構えながら日向と打ち合わせをしている。

やがて二人でタイミングを合わせながら軍用車を急発進させた。アーケードを出ると直ぐに敵機が追撃する。

彼女たちの後姿を見送りながら私は呟いた。

「囧(おとり)か……嫌な響きだ」

つい、あの美保湾の戦いで陸攻の「特攻」を思い出すんだ。

それと……なぜかアノ山城さんの姿も。

日向たちは敵と交戦しながら遠ざかっていく。幸い敵は、まだ私が乗っていると思っているようだ。

私は何気なく寛代を見た。

「逃げるなら今のうちだな」

彼女は付近を索敵しながら小さく頷いた。

私が指揮官である以上、いちばん最後まで生き延びる責務がある。それが部隊や艦娘、ひいては国家のためになるのだ。

「行くぞ」

私たちはアーケードは振り返らず反対側の路地を高尾山の方へ向くと逃げ出す。

しかし、この狭い境港だ。果たして何処へ逃げたら良いのか？

旧市街といっても本当に小さなエリアだ。

しかも、この路地の先は岸壁しかない。そこから先はどうする？ 艦娘に迎えに来てもらうのか？

すると寛代が立ち止まった。何事かと思つて前を見た私は驚いた。

「お前……」

路地の先には深海棲艦（大井・仮）が居たのだ！

彼女は何も言わず路地の出口付近に立っていた。相変わらず偉そうに腕を組んでいる。

だが今は特に、こちらを攻撃する意思はなさそうだ……なるほど、この場で直ぐに私を殺す気はないようだな。

私と寛代は距離を保ちながら様子を伺う。

そうだ、一度、聞いてみたいことがあった。

「なぜ、お前は私を狙う？」

聞いた直後に私は自分で内心、苦笑した。我々は戦争しているのだ。

改めて聞くまでも無いこと……連中に対峙できる唯一の軍隊指揮官としては愚問だったか？

「……」

無視されるかと思ったが意外にも反応があった。彼女は、ゆっくりとこちらに視線を向けた。至近距離で見る彼女の瞳は澄んでいた。

コイツは本当に我々の敵なのか？ ……この深海棲艦と相對すると、いつも不思議な感覚に捉われる。

敵対すべき相手なのに、どこかに信頼に近い存在感があるのだ。

「不思議だな……」

今まで出会った中でも最も特殊な個体だろう。

だが彼女は、ゆっくりとこう言った。

「才前ガ『公人』デアレバコソ、ワタシハ、オマエヲ、ソシテ、コノ国ヲニクム」

それは私の淡い期待を見事に裏切ってくれるものだった。

「憎む……のか？」

思わず復唱した。

敵はグロテスクで原始的な風貌をしている者が多いから正直もつと単純な動機かと思っていたのだが……意外と難しい意義付けで対峙してくるんだな。

しかし何だろうか？ 最初に出会って会話を交わした際にはとても聞き辛かった彼女の語り口も少しずつ滑らかになっている。敵も

学習をして日本語が上達するのだろう。

深海棲艦とは想像以上に知的だ。もし今後、武力だけでなく作戦面でも押され始めたら我々はどうなるだろうか？

そう考えた私は僅かな焦りを感じつつ反論した。

「お前は自分たちの群れのため……お前たち全体の目的を実現するために戦っているのではないのか？」

「ワタシタチハ、違ウ」

彼女は急に目を大きく開いて笑ったようだ。感情と表情もあるようだ。

やはり笑っている。

だが私はその笑顔を見て妙な感覚に捉われた。彼女の顔……どこかで見覚えが有るのだ。

そんな私の想いは露知らず彼女は得意気に続ける。

「私たちには国モ義務モ、ナニモナイ。考エル必要モナイ」

そこまで聞いた私はハツとした。このままではコイツの主張に呑まれてしまうぞ！

私は寛代をチラツと見てから反論した。

「お前たちは……自分勝手に戦っているというのか？ その割には組織だった行動が出来ているな」

白い頬を、やや紅潮させながら彼女は続けた。

「フ……ワタシタチニハ組織も階級モナイ。命令スルコトモナイ……ミンナ平等ダ。強制サレルコトモナイ」

私が感心するのは、そんな集団なのに、よくあれだけ統制のとれた攻撃が出来るな、という点だ。

だが私は腕を組んだ。

「何となく……釈然としないな」

私の反応に彼女も、こちらを見詰める。それは不思議な対話だ。

確かに、こいつの頭はよく切れるようだ。しかし主張する理論は破綻している気がする。

そう……彼女の主張は一見、自由と平等を謳っているようでありながら、その実、自分勝手に自己中心的じゃないのか？

うまく説明できないが、やはりこいつらとは相容れない気がする。しかし……出来ることならせめて戦いを避ける道はないものか？

「深海棲艦……」

私は苦し紛れに呟いた。

何とか彼女を説得出来ないものか？ うーん、でも理屈とか議論は苦手だ。

すると彼女（深海棲艦）は、少し険しい表情になった。

「ワタシノ中ニアル想イハ……オ前ノ存在ヲ、タダ消シ去ルコトダケダ」

「なに？」

要するに最初に日向が予測した通り。こいつらの目的は私の生命を狙うことなのだ。

鳥肌が立った。

第18話〈犠牲〉(改2. 1)

「血も涙もナイ軍人だな」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第18話 〈犠牲〉(改2)

深海棲艦（大井・仮）は少し険しい表情に変わった。

その時、何処からともなく地響きが聞こえ振動が伝わってきた。

「え？ まさか、この音は……」

私は驚いた。そう、主に海上での活動が主だと思われていた彼らに、その『まさか』である。

ほどなくして彼女の後ろの広い路地には、その車両がやって来た。

「重戦車か？」

実際に、それがそうなのか？ まだ、この路地からは分からない。

深海棲艦は無表情のままだ。

やがて、その兵器の銃口が、ちょうどこの路地……私たちを狙える位置に来た。さすがに万事休すか？ 私は覚悟を決めた。

だが深海棲艦は意外なことを言う。

「セメテ美シク殺シテヤル。機銃デハナク、コレデ」

彼女は懐から拳銃のような武器を取り出した。

「拳銃？」

そうだ思い出した。

私も祥高さんから渡された拳銃を持っていたのだ。すかさず私も拳銃を取り出して深海棲艦を狙った。

路地で、お互いに銃口を向け合う二人。

ほんの一瞬だが深海棲艦は怯（ひる）んだようにも見えた。しかし直ぐに元の冷静な表情に戻った。

「撃テルカナ？ ソレデ、ワタシヲ」

なんだこいつ、生意気に度胸を試してくる気か？

「私だって軍人だぞ、舐めるな」

私は改めて狙いを定めた。しかし表情を変えずに彼女は続けた。

「ヤツパリ、才前ハ血モ涙モナイ軍人ダナ。ソウヤツテ、アノ時ノヨウニ私ヲ殺スガイイ」

「な、何を言い出すんだ」

さすがに私は動揺した。こいつは何か知っているのか……。

「いや」

私は慌てて否定した。

「脅しには乗らないぞ」

彼女の表情が緩む。

「ソウ思ウカ？ ……私ハ、才前ノコトヲ、イロイロ知ツテイル」

そうか、やっぱり私の知っている艦娘なのか？ あせりに似た緊張が出てくる。

すると躊躇（ちゆうちよ）する私の前に寛代が走り込んで来た。そして二人の間に両手を広げて立ち塞がった。

「やめろ、寛代っ、危ない！」

私が止めても彼女は首を振って退こうとしなかった。深海棲艦は目を細めた。

「ホホウ、美シイナ小娘……ドコデソソナコトヲ覚エタ？ 海軍デハ、教エマイ」

「止める寛代、こいつは本気だぞ！」

私は銃を構えたまま叫んだが寛代は敵を睨んだまま動かない。

「無駄ダ。哀レナ艦娘ヨ。マツタク無意味ダ」

深海棲艦は、そう言いながら寛代に銃口を向ける。

「止めろ！」

だが彼女は躊躇（ためら）わずに引き金を引いた。

『まさか』……だった。

乾いた銃声が路地に響く。寛代は弾かれるように仰向けに倒れた。

「寛代！」

私は銃口を下げて叫んだ。

異質な敵……深海棲艦に人間的な常識は、まったく通用しない。それは過去の戦いからも分かっている。

対話して油断したか……冷酷な相手であることを改めて悟ったが、もう遅かった。

私は直ぐ寛代に駆け寄ると、彼女を抱き起こした。だが寛代は無言だ。赤いセーラー服の胸の辺りに小さな弾痕が残っている。そしてピクリとも動かなかった。

「寛代……」

どこか抜けた、おバカな駆逐艦だと思っていたけど……自分の身近に、まだ立派な兵士がいたのだ。誤解していた……。

「クツ……濟まない」

何かが込み上げて来るが必死に堪えた。

ふとあの海戦……『白い海』を思い出す。結局、バカなのは私……そんな指揮官の下で犠牲になるのは一途な兵士ばかりだ。今更、悔いても遅いが。

そんな私の心情を見透かすように深海棲艦は冷静な口調で続けた。

「バカナ艦娘ダ。海軍ニ、コキ使ワレ最期ハ、コノザマダ」

その言葉に私は無性に腹が立ってきた。

「違う！」

深海棲艦は銃口を下げて目を細めた。

「ナニガチガウ？」

第19話〈彷徨う艦〉（改2）

「スグニ我々の仲間にナルダロウ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第19話 〈彷徨（さまよ）う艦〉改2

深海棲艦（大井・仮）の言葉に、私は無性に腹が立ってきた。

寛代を抱きかかえながら私は叫んだ。

「違うー！」

すると目の前に立ちはだかる『彼女』は、いったん銃を下げた。続けた。

「ナニガチガウ？ オ前タチこそ自分勝手デ自己中心デはナイカ？」

「……」

悔しいが私には、それ以上の反論が出来ない。ただでさえ無能な自分に追い討ちをかけられる思いだった。

私の思いを悟ったかのように彼女は続ける。

「オ前ダツテ、人類の矛盾ハ 感ジテいるハズダ」

「くっ」

悔しいが彼女の言うことは、もつともだ。

この戦争だって、たまたま深海棲艦が攻めて来ている。ただ、それだけで人類は防御のために、一つにまとまって見えるだけだ。実際には世界の対立は皆無ではない。国内ですら完全に一つになっていないわけではない。

だからもし、この戦争が終結したら人類は必ず、お互いに新しい戦端を開くことになるだろう。

そいつは、銃を持ったまま腕を組んだ。

「ソノ小娘も、見テイロ。スグニ我々の仲間にナルダロウ」

「なに？」

私は寛代を見た。特に変わった様子は無い……ずっと動かないから。

だが冷たい目をしながら彼女は言った。

「我々と戦ッテ沈ンダ、才前タチの艦娘方、ソノ後、ドウナツタか知らナイダロウ」

「むっ」

そういえば、変な噂を聞いたことがある。

我々が敵と戦って沈んだ艦娘は、その後、夜な夜な再浮上して幽霊船となり当てもなく彷徨（さまよ）うと。その幽霊船が他でもない深海棲艦ではないか？ ……ただ、それを裏付ける証拠も何も無い。

「お前も幽霊船か？」

「……」

彼女は肯定も否定もせず黙っていた。

しかし目の前にいる、この深海棲艦だってその可能性が高いわけだ。まさか、とは思うが彼女の発言の端々に、かつて私が沈めた艦娘という可能性を感じざるを得ない。

では我々海軍は、結局こいつらと戦うほど新たな敵を作り続けることになるのか？

「まさか……海軍の存在自体が人類にとっての癌細胞なのか？」

寛代のこと動揺していた私は整理がつかずに思わず核心的な疑問が口をついて出た。この子も含めて人類のために戦う艦娘が犠牲になった結果が我々の敵になるのか？

改めて、そいつの言った言葉の意味を私は理解した。

「この子もいずれ？」

すると急に苦しくなった。

「それだけは……」

言葉が続かない。それは何とか阻止したい。だが……瀕死の寛代に今の私に果たして何が出来るだろうか？

私の苦悶を見透かすかのように深海棲艦は笑った。

「フツ苦シメ、悩め」

反論できない自分が齒がゆい。

しかし彼女の雰囲気突然変わった。改めて見上げると深海棲艦は、いつも以上に険しい表情になっていた。

「ダガ、お前に残サレタ時間は、モウナイ」

そして彼女は私たちに再び銃を向けた。相手に銃を向けられて改めて、私は自分が銃を放り出していたことに気づいた。

「バカめ。小娘ナド無視シテ私を狙エバ良カッタノだ」

「フン。お前如きに諭（さと）されたくない」

口先だけが私は最後の抵抗をした。もちろん今さら降伏するつもりは無い。こいつだつて私を助けるつもりは全く無い。

だから、せめて私を守ってくれた、この子と一緒に死のう。もし寛代が最終的に深海へ逝ってしまうとしても、それがせめてもの償いであり軍人としての誇りだ。

私は寛代を庇うように深海棲艦に背を向けた。軍人としては寛代を放り出して敵とと撃ち合い一矢報いるべきだったか？

「やっぱり、私は詰めが甘い」

思わず苦笑した。

だが無情な台詞が背後から響く。

「サラバダ」

「そうか、これで最期か」

私は再び寛代を抱き寄せると観念して目を閉じた。この子が居るからだろうか？ 不思議と恐怖心は無かった。

『ここで死んだら寛代と一緒に靖国へ往けるだろうか？ 日向や夕立は無事だろうか？』

そんなことを考えた。

だが突然、私の想いはガガガという激しい金属音に遮られた。それは深海棲艦の背後……あの戦車らしい兵器から聞えてきた。

「なに？」

機銃の音ではない、この音は……

第20話〈形勢逆転〉（改2）

「ちよつと本気を出しました」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第20話 〈形勢逆転〉（改2）

ガガガンという激しい金属音が響き、私は思わず再び目を開けて振り返った。

深海棲艦（大井・仮）も私と同様、慌てて拳銃を構えたまま振り返る。

その戦車らしい兵器は横から攻撃を受けているようだ。慌てて砲塔を旋回しているが狙いを定める間もなく装甲が打ち抜かれたらしい。車体の中に何かが入り込んでゴンゴンという跳ね回るような音がする。

「ナニツー！」

珍しく沈着冷静な深海棲艦が慌てている。横からの攻撃は継続し戦車は応戦する間もなく断続的に攻撃されていた。

「あ、これは逝ったな」

私は呟いた。間もなく戦車のハッチが開いて搭乗員……深海棲艦らしき『娘』たちが逃げ出した。

その直後だ。戦車の継ぎ目からは何本もの煙が立ち上った。さすがに砲塔が吹き飛ぶほどのダメージは与えられなかったようだが戦車内では何かが爆発する音が響く。やがて車体全体からは煙が噴き出して、メラメラと火を噴き始めた。

「……」

深海棲艦は、よほどその戦車の能力に自信があったのだろう。だが目の前で起きた突然の出来事に半ば放心状態だ。

直ぐに聞き覚えのある車の走行音が響いて、間近で停車音が聞こえ

た。続けて誰かが駆けてくる足音……。

「そうか、あいつらは生きていたか」

私は安堵（あんど）した。

深海棲艦は、次々と起こる事態に、このまま私にとどめを刺すか、直ぐに逃げるか……とつさの判断に迷ったらしい。

それが拙かった。

「司令えー！」

夕立が路地の向こうから顔を出した。

「危ない！」

思わず私は叫んだ。

深海棲艦は振り向いたまま手にした拳銃を夕立に向けて発砲した。間一髪、夕立は身をかわしたが可哀想に銃弾が腕をかすめた。

「あつー！」

夕立は叫んだ。顔をしかめ片腕を押さえながら膝をつく。そのまま路地の入口でうずくまった。

「夕立い！」

私は叫んだが寛代を抱いていて直ぐに動けない。深海棲艦は躊躇（ためら）わず二発目を発砲しかけた。

その時、夕立を乗り越えて黒い人影が現れた。

「日向？」

私は思わず叫んだ。彼女は刀を抜いて深海棲艦に切りかかった。

「クッ」

深海棲艦も拳銃で刀を防いだ。一瞬、日向の刀から火花が散る。

深海棲艦の反射神経も大したものだ。お互い刀と拳銃で力が拮抗している。

日向は一瞬、こちらを見て寛代の状況を悟った。彼女は深海棲艦を睨むと突然、片足で思いつ切り蹴りを入れた。

まさかと思うくらいに深海棲艦は十数メートルは飛ばされた。案外軽いのか？ いや日向の脚力が強いのだろう。

深海棲艦は後ろ向きのまま路地の木箱やゴミ箱を蹴散らしていく。

ゴン！ ……という頭を打ったような鈍い音がした。

「ぎゃあー！」

深海棲艦は叫ぶと同時に拳銃を放り出した。

「これは痛そうだ」

寛代を抱いたまま私は呟く。

日向は、ひるまずに倒れている深海棲艦に駆け寄る。直ぐに上段から刀を振り下ろした。

「日向ー！」

私が叫んだ次の瞬間に勝負はついた。

刀を振り下ろした姿勢のまま日向は静止している。深海棲艦は、そのままズルズルと地面に横たわった。

「ふうっ」

日向は一息つくくと刀で一瞬、空を切った。直ぐに祈るような格好をして刀を鞘（さや）に納めた。

彼女は背中を私に向けたまま言った。

「申し訳（ご）ざいませぬ司令……靖国へ行きそびれました」

そして日向は振り返ると汗をぬぐって微笑んだ。

「ちよつと本気を出しました」

私は何かを言いかけたが彼女は直ぐに付け加えた。

「ご安心下さい。みね打ちです」

私は安堵した。敵とはいえ無益な殺生……特に深海棲艦（大井・仮）には避けて欲しかったのだ。

「相変わらずだな、お前は」

私が声をかけると彼女は恥ずかしそうな表情をした。その反応も昔のままだ。

直ぐに夕立が肩を押さえながら駆け寄ってきた。

「寛代ちゃんー！」

「……」

日向も無言で寛代を見詰める。私には何も言えなかった。

第21話〈艦娘の絆〉(改2)

「駆逐艦8隻……二人分か？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第21話 〈艦娘の絆〉(改2)

路地で撃たれた寛代を抱いている私。そこに日向と夕立が集っていた。

「寛代ちゃん！」

夕立は自分が負傷しているにも拘らず寛代を心配している。

「……」

日向は何も言わないが無念そうだった。

私は彼女に聞いた。

「日向、お前も無線は持っているよな」

「ハッ」

私は少し離れた路地に倒れている深海棲艦（大井・仮）を見ながら言った。

「祥高さんに、この状況の報告を頼む」

「了解です」

日向は伸びている深海棲艦を示した。

「あれはどう致しましょう？」

「そうだな……」

私は少し考えた。

「負傷した捕虜も一名、追加だな」

「了解」

なぜか敬礼した日向は少し微笑んでいた。

「では……」

そう言いながら彼女は路地から外に出て通信を開始する。

私はチラッと夕立を見た。彼女は腕が痛むようだ。それでも私の視線に気付くと軽く頷いて笑顔で応えた。

「……大丈夫っぽい」

「無理するなよ」

「ううん、本当っぽい」

……だから、その『ぽい』が付くから、全て嘘くさくなるんだよ。ほどなくして日向が戻ってくる。

「司令、秘書艦より入電。大淀を旗艦として支援に重巡足柄。寛代と深海棲艦の移送用には駆逐艦8隻を派遣します」

私は、しばし考えた。

「駆逐艦8隻で、二人分か？」

「そのようです」

「でも大淀さんが自ら出撃とは珍しいな」

ちよつと嫌な予感がした。

私の表情を察した日向が付け加える。

「実は、この作戦は、元帥閣下からの勅命も入っているそうです」

「え？」

私は驚いた。

彼女は続ける。

「それ以上、秘書艦は何も仰いませんでした。ただ『事態の重要性を察して下さい』とだけで」

「察しろって言われてもねえ……」

私は寛代を見下ろした。その時初めて気付いたのだが、この子はかすかに息はしていた。

夕立も、それに気付いたようだ。

「あ、寛代ちゃん生きてるっぽい」

「……」

日向も安心した表情を見せる。

私もホツとした。やはり艦娘同士、安否は気になるよな。

ただ解せないのは祥高さんに報告しただけで、この子に元帥閣下が絡んできた。この美保鎮守府というのは一体、何なのだろうか？

「駆逐艦8隻で、二人分……」

私は概要を確認するように反復した。

「夕立は自力で……車で戻るのかな？」

私は日向に問い掛けた。

「そうですね……個人的な意見ですが深海棲艦の移送は、その意識の有無に関わらず陸路で運ぶ方が望ましいかと存じます」
すると夕立も言った。

「良いよお。私だって軍用車くらい運転出来るっぽい」

何か、この子の口癖は拍子抜けするんだよな。

苦笑する私に日向は真面目な顔で言った。

「ちよつと私から秘書艦に進言して見ましょう」

「頼む」

再び彼女は路地の出口付近で通信を始めた。

「司令え、寛代ちゃんの面倒は私が代わるっぽい？」

夕立が寛代を抱きかかえている私に手を伸ばす。

「いや、お前だって腕を怪我しているだろ？」

「あ……、それっぽい」

夕立は頭に手をやって舌を出す。

「やれやれ」

私は苦笑したが、何故か彼女を見てホツとした。

一見すると、おバカのように見える艦娘たちも、その心は意外に温かいのだ。そこに艦娘同士の絆の深さを感じた。

最初は、なかなか艦娘たちとの距離感が掴めなかったが、時間をかければ徐々に近くなるものだな。

日向が外を警戒しながら戻って来た。

「司令、秘書艦より返信。私の提案は受理され、夕立を海上で搬送する作戦に変更されました」

「ええ？ 私い、車で大丈夫っぽい」

夕立は反論している。

だが日向は言った。

「貴女を中心として考えるのではなくチーム全体を見て。もしも今後、突発的な事態が起きたとき、どちらが対応しやすいと思う？」

「ぽいっ……」

少し口を尖らせながらも少し考え込む夕立。

「うん、分かったっぽい」

どうやら彼女も後の作戦の方が良いと感じたらしい。

「それで良い」

日向は頷きながら淡々と応える。彼女たちのやり取りに私が口を挟む余地はなかった。

改めて日向は路地から表を覗きながら言う。

「暫くは、ここで待つしかないようだ」

彼女の後姿を見ながら私は言う。

「その路地を出ると境港の岸壁になっているだろう」

「そうですね」

日向も艦娘だからな。境港市の旧市街は初めてだろう。

私は記憶を手繰りながら続ける。

「そこは境水道（海峡）に平行した直線道路が続いて見通しが良い」

「……」

私の言葉に日向は黙って様子を見ていたが、外を見ながら口を開いた。

「ちようど良い按配（あんばい）に破壊された戦車が私たちの路地を塞いで簡単な防壁になっていますが」

「なるほど目隠しか……だがそれは敵の目標にもなるな」

「確かに」

すると夕立の高い声が聞こえた。

「ねえねえ、岸壁の向こうって川じゃないっぽい？」

私と日向は苦笑した。

「私たちの目の前にある境水道は島根半島に挟まれた一種の海峡で、狭いなりに見通しが良い」

日向は改めて夕立に説明をしている。

「だから撤収作戦を執行するには地上、海上ともに制圧しておくか、敵が来る前に迅速に作戦を遂行する必要があるということだ」

「へえ」

夕立は感心している。実は私も同じだった。日向のような戦艦クルスの艦娘になると、さすが分析力が優れているな。

その日向はチラチラと外を警戒しながら続ける。

「何しろ戦車まで持ってきた連中だ。それが一両だけ単独で上陸したとは考え難い」

私も領きながら説明する。

「この旧市街は路地が多い。建物の陰に潜むには敵、味方とも具合が良いからな。油断は出来ない」

日向も淡々と付け加える。

「迎えの艦隊が来るまでは、ここが敵に発見されなければ良いのだが………確率は五分五分の線だな」

「ええ？ 怖いっぼいい」

嘆く夕立。

だが日向は不敵に笑う。

「大丈夫。いざとなったら私が盾になるから……」

私は苦笑した。日向の場合、冗談では済まされない雰囲気があるんだ。

深刻な雰囲気になりそうだったので私は話題を変えようとした。

「しかし、とんだ墓参になった……責めるつもりはないが祥高さんの読みは外れたな」

すると夕立。

「違うよ、その深海棲艦が執念深いっぼい！」

「はは、それは言えてるな」

彼女は何気なく言ったのだろうが妙に的を得ていた。日向も微笑んでいる。

日向に伸（の）された深海棲艦が沈黙している今が撤収のチャンスだろう。

ただ、この二人には、ある程度の理解があるとしても実際に深海棲艦を鎮守府へ連れて帰ったら他の艦娘たちが複雑な感情を抱く可能性はあるな。

「やはり、私は甘いかな」

ふと呟いた。

だが元帥閣下が私たちの行動を知り即時、干渉してきた意図は何だろうか？ 少し気になった。

その時、警戒していた日向が再び報告する。

「秘書艦より入電。移送の駆逐艦娘は、黒潮、白雪、雪風、大潮、荒潮、朝潮、長月、霞です」

「おお、鎮守府の中堅駆逐艦が勢ぞろいだな」

私が言うと、夕立が続ける。

「……第六駆逐隊と島風ちゃんが入っていないね」

あ、確かにそうだな。

第22話 〈潜伏と青空〉（改2）

「せめて……瑞雲でもあれば」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第22話 〈潜伏と青空〉（改2）

路地で待機する私たち。さすがに、ちよつと暑苦しい。

周りを警戒しながら日向が言う。

「ここで戦車が破壊されたことは敵も直ぐに分かるだろう。我々の撤収部隊が来るまで、およそ30分。恐らく敵は現在、旧市街に展開している可能性が高いから最悪、撤収部隊よりも先に我々が敵に発見される可能性は高い」

「そうだな……お前の電探では敵の状況は索敵出来ないのか？」

私の言葉に彼女は浮かかない表情で振り返った。

「ここは路地で周りは倉庫です。おまけに目の前は戦車で……」

「そうか」

遮蔽物がない海上とは違って、今私たちがいる路地や旧市街は複雑に入り組んだ地上構造物だらけだ。日向の電探では、ほとんど役に立たないわけだ。

「せめて……瑞雲でもあれば」

日向は悔しそうに言った。瑞雲は彼女の索敵機だ。

しかし今日は墓参前提だったので当然、連れて来ていない。

「寛代も夕立も居るからと妖精を休ませてしまった……私の失態だ」
悔しそうな彼女に私は声をかけた。

「まさか、こうなるとは誰も思っていなかったからな。仕方ないことだ」

何かを言いかけた彼女はハツとしたように言った。

「あの軍用車も早く隠しましょう」

「そうだな」

彼女は続ける。

「車は撤収作戦には貴重な足です。攻撃されたら身も蓋もない」

日向は直ぐにでも車の移動のために路地から出て行きそうな勢いだったので私は慌てて言った。

「さつきも言ったが、埠頭に車を隠せるような場所はないぞ」

「大丈夫う？ 日向」

夕立も心配そうに声をかける。

日向は応える。

「いずれ敵が来るとしても少しでも早いほうが良い。それに……」

彼女は続けて岸壁を見渡した。

「多少でも路地を出たほうが電探での索敵が容易になるしな」

日向は改めて私の方に向き直ると直立不動の姿勢をとって敬礼した。

「司令、このまま座しては待てません。どうか斥候と車両の安全確保の任を、お命じ下さい」

寛代を抱きながら私は言った。

「分かった、行け」

「了解！」

敬礼して路地を出ようとする彼女を夕立が止めた。

「日向、これ」

夕立は使える片手でホルスターから拳銃を取り出すと日向に差し出した。

「ありがとう」

日向は拳銃を受け取ると安全装置を確認してから懐に入れた。

「さすがに刀では飛び道具（戦車）相手に太刀（たち）打ち出来ないな」
冗談めいたことを呟きながら彼女は外へ出た。

「日向……頑張って」

夕立は、まだ痛むであろう腕を押さえながら見送った。

しばらくすると軍用車のエンジンが起動する音、そして、ゆっくりと移動して行く車の走行音が聞こえてきた。

夕立は直ぐに寛代の傍に戻ってきた。

「司令、寛代ちゃんの様子は？」

声をかけられて思った。そういえば駆逐艦というか艦娘そのものを抱っこするのは初めての経験だな。最初から寛代の体温は低かった。

「私の直感では……」

人間ならヤバイ状況だが不思議とそういう感覚はなかった。寛代は、かすかに息をしているし、まだ大丈夫そうな印象だった。

「多分、大丈夫だと思うぞ」

「うん、司令が言うなら、それでOKっぽい」

夕立は微笑む。

「そんなものか？」

「そうっぽい」

そもそも艦娘が負傷って、いったい、どういう状況なのか？ 実は、まったく分からない。

いつも艦娘の戦闘は無線機越しに聞くばかりだからな。

艦娘のダメージレベルとか、そういう知識も兵学校では教えてくれなかった。いや、人類には、そういう情報が無いのだろう。

だが目の前で艦娘が撃たれる状況は海軍でも滅多に無いことだろう。

夕立もまた寛代の手を握る。

「うーん……確かに、大丈夫っぽい」

いきなり、前向きな分析だ。

「それは直観か？」

「うん」

微笑む夕立を見て私は日向や夕立には「生きて帰れ」と命令したことを思い出した。だが寛代には何も言わなかったな。

この子とは、いろいろ縁があるのだが身近過ぎてだろう。ろくに励ますことも無かった……それは反省すべきかも知れない。

だが、このまま待っていても私たちが不利な状況は変わらない。

恐らく敵の地上部隊は私たちの撤収部隊よりも先に、この付近に殺

到する可能性は高い。

しかし負傷者がいては下手に動けない……あの、捕虜もいるし。私は向こうに倒れている深海棲艦を見た。

「そういえば『彼女』は、ずっと動かないな」

日向のことだから、まあ、大丈夫だろうが。ちよつと、心配だ。

「うーん……ちよつと触れないっばい」

私に何か言われると思ったのか夕立は予防線を張る。

私は苦笑した。

「良いよ、お前が無理に確認しなくても……相手は敵だ。返り討ちに
あう危険もある」

そんなことを言いながら私は上を見た。路地から見上げる青空が
無性に青く、美しかった。

第23話〈損傷と静寂〉（改2）

「分からないっぽい」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第23話 〈損傷と静寂〉

日向が出て行った後の路地は静寂だった。暗い道路や壁と明るい青空のコントラストが妙に綺麗だ。

ここは、かなり港に近い。狭い生活道路だが人通りは、ほとんど無い。たまに野良猫が通り過ぎる程度。

そこに倒れている者2名……寛代と深海棲艦（大井・仮）、それに夕立と私だ。

既に空襲警報は止まっていた。だが解除の放送もないので町はまだ静まり返っている。今のところ敵がここへ来る様子も無い。

私は寛代の容態が安定しているのを確認しながら夕立に問い掛けた。

「そういえば夕立の報告を聞いていなかったな」

「ぼいっ。」

彼女は救護セットを、何処からか持ち出していた。さすがというか……

いや、むしろ兵士だからな。こういう事態に備えて常備しているのだろう。

「夕立、商店街を出た後の、お前たちの交戦はどうだった？ ……もし腕が痛むなら後でも良いぞ」

彼女は少し焦げた自分の服の袖……撃たれた腕の部分をハサミで切断している。白く細い腕が赤く滲んで……なるほど艦娘も人間と同じ赤い血が流れているようだ。

彼女は口を開いた。

「ううん大丈夫っぽい……あれから直ぐに待ち伏せしていた敵機と交戦して一機は直ぐに撃墜したっぽい」

説明しながら夕立は包帯の一端を歯でくわえて器用にクルクルと巻き始めた。上手に応急処置をするものだ。一見チャラチャラしているようでも、やるべき事はこなす。そこは本物の兵士だ。

「もういつひ（一機）は、ほっほ（ちよつと）てほったへほ（手こずったけど）」

「……何言っているか分からん」

彼女は口から包帯を外した。

「えっと……いったんビルに隠れて、こちらから待ち伏せして後ろから攻撃して撃墜」

「何のことだ？」

「だから……別の一機が大変だったけど墜ちたっぽい」

夕立は包帯を巻き終わった。

「それは結局、撃墜したって事だな？」

「そうっぽい」

やっぱり彼女の口調は慣れないな。私はため息をついた。

夕立は補足する。

「あの機銃の弾（タマ）は、さっきの戦車で全部なくなったっぽい」
彼女の目が急にキラキラしてきた。

「もうタマがギリギリでトドメ刺すまでに切れたらどうしようかって思ったからラッキーだったっぽい」

要領を得たような得ないような報告だが……まあ良い。

「そうか、ご苦労」

夕立は壁に寄り添ってしゃがみこんだ。空を見上げると「ほう」と一息つく。

私は慌てた。

「膝を立てるなっ」

「ぽいっ」

パン〇が見えるぞ。

しかし腕の痛みは良いのかな？ 私は、ふと疑問をぶつけてみた

なった。

「なあ、夕立……」

「ぽ?」

自分の応急手当が終わったら急に、いつもの夕立スタイルに戻ってる。相変わらず瞳が大きいな。

「お前たち艦娘が戦闘中に被弾とかすると身体は、どうなるんだ?」

「……」

私は寛代を見下ろした。

「今みたいに血が流れたりするのは、よく見るが」

そういえば寛代は胸を撃たれたはずなのに、あまり流血していない。呼吸も安定してきたようだ。

私は顔を上げて続けた。

「艦娘つてのは多少、直撃弾を受けたとしても人間のようにならぬ、やられるわけではないのか?」

夕立は少し驚いたような顔をした。それから急に、こっちを指差して嬉しそうに笑う。

「わあ、司令って何も知らないっぽい」

「悪かったな」

私も本気では怒っていない。こういう状況だと、夕立の屈託の無い笑顔はホツとするから。

「うーんと」

やっと考える仕草をする。

「……やっぱり、分からないっぽい」

彼女は舌を出して笑った。

「分からないって……おい! お前自身が体験していることなんだぞ!」

怒るといふより脱力した。

「ダメ?」

「いや………良い」

もう、これ以上質問する気力も失せた。天然少女には敵(かな)わない。

だが夕立の台詞に私はふと、あの深海棲艦の言葉を思い出ししていた。

『ワカラナイナ』

「分からない……か」

私は、その台詞を反復した。艦娘という存在自体、現在の人間にも説明できていない。

そもそも、この戦争だつて分からない事だらけだ。駆逐艦である夕立が、そんなに詳しいことを知らなくても当然だろう。

抱っこしている寛代をみて私は秘書艦を連想した。

「やっぱり彼女に聞かないとダメなんだろうな」

「ぼい？」

夕立が首を傾げる。

「いや、こつちのことだ」

伸びている深海棲艦は、まだ動かないが……なんとなく寛代と同じように息はしている気配だ。

敵とはいえ連中もやっぱり艦娘と同じような身体なんだろうか？

捕虜として連れ帰れば、いろいろ分かるかもしれない。

別に陸軍とは違うから拷問とか人体実験するわけではない。ただ、ちよつと後ろめたい気分にもなる。

「ヒマっぽい」

夕立も空を見上げて、ため息をついている。

そのとき遠くから何かのエンジン音……

「軍用車の走行音だな」

私が言うと彼女も応える。

「あれは、日向？」

ちよつと胸騒ぎがした。

第24話〈ぜかまし〉(改2)

「ぜかまし?」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第24話〈ぜかまし〉(改2)

軍用車の走る音が向こうから近づいてくる。

「日向?」

嫌な予感が……と思つたらズドンという大きな地響きがした。

「敵の地上部隊か!」

続けて何かの発射音が響く。直ぐにキューンという高い滑空音。

「わぁ、砲弾っぽい?」

さすが夕立、戦場の音には敏感だな。

直後にズシーン、ビリビリという弾が地面に着弾した音。同時に、やや遠くからパリパリ、タタタンという機銃の音も聞こえて来た。

「逃がっているのは日向か?」

「でも日向なら、きつと大丈夫っぽい」

普段は天然でも、実際の戦場を知っている夕立の言葉は重いな。

「あいつのことだ……回避能力を生かして、地上でもうまく逃げろ!」
日向が事前に分析した通り敵も地上部隊を投入している……それも単独ではないな。

私は、ふと気になった。

「日向は何やってんだ?」

「え? 一生懸命逃げているよ」

夕立が弁解する。

「違う……私たちの軍用車を隠すのに、そんな時間は要らないだろう?」

私は苦笑した。

「そういえば……」

さすがに夕立も気付いたか。

「何を手こずって岸壁をウロウロしているんだ」

私は心配になってきた。

「確かに日向らしくないっぽい……」

ドーンという発射音がし、そのたびに着弾の地響きがする。

「鎮守府の撤退部隊が岸壁に到着するまでは、まだ時間がある」

「日向、大丈夫かな」

夕立も心配している。

ちやうどその時、軍用車が私たちのいる路地の前を通り抜けた。

一瞬だけチラッと日向の横顔が見えた。

「あいつ意図的に岸壁で動いているのか？」

私は何か作為的なものを感じた。

「ええ？」

「日向も割りと戦略的な作戦が得意だからな。何か考えがあるのだろう」

そのとき夕立が何かを受信した。

「司令、さつきから緊急通信っぽい。断続的に……えっと、ぜか……まし？」

「なに？　ぜかまし？」

彼女は耳を澄ます。

「同じ言葉を定期的に繰り返してるっぽい」

「ん、どこかで聞いたことがあるぞ。何かの暗号か？」

私は天を仰いだ。

すぐに悟った。

「島風か！」

……なるほど敵に無線傍受されても問題ない言葉を使ってるのか。

「敵を欺いて意図的に私たちに何かを伝えようとしているのか？」

「島風ちゃん、何を？」

夕立も少々困惑している。

あのウサギちゃんが、どうしたというのか？

「島風、島風……わからん」

そのとき岸壁の端の方へ走り去った軍用車が激しく180度ターンをしたようでキュルキュルという車輪の音が響いてきた。

「あいつも派手だなあ」

やがて反対側から戻る軍用車の走行音と戦車の発射音が混じる。

左右からの滑空音と着弾音が次第に、こちらに近づいてくる。

どうも日向は岸壁の左右から挟まれたらしい。

境港の岸壁は境水道に沿って数キロ緩やかに湾曲して続く見通しの良い場所だ。

時間稼ぎをするにしても戦車という「飛び道具」相手では日向も逃げ切れるかどうか？

「撤収艦隊が来るまで持つのだろうか」

やがて岸壁の左右から砲声を響かせつつキュルキュルというキヤタピラの音。そしてズズズという地響きだ。

「やはり複数の戦車だな」

「日向……」

夕立も心配そうだ。

「いや、これはもしかしたら……」

第25話〈島風と反撃〉(改2)

「囃(おとり)」が好きだな、日向。

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第25話 〈島風と反撃〉(改2)

岸壁の左右からのキヤタピラの音が、かなり近づいて来た。
日向と思われる軍用車は狭い岸壁で盛んに回避運動をしているよ
うだ。

「勢い余って車ごと岸壁から海に落ちないか？」

何だか、そっちが心配になってきた。

「境水道は潮の流れが速いからな。普通の船でも油断すると危ない」

私は何気なく呟いた。

「そうっぽい？」

興味深そうに夕立が聞いてくる。

「ああ。だからココで海に落ちると一週間くらい上がって来ないん
だ」

「何が？」

彼女は不思議そうな表情をする。

「人間の遺体」

「ええ？・怖い」

目を丸くしているな。

「あ……でも艦娘は車ごと海に落ちても、まったく問題ないか」

私は苦笑した。

口を尖らせる夕立。

「私い、やだよ水死なんて」

私は改めて彼女を見た。

「艦娘が自分から落ちたぐらいで溺れるかよ」

「あ、それもそうっばい！」

……疲れるな。

そのうちヒューンと言う滑空音。着弾地点が私たちが隠れている路地の周りにも集中し始めた。

バリン、バシツツという破壊音が聞こえ、地面がビリビリと振動する。

「日向の心配より、こっちが、まずいんじゃないか？」

私は目覚めない寛代を気にしながら周りを見回した。

「司令え、怖いっばい！」

夕立がしがみついてくる。やめろっ！ 寛代が潰れる。

「おい、お前も軍人だろ？ しつかりせんか！」

私が嗜（たしな）めると彼女はハツとしたような顔をした。

「島風ちゃん？」

「はあ？」

一瞬、夕立が何を言っているのか理解出来なかった。

「あ、無線か？」

そう悟った次の瞬間だった。

少し遠くからダーン、ドーン！ ……という砲撃音に着弾音。そして

陸地側からは爆発音が入り乱れ始めた。

「これは流れが変わったな」

直ぐに私は彼女に言った。

「状況を確認！」

「ぼい！」

夕立は弾かれたように立ち上がると路地から外を窺（うかが）っている。

「えっと、島風ちゃんが近くの家まで来たっばい……あと連装砲ちゃんも」

呆れた。

「おい、報告に『ぼい』はないだろう？」

「えへ」

リボンの付いた頭に手をやる彼女。

「だが島風が来たことは確かだな」

……そうか、あいつなら足が速いから。

「取り急ぎ撤収艦隊よりも先に地上掃討のため島風を派遣したか」

さっきの通信は、その暗号だったか。

「なるほど」

それをいち早く悟った日向は意図的に敵の地上部隊を岸壁に引きずり出すべく奔走したわけだ。

『囿(おとり)』が好きだな日向……だが疾走する姿が似合っているのは、お前らしい」

私は納得するように呟いた。

夕立が報告する。

「司令、島風ちゃんが無線で叫びながら戦車を砲撃中っぽい」

……この『ぽい』にも慣れてきた。

「駆逐艦一隻といえども艦砲射撃は威力が大きい」

私は言った。

「島風は連装砲がいるからな。旧市街に敵の戦車が数台いるとしても境水道で逃げ回る島風たちを戦車から狙い撃ちするのは至難の業だ。その結果は明らかだな」

夕立が聞く。

「それも秘書艦さんの立案？」

「多分な。相変わらず祥高さんは切れ味が鋭い」

そう言いながら、私は疑念が湧いた。

まさかとは思うが、今回の墓参に私を強く押した理由って、敵をおびき出す為？

「……いや、疑うのは止めておこう」

私は頭を振った。

……仮に秘書艦には何らかの作戦の意図があったとしても結果的に寛代は私を庇って犠牲になり夕立も負傷した。祥高さんだって気持ち的には苦しいだろう。

ズドン、ズドンと爆破音が続き岸壁には硝煙の匂いと黒煙が立ち上

り始めた。明らかに流れ弾は目標以外の市街地にも幾つも落ちてるようだな。

「やれやれ、空軍基地に続いて今度は民間の港湾施設を破壊しまくりか」

美保鎮守府は過激だという評判が立ちそうだな。

「ぽいっ」

夕立も苦笑している。

「まあ敵襲だ。公的な『お咎（とが）め』はないだろう」

「そうっぽい？」

やや驚いたように聞いてくる夕立。

「……ああ。陸軍や空軍が太刀打ち出来なかった相手だ。結果的には大目に見てくれるだろう」

ただ地元の境港市民に対しては心が痛んだ。

「しかし敵は地上部隊だけだろうか？」

もう少し情報が欲しい。日向たちが2、3機ほど墜としたとはいえ、まだ追加で敵機が来襲する可能性は十分にあり得る。

やがて私たちの路地の向こう側に軍用車が停まる音がして誰かが近づいて来た

「日向か」

案の定、路地の入口に日向が顔を出した。彼女は一旦立ち止まって敬礼をした。

「日向、帰還致しましたので報告します……（ハアハア）軍用車を隠蔽する際に暗号電文を受信……」

彼女はポタポタと落ちるほどの汗をかいていて肩で息をしている。「直ぐに島風が先に到着すると悟って……（ハアハア）」

艦娘とはいえ兵士が目の前でハアハア言いながら報告を受けるのは初めてだ。

相手が日向となれば、なおさら貴重だ。こうやって喘ぐ日向には滅多にお目にかかれない。

……ちよつと惜しい気もしたが私は彼女の報告を制した。

「そこまでで良いよ日向。状況は分かった」

「きよ、恐縮です（ハアハア）」

日向は敬礼した。今もなお汗がポタポタと落ちている。

- 1) 深海棲艦を刀で伸した後に、
- 2) 軍用車を駆って、旧市街を囿になって、
- 3) 複数の戦車から逃げ回ったんだ。

「もう武勲賞モノだ。倒れるなよ」

私は彼女に言った。

夕立も言う。

「本当に日向は武人だよねえ」

「いや……」

他の艦娘なら恥ずかしがるところだが今の彼女は、それどころではない。

肩で息をしながら、それでも時おり耳を傾けて索敵を継続している。

思わず私は言った。

「ちよつと休憩しないか？」

「いえ、ここから脱出を完了するまでは気が休まりません」

この子は本当に真面目を絵に描いたような艦娘だ。まあ、そこが日向らしいところだ。

第26話〈要撃〉（改2）

「連装砲ちゃん、いっちゃってえ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第26話 〈要撃〉（改2）

砲撃の音は、かなり沈静化したようだ。

「そろそろ、表に出て大丈夫だろう」

「ぽいっ」

私は寛代をそっと壁際に降ろした。かなり呼吸は落ち着いてきたようだが、まだ意識はない。

夕立が軍用車から簡易毛布を持って来てくれた。

「深海棲艦の分は無いな……許せ」

私は向こうに倒れている敵に話しかけた。当然、相手も意識はない。

それから日向が最初に路地の表に出て様子を伺い、直ぐに大丈夫だという手招きをした。私と夕立も続けて外に出た。

「ああ、これは酷いな」

思わず絶句した。

境港の岸壁は見渡す限り大小の穴だらけだった。破壊された戦車も数台点在して黒々とした煙を吹き出していた。岸壁も、あちこちで大きく裂けている。

「やっほー」

海の上で島風が手を振っている。

「大活躍だなあ島風……」

お前も夕立並みに激しいけど。

「仕方ないっばい、一人で戦車相手だから」

夕立が取り成す。

「まあ、そうだな。島風なりに一生懸命やってくれたんだ」

文句は言うまい。

そういえば昨日は、破壊された美保空軍の滑走路は見ていないから何とも思わなかった。

ただ、この岸壁の惨状を見ると市街地での戦闘は荒れるな……もちろん美保鎮守府が悪いわけではないのだが。

夕立がこちらを見る。

「どうかしたっばい？」

「やっぱり胸が痛む」

地元だからな。

「深海棲艦が悪いとしか言いようがありませんが」

日向も坦々と言う。

「そうだな……」

誰彼の責任にしても仕方がない。これも戦争だ。

日向が空を見上げる。

「やはり第二波、来ます」

町中にサイレンが鳴り響いた。再び空襲警報だ。

「敵も、しつこいな」

「美保湾かどこかに敵の空母機動部隊がいるのだろう」

相変わらず冷静に分析する日向。

「また空軍の出方を待たないとダメなのかなあ」

私は呟いた。

すると察したように日向が言った。

「我々は敵機を落としました。それに戦車も……。従って今後、陸海

空どこから敵が来ても我々が攻撃することに問題ないでしょう」

そう言う彼女は心なしに微笑んでいる。

「おい日向、嬉しそうだぞ」

「……」

私が半分茶化すと、また彼女は恥ずかしそうな表情をする。この辺りの感情の細やかさが駆逐艦と戦艦の違いだよな。

「だが、どうやって迎撃する？ お前は丸腰、機関銃はタマ切れだ」

私は聞いた。

「……」

日向と夕立が考え込んでいる。

私は海上の島風をチラッと見た。

「島風一隻では、これ以上の対空戦力は期待出来ないのでは？」

そのとき

「あつ」

夕立が声を上げた。

「入電……比叡が来るっぽい」

「あ、そうか」

私はそつけない返事をした。戦艦は貴重な戦力だけど……比叡だとなあ。どうしても不安が付きまとう。

海の上から島風が大声で叫んでいる。

「ねえ、私も対空砲火くらいあるんだからさあ！」

私は振り返る。

「なんだ聞こえてたのか？」

「バカにしないでっ！」

珍しく島風が膨れっ面だ。意外に可愛い。

直ぐにサイレンに乗って敵影が数機、見えてきた。

「比叡はまだか？」

「あ！」

「境水道大橋の向こう……」

夕立と日向の指差した方角に白い服の、それらしい陰が……と思うまもなく「斉射あ」……と、叫んだように見えた。

境水道の海面に、ひとときわ明るい光を放ちながら比叡は要撃を開始した。ズドンという砲声が境水道に、こだまする。

「負けないんだから！」

「ありや？」

見ると島風が対抗意識を燃やしている。大丈夫かな、こいつら。

「連装砲ちゃん、いっっちゃってえ」

「……って、おい！」

頼むから町の真上で撃墜するなよ！ ここは大海原じゃないんだから！

私は焦った。

「艦娘って、そもそも、こういう市街戦には向いてないんじゃない？」

「ええ？」

首を傾げている夕立。いや、そもそも、お前も向いていないって。

急にズドン！ という砲撃音……島風と連装砲ちゃんによる迎撃が、こっちの海からも始まった。

「……」

気のせいかな日向がムズムズして見える。

「不覚……」

聞えるか聞えないかの悔しそうな呟きが聞えてきた。

さすがに日向には駆逐艦ほどの無鉄砲さはない。それでも艦娘だ。

目の前に敵が展開して手も足も出ないのは悔しいだろう。

「もう少し堪えろ日向。直ぐに活躍できるさ」

私が言うのと彼女はフツと微笑んだ。

「有り難うございます、司令」

もともと私と日向は付き合っても長い。しかし美保に来てからは彼女の意外な面ばかり見ているようだな。

……まあ、それも彼女の魅力の一つと思えば良いか。

第27話〈空母機動部隊〉(改2)

「……頼むから住宅密集地へは落とすなよ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第27話〈空母機動部隊〉(改2)

今日も快晴。

境水道を吹き抜ける潮風は心地良いが油断は出来ない。

恐らく戦いたくてムズムズしている日向。遮蔽物のない岸壁で必死に電探での索敵を続けている。

きつと何かをしていないと落ち着かないんだろう。平時はボーッとしている夕立とは違うよな。

その日向が言った。

「司令、先ほどの攻撃より敵機が多いです」
「なるほど」

私は頷きながら、そういう生真面目さが彼女らしいなと思った。

日向は矢継ぎ早に続ける。

「秘書艦より入電、美保関沖に敵空母2隻、駆逐艦数隻を確認」
「……あ」

聞いていなかった。

「ごめん日向、上(うわ)の空だった。なに、空母？」

呆けていた私に構わず彼女は真面目な顔で報告を続ける。

「こちらの撤収部隊とは別に迎撃艦隊を編成して宜しいでしょうか？

……と秘書艦より確認が着いています」

「すべてOKだ。以後、本日の作戦において君(秘書艦)の判断に任せると伝えてくれ」

私は応えた。半分手抜き……というか戦闘の指示に関しては彼女

が判断しても問題ないだろう。

「了解」

日向は敬礼して、その旨を通信している。

境水道では比叡と島風が断続的に対空射撃を継続して砲撃音が続く。やはり既存の陸軍や空軍よりは遙かに威力がある。敵機が次々と撃墜されていく。

それは良いのだが。

「……頼むから住宅密集地へは落とすなよ」

そちらの方が心配だ。民間人への被害だけは最小限に……そう思いながら冷や汗が出そうだった。

時折、暇そうな夕立が岸壁から島風と話をしている。

「おい！ お前らなあ、一応、戦闘中だぞ？」

「でもお」

夕立が口を尖らせる。

「今のところ大丈夫そうだよ？」

時おり連装砲ちゃんたちに指示を出しながら島風は済まして言う。

結局、島風と比叡だけでも、十分戦線が維持出来ているということか。

「そういえば美保関沖に、敵の空母機動部隊が居るらしいが」

日向は坦々と言う。

「その部隊、そのまま動かなければ良いっばい」

夕立は相変わらずだな。

「なぜ空母二隻？」

気になる……私は腕を組んだ。

ふと正面にある島根半島の高尾山にある空軍の電探施設も気になってきた。

「日向、あの高尾山の電探施設から直接、情報を受信することは出来ないのか？」

彼女は頭を振った。

「海軍と空軍ですから、そもそも処理経路が違います。やるとしても一度、面倒な変換が必要なはずですよ」

「そっか」

(難しい話だな) また半分、私は上(うわ)の空。

……そんな私に構わず日向は続ける。

「空軍側の暗号解除処理と同時に伝送時の盗聴防止など、その変換処理だけで私一人の能力を越えます」

「要するに無理なことだな」

別に日向自身に単独で処理して欲しいわけではないが。

その間にも比叡は要撃を継続しながら少しづつ、こちらへ近づいている。

「司令え！」

「おい手を振っている場合か？」

あいつも、夕立に負けずのん気だ。

比叡と島風が境水道で粘ってくれているので意外に敵の航空部隊は、ここへ近寄れないらしい。

既に第二波の敵は、いくつも撃墜したようだ。他の機体は警戒して、やや遠巻きに旋回を続けていた。

その時、夕立が美保湾側を指差して叫んだ。

「キタっばいー！」

比叡の向こう側に、かなり大きな艦隊が見えた。例の大淀さんを中心とした撤収部隊だ。旗艦は大淀さん。補佐が足柄さんで、その後ろに駆逐艦が大挙して航行している。

「けが人二人分の撤収か……大掛かりになるな」

やっぱり捕虜は余計だっただろうか。ちよつと考えてしまう。

一緒に居るのが艦娘でなく人間の部下だったら感情的な反応を示したかも知れない。ただ日向も夕立も私の指示には反発しない。

それが良いのか悪いのか……さすがに戦艦クラスの日向になると何か考えているような表情を見せることはある。

私情と言われても仕方がない。それでも、この深海棲艦は気になる。それに……。

その時、日向が報告する。

「美保関の敵空母機動部隊は、なおも動く気配はない模様」

「あの敵の機動部隊は気になるな」

「そうですね」

日向も同意する。

「敵機にしても、いつものように本格的に攻めて来ないのも逆に嫌な感じだが」

私は腕を組んだ。

「ぼいぼい？」

夕立は安心しきっている。いや、こういうときこそ警戒を怠ってはいけない。

どこかのセミが鳴き始めた。私は帽子の汗を拭った。

第28話〈憲兵と陸軍〉(改2)

「陸軍にバレたらまずい」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第28話 〈憲兵と陸軍〉(改2)

境水道に大淀さんを中心とした撤収部隊が遠く見え始めた頃、岸壁には憲兵など陸軍の連中が続々とやってきた。

その中には見覚えのある顔もチラホラ。この前、山城さんが弓ヶ浜を砲撃したときに調査に来た憲兵たちだな。

「そっか、ここは境港だもんな」

私は、のん気に構えていた。

つかつかと憲兵と陸軍の将校らしき男が近寄ってきた。夕立はサツと逃げ、日向は一步後退した。私は少しだけ胸を張った。

彼らは私に敬礼をした。

「陸軍米子駐屯部の者です。岸壁の敵戦車を破壊したのは海軍の部隊でしょうか」

私は応える。

「そうだが、ちよつと派手にやりすぎた。申し訳ない」

思わず本音が出た。

「いえ。相変わらず見事です」

それは褒めてるのか？

陸軍は現場を見渡しながら言い難そうに続けた。

「今回の敵の残骸ですが、もし海軍さんで、ご不要でしたら、その……」

「ああ、我々には必要ないものだ。好きにしてくれて良い」

海軍としては見飽きているくらいだからな。

「恐縮です」

陸軍は改めて敬礼をする。

彼は、その場から下がると直ぐに手を上げて指示を出している。待機していた陸軍の兵士たちがサツと動き出した。

「さつきと片付けて貰った方が有り難いな」

私が呟くと

「司令」

日向が後ろから声をかけた。

「あの戦車……あれも彼らに渡して宜しいのですか？」

私は軽く振り返る。

「本当は海軍で調査した方が良いんだらうけど残念ながら美保には、そこまでの人材も設備もない」

「はい」

日向も美保の現状は知っている。

私は付け加えた。

「ただ残骸の扱いについては今度、上申しておくか」

「はい、それが宜しいかと」

やはり戦艦は細かいところによく気がつく。さすがだな。

陸軍は重機も持ち込んで来てた。岸壁を片付けつつ作業を開始する。

それを見た夕立が感心している。

「スゴイっばい」

「当たり前だが陸のことは陸軍だな」

私も相槌を打った。

「そういえば、さっきの陸軍将校は私より上の階級なのに腰が低かった」

「そうですか？」

日向が反応した。

「ああ、米子や境港の人たちは軍人に至るまで人が良い感じだ。地方という気候や風土が、そうさせるのかな」

「ほい？」

夕立は首を傾げる。

「つまり私も一応、境港出身なんだが他所の土地を回っているうちに大切なものを失ったかなあ？ ……つてね」

夕立が反応する。

「でも司令も良い人っぽい」

私は思わず苦笑した。お前の、その最後の『ぽい』が全て台無しにするんだよ。

日向が思い出したように報告する。

「まだ敵機は遠くを周回しているようです」

私も遠くの空を横切っている敵機らしき影を見ながら応えた。

「島風や比叡を警戒しているのかな」

陸軍も敵の攻撃を警戒しながら回収作業を進めている。憲兵は同時に警報解除になって出てきた見物人が不用意に近づかないように注意していた。

「恐らく敵の残党も何処かから、この作業を見ていることだろう」

私は日向に言った。

「戦車を操縦していた深海棲艦は逃げたようだな」

「そうですね。潜水艇とか上陸部隊（船）がどこかに居たのでしょう」

彼女は応える。

その言葉に私はハツとした。

「さて……上陸部隊？ そういえば敵の空母が来たのは後からだよね」

「はい」

「そもそも深海棲艦は海上が主戦場だ。だが今回は戦車を持って来たよな」

「そうですね」

私は日向の顔を見ながら聞く。

「連中の基本装備は変な話だが、我々帝国海軍とよく似ている。逆に言えば彼らも艦船や航空機は持っていて地上攻撃部隊は居ないはずだ」

さすがに彼女も不思議に思い始めたようだ。

「そうですね。私の経験からも敵は地上部隊は持っていないはずで

す。それに今回の戦車のデザイン形態は深海側とは違う印象です」

思案しながら的確に応える日向。さすが戦艦は分析力がある。

「やはり我々と深海側以外の第三者……別の勢力が加担している可能性が否定出来ないな」

「はい」

そうこうしているうちに大淀さんたちは、かなり近づいてきた。

私はトーンを下げて日向に言う。

「私たちが実は深海棲艦を生け捕りにしていると知ったら陸軍も大騒ぎだな」

「はい、だから陸軍に黙っていて正解でしょう」

察しが良いな。

そうだ、念のために……

「おい、夕立」

私は声をかけた。

「ぽい？」

島風と話をしていた夕立は、こちらを振り返った。

「寛代と、あの捕虜の様子を見てきてくれ」

「了解っぽい」

軽く敬礼をすると夕立は路地へと戻って行った。

私は改めて日向に言った。

「今のところ岸壁付近の制空権は問題ないな」

「そうですね」

「大変っぽい！」

いきなり路地から夕立が叫んだ。

「居ないっぽい！」

「また……報告に『ぽい』は、ないだろう？ 事実を報告しろって」

相変わらず焦点がズレてるな。

「だから、いない、いない！」

さすがに夕立も慌てふためいて、こっちに戻ってきた。

「分かったから、ちよつと落ち着け」

私は夕立をなだめる。

「おい、大きい声を出すな」

私はわざと強い声で制した。夕立は硬直して大きい瞳をさらに見開く。

それから周りを見て言った。

「陸軍にバレたらマズいだろ」

「ぼ……」

夕立は、慌てて自分の口を手で塞（ふさ）いでいる。

「だから、そういう変な格好は止めろって！ 余計に目立つだろう？」

まあ一応、可愛いんだが……この状況を、ぜんぜん悟ってないな、こいつめ。

取り敢えず私は落ち着いた声で質問した。

「寛代は大丈夫か？」

私の問い掛けに、やっと納得したように夕立は大きい瞳をしながら応える。

「うん、大丈夫っぽい」

「だから真面目な報告で『ぼい』は、やめろって。どっちか分からんだろ！」

……疲れる。

陸軍を警戒しながらも日向も苦笑していた。

第29話 〈バカな司令官〉(改2)

「敵の身を心配する私は、バカな司令官だと思うか？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第29話 〈バカな司令官〉(改2)

撤収部隊は直ぐそこまで来ている。

私は日向に言った。

「面倒なことになったな」

「はい」

意外に落ち着いている彼女。

「敵の地上部隊もほぼ制圧された今、逃げ延びるのも簡単ではないでしょう」

ショートヘアを気にしながらそう言った。

しかし私は気になる。

「確かに丸腰で手負いの敵だからな……今さら我々が心配する事ではないが」

彼女は意味ありげに微笑む。

「もし憲兵に捕まったら？ ……ということですか」

それは凶星だった。

「そうだ、とてもマズイ気がする」

「……」

もともと日向は冷静で、あまり感情を表に出さないタイプだ。だが察しの良さは秘書艦に次ぐかも知れない。

私は少々、落ち着かない。

「もしアイツが陸軍の手に渡るとどうなるだろうか？」

私の言葉に彼女は続けた。

「米子の陸軍が、どういった方針なのか知りませんが基本的には拷問や尋問は免れないでしょうね」

「陸軍や憲兵は残酷だからな。連中なら容赦なくやりかねんよなあ」
「ここまで話をした私は日向の顔を見た。」

「敵の身を心配する私は、バカな司令官だと思っつか？」

「単刀直入に聞いた。」

「一瞬、間（ま）があった。彼女はゆっくりと答えた。」

「指揮官と隊員は一心同体であるべきです。司令が敵の身を案じるなら、私も躊躇無くそれに従います」

正直、日向の返事に私は安堵した。恐らくその言葉に偽りはないだろう。

「出来れば深海棲艦が遠くに行かないうちに確保したい」

「はい」

「だが私たちの撤収も迅速にすべきだ。逃げた捕虜が見つかるまで待っているわけにもいかない」

「ちよつと悩んだ。」

そのとき大淀さんと足柄さんが岸壁に到着した。日向が大淀さんから呼ばれて岸壁へ駆け寄る。

そこで彼女は何かを手渡され指示を伝達されていた。駆逐艦たちも何か荷物を持って来ていた。

「司令……」

日向が私の元に戻ってきた。

「軽機関銃の弾丸の補給と簡易無線機がきました」

さらに日向は大きな荷物を抱えて嬉しそうな顔をしている。

「それは？」

「はい、私の砲塔は無理ですが飛行甲板の軽量版（試作）を夕張が作ってくれました」

「へえ」

思わず声が出た。

「………てことは索敵が出来るのか？」

「はい、瑞雲も来たので可能です」

「おおー！」

まさに渡りに船だ。

そこで私は指示を出す。

「では予定通り寛代と夕立は担架で搬送。日向と私は逃亡者を探しながら基地へ戻る」

その場に居た全員が驚いた……日向を除いて。

大淀さんが意見する。

「司令、事前には負傷した捕虜がいるという、お話でしたが」「事情が変わった」

私は周りを見回してから大淀さんに顔を寄せ小声で言った。

「落ちて聞いて聞いて欲しい、実は捕虜に逃げられた」

「……」

さすが大淀さん、それを聞いても眉一つ動かさない。

「この件は無線連絡も厳禁だ。敵も傍受して奪還に来るかも知れない」

私はチラッと陸軍を見ながら続ける。

「もちろん陸軍や憲兵にも伏せる……当然、彼らより先の発見が必須だ」

私は顔を上げた。

「以上だ。速やかに夕立及び寛代を収容して撤収せよ」

「了解」

大淀さんは敬礼した。

駆逐艦たちがバラバラと路地へ向かう。

夕立は愚痴を言う。

「ああ、私も車が良かった。詰まらないっぽい」

「夕立、これも訓練と思え！ 運ぶ方は、もつと大変なんだぞ」

足柄さんが諭す。

「私、もお大丈夫っぽいんだけど」

ぼやきながらも夕立は駆逐艦たちが広げる担架へ向かう。

その後姿を見送りながら私は空を見上げた。

「まだ日差しが強いな」

ただでさえ弱っている深海棲艦（大井・仮）は、この炎天下にウロウロして身体は大丈夫だろうか？

すると日向が言う。

「深海棲艦が心配ですか？」

「ああ。敵……だけだな」

日向は何かを詮索するような表情をする。

私は口には出さないが、あいつは敵でない可能性がある。そんな気がするのだ。

つい口に出た。

「でも私の命を狙っているし。なんだか複雑だな」

日向は微笑んだ。

第30話〈準備の裏に〉(改2)

……意外に可愛らしいところあるな、日向も。

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第30話〈準備の裏に〉(改2)

撤収部隊は、まだ目覚めない寛代と腕以外は元気な夕立を担架に乗せた。そして海上で陣形を整える。

旗艦は大淀さん。比叡と島風が護衛に就き足柄さんが最後尾だ。旗艦の合図の元、艦娘たちはバランスを取りながら境港岸壁を出発した。

さすが艦娘、潮の流れの速い境水道でも、さほど隊形を崩すことなく進み始める。

私と日向は岸壁から敬礼して彼らを見送った。作業をしている陸軍の兵士たちも珍しそうにチラチラと見ている。

一般人だけでなく多くの陸軍兵たちにとって艦娘は、あまり知られていないのだろう。

私は日向にだけに聞こえる声で言った。

「彼らも、まさか島風が一人で、この岸壁をボコボコに破壊したとは思えない」

彼女も応える。

「恐らく、あの陸軍将校も分からないでしょう」

「陸軍や空軍といえども艦娘の実力は不用意に知らないほうが良いだろうな」

「はい。今はまだ彼らとの共同作戦が可能だとは思えません」

日向の言う通り艦娘の戦力は海軍だけでなく陸軍や空軍の通常兵器とも比較にならないほど強い。

もちろん深海棲艦たちも艦娘と同等か、それ以上に強いわけだ。
少し風が出てきた。

「もうすぐ、お昼か」

私たちは岸壁を離れて倉庫の前に停まっている軍用車へ向かった。
車の脇には艦娘たちが持つてきてくれた荷物が、いくつか積んであつた。

「司令」

車の前まで戻ると日向が振り返る。

「私が深海棲艦の索敵をしますので申し訳ないですが……」

彼女は司令である私が運転を担当せざるを得ないことを恐縮しているのだ。

「ああ、構わない。もともと夕立が居ても私が運転するつもりだったから」

日向だって飛行甲板を装着したままで軍用車の運転なんか出来ないだろう。ここは海の上じゃない。

彼女は軍用車に向き直って言った。

「状況によつては私が銃座を担当します」

「頼む」

「……では準備に入ります」

日向は軽く敬礼をすると早速チェックリストを片手に補給物資の山を確認する。それが終わると軍手を取り出して金属のケースから弾倉を取り出した。

「ほう、それが弾丸か」

実は初めて見た。

「外観は普通のものとは大差はないんだな」

彼女はパッケージをチェックしながら言う。

「これは夕張さんの試作品で……美保ではまだ量産が出来ないから舞鶴や呉に製造依頼する形で特注するようですよ」

「それは大変だな……手続きの手間とか」

「はい。夕張さんも、いずれ美保で作りたいと、いつも話しています」
日向は苦笑する。

「まあな、こんな地方じゃ軍需工場も皆無だからな」
私も笑った。

続いて彼女は軍用車の銃座に上がると手際よく空の弾倉と交換をする。これも普通の機関銃への弾丸補充にしか見えないから周りの陸軍連中も、この作業には、まったく興味を示していない。

「知らぬが仏か」

艦娘も普通の少女にしか見えない。この銃だってそうだ。だからこそ良いのかもしれない。

そういえば今、陸軍が調べている敵の戦車（残骸）だって、恐らく深海連中独自のものではないだろう。それでも私が路地から見上げた瞬間は、かなり強そうに見えた。

しかし結局、艦娘仕様の軽機関銃で、あつさり蜂の巣になった。それから島風と比叡にボコボコニされて……今更、陸軍が調べても何も得るものはないだろうな。

日向は機関銃を軽く点検している。

艦娘が偉いと思うのは夕立も含め基本的な兵器の取扱いに幅広く精通していることだ。だから夕立だって普段は、あんなに可愛らしい天然娘なのに、いざとなると戦闘のプロになる。その落差はすごいよな。

もちろん日向のように外でも普段通り変わらない艦娘だっている。本当に個性豊かな子たちだ。艦娘というのは接するほどに不思議で興味深い存在だと思う。

「司令、車の方は準備完了です」

日向が報告する。

「苦勞」

私は妄想めいた考えを中断して返事をした。

「あと……」

日向が立ち止まって、こっちを見ている。

「なに？」

「補給物資の中に、これが」

彼女が差し出したのはサンドイッチだった。そうか、もうお昼だ

な。

誰かな？ 祥高さんか鳳翔さんが気を利かせてくれたのだろう。

「量からすると3人分くらいあるな」

ちよつと余る。本来は夕立の分か？

「司令、あの……」

急に日向がモジモジしている。

「あまり時間もないですが、その……」

どうした日向？ お前らしくもない。

「え？」

顔が真っ赤なんだけど。

「ちよつとだけ……食べませんか」

「あ、スマン！」

そうだよな。お腹すいたか。今朝から日向は働き詰めだからな。

「そうだな、そうしようか」

もしや、それで遠慮して赤くなっていたのか？ ……意外に可愛らしいところあるな日向も。

美保に着てからの彼女は、いろんな一面を見せてくれる。

艦娘が奥が深いのか？ 日向が実は深いのか？ まあ、どっちでも

良いが。

「やれやれ、この戦争は分からないことだらけだ」

私は苦笑した。

日向も微笑んでいた。

第31話〈新緑と赤面〉(改2)

「二人で外を歩くのは初めてです」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第31話 〈新緑と赤面〉(改2)

日向は軍用車の傍らで相変わらず赤面している。こんな彼女を私は初めて見た。そんなに恥ずかしいことなのか？

私は鈍感だからな。こういう心理は苦手で……艦娘だと、なおさら分からん。

「もちろろん捕虜を見つけ出すには一刻の猶予もありませんが」

そう言いながら彼女は岸壁で作業をする陸軍を見渡す。

「あ……」

そこで何となく悟った。どこかで落ち着いて食べたいのだな。

私は帽子を取って汗を拭(ぬぐ)って間を持たせた。

「そうだな……取り敢えず陸軍も残骸回収で忙しいだろう。我々もサンドイッチを食べるくらい時間はありそうだな」

そこで帽子を運転台に置くと私は日向に向き直った。

「サツサと食べてから捜しに行こうか」

そう言いながら彼女の手にしたサイドイッチに手を伸ばした。

「あれ？」

だが日向は、なぜかサツと手を引つ込めたのだ。

「おい、冗談やっつてる場合じゃ……ん？」

日向は、まだ真っ赤な顔をしている。

「あの……」

私も痺れが切れそうだ。

「どこか具合でも悪いのか？」

彼女は続ける。

「いえ、これは提案ですが……直ぐ傍に公園があります。瑞雲を飛ばすにも調整が必要なので、そちらの方が良いかと思えます」

「あ、そうか」

よく分からないけど航空戦艦の日向が、そう言うなら無理に反発することもないか。

「じゃ、そうするか」

「はい」

なぜか急に嬉しそうな表情を見せる彼女。鈍い私は『変だな』という程度にしか思わなかった。

岸壁そばの公園といえば、お台場公園だ。

「確か陸軍の高射砲が設置されていたな」

「はい」

私は記憶を手繰りながら公園付近の地理を思い出していた。

「軍用車は公園脇の駐車場で大丈夫だろう」

「はい」

さつきから硬い感じの日向……いつもの事だな。

「じゃあ、動こうか」

私は改めて帽子を取ると運転台に座った。日向はサンドイッチを妙に大事そうに抱えて助手席に座った。

やはり『変だな』という程度にしか私には思えなかった。

私は軍用車のエンジンをかけた。車の運転は実に久しぶりだ。

だが、お台場公園といっても岸壁からは目と鼻の先で、実は歩いてでも行けるのだ。

私は何気なく言った。

「小さい頃は、ここでよく遊んだものだ」

「そうですか？」

興味深そうな彼女。

だが案の定、車は直ぐに公園脇の駐車場に着いた。

「……」

「……」

二人とも、なぜか無言のままだ。しばらく公園の木立の葉が風でザワザワとさざめく音だけが聞こえてくる。

敵機も低い音を響かせながら遙か遠くを周回し続け、空襲警報も収まっている。

やがてセミが鳴き始めた。思い出したように私は言った。

「行こう」

「ハッ」

突然スイッチが入ったように返事をする日向。別に行くアテもないが……車を降りた。

「えっと」

手で日差しを避けながら公園を見渡す。さすがに陸軍の高射砲が見える場所は落ち着かないから却下。

左手に桜の木が植わっている小高い丘がある。私は過去の記憶を思い出した。

「その高台にベンチがあるはずだから上がってみよう」

「ハッ」

杓子（しゃくし）定規な日向は簡易甲板を抱えて降りようとした。

「おい、それを持っていくのか？」

「ハイ」

さすがにそれはちよつと……と思った。

「荷台に置けば大丈夫だろ？ 艦娘にしか使いこなせない物だから誰も盗らないよ」

「はい」

日向は抵抗することも無く、若干ぎこちなく甲板を置く。

それから改めてサンドイッチを持って降りた。

ふと見ると、お台場公園の白い灯台は今でも木々の中に鎮座している。

「懐かしいな」

私の言葉に日向は顔を上げた。

「ここは司令の？」

「ああ、故郷だからな」

今日は断続的に空襲警報がある。陸軍の高射砲……そういった敵に破壊されて今は修理をしているが、その周りでは兵士が更に小さな機銃を数台設置して待機している。

私たちは高台への階段を上がった。ちよつとした木立の中に小さな白いベンチがあった。

「腰掛けよう」

「はい」

最初に私が座り、続けて日向が腰をかけた。

目の前に岸壁の一部が見え陸軍が作業をしている。その向こうに川のような境水道が流れ、対岸には新緑の島根半島が横たわる。

公園を渡る風は湿気が少なく心地良い。

私たちは、お互い軍服だから憲兵が来ても何も言われまいだろう。

ただ瑞雲の調整名目があるとはいえ艦娘（女性）相手に二人っきりで公園でランチとは実に妙な感じだ。

元々日向は口数が少ない艦娘だ。それでもさすがに間が持たないので私は声をかけた。

「どうした？ 今日は無理しすぎて体調を崩したか？」

「いえ……実は作戦以外で司令と二人で外を歩くのは初めてです」

「そうか？ 一応、これも作戦中なんだが」

そう言いながら愛想が無いなと自分で思う。

日向は苦笑する。

「済みません、こういう状況は慣れないもので」

「え？」

それは、どういう状況だ？ ……何が不慣れで赤い顔をしているのだろうか？

表情は淡々としているのだが、いつもと違ってソワソワした口調で会話を続ける彼女。

「岸壁で食べた方が時間的にも早いのは分かっていますが、なぜか反射的に手を引いてしまい申し訳ありません」

「そうか？ よく分からんが」

これは本当だ。彼女がそんな反応をしても別に気分は害さなかつ

た。

何かを抑えるような雰囲気のまま彼女は説明を続ける。

「急に司令との時間は外せないという妙な感情が湧き上がって来ました」

「そうだな。今の時間なら作戦上、無線封鎖もしているから余計な邪魔も入らないから」

『え?』

……と言った感じで、お互いに顔を見合わせた。

「な、なに考えているんだ私は!」

自分で慌ててワザとらしく喋った。それは照れ隠しというか……誤魔化そうとアレコレ次の台詞を考えた。

だが急にカーツとして、こっちまで赤面する心地だ。鼓動が早まる。

直ぐ傍でセミが鳴き始めた。

「う、うるさい!」

一瞬シーンとなる公園。私の慌てぶりに日向は微笑んでいた。彼女のショートヘアが風になびいている。

「あ……」

その瞬間、急に日向の気持ちが分かったように思えた。

「なるほど、そうか」

私は帽子を取って、その想いを自分の中に定着させようとした。

それは男女の関係というよりは組織の上官と部下の信頼関係を、さらに純粹に昇華させたように感じたのだ。

澄まし顔でベンチに佇む日向を私は改めて見詰めた。

「お前の気持ちは純粹に嬉しいよ」

「はっ」

普段なら絶対にいえない台詞。だが、自然にそう言えた……もし軍神が本当に居るのなら、その存在に導かれた感覚だ。

……そういえば執務室に来たときの日向は必ず神棚に手を合わせているのを思い出した。

艦娘が信心? まさかね。

第32話〈瑞雲〉（改2）

「今までにない感情が……」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第32話 〈瑞雲〉（改2）

ここは境港市の、お台場公園。その萌えるような青緑の木立に囲まれた白いベンチは、意外に涼しくて居心地が良かった。

「取りあえず、食べよう」

「はい」

日向はサンドイッチの包みを差し出した。「ハッ」じゃないんだ。

ちよつと新鮮……かな？ いや、さつきから何度か繰り返していたか。

彼女は独り言のように言った。

「司令、申し訳ない。今日の私はチョツとおかしい。疲れてるのかも知れない」

「……」

そうだな、と言いかけて黙った。適切な言葉が見つからなかった。おかしいといえば、さつきから私も変なんだが。

日向は続ける。

「艦娘同士での作戦行動は問題ないのですが、司令と二人で作戦というのは本当に初めてなので」

敢えて視線を合わせない彼女に私も答えた。

「いや別に謝ることはない。初めての体験では勝手が違うこともある」

すると日向は急に真顔になった。

「軍人は常に平常心であるべきで、いかなる状況でも感情に動かされ

てはならない……そう思ってきたが岸壁で司令と二人で作戦を遂行する決意した途端、今までにない妙な感情が湧いた」

「その当たりは分からないが」

私が応えると彼女は始めてこちらを向いた。その表情はいつもの日向だった。

「いえ反省します。こうして調整の時間まで割いて頂いたから、次の作戦では必ず成果を出します」

「頼む」

ようやく平常運転の彼女に戻ったようだ。やれやれイロイロ遭った。

(え? ちょっと、惜しかった?)

それから簡単に昼食を終えた私たちは、その後、特に問題も無く高台から降りた。

一旦、軍用車へ戻った日向は早速、簡易型の飛行甲板を持って芝生の広場に出た。

彼女は瑞雲そのものは使い慣れている。とはいえ今日は初めて使う簡易甲板だ。

やはり最初は調整が必要らしい。

「調整が終わり次第、逃亡者の索敵に入ります」

「ああ、了解だ」

領きながら飛行甲板を片腕にはめた日向。さすが航空戦艦、さまになる。

「ハル、居るか?」

彼女の問い掛けに簡易型の飛行甲板のエレベーターが開いて妖精が顔を出した。

「狭い!」

「済まない、今回は簡易甲板を使う。まずは瑞雲で飛んでくれ」
「……」

生意気そうな妖精は、しばらく日向を見上げていた。

「何か良いことあったか?」

「いや別に……どうした? 急にそんなことを」

ゴーグルを着けながら妖精は応えた。

「今日のお前、綺麗だからさ」

「な……」

ああ、また日向が赤くなっている。

「いいから、行けっ！」

「了解」

妖精は敬礼をして、いったん引っ込んだ。

簡易飛行甲板とはいえ瑞雲は最大で3機、搭載出来るようだ。

今日は試用なので2機だけ。

日向は何度か構えの角度を変えつつカタパルトの具合を見ている。

やがて瑞雲の位置と、射出角度が決まったらしく公園の芝生の上で飛行甲板を構えた。

「瑞雲、射出します」

「ラジャー」

「よし、良いぞ」

パシユツという音と共にハルともう一人の妖精は相次いでカタパルトから射出された。夏の青い空に向けて2機の瑞雲が綺麗に飛び立った。

「よし、良いぞ」

日向は呟く。そういう彼女も良い表情に戻っている。やはり航空機を運用してこそその航空戦艦だな。

一時は、どうなるか？ と思った。だが、これこそ、いつものお前なんだ。

私もホツとした。

しばらく公園の上空を旋回して緩急を付けながら飛び交っていた瑞雲たち。やがて安定したエンジン音が響くようになり、ハルが言った。

「特に問題はない、このまま索敵に入る」

「了解、頼んだぞ」

『ラジャー』

日向の命令で、2機は旧市街上空へと散って行った。

第33話〈炎天下〉（改2）

「やっぱり、良いことがあったんだ」
「う、うるさいぞ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第33話 〈炎天下〉（改2）

お台場公園では日向が妖精に索敵の指示を出しているのが聞こえる。

「境港の岸壁は陸軍が作業中で憲兵もいるから基本除外だ。旧市街、特に路地を中心に索敵せよ。なお発見時には目標物の固有名詞、特徴は伏せること」

私は駐車場の軍用車に戻り無線機を助手席に設置した。電源を入れると陸軍や空軍の無線に混じって美保鎮守府と大淀艦隊の交信も混じるようになった。

「島風ちゃん、速いわ」

「ええ？ 皆が遅いんだって」

「担架だからな、もうちよっと抑えてくれ」

「ぶー」

「あと半分よ……皆、頑張って」

既に大淀艦隊は美保関沖の敵と最接近する地点を無事に通過したようだ。

「敵の空母二隻は動かないか……」

私はふと思った。あの敵の艦隊は大淀艦隊がもし深海棲艦（大井・飯）を拿捕して連れて帰った場合には強引に奪還する攻撃を仕掛ける意図があったのでは？

「それが寛代と夕立だったから……」

それで敢えて見逃しているのだろうか？

私は運転席で腕を組んだ。

公園の芝生の上では日向が交信をしながら索敵を続けている。

軍用車が停まっている駐車場はちょうど建物の陰になっていた。

この日陰は境水道を渡る風が通り過ぎるから意外と涼しい。

入り混じる無線を聞きながら私は考えた。実際のところは分からないが連中は確実に私たちの交信を傍受しているだろう。それは先日、あの青年将校の実施した作戦を思い出せば、十分立証されるだろう。

「まさに情報戦か」

気付けば太陽は、ほぼ真上に来た。

「今日も暑いな」

そういえば、あの深海棲艦は日向に強く打ちのめされていた。その上で逃げ出したのか。

「大丈夫かな？」

敵ながら心配になる。

「この炎天下に、この気温だ。弱った身体では、どこへ逃げても大変だろう」

まして、さほど遠くに行けるとも思えない。

詳しくは知らないが深海棲艦という名のごとく、あいつらは深海のようなどころから来たのか？

「もし、そうだとすると、この真夏の地上に居るだけでも拷問みたいなものだな」

私は助手席の上に一人分だけ残ったサンドイッチを見ながら呟く。

「あいつも、お腹すいてるだろうか？ ……このサンドイッチ渡したら食べるかな？」

だが私は直ぐに苦笑した。

「バカバカしい、頭を冷やせ！」

思わず制帽を取った。

「そもそも話し合って通じる相手では無いのかも知れない」

私は……自分の立場で出来ることを精一杯するだけだ。

無線は、いろいろな通信を傍受し続けている。美保関沖の敵の空母機動部隊は、ずっと動かないらしい。

時折かなり小さな敵機が単独で比較的上空を横切る。まるで対空砲火を刺激しないように用心して飛んでいる感じだ。

「妙に慎重だな……やはり連中も深海棲艦を探しているんじゃないか？」

もし逃げた「彼女」がまだ境港の旧市街の何処かに留まっているとすれば？

敵の航空機は、このエリアには近づけないのが現状だ。すると敵より先に私たちが発見出来る可能性が高い。

陸軍も、まだ境港の岸壁での残骸回収でバタバタやっているし……この無線機は軍用だから特別な暗号通信もある程度は傍受できる。

日向と妖精のやり取りもちょうど入ってくるな。

「駅周辺は特に問題なし」

さっそく妖精からの通信だ。

「了解」

日向は、きびきび答えている。

「なあ、日向」

「何だ」

「良いことあったんだろう？ ハルにも教えてくれよ」

「お前には関係ない」

すると別の妖精の通信が入る。

「関係ないって言うからには、やっぱり良いことがあったんだ」

「う、うるさいぞ」

珍しく日向が感情的になっている。

「まあまあ……」

ちよつと間が空いて

「ハルも良いことあったぞ。墓参りが終わったら今日は神社で盆踊りだな」

「……」

日向が、こちらを向いて手を振っている。

「なるほど、一種の暗号か」

私も手を上げて応えた。

彼女は妖精に指示を出す。

「ハル、そのまま上空で待機」

「ラジャー」

ハルの返事を受けて、こちらに向かって駆けくる航空戦艦。夏の芝生の上を飛行甲板を装着した艦娘がやって来るといのは、なかなか絵になるな……いや、それは、どうでも良いことか。

彼女は報告する。

「司令、発見です」

私も応える。

「あのハルとか言う妖精、しっかり仕事は、するんだな」

彼女は苦笑した。

「口は悪いですが、能力はあります」

「そうらしいな」

私はエンジンを始動させた。

第34話〈敗残兵〉(改2)

「バカナコトヲ言ウナ……」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第34話〈敗残兵〉(改2)

日向が後部座席に乗り込むと同時に私は軍用車を発進させた。エンジンが快調に唸る。

お台場公園から出ると路地を抜けて一気に商店街を目指した。ただし決して慌てないように、またその素振りを見せないように。

「どこに敵の監視の目があるか分からないからな」

「はい」

私の想いに即応してくれる日向。この阿吽(あうん)の呼吸は、かつて前線で戦ったときと同じ感覚だ。

もちろん陸軍にも悟られてはいけない。慌ててスピード違反をして憲兵に捕まってしまうば時間の無駄。さらに癪(しゃく)だ。

助手席の無線からは継続して妖精ハルの暗号的な報告が続いてる。

「商店街の近くに結構大きな神社があるんだけど。ここなら境内も結構広くて盆踊りにはサイコーかもね」

「そうだな」

日向は何気なく返信をする。仮に軍関係者が聞いても雑談にしか聞えないだろう。

車は商店街に差し掛かる。寛代と逃げているときはソコソコ広く感じた境港の旧市街も車だと、あつという間だな。

「あ……」

思わず小さく叫んだ。

「何か?」

「いや何でもない」

実は商店街のアーケードが一方通行だと今、気づいたのだ。自分が普段から運転していないと分からないものだ。

今は空襲警報も何も出ていないが人通りが少ないので私は敢えて、そのまま素通りした。幸い憲兵も居ない。

周りを気にしながら私は言った

「一通だった……今後は気をつけよう」

「はい」

日向は淡々としている。無線に集中しているか。

アーケードを出たところでハンドルを右に廻して軍用車は路地へと入る。曲がった路地のすぐ左手がハルの言っていた神社だろう。

「あれか」

通りの角に見える神社の上空を瑞雲が旋回していた。

「はいです」

日向は報告と同時に妖精と交信を始めた。直ぐ2機の瑞雲は、やや高度を上げ周回半径を広げた。

私は慎重に神社の前に車を止めた。辺りを見渡すが人通りは無い。

交信が終わった日向に私は目配せをした。彼女も緊張した面持ちで頷く。

「神社に隠れている敵も軍人だ。恐らく逃げ出した今は武器は持っていると思うが、それでも私たちの想像を絶する何かを持っていないとも限らない」

「はい」

「いくぞ」

「ハッ」

私と日向は降車して神社へ向かう。念のために私は拳銃を構える。

日向は一瞬、軍刀に手をかけたが「あ……」と言いながら夕立から貰った拳銃を取り出した。

私は彼女を見ていった。

「それが良い」

「はい」

彼女としては飛び道具は好みではないだろうが念のためだ。

私たちは、ゆっくりと神社の境内に入る。セミが大声で鳴いていた。まるで合唱だな。

中を見渡して日向が小さく叫ぶように言った。

「司令ー」

「ああ」

そこでは意外にあっさり深海棲艦（大井・仮）が発見された。社殿の正面、階段の中段に苦しそうに寄りかかっていたのだ。

武器は持っていないようだ。こちらを一瞬睨んだだけで特に攻撃する意思も、逃げる気も無いようだ。

私は視線を逸らさず片手を日向に向けて指示を出した。

「日向、銃を下ろせ」

「はい」

二人とも念のため引き金には指をかけたまま、ゆっくりと『彼女』に近づいた。深海棲艦は苦しそうに肩で息をしていたが、やはり大きな動きは見せない。

この炎天下の陽気と日向に受けたダメージ。それに逃亡時の疲労や緊張から来るストレスなど、いろんなものが一気に噴出しているようだ。

「痛々しいな」

私は思わず呟くように言った。

「陸軍や憲兵より先に見つけて良かった」

日向もボソツと呟いた。

「瑞雲が来たのはタイムリーだったな」

私もホツとした。瑞雲を寄こすという判断をした秘書艦・祥高の判断は、さすがとしか言いようがない。

そう思いながら、ふと見ると日向は複雑な表情をしている。自分が蹴飛ばした相手が目の前で苦しんでいるのを見れば、それが敵であっても多少は良心の呵責を覚えるのだろう。必死だったとはいえ日向も多少、やり過ぎたかも知れない。

決して責めるつもりは無いが「本気」出してたよな……まあ、お互

いに兵士だ。敵と相対すれば何処でも戦場だ。必死になるのは避けられない。今はただ、この戦争に巻き込まれている自分たちの運命を呪うしかない。

「日向、気にするな。すべて私の責任だ」

今さら無意味かも知れないが私は一言、声をかけた。

「……」

さすがの日向も、やりにくいだろう。私も最近では少しずつ艦娘たちの敏感さを感じるようになっていた。

私は銃をしまうと、さらに深海棲艦に近づいて様子を窺（うかが）った。境内の彼女は私たちへ向けて、ゆつくりと顔を上げた。

ふと目が合った。

「……」

今朝、路地で出会ったときの挑戦的な眼差しはすっかり消えていた。むしろ何かに怯えるように不安と恐怖が入り混じった弱々しい表情だ。

「才前タチカ」

絞り出すような声……やはり相当ダメージを受けているようだな。

それでも、まだ多少は私たちに抵抗するような反抗的な光は残っている。

「……」

だが、それ以上は何も言わず乏しい表情でこちらを見つめている。もはや現実的に、これ以上抵抗しても無駄であるし戦う体力も無いだろう。

そういう立場は、お互いよく分かっているのだが……黙って睨み合っても間が持たないというか、このままでは、無意味に時間ばかり過ぎていく。

だが、いつまでもグズグズしてはられない。こいつの体調の問題もあるし、いま陸軍や憲兵に見つかったら、かなり厄介なことになる。

私も説得は苦手だが仕方ない。

「逃げたい気持ちも分かるが無駄なことは分かるだろう」

「……」

無表情だな。

「お前のプライドは許さないかもしれない。だが、ここは敵地だ。特にいま陸軍に見つかると面倒だ」

「……」

すると日向も口を開いた。

「戦場であれば戦う定めだが今は違う。彼は海軍の司令官だ。お前を保護したいと仰っているのだ」

私も頷く。

「捕虜ということであれば、お前の身柄は海軍の責任で保証する」
続けて日向。

「今は私たちと一緒に基地へ同行してほしい。抵抗しなければ軍人としての誇りは最大限、守ってやる」

二人で言うには言った。

……だが、こいつ確か海軍とか人類が嫌いなんだよな。それ以上に私を嫌っているか。

深海棲艦は弱々しいながらも不敵な笑みを浮かべるのが分かった。

「バカナコトヲ言ウナ」

ああ、やっぱりそう来るか。そうだろうとは思ったけど、ちよつとガツクリする。

だが、私もこのまま引き下がるわけにはいかない。

第35話〈針のムシロ〉(改2)

私たちは、いったい誰と、なぜ戦っているのか？

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第35話 〈針のムシロ〉(改2)

深海棲艦（大井・仮）は神社の境内で苦しそうにしている。しかし相変わらず捕虜になることには抵抗していた。

私は日向にだけ聞えるように呟く。

「確か軍用車のどこかに拘束用の手錠もあつたはずだが……」
すると彼女は珍しく渋い顔をした。

「司令？」

「あ」

私は苦笑いした。

「いや、私は憲兵じゃないからな。それは避けたいな……と」

時おり神社の周りを陸軍の兵士が駆け足で通り過ぎる。その度に私は冷や冷やした。境内の外からは見え難いのだが、もしここに憲兵が入って来れば、さすがに今の状況は説明し難い。

「おお、そうだ！」

私は、さつきから複雑な表情で固まっている日向を振り返った。

「日向、車に戻って、この神社の周辺を見張っていてくれ」

「ハッ」

続けて指示を出す。

「あと瑞雲と協力して敵の動きも警戒だ」

「了解！」

日向は弾かれたようにサッと敬礼をした。パツと反転して……

「あれ？」

妙に嬉しそうに走っていくな。

まあ日向にとって自分が蹴飛ばした相手……深海棲艦との心苦しい対話をしているよりは外で警戒待機していたほうが良いだろう。それに陸軍の監視も出来る。一石二鳥か。

ただ針のムシロだったのは深海棲艦も同様だったらしい。

「あれ？」

日向が出て行くのを見た彼女も急にホツとしたような顔をしている。

これは意外……というか。

「なるほど」

階段に腰掛けていた彼女は「ふう」と言いながら、その長い髪をかき上げた。

「ほう」

そういえば前、夜の鎮守府岸壁でも、こんな感じで髪をかき上げてたな……ちよつと女子っぽい。

よく見たら深海棲艦も敵とはいえ、基本的な顔のパーツは美人系だ。

(いや女子か?)

おぼろげな記憶をたどると舞鶴に居た大井も、性格に難はあったが結構な美人系だった。

「いやいや、関係ない！」

私は妙な妄想をする自分の恥ずかしさを隠すように軽く咳払いをした。

すると深海棲艦は驚いたように私に視線を向けた。その視線に私は鳥肌ではなく普通にドキつとした。この落差に正直、戸惑う。

いま私を見詰めている深海棲艦の瞳。それは昨夜……月夜の鎮守府での北上のそれと、よく似ていた。

凄(すご)んでいる時の深海棲艦は、もつと眼光も鋭く、まるで刺すようだ。それでいて濁って鈍器で殴ってくるような威圧感のある瞳なのだ。

しかし……今の彼女は不思議なくらい普通の、あどけない少女の瞳にしか見えない。

「ワカラナイな」

私は呟いた。私たちは、いったい誰と、なぜ戦っているのか？

「……」

また、お互いに沈黙した。

相変わらず境内のセミがうるさい。神社上空では瑞雲が警戒を続けている。このまま瑞雲を上空で待たせるのは悪いな。

それに小さいとはいえ、ぐるぐる回っている飛行機を見れば、さすがに陸軍も変に思うだろう。あまり長引かせると憲兵が調べに来るかも知れない。

海軍の提督でありながら今の私は純粹に彼女を助けたい気持だ。陸軍からは「海軍は腑抜けだ」と呆れられるだろうが。

だが、きつと彼らは深海棲艦が、ここに居ると知れば目の色を変えるだろう。役立たずの機体や戦車の残骸ではない。彼らが喉から手が出る程、欲しい「生きた」資料。ランクから言えば最上級だ。

ただもし彼女が陸軍の手に渡ってしまえば尋問や拷問どころではない。連中は本当に人体実験をやりかねない。陸軍の特殊部隊の噂は知っているぞ。あそこは怖いなんてもんじゃない。残虐、冷酷、非道……。

旧来より捕虜の扱いでは陸軍省と海軍省が何度も衝突している。一度、お互いの議員が国会で掴み合いのケンカになったこともある。それくらい政治での陸と海は微妙な関係だ。

ただ地方の陸軍、特にこの山陰地方の兵士たちは誰も温厚そうなのが助かるが。

……目の前の彼女は護りたいな。

私はダメもとで、もう一度、突っ込みどころを変えて声をかけてみた。

「このまま留まって、お前たちの仲間が迎えに来るのか？」

「……」

反応なし。どうやら、その当ては無いらしい。

私は軽く腕を組んだ。

もしかして抵抗しているのは、こいつの単なる意地なのか？

(もしそうだとすると逆に、話を通じる相手なのかもしれないな)

そう思った矢先、上空の瑞雲のエンジン音が微妙に変化した。セミが急に鳴きやみ日向が慌てて走りこんできた。

「司令ー！」

「どうしたー！」

神社周辺には、急にバタバタとした慌ただしい気配が漂ってきた。

第36話〈海軍の兵士〉(改2)

「この娘は、艦娘……海軍の兵士です」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第36話 〈海軍の兵士〉(改2)

境内に駆け込んできた日向は報告した。

「司令！ 敵空母機動部隊が大淀の撤収部隊に攻撃を開始しましたっ！」

「なにー！」

それはマズい。

「もう一隻の空母からは飛行編隊が発進！」

彼女が言い終わらないうちに空襲警報が鳴り始めた。

「クソ、この忙しいときにー！」

だいたい面倒なことは同時多発的に起きるんだ。
すると神社の外からバタバタという足音がする。

「あ……」

「全員、そこを動くなー！」

こつちもマズい！ 陸軍……憲兵だ。

強面（こわもて）の憲兵と銃を構えた兵士が7、8人。神社の鳥居の辺りに一瞬のうちにズラリと並んだ……悔しいが彼らの陸上における統率感は、さすがだ。

直ぐに指揮官らしき憲兵が胸を張って出てくる。彼は手を後ろに組んだまま、ゆつくりと私たちに近づいて来た。

「海軍の方々と、お見受けするが？」

「そうだ」

慌てても仕方がない。それに軍属は違っても階級は日向も私も、こ

こちらの方が上だ。

見るからに態度がでかくて偉そうな奴……新顔だな。彼は、こちらを一瞥（いちべつ）した後に続けた。

「本部より今朝の市街戦で敵の残党が旧市街に逃げ込んだという情報が入った」

そう言いながら憲兵は境内に寄りかかっている深海棲艦を疑い深い目つきで睨んだ。

「ん……その者は、誰だ？」

警棒で指しながら彼は、どんどん近づいてくる。だが顔を上げている深海棲艦は全く動かない。

（これはヤバイ）

私は頭の中が真っ白になる。こういう肝心なときには機転が利かないのだ。

すると突然、日向が深海棲艦に駆け寄って彼女の手を取った。

「誤解させて申し訳ない、この娘は艦娘……海軍の兵士だ」

深海棲艦は目を丸くしているが日向は構わず続けた。

「地上で敵と戦った後、境内に逃げ込んだのを我々で確保した。彼女に傷を負わせた敵は、そのまま旧市街へ逃げた」

一瞬、境内は沈黙した。だが憲兵の足はそこで止まった。彼は疑い深く鋭い目つきで日向たちを睨んでいたが直ぐに肩をすくめた。

「ブン」

やや拍子抜けしたのだろう。少し表情が緩んだ彼は半分照れ隠しのような咳払いをすると鳥居の方へ向き直って手を挙げた。

「撤収だ」

すると銃を構えた陸軍兵士たちは一斉に銃を下げた。

「撤収！」

両側の兵士が号令すると彼らはキビキビとした動きで銃を構え直して境内の外へと出て行った。

（ひよっとして上手くいったのか？）

それから憲兵は日向に向き直ると改めて質問をした。

「その敵は、どちらへ？」

「アーケードを駅の方向へ逃げたらしい」

日向は即答した。彼女もある程度、地図情報を持っているのだから。

最初は疑っていた憲兵も日向の堂々とした態度に、少しは信用したらしい。

「ご協力、感謝する」

敬礼をすると境内を後にした。

一瞬の沈黙。やがて少しずつセミが鳴き始める。

「ホッとした」

私は脱力した。いやはや、一時はどうなることかと思った。

そういえば深海棲艦の実物の姿を見た者は海軍でも少ない。まして陸軍なら、なおさらだろう。

「うるさいぞー」

ちょうど瑞雲が何か言っただろう。日向が無線で反論をしている。その剣幕に一瞬、驚く深海棲艦と私。

だが艦娘といえども、さすが戦艦クラスは肝の据わり方が違うな。

「頼もしいな日向」

「いえ」

そう答えながら恥ずかしそうな表情を見せる。このギャップ感が艦娘の特長だ。

そんな日向の顔は清々しかった。

第37話〈暖かい手〉（改2）

「才前ハ、モット暖カイナ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第37話 〈暖かい手〉（改2）

空襲警報はずっと続いている。

陸軍としても多少疑いは残っても今は、それどころではないのだから。

やがて少し弱々しい印象の機銃音が断続的に響く。お台場公園に設置してあった、あの小さな機銃を撃っているようだ。

「我々も早く撤退しよう」

そう言いかけて私は思わず静止した。日向がまだ深海棲艦（大井・仮）と手をつないでいたのだ。

彼女もそれに気づいてパツと手を離れた。ただ敵である深海棲艦は、さほど嫌そうな顔ではなかった。

日向を見て言った。

「才前の手、暖カイナ」

『……』

その意外な反応に私と日向は一瞬、戸惑って静止した。だが警報は続いている。

直ぐに日向が私に頭を下げた。

「司令、申し訳ありません！ 出過ぎた真似を……」

「個人的には咎（とが）めたくは無いがな」

命令系統としては日向の行動は確かに良くはない。だが今はグズグズして居られない状況だ。

「言い訳は後だ。私たちも退却だ」

「ハッ」

日向は早速、瑞雲から報告を受ける。

「司令、瑞雲からも目視できる距離に敵機を確認！」

私は上空の機体をチラツと確認してから境内の深海棲艦に手を差し伸べて言った。

「もう時間がない。最後のお願いだ、一緒に来てくれ」

「……」

すると『彼女』は無言で手を差し出してきた。私は迷わず彼女の手を握った。

深海棲艦は私の手を、やや強い力で握り返してきた。それから私が軽く手を引くのに合わせて神社の階段から、ゆつくりと立ち上がった。

確かに『彼女』の手はちよつとヒヤつとしていた。そもそも敵に直に触れるのは、これが初めてだ。

私は語りかけた。

「行くこうか」

「……」

少し手を引いて後退すると深海棲艦も慎重な足取りで階段を下りた。

だが、やはり少し体調が悪いのだろう。彼女は地面に降りた途端、少しよろめいて声を発した。

「アツ」

……人間の発音とは違うので上手く表現できないがイメージとして、そんな声だった。

反射的に私も慌てて彼女の身体を抱き寄せた（正しくは受け止めた……というべきか）

「……」

彼女の腕や体全体もヒヤツとしていた。やはり『深海』に棲息するのだろうか？

だが正直ちよつと焦った……何しろ私たちを散々手こずらせた相手なのだ。いわば人類共通の『敵』である。

おまけに、この深海棲艦は私のことを『憎い』とまで言っていた。そ

の本人と接しているんだから。

「……戦争とは想像を絶する世界だな」

私が言うとは意外な反応が返ってきた。

「モットモダ」

「……」

接するほどに不思議な敵だ。

既に憲兵は居なくなつた。日向は先に神社の外に出て周囲を警戒している。そして大丈夫という感じで軽く手を上げて先に軍用車に向かった。

私と深海棲艦も鳥居をくぐつて外に出た。そのとき呟くように彼女が言った。

「才前ハ、モット暖カイナ」

(それは……日向と比べているのか?)

空襲警報は断続的に続き、お台場の機銃の発射音が響きわたっている。岸壁では陸軍が慌しく動き回っているようだ。自走式の高射砲も出てきた。

私たちは、それには構わず軍用車に乗り込んだ。深海棲艦を先に助手席に乗せて私は車のポケットから手錠を取り出した。それが何であるか深海棲艦も直ぐに察したようだ。少し警戒して身を引いた。

私は釈明するように言う。

「悪く思わないでくれ。これは軍の決まりだ。それに陸軍に見つかった場合これが無いと逆に疑われて厄介だからな」

「……」

彼女は今回も意外な反応を見せた。つまり黙つて私にされるまま手錠をはめたのだ。私は「済まない」と言いつつ手錠の一方を軍用車の手すりにはめた。

「ガチャッ」という冷たい音。

「……」

相変わらず無表情な『彼女』。

だが不思議なのは神社の中で見せた程の抵抗感が見られないことだ。それは気のせいだろうか？ 或いは、もう抵抗するのは観念して

諦めているのだろうか？

日向は軍用車の荷台に飛行甲板を固定してから銃座に上がった。それから上空を見上げて瑞雲に『警護しながら鎮守府へ向かうように』との指示を出している。

無線機からは陸軍と美保鎮守府からの無線が入り乱れる。大淀艦隊も必死に回避している状況が断片的に伝わって来た。

「グズグズしてられないな」

「はい……こちらの機銃の準備はOKです」

日向が報告する。

「よし」

私は車を発進させた。

第38話〈偽善者〉(改2)

「優しくスルナ……偽善者メ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第38話〈偽善者〉(改2)

さて運転席に座ろうとした私は座席にサンドイッチが一人分、残っていたことに気づいた。

おもむろに、それを取ってから運転席に座ると助手席に座っている深海棲艦(大井・仮)に話しかけた。

「片手が塞がっていて食べ辛いと思うが」

そう言ってサンドイッチを彼女の目の前に差し出した。

「ナンダ、コレハ?」

「あ」

(サンドイッチを知らないのか?)

私は一瞬『やはりこいつは艦娘(大井・仮)ではないのだ』と納得せざるを得なかった。同時に、ちよつと残念な気持ちも起きた。

だがそれは私が勝手に思い込んでいただけだ。事實は冷静に受け止めよう。

気を取り直して私は言った。

「食べ物だ。お前も、おなか为空いただろう?」

「……」

助手席の「彼女」は、ただ黙って見ている。

「安心しろ。別に毒なんか入れてない」

そう言いつつも後部の銃座からは日向が無言で観察してくる雰囲気(威圧感はない)が伝わって来た。瑞雲も飛んでいるし……グズグズしている時間は無い。

私は『彼女』の反応を待たず、そのヒザの上に半ば強引にサンドイッチの包みに乗せた。

「出すぞ」

「ハッ」

後ろの日向の反応を受けつつクラッチを踏み込んだ私はシフトチェンジした。軍用車は独特のエンジン音を立て黒煙を吐きながら神社前を出発した。

「優しくスルナ……偽善者メ」

ふとエンジン音に紛れて、そんな台詞が聞こえたような気がした。境港の旧市街は少々歪みながらも碁盤の目のように入り組んでいる。だから一区画を一周すれば大抵、元の道に戻る。私は路地を何度も曲がり続けて大通りを目指した。

ふと軍用無線が私の名を呼んだような気がした。だが運転中は応対出来ない。

直ぐに日向が代わりに無線を受けて後ろから大声で報告する。

「司令！ 秘書艦より海沿いの幹線道路に出て下さいとの指示が出ました」

「海沿い？ 431号線のことか」

この旧市街を出れば弓ヶ浜はどこも見通しが良く敵に見つかりやすい。

私は瞬間的に今回の敵襲を整理する。

彼らの目的は

- 1) 撤収する大淀艦隊への攻撃
 - 2) この捕虜を奪還するため
- という可能性が極めて高い。

助手席に居る捕虜は別として敵の本体は私個人への怨恨なんて微塵（みじん）もないだろう。そんな中を敢えて海岸通りに出れば余計、敵に見つかってしまう可能性が高い。ちよつと作戦に疑問を感じた。

しかし作戦指揮権を秘書艦である祥高さんに一任すると言った手前、司令といえども、まずは従うべきか。

「了解」

そう応えながら私はハンドルを切った。

軍用車は『水木しげるロード』と書かれた駅前的大通りに出た。い

わゆるアーケード商店街だ。空襲警報が出ているから、ほとんど人通りは無い……と、左右を見て一瞬、ドキツとした。

隣の深海棲艦がボロボロと涙を流している。

(参ったな)

日向に蹴られた所が、どこかが痛むのだろうか？ だが申し訳ないが今は構っていられない。

私は直ぐに妖怪のブロンズ像が立ち並ぶ通りを左折した。直ぐに正面に信号機とアーケードが見える。

本当はダメだが非常事態だ。陸軍も憲兵も文句は言うまい。私は赤信号を強行突破。さらに一方通行のアーケードをまた逆走する。

アーケードを出たところで上空を確認。瑞雲も2機、車に並走して飛行していた。

「そろそろ敵機が来ます！」

日向が後ろから叫ぶ。

「了解……」

そう言いながら私は何気なくバックミラーを見た。

「うっ！」

(……沈黙)

私は見てはいけないものを見てしまったようだ。頭に血が上る。

(ごめん、日向)

お前のズボンみたいなもの、よく知らなかったが……一応スカートだったのか。

夕立もそうだったが艦娘の服装って、どうして『ミニ』が多いのかな。

(きつと、風が悪い)

そういうことにおこう。

第39話〈天国か地獄〉(改2)

(当たり前前だ。私はつくづくバカみたいだな)

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第39話 〈天国か地獄〉(改2)

旧市街を抜けた軍用車は東の日本海へ向けて狭い路地をひた走つた。

私の記憶が正しければ、この先のお台場公園を抜けると幹線道路(431号線)に出るはずだ。

「敵機、警戒!」

日向が凜々しく叫ぶ。

機銃を構える君は実に頼もしい。だがさつきから、お前のスカートが風でヒラヒラとまわってパン〇が見えまくっている。

見てはいけないと思うのだがバックミラーで後方確認するたびに嫌でも視界に入る。そのたびに何度も私は思わず固まりかけて慌てる。鼻血が出そうだが、それを精神力で耐える。

(これは天国か地獄か?)

日向には何とかして欲しいのだが、どうも女子(艦娘)にはハッキリと言えない。自発的にスカートがめくれないように何とかして欲しいよな。

(艦娘とはいえ、お前だって一応、女子なんだろう? 無頓着すぎるぞ!)

その日向の制服は忍者装束だ。私はてっきり行動しやすいズボンタイプなのかと思っていたが意外や意外。青天の霹靂、まさかの艦娘仕様だ。

(どうして艦娘ってのは、こうなるのか?)

私も運転している手前、ミラーで後方確認をしないわけにも行かず……男子としては嬉しい反面、司令官としては苦しいばかりだ。

(ああ天国と地獄)

一方、私の隣ではサンドイッチを抱えたまま滂沱(ぼうだ)の涙を流している妙な奴が座っている。一応敵なのだが水木しげるの妖怪そのものだ。まさに魑魅魍魎(ちみもうりよう)。

翻(ひるがえ)って空からは果たしていつ敵機が襲ってくるのか？
油断出来ない状況が続く。

日向のパン〇ラと妙な敵と空からの敵機の脅威……ここは天国と地獄が入り乱れている。

生死苦悦、混沌カオス、もう私の脳内もムチャクチャである……と、ココまで妄想していたら状況が動いた。

「あー！」

私は思わず叫んだ。

目の前の斜め上空に敵機が出現したのだ！ 日向は迷わず正面に向かつて機銃を発射する。私は軍用車の速度を保ちながらハンドルを保持した。

タンタンという感じの発射音。そして車体を受ける機銃の反動と同時に腹にズンズンと来る振動。そして辺りにバラ撒かれるカートリッジ。それらが内外に跳ね回ってキンキンという金属音が入り乱れる。

気のせいカタ立が撃ったときとは受ける感触が違った。より激しく、かつシャープな印象だ。恐らく最初のものとは機銃に装てんされているタマの種類が違うのだろうが恐らく新しく入れたものは強化されている。

正面に現れた黒い敵機に、ほぼ一直線に銃弾の光点が次々と刺さっていく。なるほどカタ立もソコソコ上手いが日向はもっと上手だ。

走行中の軍用車からの射撃は難しい。それを振動や風圧にも関わらず真っ直ぐ撃つ技術は、さすがだ。

やがて正面の敵機は日向の放った機関銃の餌食となる。

「やったー！」

日向が叫ぶと同時に黒い機体は火花を散らして派手に爆発し空中分解した。百発百中とは、まさに、このことだ。

海上では魚雷も打ち抜くという日向の正確な射撃能力は海軍でもピカイチだ。敵もそんな彼女の標的にされたのが運の尽きだな。

「よしー！」

ガッツポーズは出なかったが日向は会心の笑みを浮かべている。実は私も彼女の勝どきの声を聞くのは初めてだ。

それでも夕立とは違って過度に感情的にならないのは冷静な彼女らしい。

しかし日向が任務に忠実なのは有り難いが私には目の保養か毒なのか？そのスカート下のピラピラは何とかならないものか？

いや、鼻の下を伸ばしている場合ではない。私が車を止めようと思った次の瞬間、撃墜された敵機の直ぐ後ろから別の機体が現れた。

「編隊かー！」

まあ当然だろう。

「……」

落ち着いた日向は冷静に標的を捉え容赦なく攻撃を再開する。

やはり、さつき夕立が射撃した時よりも日向の発射音は小さくて低い。タマの種類が違うこともあるが、それ以上の何かがある。

銃器つてのは意外とデリケートだ。ちよつとした扱いやメンテの差で作動全般に差が出る。

ましてや日向の機銃操作は完璧だ。当然そこから紡ぎだされる動作音にも、違いが出るのだ。

彼女が教官になったら、きつと優秀な生徒がたくさん生まれるだろう。そう思いつつ上空の敵機を見る。機銃を浴びた機体は、まだ墮ちずにそのまま私たちの頭上を通り抜けて後ろへと過ぎ去った。

「ハルー！」

振り返りつつ日向が叫ぶと妖精が応える。

「ラジャーー！」

待ち構えていた上空の瑞雲2機が、日向の撃ち洩らした敵機に次々と襲い掛かる。結果は明白だ。直ぐに後方からはズゴンという低い

音と共に派手な火柱が上がった。

重低音が響きミラーには黒煙が立ち上っているのが確認できた。

「あ……」

落ちたのは、お台場公園かなあ？　そういえば市街戦で敵機の落下場所の心配を忘れてた。

しかし艦娘たちは、いざ戦闘になると有無を言わせない迫力がある。日向のパン〇ラも凄いが、それを怪しからん物と感ぜさせない勢いだ。

そういえば私は艦娘艦隊の提督でありながら彼女たちの実戦の場……つまり闘っている姿を現場（肉眼）でほとんど見たことがない。そもそも現代の海軍において艦娘たちがリアルに戦う姿は他所でも、ほとんど知られていない。昨日の神戸が言っていた「戦う姿を初めて見る」というのは大げさでなく全ての提督や参謀にいえることだ。

変な話、私のような人間よりも隣に居る深海棲艦たちの方が艦娘の「真の姿」を知っているかも知れない。まして今日の夕立や日向は艦娘の地上戦だ。かなり貴重（レア）な光景だろう。

だが私は考える。そんな昨今の人間と艦娘の関係……彼女たちが前線へ行き人が後方に居るという構図は果たして好ましいのだろうか？

ふっと後ろで警戒を続ける日向とミラー越しに目が合った。彼女は少し微笑んだ。そしてミラー越しにチラチラと私を見てくれる。

そう、私のように出来の悪い指揮官であつても全幅の信頼を寄せてくれるのが艦娘だ。今見る日向の純粹な眼は、それを象徴している。

「そうか、そうだよな」

ハンドルを握りながら私は呟いた。

「？」

日向は周りを警戒しながらも私の言葉に少し首を傾げた。

私は思う。人間……特に海軍の軍人（指揮官）は彼女たちを裏切つてはいけない。どこまでも運命共同体であり一蓮托生なのだ。

そう思えば普段、なかなか共に戦うことのできない彼女たちと、こ

うやって地元、境港で共に走り抜ける経験。

今日という日は私にとっても海軍に於いても記憶すべき歴史的な一日だ。大げさだが心からそう思うのだった。

そんな私の隣には海軍（人類）の敵も居るんだが……まだ泣いているのか？ こいつ。

そして日向は相変わらず派手にピラピラと腰周りをはためかせている。

「うーむ」

それは彼女に言うべきか否か？ そのうちに海岸線が近づく。

（もう時間がない！）

私は突然決意した。

「そうだ艦娘たちには隠し事をしないようにしよう！」

「……」

訝（いぶか）しがる日向をよそに私はアクセルを緩めると幹線道路に出る交差点の手前で軍用車を停車させた。

すぐに周りを警戒。今のところ大丈夫だ。後ろの日向は……おお！ 停車すれば、お前のスカートは、ちゃんと重力に従ってくれるんだな。

（当たり前だ。私はつくづくバカみたいだな）

「司令？」

彼女は後ろの銃座で不思議そうな顔をしている。

「日向……その何だ」

私は振り返りつつも彼女の顔を見て、ただ苦笑するばかりだ。

「実に言い難いのだが、お前には隠さないことにする」

「は……」

相変わらず不思議そうな表情の日向だった。

第40話〈海岸道路へ〉(改2)

「毒ジャナイヨナ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第40話 〈海岸道路へ〉(改2)

「司令?」

彼女は後ろの銃座で不思議そうな顔をしていた。

「日向……その」

私は振り返りつつ、澄まし顔を見て、ただ冷や汗を流す。

「どうか、されましたか?」

彼女が改めて聞いて来る。

私もいい加減、妙な思いになる……軍隊の指揮官が何で兵士のスカートの心配をせにやなんのだ。実に理不尽だ。

いや、しかし出来の悪い指揮官だから、こういうハメになるのかな? ギリギリになつて下らない葛藤をする私。

これが平時であれば絶対に言えないことだが今は戦闘中で時間も無い。それに艦娘と一蓮托生だと決意した以上、彼女たちとの間に壁があつてはダメだ。

私は意を決した。

「日向……お前の働き振りには感心だ。ただ」

「ただ?」

彼女は怪訝(げげん)な顔をしている。許せ日向。

「お前のスカートが。その……風でピラピラと」

うーむ、これが精一杯。途端に耳がカーツとなった。

「あ……」

ハツとしたような彼女は私以上に真っ赤になった。そして慌てて自分のスカートを押さえた。(別に今はめくれてない)

私は肩をすくめた。ようやく肩の荷が下りた思いだ。

日向はドギマギしながら言った。

「あの……その、失礼しました」

機銃に手を掛けつつ必死に頭を下げている。ホントに全然、気付いていなかったんだな。

ただ先ほどまでの精悍な日向とは、うって変わって女性らしい。

そんな私たちのやり取りを不思議そうな目をして見ている深海棲艦（大井・仮）。この光景は誰が見ても変だよ。説明し難い。

でも日向は顔を上げると改めて私を見詰めながら、ゆっくりと言いつつ聞かせるように言った。

「でも私……司令なら別に構いませんから」

「や……」

そう言われると何て返して良いんだ？ 逆に私は言葉を失った。すると急に私の隣にいる深海棲艦が話しかけてくる。

「オイ」

私はハツとして現実に戻された。サンドイッチを指差した『彼女』は言った。

「毒ジャナイヨナ」

（こいつ戦闘中に食べるつもりか？）

当然、彼女にとっては日向のパ○チラなんか関係ないようだ……まあ当然か。

私は二回ほど頷くと言った。

「毒じゃないぞ」

オウム返し状態の私。これじゃまるで漫才だ。すると助手席でムシャムシャと食べ始める変な奴。

私はそんな彼女を見ながら気を取り直して日向を見た。

「改めて、行くぞー！」

「はいー！」

彼女も爽やかに応える。何か……妙なクルーだが。だがホツとしたのか、肝が据わった。

再び走り出した軍用車は直ぐに幹線道路に入る交差点に来た。こ

ここから鎮守府まで幅広い幹線道路になる。

この道路を走るとは即ち敵に発見される可能性が高まる。現に海岸沿いの上空には既に数機の敵機が浮かんでいた。

特に今は空襲警報発令中で他の車は走っていないから、なおさら危険な状態だ。日向のパン〇ラのゴタゴタで、まったく無線が耳に入らなかったから状況が把握出来なかった。

だが既に戦端は開かれている。無線機からはノイズに混じって艦娘たちの声が入ってきた。

「よく狙っ……てーっ」

ガリガリ

「弾幕を……りなさいなー!」

ザザザザ

「ひゃああ」

ガリッ……

美保湾の上空にも何本も黒煙が立ち上がっている。敵機や艦娘の艦載機が飛び交い混戦状態だ。

直ぐに日向が鎮守府からの無線を受けた。

「秘書艦より大淀艦隊は現在、中破3、大破1で、やや苦戦中です。司令は海岸道路をそのまま鎮守府まで全速力で南下してください!」

「了解!」

私は応えた。

もはやムダに考えて躊躇（ちゅうちよ）している暇は無い。ただ前進あるのみ。私はシフトレバーをチェンジしてアクセルを踏み込んだ。

第41話へタフガール再び(改)

「こいつも、タフなやつ……」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第41話へタフガール再び(改)

軍用車は海岸道路(431号線)に乗った。無線機からは断片的に大淀艦隊の苦戦状況が伝わってくる。

ガリガリ

『あぁっ……あかんで……』

ザザザ

『……は沈みません……』

叫び声に合わせて入る爆音らしきノイズが痛々しい。

銃座で敵機を警戒している日向も時々悔しそうな表情を浮かべている。彼女は自前で無線を持っているから細かい内容が四六時中入っているのだ。

美保鎮守府に赴任して間が無い私にとって、実は大淀艦隊8隻の駆逐艦の、ほとんどがまだ面識のない子ばかりだ。だから正直、声を聞いても誰が喋っているのか見当がつかない。

『ひえええ』

ああ……良くも悪くも、これは比叡だと一発で分かる。

昨日までの私なら彼女たちの無線も客観的に聴けたかもしれない。だが今日の夕立や日向の戦う姿を間近で見た今となっては、とても他人事ではない。

もちろん軍隊の指揮官としては兵士への同情は無用だ。

しかし今さらだが彼女たちに申し訳ない気持ち湧く。以前より多少とも彼女たちの喜怒哀楽の世界に近づいたからだろう。

艦娘だけの鎮守府という特殊な環境下での艦娘と指揮官(提督)の

関係性は、果たしてどうあるべきか？

今後の我が国の海軍を想えば小さいとはいえ美保鎮守府での『いち司令官』として試行錯誤がまだまだ続くのだろう。

すると急に強い口調の無線が入った。

『……です！ 私も出るっばい』

ザザザ

明らかにこの口調は夕立だと分かる。

『……めよ！あなたは怪我を……』

ガリガリ

『……秘書艦！ お願いし……』

何をしようとしているのか？

『きやあっ』

複数の悲鳴……駆逐艦か？

夕立が担架に乗っているから駆逐艦たちが敵の標的になっているのだ。

一連の状況を察した日向が叫ぶ。

「海上の夕立が自分も戦列に加わると主張しています！ 大淀は否定し本人から秘書艦に直訴を試みていますが」

彼女は不安定な現場無線に代わって鎮守府司令部へ無線を放った。ひよっとしたら敵の中にも義理堅い奴が居るのかも知れない。だがもともと人間とは違う深海棲艦だ。赤十字のような『救護』という考え方は、まったく通用しないだろう。

ザザザ

『……許可します。夕立、出撃し……』

直ぐに返ってきたのは祥高さんの声だった。

日向は早速、現場海域へ向けて司令部からの指示を伝えている。

「こちら日向、秘書艦より夕立出撃の許可が下りた。聞こえるか？」

『ばいっ！』

直ぐに反応があった。

「思った以上に元気そうだな、夕立」

私は呟いた。

そのとき日向が叫ぶ。

「来ますー！」

既に軍用車は数百メートル南へ即ち鎮守府へ向けて走っていた。そこへ遙か前方に漂っていた敵機が軒並みこちらへ向かってくるのだ。

日向は照準もソコソコに機銃を構えると射撃を開始した。

再びガガガという機銃の発射音。キンキンという音と共に無数の薬莢（やつきよう）が車体から路面へと、ばら撒かれた。

艦娘仕様の機関銃が普通の機銃とは違う感じは、この軍用車のハンドルが、かなり振られるので分かる。

恐らく威力があるから反動が大きい。つまり射撃するだけでも安定させるのが難しい。

それを走行中に保持しつつ真っ直ぐに射撃する日向。路地での敵への蹴りも凄かったけど日向の足腰は半端ないな。

同時に彼女は機銃本体の固有振動……つまり反動も考慮しながら銃の特性を加味し最も効果的なポイントを探りながら撃つ。

そんな彼女独特の手綱捌（さば）きの感覚が伝わってくる。そこが夕立とは違う点だ。さすが戦艦クラスだ。

私も、すっかりハンドルを固定する。だがアクセルは離さない。前方の敵機はチカツと一瞬、光ったかと思うと幾筋もの光の筋を放つ。

ブーンという聴きなれない不自然な音を立てて通り抜ける光の筋。次の瞬間メリメリという音を立てながら車の左右の道路がめくれ上がっている。同時にアスファルトが宙を舞う。

信じられない光景だが私も日向も不思議と落ち着いている。戦場では常軌を逸したことが起こりがちだ。何が起きても不思議と気に留めないのだ。むしろ気にしていたら戦えない。

日向は、ひるまず真っ直ぐに撃ち続ける。上空で併走していた瑞雲も急加速して先行。それぞれに個別の敵を迎撃し始めている。

私は車体を直線に保ちつつ前方から来る敵の光線や、めくれたアスファルトの塊が私たちを直撃しないよう小刻みにハンドルを左右に振り続けた。

夕立なら『おええ』とか言いそうだ。しかし銃座という重心の高い不安定な場所に居ながら日向はビクともしない。さすがだ。

彼女のパン〇もチラチラするが、もはやそれを気にしている次元ではない。まあこういう修羅場では些細なことは、お互い気にしないということだ。

……でも私の隣の深海棲艦（大井・仮）は意外に長い髪を後ろになびかせて最後のサンドイッチを片手で無言で食っている。神社の境内でのバテ振りが今は嘘のようだな。こいつもタフだということか。

「よー」

日向が叫ぶ。立て続けに前方および側面の敵機がズゴンという激しい爆音を立てながら空中で分解していく。

なぜかその光景がスローモーションに感じられ同時に私は彼女との不思議な一体感を感じていた。

以心伝心（いしんでんしん）……とまでは行かないが、この感覚は久しぶりだ。かつて彼女と共に最前線を戦っていた頃の記憶か。

ふと気付くと海岸道路や松林には早くも敵機の攻撃や残骸でボコボコになっている。

やれやれ……境港の皆さんには本当に申し訳ないな。このお詫びは市民の安全を以って返すしかないか。

第42話〈波状攻撃〉(改)

(私は、ここで死ぬのかな?)

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第42話〈波状攻撃〉(改)

立て続けに2機を撃墜して喜んだのも束の間。

私はサイドミラーに機影を確認した。

「日向! 後ろだっ」

思わず叫ぶ。銃座の日向が振り返ると同時に敵機の突起部分がない味に光る。私は反射的に急ブレーキを踏んだ。

キキッ! ……というタイヤがこすれる音と共にガクンという前方への激しい衝撃が車体に加わる。

深海棲艦(大井・仮)や私はシートベルトをしているから大丈夫だが日向も中腰の姿勢で機銃を抱えたまま何とか踏ん張った。さすがだ。

次の瞬間、日向の頭上をかすめた敵の攻撃が軍用車前方の道路をえぐった。何かが溶けるような音を立てて敵の光線が前のほうへと移動していく。

私たちが攻撃し損なった敵機は、そのままの勢いで軍用車の上を通り過ぎて前方へと飛び出した。

「貫った!」

中腰で伏せていた日向は、すぐさま上体を起こすと機銃を構え直して攻撃を再開。

激しい銃撃音と共にバラバラと飛び散る葉莢(きょう)。停車している軍用車は反動で振動する。前に居る私たちの所にもキンキンと音を立てて葉莢が飛んでくる。

車の左右からは瑞雲も攻撃に加勢する。敵機は瞬く間に前方の上空で火花に包まれ破壊された。私は軽く頭を押さえて衝撃波や爆風と共に飛んでくる破片をやり過ごした。

「やれやれ」

ホツとする間もなく遠くからゴオオという重低音が響く。停車しているから良く分かるな。

「司令ー」

日向が海を見ながら叫ぶ。

美保湾を見ると、その方向から数機の黒い機体が編隊を成して向かって来る。

「新手か？」

私は直ぐにシフトレバーを入れ直して車を発進させた。目の前の道路には先ほど墜落した敵機の残骸が火花を散らしながら横たわっていた。

「通れないな……」

眩きながら私はハンドルを切って反対側、つまり逆走する車線へと移った。幸い今は非常時だから向かってくる車はない。

「今日は逆走ばかりだなあ」

独り言と共に左の海側の敵を何度かチラチラと見た。しかし車体が揺れるのと弓ヶ浜の松林が邪魔をして、なかなか数えられない。

思わず私は叫んだ。

「日向っ、敵機を確認ー」

「……3、4、全部で5機ですー」

さすが日向、確認が早い。

「敵もしつこいな」

だが確認すると同時に連中は遠くから攻撃をしてきた。

「クッ」

構える間もなく車の前後を敵からの光線が幾重にも走り抜け、周りの道路が次々と破壊されていく。その度にアスファルトがめくり上がり激しい振動が襲う。

狙いが外れて道路沿いの松林に入った敵の光線は容赦なく枝をな

ぎ払う。一部からは火の手が上がっている。

私は必死にハンドルを保持しながら走り続けた。

だが敵が海側（真横）から来ているので反対車線で逆走している私たちには都合が良かった。幹線道路の中央分離帯が、ちょうど敵機からの目隠しになって照準が僅かにズレている。何が幸いするか分からない。

しかし敵の攻撃パターンから、連中は捕虜の安全は全く考えていないように感じられた。

さつきはこいつを救出する艦隊を出したようにも思えたのだが……気のせいか。結局、こいつを救出するつもりは無いのか？

この執拗な攻撃は、この道路で深海棲艦と私たち諸共（もろとも）消し去るつもりだろうか？ そんな印象もある。

日向が叫ぶ。

「司令、残弾僅かです！」

「そうか」

機銃の威力が相当あるとはいっても、日向もかなり撃ち続けている。お昼にタマの補充はしたが敵も波状攻撃を仕掛けてくる上に数も多い。

私は鎮守府周辺の地理を思い出す。

「鎮守府まで、あと僅か……弾はギリギリか？」

恐らくネックになるのは埋立地に入る交差点……減速する瞬間だ。

オマケに今は逆走しているから国道から埋立地へ曲がるためには逆走している車線分だけ減速する区間が長くなる。そこを狙われる可能性は高い。

「まずいな」

機銃のタマに余裕があれば、ある程度を行き過ぎてから応戦するという戦法も取れた。だが残弾が少ない今の状態で逃げ回るのは得策ではない。

「悩んでいる暇はないか」

もう交差点は間近だ。

無線からは、かなり苦しい声が入る。

「もおお、ばかあ……」

ガリガリ

「今のは夕立か？」

恐らく誰かに艀装を借りてでも戦っているのだろう。そういう根性だけはある子だ。

(でもムリするな夕立)

ジジジ

「大淀、沈みはし……」

ザザザ

「まずい、大淀さん被弾か」

……かなりヤバそうだな。

ビリビリ

「この……がやられるなんて……」

ガーガー

日向も受信しているはずだが時おり応戦しつつも黙っている。まだ艦隊から轟沈という報告は無いが無線の雰囲気から切羽詰った状況だ。

各艦娘も気になるが一番心配なのは何も語らない寛代だ。もともと口数が少ない子であるが……無事なのか？

「まさか日本海に、そのままズリ落ちたりしないよな」

先に逝くなよ！ 寛代。

無線からは断続的に叫び声が入る。

「……した！ 直撃ではないが……」

ガガガ

「ヤバいな」

もうそろそろ限界か。これ以上、敵の攻撃を受けたら誰かが沈むのは時間の問題か？

私たちの車は、ついに鎮守府入口の交差点に来た。曲がり角は目の前だ。ハンドルを握る手が緊張する。

「うおおお」

珍しく叫ぶ銃座の日向……彼女は全弾を撃ち尽くす如く全方位へ

向けて激しく応戦した。その結果、上空の敵機が一瞬、私たちから距離を取って離れた。

「しめた！」

私は、その隙に反対車線から鎮守府の埋立地へ向けて左折して一気にアクセルを踏み込んだ。

交差点を走り抜けて埋立地に入る。松林の間の道路を通過して直ぐに鎮守府手前の交差点からは右手に司令部の赤いレンガの壁が見えてきた。

少しホツとした私は一瞬アクセルを離して減速させた……だがその一瞬の油断がまずかった。敵はそれを狙っていたようだ。

「司令ー」

日向が叫ぶ間もなく離れていた数機の敵機が、あつという間にその交差点に向けて攻撃を仕掛けて来た。

「！」

私と日向は思わず緊張した。

いや正直、これで終わりか？ ……思ったのだが意外にも敵の攻撃目標は軍用車ではなかった。

連中は交差点の直前にある小さな橋へ集中砲火を浴びせた。私たちの目の前に一瞬、大きな火柱が上がり激しい煙が立ち上った。

減速していたとはいえ60キロは出ている車だ。直ぐには停まらない。

「あー」

叫ぶ間もなく軍用車は壊れた橋へと突っ込んだ。

私は瞬時に思い出す……確か交差点を渡って直ぐのところ数十メートルの小さな橋があった。普段は全く意識しないほど小さいものだが、その下には美保湾からの海水が流れ込む水路になっていた。

(迂闊(うかつ)だった。ここに橋があったんだ)

そう思ったが後の祭り。しかも私は今日、美保では初めて軍用車を運転している。

敵は鎮守府周辺の細かい地理や、こちらの状況を実に良く調べていることを悟った。悔しいが情報戦で負けた気がした。

だが、こちらには捕虜も居る。そこまでの情報取得能力があるなら当然、捕虜のことも考えているはずだが？

解せない。先ほどの幹線道路での攻撃を思い出して疑問が湧く。

(やはり見殺しなのか?)

いろいろな頭を巡る。

(いや、もしかしたら……)

アレコレ考えいていた時間は、ほんの一瞬だったに違いない。

3人を乗せた軍用車は交差点へ入る手前の水路へとジャンプ。一瞬、体が浮くような感覚があつて、そのまま水路へと落下して激しい水しぶきを上げた。

シートベルトはしていたが落下の衝撃で私はフロントガラスかどこかで頭を強打した。同時に意識が遠のく。

それはかつて訓練や戦場で死に掛けた際に感じた、何かが切り離される感覚に似ていた。

(私は、ここで死ぬのかな?)

「司令！」

最後に聞いたのは日向の叫び声。そして差し出された掌が見えた気がしたが……あとの記憶は途切れた。

第43話〈決断〉(改)

(あの深海棲艦までやられてしまわないか?)

マイ「艦これ」みほ2ん」

第43話〈決断〉(改)

気を失っていたのは数分だろうか?

「司令っ、しつかり!」

この声は日向か? そういえば目の前で橋が破壊されたことを思い出した。

「はっ」

……我に帰った。

「気付かれましたか?」

青空をバックに私を覗きこんでいる日向の『どアップ』だ。その向こうの空を瑞雲が旋回している。

全てがドライな日向に、ここまで接近されると、ちよつとビツクリするが……いや、それどころではない。

私は直ぐに上体を起こそうとするが……

「ん? 冷たい」

ああ、そうか。ここは水路の中か。

私の思いを察したように彼女も頷いて淡々と説明する。

「司令、ここは水路です。何とか足は届くかも知れませんが」
「済まない日向」

と言いながら私は彼女に支えられて上体を水路の中で起こす。

何とか立ち上がるが

「イタタ……」

全身打撲か。ハンドルで額を打ったような感触……おでこがズキ

ズキする。

見渡すとコンクリートの土手……ここは確かに水路だな。口の中がしよっぱい。

日向が身体を密着させて私を支えてくれる。彼女の場合、不思議と変な気は起きないのだが……やや筋肉質な身体ながら、やはり柔らかい感じ……女性なんだなと思わせた。

彼女は言う。

「司令、お体は？」

「ああ、まあ中身は検査しないと分からないが、今のところ打撲程度で済んでいる感じだな」

「……良かった、です」

意外な言葉。彼女自身あまり使わない単語だろう。

一瞬、二人の間に気恥ずかしい空気が流れた。

その空気を払うように私は言う。

「そうだ、あの捕虜は？」

次の瞬間、私の背後で突然大きな音がした。

「え？」

振り返ると巨大な水柱が上がっていた。

見ると艦娘が……第六駆逐隊が何かを追っている。

「潜水艦か？」

指揮を取っているのは神通さんか。

日向は改めて敬礼をした。

「報告致します。軍用車が水路に落下直後、司令は頭部を強打され意識を失われました。私は直ぐに救出を試みましたが……」

また背後で水柱が上がる。

「逃がさないわよー」

恐らく瑞雲だろう。機銃掃射の音も聞こえた。日向は報告を続ける。

「落下直後、恐らく至近距離からの魚雷が土手に着弾。激しい水柱と水圧の中で私は司令を確保。その間に敵の特殊部隊及び潜水艦数隻が捕虜を強奪しました」

「なに？」

確かに周りを見ると私たちしか居ない。やはり捕虜を狙っていたか。

「ビンゴー！」

背後で、また水柱。今度は火柱も立った。敵の潜水艦か特殊潜航艇に攻撃が命中したらしい。

「このままいくと……」

私は慌てて口をつぐんだ。

(あの深海棲艦(大井・仮)までやられてしまわないか?)

私の思いを察知したらしい日向は急に私の手を取った。

「司令……」

相変わらず淡々としているが、その眼差しは何かを懇願するように真剣だった。

「捕虜、あいつは敵です！」

彼女には私の気持ち分かる反面、艦娘として許せない想いもあるだろう。

「司令の意図に反するようで申し訳ありません……が艦娘たちの想いは皆、同じはずです！」

もともと口数が少ない彼女だが絞り出すように訴える。

「しかし……」

私は何とか返したが日向は構わず続ける。

「この作戦は秘書艦が直接指示を出されています。でも……でも」
急に声のトーンが下がる。

かなり押さええているとはいえ、ここまで感情的になる日向は初めてだ。それでも私には、あの深海棲艦が気になるのだ。

「あの子は……」

私もようやく声が出た。

「沈めるべきではない」

その言葉に何か外れたようになった日向の表情が変わった。

私は一瞬『しまった』と思った。いわゆる『地雷を踏んだ』という奴だ。

そのとき初めて目の前の艦娘から殺気を感じたのだ。それが日向だと、なおさら緊張感が漂う。

「司令ー」

思い詰めたような彼女。

「……」

私は何も返せない。

次の瞬間、彼女が私に抱きついてきた。

「あ……」

変な話、私は死を覚悟した。丸腰とはいえ相手は艦娘だ。その腕力があれば、この場で私を絞め殺すくらい容易（たやす）いだろう。だが、私は絞め殺されなかった。

彼女はホンの少し丸みを帯びた身体で呟くように言った。

「司令が撤回命令を出されるなら私も咎（とが）めません……」

私の胸で、ふっと寂しそうな目をした日向。私はドキツとした。

やはり心の底では反抗するののか？ ……本来、指揮官には絶対従順であるはずの艦娘だが生真面目な日向らしい一途さがあるな。

もちろん艦娘たちが敵を憎む気持ちも理解は出来る。これは戦争だ。最前線で戦う艦娘にとってはキレイゴトではない。

相手は武力行使をしてきている。それに対して全力で立ち向かう艦娘たちが間違っているのではない。

敵は敵、まして個人的な思い込みによる同情は無用だ。むしろ可笑しいのは私の方だろう。

「追い詰めたよー！」

どうも指揮をしている神通さんよりも第六駆逐隊の方が目が血走っているようだ。

だが私は決断した。彼女の両肩に手を添えて改めてその顔を見ながら諭すように言った。

「日向、済まない。あいつは……見逃せ」

「……」

とても哀しそうな目をした日向は、一瞬ためらった後に敬礼をした。

「了解」

そして彼女は淡々と美保鎮守府司令部に通信を始めた。

第44話〈日向の涙〉（改）

「航空戦艦『日向』は、もう迷いません！」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第44話 〈日向の涙〉（改）

「はい。そうです……よろしくお願いします」

日向は通信を終わった。

たまらず私は重ねて言った。

「日向、済まない」

私としては、あの深海棲艦（大井・仮）とのいきさつも彼女にも話すべきか一瞬悩んだ。

だが日向は私の言葉を打ち消すように急に笑顔で言った。

「司令、作戦変更は受理されました。直ぐに私たちの救出部隊が来ます！」

（日向、無理するなよ）

そう言いかけた私は口をつぐんだ。普段から、あまり喜怒哀楽を出さない、お前の顔が珍しく引きつってる。

やはり彼女にとっては敵を逃がすというのは相当、耐え難い判断だったか。私は彼女の報告に「そうか」とだけ応えた。

それにしても少し動くだけで身体の節々が痛む。

それに気づいた日向は言った。

「司令、お体が」

彼女は手を差し出す。

だが私は敢えてそれに応えず「ああ、大丈夫だ」とだけ言って掌を左右に振った。

正直これは、やせ我慢だな。ただ同時に彼女への後ろめたさと恥ず

かしさもあつた。

だが日向は、そんな私を見ても落ち着いて言う。

「司令」

「なんだ？」

彼女は私に近寄ると私の身体を支えるようにした。『おやつ』と思う間もなく日向は私の正面から無言でソツと抱き付いてきた。

「お、おいー」

私は慌てた。だが彼女はジツとして離れない。

さつきは、お互い感情的になつていたからだろう。私も日向に抱き付かれても別に何も感じなかった。

ところが、なぜか今回は妙な恥ずかしさがあつた。自分の頭に血が上るようでカーツとなる。

「……」

彼女はジツとしたままだ。だがこの感じ……誰かに似て居るよな。

えつと沈着冷静な艦娘……例えば秘書艦の祥高さんか司令部の大淀さんかな？

その時フツと遠い記憶が蘇つた。

(……確か加賀という艦娘も、似た感じだったな)

もちろん彼女は美保には居ない。ただ一度だけ呉かどこかで同じ作戦に加わった際に見かけただけ……たつたそれだけでも強い印象を残す子だった。

直ぐに傷みで現実に戻される。

(き、筋肉痛が……)

恥ずかしいだけでなく身体中がズキズキする。

筋肉痛と併せて日向に張り付かれたこの状況は、どうしたものか？

しかし、ようやく彼女は静かに言った。

「司令、申し訳ありません。命令違反の数々に先ほどの反抗心……艦娘としての至らなさを悔いるばかりです」

日向もパワー全開ではないだろうが艦娘の腕力は侮れない。特に力んでなくても彼女たちに確保された男性は容易に離れることが出来なくなる。

(あ痛てて……)

お、お前はアマゾネスか？ 失礼ながら一瞬そんな連想がよぎった。

だが彼女の純粋な気持ちを思うと邪険にも扱えない……私は、ただ苦笑して冷や汗(脂汗)をかくばかりだ。

日向は私の胸に顔を押し付けながら絞り出すように言った。少し声が震えている。

「もし私が艦娘でなければ！ 司令のご苦労や苦悩を、もっと理解して差し上げられたのに……悔しいです！」

「いや、そんなことはない」

どうして彼女はここまでクソ真面目に成れるのだろうかと思うんだ。

そこまで根を詰めなくても……ただ単に私が、お馬鹿なだけだ。つくづくそう思うんだが。

それでも純粋な彼女の気持ちは痛いほどに嬉しい。

「……」

日向の体が小刻みに震えている。別に意味でギョツとした。

(あれ……日向、お前もしかして泣いてるのか?)

お前でも涙を流すことあるのか。

恐らく『涙を流すなんて絶対に有り得ない艦娘』の筆頭に数えられる日向だ。逆に彼女を、そこまで思い詰めさせてしまった自分の不甲斐なさに呆れた。

(やれやれ……もはや自分が極悪人に思えてきた)

だが私は、ここで悩む。

物語の定番(セオリー)通り今、この子を抱きしめるべきか、否か？

しかし指揮官として一人の兵士である艦娘Ⅱ日向に対して個人的な感情を抱くのも問題だ。

もし彼女とケツコンするのなら話は別だろうが……いきなりそれは有り得ない。

悶々としていたそのとき目と鼻の先にある美保鎮守府から別の軍

用車が近づく音がした。それを聞いた私と日向は反射的に、お互いの身体を離れた。

(正直ホツとした)

妙な解放感と筋肉痛で私は少しよろめいた。

しかし、そんな私に向かって日向は急に敬礼をする。

「えっ?」

咄嗟(とつさ)のことに私は驚く。

同時に日向の足下の水がザブンと跳ねた。そして今しがた彼女が顔を埋めた私の胸にも水が飛んできた。

「冷たいっ!」

(あ……)

その時、私は『しまった』と思った。

つまり先ほどまでの珍しい(レアな)日向の『涙』は永遠の謎になってしまったわけだ。

(まさか日向、わざとやったのか?)

訝(いぶか)しがる私に構わず彼女は続けた。

「航空戦艦『日向』もう迷いません! 全力で敵と戦い、時には引いて

……粉骨碎身、完全に司令に従う所存です!」

……おい! さつきから、どうしたんだ日向?

今日のお前は『らしく』ない、変だぞ!

すると直ぐに2機の瑞雲が同じ水路に着水してきた。

「え?」

やがてハルともう一人の妖精がキャノピーを開いて……私に敬礼した。

「ボクたちも同じです」

「同じく!」

「何だ? お前たち聞いてたのかよ!」

(無線回線が、いつの間にか開いていたのか?)

思わず日向を見るが彼女は、いつものポーカーフェイスだ。何処までが本音で何処までが演技なのか? 一筋縄では行かない子だな、日向。

「やれやれ……」

肩をすくめた私は、それでも敬礼を返した。

「分かった、今後も頼む」

『ハッ！』

何だかんだ言っても、お前たちの気持ちは嬉しい。本当に一途な……

「あ痛っ」

筋肉痛が痺れた。

やがて軍用車が崩れた橋のたもとに到着した。水路の上から声がする。

「大丈夫ですかあ？」

上から覗いたのは青い髪の子青葉さん。もう一人は龍田さんだな。

「繩梯子（ばしご）ですう。降ろしますね」

ほわっとした龍田さんは「それっ」と言いながら繩梯子を放った。髪の子青葉さんが、ふわっと舞っている。

「大丈夫ですか？」

「ああ、上るぞ」

私は降ろされた繩梯子を使って、ようやく水路から上がった。

（うう、身体の節々が痛いぞ）

水路から出るとホッとした。出迎えた青葉さんが敬礼する。

「司令、ご無事で何よりです」

「ああ……何とかね」

ふと見ると彼女はカメラを持っていない。

私は青葉さんに言った。

「珍しいな」

「え？ ……えへへ。緊急出動でしたから」

何となく笑って誤魔化された。ちよつとは遠慮しているのだろうか？

そんな私には構わずに彼女さんはテキパキと別のカゴで瑞雲と妖精を回収し始めた。

水路に残っていた日向は妖精たちをカゴに乗せ終わると手馴れた

様子で縄梯子から上がってきた。

龍田さんが交信する。

「秘書艦ですかあ？ はい、回収は無事に終わりましたあ」

そのとき美保湾からズドン！ という大きな砲声が響いた。

「艦娘か……？ そういえば大淀艦隊はどうなったのだろうか」

私と日向にバスタオルを渡ししながら青葉さんが海を見て言った。

「報告します。大淀艦隊は大破6、中破4、小破2です。轟沈は免れませんでしたけど実質的には敗北寸前でした」

さすが記者だけあって、さらりと凄いを言うな。

そのとき、また海のほうから砲声が響く。

気になった私は美保湾が見える位置に移動した。すると、海面に水柱が上がっていた。

「あの砲声は？」

（記憶違いでなければ山城さんのような気がする）

「はい、あれは山城さんです」

青葉さんは確認するように言う。

「いったい何してるんだ？」

山城さんは、何かを攻撃してるのか？

第45話〈対抗意識〉（改）

「対抗意識、燃やしているんですよ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第45話 〈対抗意識〉（改）

私は改めて青葉さんを見て聞いた。

「山城さんは何を撃っているんだ？」

すると彼女は得意そうな顔をしながら解説を始める。

「えつとお、山城さんって、もともと海岸通りを南下する司令を海上から援護する予定だったんです」

「なるほど」

それを聞いて私は初めて秘書艦の作戦指示の意味が理解できた。なるほど、それで祥高さんは私に海岸通りへ出るように指示してきたのか。

そんな私たちの背後では、相変わらず山城さんの砲撃が続く。

しかし青葉さんも怯（ひる）まない。さすが従軍記者だな……砲声音には慣れているのだろう。

「でも、ねえ……」

彼女は、ちよつと勿体ぶつたように表情を緩めてニタニタし始めた。

（なぜニタニタしている？）

私はちよつと疑問に思った。

すると青葉さんは、いつもの悪戯っぽい表情になる。

「司令と日向さんの連係プレーが、あまりにも見事過ぎたんですよ
ねえ」

「はあっ？」

そう言われても自覚は無いが。

彼女は、ちよつと真面目な表情に戻る。

「結論から言うそうですね、山城さんが射撃体勢になったときには、もう落とすべき敵機が居なくなっていたんです」

「あ……」

それは何となく分かる。日向と瑞雲が、ほぼ百発百中で片っ端から落としていたからな。

その時、急に海が静かになって砲声がやんだ。

青葉さんは一瞬、美保湾を確認して……また、こちらを見た。

「でもね、司令……それ以前にですよ？」

「なんだ？」

何を念押ししているんだ？

彼女はニタニタして続けた。

「山城さんが駆け付けけるよりも早く司令たちが、あつという間に鎮守府近くまで来ちゃいましたから」

「ああ、そういうことか」

よく分からないが相当ぶっ飛ばしたことは確かだ。

日向の見事な射撃と私も……そのパン〇ラの影響で頭に血が上ったともいえるのだが。

そんな私の妄想を感じたのか青葉さんはチョツと肩をすくめた。

「結局……山城さん出遅れちゃったんです」

すると龍田さん。

「高速戦艦じゃないですからねえ」

……余計なことを言う。

青葉さんは、いつものように後ろに手を組むと上目遣いになって、こちらを見詰めた。

「しかあもー」

ワザとらしい言い方……嫌な予感がする。

「司令ってばー、日向とまあ、イチヤイチャ、ベツタリで」

「はあ？ ……な、何のことだ？」

ドキツとした私は慌てて誤魔化す。

だがふと思いついた。艦娘同士って互いの無線が聞けたりするんだよな……つてことは？

「おい、日向あー！」

私は思わず振り返った。

「……」

だが、そこに居た日向は、いつも通りのすまし顔だった。

(日向って、真面目な顔して実は確信犯なのか?)

戦闘能力が高い彼女だ。それはつまり頭が切れるということの意味する……だから日向は策略家ではないか？

いやしかし、あの一途さは、むしろ真逆とも言えるか？

……そんな悶々し始めた私に構わず、どんどん話を続ける青葉さん。

「まあ山城さんにとっても日向さんって日頃から、すつごく対抗意識を燃やす相手ですから」

「へ?」

それは知らない。

すると龍田さんが加わる。

「山城さんと基本設計は同じなんですよお日向さんって……それが戦艦を通り越して航空戦艦でしょ?」

「……」

そういえば、そんな噂話を聞いたことがあったような。

青葉さんも腕を組んでしきりに頷く。

「だから、もう戦果から恋までメラメラ対抗意識が……あ、でもこれは美保鎮守府では有名な話ですからオフレコではありません」

「なんのこっちゃ」

私は半分、呆れた。

彼女は白い歯を見せて悪戯(いたずら)っぽく笑った。

「だからあ別に隠す必要はありませんってば」

「何だ、どういうことか?」

よく分からないが、呆れると同時に急に美保の艦娘たちの背景がボンヤリと見えてきたような気がした。

「そりや山城さんも、ちょっと考え過ぎだろ?」

……私の言葉にニタニタしている青葉さん。

そして不思議な笑みを浮かべている龍田さん。

……当事者の日向は少し距離を置いて瑞雲を調整しながらポーカーフェイスのままだ。

でも艦娘も繊細だよな。

「山城さん……このままだと、ヤバくないか?」

私の心配する言葉に顔を見合わせた青葉さんと龍田さん。

二人は『大丈夫だから心配ない』といった感じだったが、さすがに気になるよ。

私は軍用車に近寄ると龍田さんに双眼鏡は無いか聞いた。

スローテンポで縄梯子を片付けていた龍田さんは「どこかしら」と言いながら双眼鏡を探す。

「ありました……はい」

龍田さんから双眼鏡を受け取った私は鎮守府の脇から埠頭の向こう……

大山の下の海面にピントを合わせた。

薄い大山と埠頭が見える……あ、山城さんが海の上で泣いている。

私の横に青葉さんが来て続けた。

「あと司令が作戦中止命令を出されましたよね?」

「ああ」

……やだな。泣いている山城さんの姿に落ち武者のような鬼気迫るオーラが感じられるぞ。

山城さんの映像に青葉さんの声が被る。

「そこで一矢報いようと意気込んでいた山城さん、結局最後には司令にまでトドメ刺されちゃいました」

……私はハツとした。

「違う、そんなつもりじゃ……」

私が顔を上げると青葉さんがウインクをしている。

「お……」

何かを言いかけた私を制するように青葉さんは唇の前に指を立て

た。

「分かってますよ！ ……そ・ん・な・こ・と」

「おいおい」

私は脱力した。

「ちよつと、記事風に言ってみただけ！」

まったく、もう青葉さん……趣味が悪いよ。

すると、ようやく私の横に日向も来た。それまでの私と青葉のやり取りは全く気にしないように彼女は言った。

「あいつらも悔しいだろうな……」

日向の視線の先には山城さんか。その方角を私は再び双眼鏡で覗いた。

山城さんの側に、やっぱり泣いているらしい第六駆逐隊の面々が群がっていた。

……あ、一緒に泣いている。

あの姿を見ると私も悪かったと思えてきた。

……そうか、よほど悔しかったか。

だが、あの深海棲艦はどうなったかな……。

私の想いを受け継ぐように日向が呟いた。

「司令、大丈夫です。過去の事情は私も何となく存じ上げておりますから……」

私は「え？」と日向を振り返る。彼女は真顔だが少し微笑んでいた。

「司令がああ深海棲艦を誰だと思われているのか、過去の経歴も含めて伺ってますので」

「君には詳しく話した事は無いはずだが……あれ？」

日向の後ろで青葉さんがブイサインを出していた。そうか彼女が情報源か。

「ああつー！」

私は肝心なことを忘れていた。

「結局、大淀艦隊は、あれから大丈夫だったのか？」

「……」

そこで何かを受信した日向が言った。

「司令、秘書艦がお呼びです。一緒に参りましょう」
「ああ……」

私たちは直ぐに軍用車に乗り込むと鎮守府の正面玄関へと向かった。

良くも悪くも日向は一途だ。私は彼女の横顔を見てそう思うのだった。

第46話〈Hey、提督ウ〉(改)

「比叡が、いろいろ世話になったネ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第46話 〈Hey、提督ウ〉(改)

私たちの乗った軍用2号車は鎮守府の正面玄関に戻る。
車を降りると私は改めて本館の建物を見上げた。

正面玄関は北側に面しているから午後になるとちようど日が陰る。

「もう午後か」

日向も降りてきた。

青葉さんが言う。

「では青葉たちは車を戻してから後片付けをします」

「ああ、分かった。頼む」

私たちは敬礼をして車庫へと向かう二人を見送った。

制帽を軽く持ち上げながら私は何気なく日向に言う。

「いやはや今日は大変な墓参になったな」

「そうですか」

艦娘には墓参と言ってもピンと来ないか。

「考えても見ろ。昨日は鎮守府埠頭や空軍の滑走路を大破。そして今

日は境港の岸壁や幹線道路、公園などをボコボコにした」

「……」

「私が着任してからの美保鎮守府周辺には、ろくな事がない。境港の
住民感情が悪化しなければ良いけど」

すると彼女は応える。

「今は戦争中ですから」

「……」

私は苦笑した。それを言われると身もフタも無い。ホントに日向も独特な子だよな。

ただ彼女は昔からそうだ。

このドライな感じだからこそ戦場でも沈着冷静で居られるのだ。確か姉が伊勢で日向は末っ子のはずだが意外にしっかりしている。それで着実に戦果を上げられるのだろう。

私はふと、どうでも良いことを思い出した。

「お前は山城さんと姉妹なんだよな？」

「基本設計は同じですが……あまりそれを意識した事はありません。それが何か？」

「いや、良い」

ピンと着てない感じだな。

私たちは鎮守府本館の玄関に入る。ロビーには、ちよつと疲れた顔の神通さんが居た。

(ああ、彼女はさっきまで鎮守府近海の掃海部隊を指揮していたな)

そんなことを思っていると神通さんが軽く敬礼をして声をかけた。

「司令」

「どうした？」

私は彼女の顔を見ながら、この子は静かなタイプだが日向とは、また違った雰囲気があると思った。声は可愛いが意外にしっかりしている。

「スミマセン司令。作戦は終了したのですが、あの子達は何か……なかなか収まりがつかないみたいです」

「第六駆逐隊のことか」

彼女は無言で頷く。

私も正直どうすべきか分からない。だが彼女たちにとっては理不尽ともいえる命令を発して混乱させたのは私だ。この後始末は私が責任を持って付けるべきだろう。

「そうだな。対応については検討する。皆、良くやってくれた。有り難う」

「はい」

神通さんは軽く会釈をした。彼女の前髪が、ちよつと垂れ下がる……この娘も敬礼よりは、お辞儀の方が似合うタイプだ。

「失礼します」

そう言いながら立ち去る華奢（きゃしゃ）にも見える彼女の後姿を見ながら思う。

（神通さんは鳳祥さんみたいに奥ゆかしい感じか）

艦娘つてのは个性的だ。活発な子、大人しい子。各人各様（かくじんかくよう）だ。それをバランスを取って配置していくことで部隊としての調和が取れていく。

鎮守府とは、それで良いのだろう。

黙ってジツと待っていた日向を私は振り返る。

「待たせたね、行こうか」

「はい」

日向と一緒に階段を上がって作戦指令室に入る。

「うは」

思わず声が出た。窓が開け放してあるが室内はムツとして暑い。

中のデスクにメモや書類をまとめている祥高さんがいた。やや疲れ気味の彼女は

私たちを見ると、ふらふらと立ち上がって敬礼をしかけた。

私は制した。

「いいよ、そのまま……大淀艦隊はどうなった？」

改めて腰をかけた祥高さんはメモを見ながら応える。

「14・15頃には戦闘が終結。轟沈は、ありません。大淀艦隊は大破6、中破4、小破2です。速力が低下していますので、まだ帰還していません」

「ご苦労だった」

半日とはいえ鎮守府周辺の、すべての応戦指揮を一手に担ったんだ。大変だったな。

彼女も足元がふらついているようだ。

しかし墓参なら今日が良いと計画を立てたのは秘書艦だ。悪く言

えば身から出た錆（さび）とも言える。

でも私が着任する前に美保で、ここまで大規模な敵襲は無かったはずだ。

今回は深海棲艦側にも意外に情報収集能力があることを知り得たな。

ただ気になるのは秘書艦だ。実は今回の墓参も何か作為的な……意図的に計画されたものを感じるのだ。気のせいかな？

悶々としている私に彼女は聞く。

「どうかされましたか？」

「いや」

別に今、私は妄想してたわけではないので後ろめたくはない。

（いろいろな疑念について今、まだ聞くべきではないか）

私は誤魔化すように聞く。

「お昼ご飯、まだだろ？」

「はい。でも、もう少し報告がございます」

彼女は続けた。

「今回は敵機動部隊2隻の空母のうち1隻を撃沈。残りは逃走しました」

私は少し驚いた。

「良く追い返したな」

意外に頑張ったじゃないか？ 大淀艦隊。

「それが……」

そのとき指令室の無線機が割れんばかりの声を出した。

「Hey! 提督ウー!」

比叡より軽い声が聞こえた。

「なんだ？ これは」

この発音は……本物のハーフか？

まさか夕立2世なのか？ いきなり筋肉痛が酷くなった心地がした。

「提督、聞えますかあ？ ワタシ金剛ね！ よろしくデース!」

金剛……聞いたことあるぞ。

「比叡が、いろいろ世話になったネ」

いや、してない。

「いま周りの皆、ダメージマックスで足遅いネ。そっち着くのは少し待つネ」

元々軽い感じの無線機の音声が更に薄っぺらくなる。

「いや、慌てなくて良い。ゆっくり戻って来い」

つい返事をしてしまった。

「イエースー」

……軽いな。秘書艦が珍しく苦笑している。

しかし、この金剛という艦娘には、妙に反発心が湧くのはなぜだ？

さすが比叡の姉か。

祥高さんが続ける。

「神戸から着任の金剛です。軍令部からの指示ですが比叡のお姉さんに当たるとか」

比叡と同型の戦艦か……さてよ。それは、つまり足が速いということか？

祥高さんが補足する。

「火力、速力、防御力、全てにおいてバランスが取れています」

「なるほど、それは心強い」

だが私はふと隣に居る日向を見て山城さんを連想した。

「山城さんが、また落ち込まなければ良いけどな」

そう、さっきの龍田さんの説明じゃないけど山城さんって火力はあるけど基本的な足が遅いのが弱点だ。

(おまけに性格に難が……それは良いか)

すると急に日向が応えた。

「山城さんなら大丈夫です、司令」

「え？」

そのとき無線機に、また別の通信が入った。

第47話〈姉妹艦〉(改)

「あいつ、食べたんだ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第47話〈姉妹艦〉(改)

指令室の無線機から声が聞こえる。

『山城、大丈夫?』

『お……お姉さま?』

山城さんが直ぐに反応する。

「なに?」

また新しい艦が着たのか?

わけの分かっていない私に日向が淡々と説明する。

「美保鎮守府に新しく戦艦『扶桑』も着任です」

「ええ!・ 立て続けに?」

普通の海軍では有り得ない事態に私は驚いた。

祥高さんも書類を取り出して説明する。

「先ほど軍令部から来た命令です。本日付けで戦艦『金剛』と戦艦『扶桑』の2隻が着任しました」

「なんと……いきなりの増強か」

さすが艦娘の鎮守府、対応は早いな。

もつとも、ここ数日の敵の猛攻を見れば、むしろ遅いくらいか。

「あの青年将校が中央で手を回したのかな?」

私は呟くように言った。

(もし、本当にそうなら感謝すべきだが。お歳暮でも贈ろうかな?)

ただ真面目な秘書艦も日向も、すまし顔だった。

私が妙な思案していると隣の日向がボソツとつぶやく。

「お姉さんか。いいな……」

「え?」

意外な艦娘の、これまた意外な発言に私はちよつと驚いた。彼女の方を振り返ると私の考えを悟ったように日向は応えた。

「はい。私の姉は『伊勢』です。もちろん私が個人的に希望しても叶うものではありませんが」

無表情に呟く日向。確かに艦娘は姉妹艦が多い。

(いつも淡々としている日向でも、お姉さんへの想いはあるんだな)

無線機からは山城さん(妹)の涙声と、それを慰める扶桑(姉)らしき声。さらに、そこに群がって一緒に泣いているらしい第六駆逐隊。

無線機から流れる妙な涙声の合唱に私は苦笑した。

「なんだよ、これ?」

さすがに祥高さんと日向も苦笑している。

制帽を外して、顔を扇ぎながら私は言った。

「……まあイヤか」

これで山城さんが少しでも落ち着いてくれれば、むやみに美保湾に発砲することも無くなるだろう。

山城さんに比叡。どちらも「妹」だ。今回二人の姉さんが相次いで着任したというわけだ。賑やかになるな。

(でも他の鎮守府は大丈夫なのだろうか? ちよつと心配になる)

その時、私はふと秘書艦が気になった。

……口には出さなかったが彼女にも姉妹が居るのだろうか?

島風のような子は特別だ。祥高さんだって単独で建造されたわけではないだろう。

「コンコン」

そのとき誰かがドアをノックした。

「はい」

私が応えるとサンドイッチを大きなお皿に盛った北上が入ってきた。

「お腹すいたでしょう。とりあえず、作ったから……皆で食べて」

「おお、北上か」

気が利くな。

ただサンドイッチを見た私は一瞬「え？」と思った。

今日の昼、食べたものとほぼ同じ……というか一緒じゃないか？

私は彼女に聞いた。

「あれ？もしかしてお昼に大淀さんの撤収部隊が持ってきたサンドイッチも？」

サイドイッチの大皿をデスクに置いた北上は言った。

「そうだよアタシ……まあ、さすがにこれは鳳翔さんも手伝ったけど」
意外と言ったら失礼だけど。北上は料理というかサンドイッチも作るんだな。

私の疑問を察知したのか北上は、こつちを見上げて言った。

「なに？アタシが作ると、どっかおかしい？変？」

「いや」

詰問してくる北上にタジタジになりながら私は心の中で範唱した。

（そうか、北上が作ったのか）

何か、この意外さにも感慨深いものがあつた。

午前中のことを思い出した私は彼女に言った。

「さっきのサンドイッチだけだな」

「ん？」

持ってきた北上本人が早速イスに座ってサンドイッチを摘んでい
る。

「あの深海棲艦が、おいしそうに……涙を流して食べてたぞ」

「ええ？」

不意打ちを食らったように目を丸くしている北上。

でも、そばに立っていた日向も腕を組んで軽く頷いていた。

そして祥高さんも微笑んでいる。

（あれ？）

二人の反応を見た私は逆に意外な印象を受けた。

少なくともこの二人の艦娘は私が深海棲艦に対して取った行動を
容認しているようだ。

特に……ついさっきまで私の判断に対して激しく抵抗を見せた日
向が、これまた一体どういう風の吹き回しだろうか？

そんな私の思いは露知らずアゴに手をやる北上。

「へえ、そうかあ。あいつ食べたんだ」

彼女は何か遠くを回想するような目をして嬉しそうだ。

いつの間にか指令室は和やかな雰囲気になった。

「そういえば確か北上と大井も姉妹艦だよな」

「うん、そうだね」

急にそんな言葉が私の口から出た。もちろん、その深海棲艦が大井だとは

一言も言っていない。

ただ一連の状況を見ながら私は思った。

『あの深海棲艦は、やはり大井か艦娘の誰かなのだろうか？』と。

境港の神社で見たときのあいつの瞳も、どこかしら北上を連想させた。

妙に義理堅いのも、そういう背景があれば納得がいく。

艦娘の姉妹艦には理屈を越えて引き合う何かがあるのだろう。

だからこそ秘書艦や日向、そして北上は何かを感じた。

さらに敵である、あの深海棲艦自身も何かを感じて涙を流した……

そんな可能性もあるだろう。

あれこれ葛藤して悩んだけど……結局は見逃して正解だったか。

もちろん捕虜として確保できれば最高だったが今回は仕方がなかったな。

だが、あの執念深さだ。奴はまた来るだろう。

そしていずれ必ず救出してやる。私は、そう決意するのだった。

そのとき無線機が鳴った。

『大淀艦隊、鎮守府に帰還致しました。ただ今より接岸します』

「おお、無事に戻ったか」

第48話〈帰還報告〉(改)

「ありがとうございます……ごいいます」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第48話〈帰還報告〉(改1. 2)

私は指令室を、いったん祥高さんに任せると直ぐに埠頭へ下りた。岸壁では大淀艦隊が順番に接岸している。轟沈こそ無かったが、もはや小破も大破も区別がつかない。彼女たちは艤装も服もボロボロだった。

特に寛代を運んでいた駆逐艦娘たちの被害が酷かった。ほとんど反撃し難い状態だからな。黒潮に白雪、雪風、大潮か……よく沈まずに耐えてくれた。

一方の夕立を運んでいた荒潮、皐月、長月、霞は途中で担架を外したので、そのまま戦闘に合流出来た。従って、さっきの艦隊よりは被害が少なかった。

だが夕立を含めて大淀艦隊全員がボロボロなのは、ほとんど同じだ。

途中から参戦した夕立も可哀相に「ポ」の字も出ないくらい激しく疲労していた。

もうグツタリだな。

まだ意識のハッキリしない寛代は直ぐに担架のまま救護室へ運ばれた。

足柄さんに支えられた大淀さんが私の前で敬礼をした。

「報告します……」

私は手を上げて制した。

「無線で聞いている。詳細は良いから早く手当をしろ」

「はい」

敬礼して足柄さんと共に下がる大淀さん。

「待て」

私は声をかけて彼女の手を握って言った。

「良くやってくれた。有り難う」

最初は驚いていた大淀さんは、私の言葉で緊張が途切れたのだから。急にボロボロと大粒の涙を流しはじめた。

いつものツンとした印象とは裏腹に彼女自身は日向よりは素直な性格だなと感じた。

大淀さんは片手で自分の頬を拭ってから、改めて私の手を握り返して言った。

「司令も……有り難うございます」

「あ？」

思わず振り返ると……足柄さんも

「貰い泣きしているのか？」

「ち、違う。目にごみが……」

(はいはい)

取り繕う表情が何とも言えなかった。

救助のため岸壁で待機していた他の艦娘たちが集まって大淀さんや負傷した艦娘たちを手助けしながら鎮守府本館へと向かう。

私は落ち着いてから最初に救護室に運ばれた寛代の様子を見舞った。

彼女は、まだ意識が戻らないようだったが夕張さんによると命に別状はないとのことだった。ホッとした。

念のためにベッドの彼女の様子をうかがったが彼女の濡れた長い髪の毛がワカメのようだった。思わずあの弓ヶ浜での逃避行を思い出した。

ある程度、各自の被害状況を確認した後、艦娘たちは順次、入渠施設へ入る。

ただ、これだけの人数になると一度には入れないため怪我の程度の軽い子は一部、待機となった。

そんな中、意外に金剛と比叡が良く動き回って補佐をしてくれた。やはり戦艦はタフなのだろうか？

それから私は、疲れていた祥高さんには休んでもらった。その代わりに私が2階の指令室へ入った。

艦隊司令本部からは早速、状況確認の催促が着ている。私はちよつと考えた。

『金剛ト扶桑ノ加勢ニヨリ敵空母機動部隊ヲ撃退セリ』

……と書いて本部へ返信した。

通信用の文面を作りながら、なぜか深海棲艦（大井・仮）を連想した。

「私が作った文面より、あいつのほうが日本語がうまいな」

自分で自分に冗談を言ってしまった。

「しかし……」

私は考えた。あの連中は沈没して変化（へんげ）する割には日本語がたどたどしくて使えなかったり、ママならないことが多い。

「結局、あれは元艦娘ではないのだろうか？」

それとも現役の頃の記憶は沈没のショックでどっか飛んでしまうのか？

「何しろ情報が少ないからな……良く分からない」

しかし今回、敵は地上部隊まで投入してきた。今日来たのが重戦車かどうかは不明だが、その気になれば敵は地上も制圧する能力があるわけだ。これは厄介だ。

でも夕張さんの軽機関銃とか日向が使った簡易飛行甲板。今回は試作だろうけど、あの新兵器が無かったら恐らくもつと苦戦していた。

「さすが夕張さんだな……助かる」

そう言いながら、ふと気付いた。

「この新兵器のことも中央に報告しないといけないのだろうか？」

そういえば戦車の残骸のこともある。結局、陸軍にくれてやったが……そもそも、調査するにも予算が足りない。そっちの費用とか申請したら廻してくれるのだろうか？

「そうなる稟議をあげなきゃ……くそ面倒くさいな！」

私は頭をかいた。

ここは実家と違って空調なんか入っていないから夏の午後は異常に暑い。早くも、暑さによる混乱で頭が働かなくなってきた。

今日はどういうわけか、あまり美保湾からの海風も吹かない。

「もう、やめた！」

速報は流した。後は、あの二人に任せよう。祥高さんと大淀さんが復帰するまで報告は中断だ！

私は紙とペンをデスクに投げて、そのまま通信機の前の椅子に手足を伸ばして思いつきりふんぞり返った。どうせ誰も見ていない。

「しかし通信や指令室担当も、また育成しないとだめだなあ」

そんなことを思いながら、ふと見るとデスクの上に、さっきのサンドイツが、まだちよつと残っていた。

半分以上は誰かが食べたらしい。

「そういえば、お腹すいたな」

私はデスクの上のサイドドイツをいくつか、つまんだ。

「……ウマイ」

疲れているからだろう、とても美味しく感じた。

お台場公園で日向と一緒に食べた、あの味だな（当たり前か）。

「どうせなら、もつと落ち着いた環境で、のんびり食べたいな」

ふと、そんな状況を妄想してみる。

『フンコツサイシン！』

なぜか金剛が叫ぶ顔が直ぐに浮かんだ……私は苦笑する。

「いや別に日向でなくても良いけど」

（とりあえず、あいつしか思い浮かばん）

『フンコツサイシン！』

やれやれ金剛の顔が消えない……なぜか彼女の脇に比叡までちらつく。さすが金剛姉妹……っていうか、もはや妄想にすら成ってない。

「まあ、いいか。妄想は」

私は女性と付き合ったこともない。軍隊一筋で生きてきた弊害だな。

ふと窓を見ると、大山も青いシルエツトを美保湾に写していた。そんな美保鎮守府の夏の午後は、ゆつくりと過ぎていくのだった。

第49話〈思い出と確信〉(改)

「本当にあいつなら何か思い出すんじゃないかって」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第49話 〈思い出と確信〉(改)

夜になると昼間の暑さがウソのように収まって美保鎮守府にも良い海風が吹く。

昼間は救護に伴って混乱していた食堂も夜になると落ち着きを取り戻していた。

いつもは秘書艦と夕食をとることが多いのだが今夜は彼女が夜勤に就いていた。

その代わりというわけではないが今、私の目の前には大淀さんが座っていた。まだ本調子ではないようだが想像した以上に速く回復したようだ。

とはいえ大淀さんも秘書艦同様に超がつく生真面目さだから正直ちよつと会話が弾まない。

(祥高さんほどの威圧感はないけど)

……この生真面目さって言うのは司令部つきの艦娘の特徴なのだろうか？

私も多少は気を遣って今日の昼間の戦闘の話は避けようとしていた。

でも、もともと私自身の『話題の引き出し』が少ないから……結局そこに話題が戻ってしまう。

私は彼女の顔を見ながら何度も思う。

(大淀さんには、他のネタは無いのか?)

……無いよな。

彼女だつて夕立と同じく外を出歩く機会も少ないだろう。

(そういう趣味があるようには見えない)

でもちようど今、何となく寛代の搬送の話題になった。

そうだ！ コレ幸い……と、私は昼間に寛代が、あの路地で見せた武勇伝を大淀さんに披露した。

「……え、そんなことがあったのですか？」

最初は驚いていた彼女だったが私の話を聞いて少し思案してから言った。

「それはきつと、寛代ちゃんに確信があつたからだと思います」

「確信？ なんの？」

私は首をかしげた。

今ひとつ分かつていない私に彼女は補足説明をしてくれる。

「つまり深海棲艦が本当は轟沈した艦娘だということ。もしその敵が元々艦娘であれば、きつと自分を撃つては来ないだろうと思つたのでしよう」

「でも結果的には撃たれたから……それは違うだろう」

私は否定した。

しかし大淀さんは淡々と反論をする。

「ええ。結果を見ればそう思うのは無理ありません。でも私がもし寛代ちゃんと同じように、その場に居合わせていたら……きつと同じ行動を取つたでしょう」

これは少々意外な答えだった。

「へえ、そんなものかなあ？」

私はやつぱり首をかしげた。

するとそこに天井から降ってきたような声が聞こえた。

「アタシも、そう思うな」

「あ、北上か」

……いつの間に。

そのまま「ンしょー！……」と言いながら彼女も私と同じテーブルにお盆を置いて着席した。

北上は言った。

「アタシも昨日、あいつにキツイこと言ったけどさ……でも結局さ、あいつが生きてたときからアタシ、いつもそんな感じで接してたんだ」
「そうか？」

「うん。そう」

彼女は、ちよつと微笑んだ。

「……だからアタシ的にはさ、もしあれが本当にあいつなら何か思い出すんじゃないかって。何となく期待しちやっただわけ」

「ふーん」

その辺りは分かるような……でもやっぱり良く分からないような。そこで急に真顔になった北上。

「でも司令が言ってたサ、あのサンドイッチの話……うん、あれは正直、嬉しかったナ」

「やっぱり、気になるんだ」

私の言葉で彼女は頷いた。大淀さんも相槌を打っている。

そういえば今日のあいつの反応は……特に境内で捕まえた以後は逐一、妙な感じだった。「アタタカイ」とか言ってたし。

「……どっちにしても敵については不可解なことが多すぎる」

そのとき、背後から何かが迫ってくる気配がした。

……これは

「比叡か？」

「ブー！」

振り返る間もなく衝撃が走った。

第50話〈寛代の変化〉(改1・2)

「一人くらい増えても邪魔にならないでしょ？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第50話 〈寛代の変化〉(改1・2)

「ブー！」

振り返る間もなく私のでん部に衝撃が走った。

「あ痛あつ」

思わず飛び上がる。

「誰だっ！」(カンチヨーするのは！)

一瞬、テーブルの周辺は騒然とした……が。私は振り返って驚いた。

寛代らしき娘がオヤジのような「ヘン顔」でニタつと笑っている。

「お、お前は寛代じゃないか？ もうケガは良いのか」

それには応えず彼女はアカンベーをして走り去って行った。

「何だありゃ？」

北上が笑う。

「あはは、寛代ちゃん元気そうじゃん」

「あれが寛代？ 信じられないな」

私は中腰のまま、でん部を擦る。

「うーむ、尻が痛い……じゃなくて」

あのワカメのようなサラサラ黒髪ストレートヘアは間違いなく寛代だろうが……しかし雰囲気が変わったな。

「あんなに変なことをする娘じゃなかったのに」

(寛代が壊れた)

私はそう思った。

すると大淀さんも半分呆れたように応える。

「あれば紛れもなく寛代ちゃんですが回復したら改になっていたんです」

「ええ？」

半分振り返った私は改めて彼女に聞いた。

「噂に聞くが艦娘の『改』って、あんなに変わるものなのか？」

「いえ、個体差はあります。ただ寛代ちゃんの場合は、むしろ珍しいパターンだと……」

「へえ」

大人しい寛代ちゃんの方が良かったが……ちよつと下品に壊れ過ぎてないか？

「もしかして深海棲艦に毒されたのか？」

思わず呟いた。

大淀さんは、ただ苦笑するばかりだった。

痔ではないが駆逐艦に思いつきりカンチョーされれば、でん部がヒリヒリする。

(チクシヨウ、あいつめ覚えていろよ)

……と、司令にあるまじき怒りがこみ上げた。

しかしテーブルに戻って生真面目な大淀さんとクールな北上の顔を見ていたら、さすがに平常心を取り戻した。

(やれやれ……自分が恥ずかしい)

日向の言っていた「平常心」か。司令にも必要だよな。

(それはそうと……)

私は改めて大淀さんに向き直った。

「あとで祥高さんにも伝えて欲しいんだが、お盆前に改めて墓参をしようと思うんだ」

「墓参……ですか？」

大淀さんは、ちよつと意外な表情を見せた。

私は続ける。

「ああ、今日も祥高さんの提案で行ったは良いけど、結局は墓参という雰囲気じゃなかった」

北上が口を挟む。

「上に下に、大騒ぎだったもんね」

「ああ」

彼女が言うと思議と嫌味がない。それは性格だろうな。私がチラッと彼女を見ると北上は微笑んでいた。

私は続ける。

「別に信心してるほどじゃないが、やはり墓参は、きっちりやりたい。お盆は込むからタイミングを前にずらしてね……もう、お墓の場所は分かったから迷わないだろうし」

納得したような大淀さんも頷いた。

「分かりました、伝えておきます」

そのとき後ろから低い声。

「司令……」

「うわっ」

一瞬、山城さんかと思った。

だが私が、ぎこちなく振り返るとそこに、すまし顔の日向が居た。

「どうした？」

「差し支えなければ私もご同伴願いたく存じます」

「そうか」

今回、彼女は最大級の功労者だ。拒否出来るはずもない。

「分かった。お前も今日は大変だったからな」

私は頷いた。

彼女は少し微笑むと明るい声で言った。

「ありがとうございます」

すると意外な声。

「へえ、それならアタシも行きたいな。あいつが出没したところも拝んでみたいしね」

私は少し慌てた。

「何を言い出すんだ、北上」

「ええ、何でサ。別に良いよね？ だって一人くらい増えても邪魔にならないでしょ？ アタシも主体的に動くから」

そう言いつつ彼女は後ろに結んだ三つ編みの髪の毛を鞭（むち）のように振り回す。

（それはヌンチャクか？）

その三つ編みを振り回すなって。チクチクして痛いんだよ……。

「あ、まあ良いか」

気がつくとは結局、押し切られた。

北上と日向は、私の目の前で嬉しそうに言葉を交わしている。タイプの違う二人の艦娘を見て私は思った。

この二人の艦娘とは付き合いが長い。だが思い起こせば、その多くは鎮守府での時間だ。

だが艦娘の部隊では指揮官と艦娘が共に闘う機会が普通の軍隊よりも少なくなっていく。それはいけないと思いつつ今直ぐに改善するのは難しいだろう。政治家や上層部から見たら、これほど人間が守られる戦闘システムは他にないからだ。

私も長らく、その傾向が強かった。

しかし今回、美保に着任して、いろいろ考え方が変わった。

特に日向や寛代と行動を共にして艦娘への認識が改まったな。

「このままじゃいけない……か」

「え？ 何が」

直ぐ反応したのは北上。

「いろいろ変えていこうってことだ」

「ふうん」

頭の後ろに手を組んでいる彼女。この屈託の無い開けっ広げなところは彼女らしい。

私は言った。

「今回は実家にも寄らないつもりだ」

「へえ」

「別に良いだろう？」

そう思っ、ふと見ると……あれ？

「……」

気のせいかな日向がジト目で見詰めていた。

「何だ？ 日向……」

「いえ」

すると北上が突っ込みを入れる。

「日向はサ、司令の実家に行きたいんだよね」

「はあ？」

そりや意外と言うか……まさか日向に、そんな嗜好があるとは私も想像すらしなかった。

聞いてみる。

「そうなのか？」

「……」

否定も肯定も出来ずに黙っている日向。

もう一度聞く。

「そもそも、何でウチの実家だ？」

「……」

確か実家に来た艦娘は夕立だけだ……と思って向こうを見ると、その夕立本人が嬉しそうに手を振っている。

「司令っばい」

「何だよ？ それ」

その隣では青葉さんがブイサインを出している。

(あいつらめ余計なことを日向に吹き込んだな?)

変な噂を立てられても困るから注意してやろうと立ち上がりかけた瞬間、ズン！ という衝撃が再び襲った。

「ああああー！」

振り返ると、やっぱり寛代だ。

「なんだ？ お前は」

イラついた声で応える私。

「……」

しかし、それに構わず無言で自分を指差す寛代。

「へ？ ……あつ、ひよつとして、お前も同伴したいのか？」

盛んに頷く寛代。

「やれやれ……」

私は肩をすくめた。

「仕方ないな」

本当は、もっと静かに参りたかったけど。

「これで4人か」

(ほぼ、軍用車は満席だな)

「実家に行くとは言っていないからな」

私は念のために釘を刺した。

『ええ?』

どこかから艦娘の残念そうな声……誰だよ? まったく。

正規軍でさえ艦娘は、まだ余り認知されていないのに。まして普通の人間である私の両親のところへ、お盆前に大挙して艦娘を連れていくワケには行かないだろう。

「我慢しろ。命令だ」

『はあい』

……私は苦笑するばかりだった。

第51話〈墓参前騒動〉(改)

「軍事演習の真似事でもする気か？」

「艦これ」的「みほ2ん」

第51話 〈墓参前騒動〉(改)

「暑いねえ」

鎮守府のどこに居ても、この掛け声が合言葉のように響く。

ただ艦娘の性格の違いがある。

「暑いですね」

……と言う子も居れば

「暑つちいなあ、オイ！」

……と言う子も居る。

どっちが誰だとは、いちいち気に留めない。

私が指令室に入っていると索敵と無線を兼任して担当している利根がうちわで扇ぎながら言った。

「山陰の夏は、やっぱり暑いろう」

すると別の端末を見ていた大淀さんが言う。

「そうですね……ここは気温は高いのですが湿気が多いです。それに太平洋側と違って晴天が多いです」

「え？ そうなのか」

時折、水偵と無線で交信をしている利根が目丸くして言った。

「はい。日本海側特有の気候です」

「へえ」

利根は白いリボンに手をやりながら少し感心したようだった。

その場は二人に任せて私は執務室に戻る。そこには秘書官の祥高さんが自分の机に座って書類を整理していた。

「司令、軍令部に提出する報告書の内容ですが」
「ああ」

私も自分の机に腰をかける。
彼女は続けた。

「深海棲艦とは相変わらず数日の間隔で日本海で哨戒部隊との衝突を繰り返しています」

「今のところ双方には、さほど被害は無いな」

私の言葉に彼女は書類を数枚、めくりながら答えた。

「はい……相手も深追いしてこないことがほとんどです」

「そういうところは妙に人間臭いよな」

彼女も苦笑した。

……そう、相手も単なる機械ではないことがこれで分かる。闇雲に攻撃してくるわけでもなさそうなのだ。

何かの目的がある感触だが……真実は分からない。

私は彼女を見て言った。

「今のところ美保へ攻撃を強行してくることは無いな」

「はい。しかし時折、別の山陰海岸の砂浜から上陸した形跡が見られることがあります」

その言葉に私は腕を組んだ。

「上陸か……しかしそつちは陸軍の管轄になるからな。海軍の我々としては何ともいえない」

「……」

お互いに無言になる。

私は指示を出す。

「内容はそれで良いよ。後は頼む」

「はい」

私は再び立ち上がると廊下へ出た。

窓から輝く日本海が見える。

私は鎮守府の敷地内外で訓練をする艦娘たちを見ながら考えた。

（我々としては日々、国土防衛に努めつつ粛々と鍛錬に勤めるばかりだ）

そして美保鎮守府は8月を迎えた。気がつくとお盆前だ。

私は早速、軍令部に休暇届を出して無事に受理された……たった一日だけ。私の書類は一発OK。

しかしその後が問題だった。

まず廊下で事あるごとに捕まってしまう艦娘がいる。

言うまでも無いだろう。

1) 日向、2) 北上、3) 寛代。

捕まえ方も三者三様だが、個々には触れない。

「あーあ、艦娘が正式に休暇を取るために、まさか「休止届け」書類が必要だとはなあ」

私は執務室の椅子にふんぞり返って頭をかいた。窓の外が好天なのが余計イラつく。

実は昨日、いきなり電話でも統括官に言われたのだ。

「一度に30名近い兵士が休暇とは何事か？ 軍事演習の真似事でもする気か？」

「いえ……その」

しどろもどろで応えながら、実はその時点の私は何も知らなかった。

電話で散々注意された後に慌てて調べて分かった。

鎮守府の艦娘の休暇届けの決済印には司令（提督）の判子が必要なのだが……実は、この前の作戦に参加した艦娘たちを中心として軒並み私と同じ日に一斉に届けを出していたのだ。

もう驚いたの何のって……

「お祭りか？ お前らはー！」

思わず叫んだ。

そのお陰で結局、私の休暇も、お盆に突入せざるを得なくなったのだ。

（やれやれ……）

秘書官と相談して10名前後という計画を立ててから改めて軍令部と交渉した。

散々粘った拳句に軍令部から私と、あと12名という制限がついて

決着した。

交渉後に祥高さんが言った。

「何とかまとまりましたね」

「そりゃ艦娘も軍隊の兵士、大量に抜けるのは問題だからな」

椅子に深く腰をかけて私は言った。

「でも、よく許可が下りたな」

「私もいろいろ……伝手（つて）を使わせて貰いました」

「え？」

絶句する私。

（いや伝手を使ってまで、やることか？）

急に脱力した。

思わず私は祥高さんの顔を見てしまった。だが意外にニコニコしている彼女の顔を見ると何もいえなかった。

（実は黒幕は貴女ではないのか？）

「やはり休暇でなく訓練名目にすれば良かったかな？」

……とはいえ、後の祭り。ここまで増えるとは想定外だが仕方ない。

最初の3人……1）日向、2）北上、3）寛代は優先順・提督権限で、無条件に許可を出すことにした。

軍部の許可は下りた。後の問題は、他の参加する艦娘を、どうやって決めるのか？ だ。

「美保湾で艦隊紅白戦（実弾演習）をするのじゃー！」

「何だよそれは！」

某艦娘から出た物騒な案は却下した。

最後は、あみだくじ……平和な抽選方法になった。

（ブツブツ）

「うるさいー！」

さて私が苦勞して編み出した参加メンバーはぎつと次の通り。

〈〈 墓参：メンバー表 〉〉

1）日向、2）北上、3）寛代。ここは無条件。

以下

4) 祥高、 5) 赤城、 6) 比叡、 7) 金剛、 8) 山城、 9) 龍田、
10) 青葉、 11) 利根、 12) 五月雨。

控えめな艦は、最初っから墓参そのものを辞退しているけど。五月雨はくじでたまたま。すごく恐縮していた。

今回は、申し訳ないが司令の権限で島風は撥ねた。連装砲が付いて来ると、もうそれだけで定員オーバーする。それ以前に、あの格好は墓前ではNGだろう……許せ、島風。

それでも他に色仕掛けとか賄賂とか、ありとあらゆる裏工作があった……。

「ていうか何だよお前ら。単なる墓参だぞ！」

思わず、叫んだこともある。

当然、変な連中は片っ端から撥ねた。

(どこで覚えるだ？ そんな裏工作)

「みんな、お祭りが好きなんですよ」

意外なことを言う祥高さん。

(まあ秘書官である彼女は特別枠だな。前回の戦闘でも苦労かけたから)

しかし出た結果を改めてみると微妙に押しが強かったり妖艶だったり、やかましかったり鬼気迫ったり……。

「大丈夫かこれ」

「大丈夫ですよ。いざとなったら私が締めますから」

また意外な秘書官の発言……だが、それは心強い。

境港には水木しげるロードって言う妖怪の立ち並んだ通りがある。実際それにも負けてない……。

(もうちょっと大人しい艦娘だけ選別したほうが良かったかな?)
後悔。

(島風は仕方ないが、あまり意図的に外すと直感は働く艦娘たちだから……私も下手なことは出来ない)

冷や汗が出る。

(これが、ギリギリの線だな)

ただ留守を守る鎮守府でも大淀さんを中心に何かあったら直ぐ出

撃出来るよう体勢は整えて置く。

念のためにトラックの荷台にも例の軽機関銃を今回は2台各車に装備した。あとは予備の弾倉も……準備は抜きなく。

墓参の準備なのか戦闘の備えなのか、よく分からなくなってきた。

実は今回の墓参でも「あいつ」の配慮に期待している。そう、鎮守府港湾内で強襲され私が敢えて「見逃し」した恩着せ……あの深海棲艦にも墓参時間だけは「見逃し」てもらおうという魂胆だ。

念のために北上に聞いてみた。

「うまくいくかな？」

彼女は微笑んだ。

「……イケると思う。うん大丈夫」

すると秘書官も頷いていた。

私は改めて頷いた。

「そうだな。今回も、うまくいくだろう」

そこは確信があった。それは不思議な感覚ではあったが。

第52話 〈電気羊の夢〉(改2・2)

「艦娘を機械的なものとしか見て居ないようですからね」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第52話 〈電気羊の夢〉(改2・2)

世間は、お盆に突入する。

私が指令室前の廊下で海を見ていると青い髪の艦娘が聞こえよがしに呟いた。

「巷(ちまた)は、お盆休みですねえ……良いな」

「わざとらしいな青葉さん」

「えへへ」

……最近では艦娘と自然に、こんな普通の会話が出来るようになった。

中でも青葉さんは特別だ。変に馴れ合っているつもりはないが彼女とは不思議とウマが合う。きつとサイクル(周波数)が近いのだろう。

そんな彼女は私の側に来て美保湾を見詰めて言った。

「暑さ寒さも彼岸まで……ですか」

「そうあつて欲しいな」

こんな対話が私と自然に出来るのが彼女だった。日向と北上を足して2で割った感じだろうか？

こんな状況からも私は艦娘だって普通の人間と何ら変わらないよなど思うのだ。

「やはり山陰でも十分に暑いとう」

そう言いながら利根が指令室から出てくる。心なしか彼女のリボンまでダレているようだ。

彼女は私を見つけると言った。

「司令殿、指令室にはエアコンは入らぬか？」

「申請はしているが」

「うん、それは必須ですわねえ」

青葉さんも同意する。

そんな会話が艦娘たちと進む。そういえば利根も私とウマが合う子だな。

そのとき私は何気なく「あれ？」と思った。青葉さんと利根そして日向……性格は、それぞれ違うが何か共通点があるような気がしたのだ。

私が難しい顔をしているのを見て利根が言う。

「どうかしたのか？」

「いや別に」

「……そうか」

何かを言いたそうな彼女だったが私の口調から何かを察したように再び指令室へと戻って行った。利根も索敵担当だけあって意外と気が利く子だ。

……そうか、さつきの三人は皆、外見と内面の落差がある子たちだな。私は腕を組んだ。

すると青葉さんが言う。

「敵への緊急出撃は、ほぼ毎日あるから利根さんも大変ですわねえ」

「そうだな。だが美保湾から日本海にかけて大規模戦闘は少なくなつた」

私が言うと彼女は頷いた。

「だいたい山陰って大きな輸送航路もないですから」

私は苦笑した。

「ああ……以前は朝鮮と境港を結ぶ航路があったが深海の連中が来てからは、それどころではない」

「ここは九州（佐世保）と北陸（舞鶴）の間ですからねえ」

その発言に感心する私。

「青葉さんは地理も良く把握しているな」

「えへへ」

私は大山を見詰めながら言った。

「山陰の敵の来襲は、この程度が普通だよな……私の着任直後のゴタゴタは、あの深海棲艦（大井・仮）の執念の賜物だろうと思う」
「そうですね」

青葉さんは特に否定しなかった。

「あいつ」も本来の任務があるのか分からないが、こここのところ来襲しない。

私は確認がてら聞いてみる。

「だいたい舞鶴とか呉などは連日、敵襲があるんだよな」

「はい。青葉の聞く限りでは、そこに所属する艦娘たちが連日戦闘に駆り出されています」

彼女は淡々と答える。

「扶桑や金剛は、ここは天国だと言うが……それで良いのかな？」
「……」

青葉さんは黙った。さすがに、これは彼女に聞く質問ではないか。すると青葉さんは自分から話題を変えてきた。

「あの鎮守府の小型軍用車の始末書が大変だったと伺っています」

「ああ。さすが情報通だな」

私は苦笑した。

彼女は言う。

「もともと、あの型式は美保には2台しかないんですよね」

「知っている。その一台をこの前、水路でぶっ壊したんだ」

「そこまで言うとは私は青葉さんがニタニタしているのに気づいた。

「あのときの通信は録音しておけば良かった……」

「あ、こいつめ！」

私は怒る真似をした。

「きゃー、怖い」

おどけた彼女の反応に私は思わずハツとした。

「あれ？ どうかしましたか？」

上目遣いに私を見る彼女。

一瞬静止していた私は言った。

「いや、ホントに艦娘と言えども普段は普通の少女なんだな」

「ええ？ 何だと思っていたんですか？」

少し口を尖らせる彼女だったが、ちよつと間を置いてから私に言った。

「まあ、どの司令も提督も青葉たち艦娘を機械的なものとしか見て居ないようですからね、仕方ないです」

少し寂しそうな表情を見せる彼女。

「……」

何も答えられない私に彼女は続ける。

「いえ、司令を責めているのでは無いですよ」

「あ、ああ」

お互いに苦笑した。

それから青葉さんは、ちよつと整理するように言った。

「日向だって利根だって、それぞれ真面目とか自信家という一面も確かにありますけど」

「ここで一呼吸置く彼女。」

「でも、それが全てじゃないんです。司令は気分を害されるかも知れませんが日向と司令のやり取りを彼女が仮に意図的に無線で流したとしても、それは司令を困らせようとか言う考えは無いんです」

「意図的……」

顔をしかめて何かを言いかけた私を静止した彼女は一気に畳みかける。

「そもそも決まり事とか通信の機密保持には人一倍うるさいのが日向なんですよ。分かります？ この意味」

「あ？」

何かを悟った私に青葉さんは『してやったり』という顔をする。

「まさか……そんな」

少し狼狽する私に青葉さんはスツと近寄ると、抑えた声で言う。

「青葉も艦娘に、こんな変化があり得るのかな？ ……って不思議だったんですけど。でも美保で起きつつある事実は受け入れようと思えます」

「はっ。」

何のことだ？

「つまり、あの日向が司令には心を開いている証拠だと思っんです」

「……」

彼女は大きな瞳で続ける。

「日向だけじゃありません。他にも何人も……あ、でも誤解しないで下さいね。それって青葉も良く分からない感情ですけど艦娘と人間の感情の交流は対等ではないんです」

「えっと……つまりそれは、どういうことかな？」

「はい、私たち艦娘から司令に向ける感情と司令から私たちに來る感情は種類が違う……としか表現出来ません。済みません」

難しいな。

「……何となく分かる気はするが」

青葉さんは頷く。

「えへへ……その感情って青葉も分かりませんが……でも司令が來て美保が変わりつつあるのは事実です。それに、あの秘書艦も流れを作っているんですよ？」

「え？ まさか？」

彼女は舌を出す。

「はい。でもこれは青葉が個人的にそう思うだけなので司令と青葉の間だけのやり取りにするってコトで約束して下さい」

……やれやれ、と思った私は「あれ？」と思った。

「その約束したいコトって青葉さんの感情も日向のそれと似ているのかな？」

「……はい、恐らく」

珍しく、ちよつと恥ずかしそうな表情をしている彼女。

「これは……きつと私たち艦娘が持つ夢なんです。それが今、もしかしたら叶うチャンスを迎えているのかも知れません」

妙に清々しい笑顔を浮かべている青葉さん。

「……」

私は、その時ふと思った。

この美保鎮守府というのは何か壮大な実験を目論んでいるのではないか？

「青葉……」

「はい？」

私が今考えたことを彼女に聞こうと思ったが止めた。きっと青葉さんの食いつきは良いだろうけど、まだ食いつきの段階だから。

「いや、何でもない」

「……」

何か突っ込まれるかと思っただけど彼女は青葉さんは黙っていた。

そもそも私の墓参だって休暇でも何でもなかった。秘書艦である祥高さんの思い付きだったわけだ。

その祥高さんといえば、あの秘書艦が何かの鍵を握っているのではないだろうか？

私が悶々としていると青葉さんが聞いてくる。

「司令、ちよつと疲れてませんか？」

「ああ、お盆の件や、この前、中国地方の統括官に絞られたばかりだからな」

私が言うのと彼女も苦笑した。

私は統括官の言葉を思い出していた。彼が渋い顔で言う。

「地元のパトロールに提督がわざわざ出向くのは良いとしてだ。解せんのは艦隊が大挙して大破した上に弾薬や砲弾の大量使用だ」

「……ああ、そのやり取り！ 青葉も聞いてて手に汗握りましたよ」

彼女が喜ぶ。そういう話題には食いつきが良いな。

えつと、確かその後は……

一緒に思い出す青葉さん。

「果てに民間施設を軒並み破壊して、とどめは軍用車を一台スクラップかね？ これは一体、どういうことなのか？ ……あはは」

よく覚えてるな。

……そう先週は呉の地方監察官がやってきて、さんざん油を絞られたばかりだった。

「二度と御免だね」

「はあ」

青葉さんも自分たちにも非があると思っっているのだろう。少し頭をかきながら恐縮している。

ただそのとき私は監察官から艦娘の量産化が実用化する話を聞いた。

噂には聞いていたが、ついにその日が来るのか……と思った。

「良かったな、これで君も轟沈を気にせずガンガン投入できる」

私の過去の経歴を知っている監察官は怖いことを言う。

すると青葉さんが突っ込む。

「司令の舞鶴の件ですか？」

「ああ。お前は良く知っているよな」

「はい」

だが艦娘を酷使しない提督も居る。

「え？ そうなんですか」

「何だ、お前の情報網でもそういう指揮官の話は耳に入らないのか？」

例えば私の同期である神戸の提督は、良い奴だぞ」

「ああ、そう言えば神戸から来た金剛さんが、かなり褒めてました」

「だろう？」

もともと規格品みたいな艦娘たち。

「量産品はコピーかクローンか？ なんて呼ぶのだろうか」

「……」

私はふと「レプリカント」を連想した。

見ると青葉さんがちよつと引きつっていた。

「……あ、ごめん」

艦娘たちが単なる機械でないのは人間に極めて近い感情を持つこと。誰の発明か過去の遺構なのか、あるいは怨念か因縁か？

過去の戦争体験が噴出していると言う説もあるが私には、良く分かんらん。

その艦娘たちは、ひよつとすると自分の忌まわしい過去を打ち消す為に何かの思い出が欲しいのかも知れない。

北上も夜の海で叫んでたよな。過去は断ち切れと。

でもそれが本当に私の「墓参」に参加したがる理由なのかな？

「……だめだ！」

「ひゃっ！」

驚く青葉さん。

「複雑なこと考えると老けそうだ。やめた、やめた！」

「はい、それが良いですよ」

私の言葉に彼女も笑っていた。

第53話〈お盆休暇〉(改2・2)

「軍隊は、そんなところだ。頑張れ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第53話〈お盆休暇〉(改2・2)

そしていよいよ墓参当日の朝を迎えた。執務室で私は何気なく日報を開いている。

暦の上ではお盆だが基地内はいつもと同じ。

淡々と起床、食事、訓練、警戒、演習、講義、整備……。

でも今日は私は墓参のために、わざわざ休暇を取った。

未だに良く分からないが艦娘12人のおまけつきだ。

……あれ？ 12+1って13数か。

「縁起悪いな」

……まあ良い。ここは日本だ。

「コンコン」

「はい」

ドアを開けて五月雨が顔を出した。

「あの司令……出発の準備が出来ました」

「分かった」

私は日報を閉じるとフックから帽子を取って部屋を出た。

並んで廊下を歩く五月雨に私は聞いた。

「夕立か誰かに聞いたが、お前たち艦娘って、ほとんど外出しないのかわ？」

少し考えて彼女は言った。

「そうですね。駆逐艦だと仲の良い艦娘同士でただ雑談をして終わることも多いです。そこまで考えが回らないというか、記憶容量の問題かも知れません」

「あ……」

まさか艦娘本人から自分たちを『機械』と認めるような発言が出るとは思わなかった。ただ五月雨の場合は本人の性格もありそうだな。車庫で軍用トラックに乗り込む。荷台でも良かったが運転席に案内された。そこでハンドルを握っていた日向が聞いてくる。

「お寺の駐車場に入りますか？ これで」

「大きくて入らないな」

私は、あっさり応える。

「しかし日向ってトラックまで運転できるんだ」

「はい」

彼女は少し恥ずかしそうに答える。

「でも航空機や艦船と違って道路を走るだけだから簡単です」

(いや、そういう問題でもないと思うが)

私は日向に言った。

「旧市街は狭いからな。ギリギリトラックは入れるが駐車場は無いからアレを使うことになるよ」

私は夕張さんに依頼していた装置を思い出した。

「はい。準備万全です」

彼女は淡々と答える。それから各所に無線で確認を取る。

それが終わると日向は言った。

「では出します」

「頼む」

トラックはスムーズに車庫を出る。

静かな鳳翔さんとハンカチを振る連装砲たち。そして口惜しそうな島風の見送りを受けて軍用トラックは敷地ゲートを出る。

『行って来ます！』

「行ってきやがれっ！」

島風が怒ってる。

「許せ」

私は彼女に敬礼をした。

寛代は真ん中の席でナビゲートしてくれるが時々、私の横っ腹を突

くのだった。

(くすぐつたいな！ ヤメロ！)

運転台には三人しか居ない。

「寛代も(改)になると積極的になるのか？」

私は本人に言つてやる。

その問い掛けに寛代は無言でブイサインを出す。

「やれやれ」

私たちのやり取りを見た日向は微笑んでいる。何だか運転台は和やかな雰囲気だ。

しかし寛代がこの状態なら、あの夕立が、もし改になったら……と思うと冷や汗が出てきた。

さて荷台と運転台は分かれている。ふと気になって振り返ると案の定、後ろでは大騒ぎしていた。

……あ、いや。騒いでるのは金剛と比叡と利根くらい。他は大人しく微妙な艦娘ばかりだった。祥高さんも敢えて今回は注意しないらしい。

私としては墓参前に騒ぐ神経は理解できないが艦娘だから仕方ないか。

軍用トラックは境港の役場を過ぎ共同墓地に近づく。寛代は今のところ何も言わないから敵襲もなさそうだ。今日は道端にも黒い謎の女性も居ない。

墓地に近づくと、さすがに人や車で渋滞してきた。

運転している日向が呟く。

「県外ナンバーだらけですね」

すると寛代。

「こんな田舎で！」

私は苦笑する。

「お盆は帰省してくる人も多いから仕方が無いよ」

日向が言う。

「これ以上入ると、この車が渋滞の原因になりかねません」

「そうだな……よし、ここで全員降車だ」

「分かりました」

彼女は何かを呟くとエンジンを止めた。

後ろの荷台からゾロゾロと居り始める艦娘たち。それを確認しながら日向は懐から妖精を取り出した。

「ハル、頼むぞ」

「オーライ」

彼女は妖精にコードの付いた小さな端末を渡して運転台の下から出ている差込プラグに接続。妖精がその端末を操作するとトラックのエンジンが始動する。

日向は私に言った。

「これが新しいリモコンです」

私も頷く。

「夕張さん、面白がって作っていたな」

「役場の周辺は大きい道路なので大丈夫でしょう」

彼女とやり取りした後、私たちはトラックを降りた。

荷台の周辺には美保の艦娘たちがズラッと勢ぞろいしている。

その格好は賑やかを通り越して仮装行列だ。

全員艤装がないとはいえ金剛や比叡は被り物が眩しい。

(外して来いよ)

赤城さんと寛代、日向も一部、赤色の入った衣装(軍服)だから、とても墓参の格好には見えない。さらに献花を持っているから目立つ。

思わず水木しげるロードの妖怪行列を連想した私だった。

(艦娘たちを妖怪呼ばわりした日には半殺しに遭うだろうが)

実際、周りの墓参の人たちも好奇の目だ。それでも他人の視線は、お構い無しなのが艦娘たちの、たくましいところ。やはり常に戦場と接しているからだろう。逆に「引率」する私の方が恥ずかしい。

「Oh! 墓参、楽しみデスねえ」

「お姉さま、それはちよつと違います」

(うん、比叡が正しい)

頼むから金剛、非常識な発言は、墓前では止めてくれよな。ただ比叡がいると、ちよつど良い押さえになる。さすが姉妹。

周りを見渡しながら北上が呟く。

「あいつ、今日は来ないよな」

「分かんないな」

正直どちらとも言えない。

その後ろで利根が青葉さんに言う。

「吾輩は、来るほうに賭けるぞ」

「来たら、スクープですね」

山城も呟く。

「お姉さまも……来れたら良かったのに」

本当に艦娘つて個性派揃いだよな。ちょっと頭が痛くなってきた。

他の赤城さんや龍田さん、五月雨は大人しい。ホッとする。

祥高さんが声高に叫ぶ。

「はい皆さん！ 墓地へ向かいますよ。車が多いので気をつけて……あと住民にも」

最後の一言は謎だが祥高さんが同伴して正解だった。物静かだが彼女の威圧感で艦娘たちにも一発で効いた。

しかし、やっぱり全体的な印象は女子高の遠足だな。

妖精が運転するトラックは路地から表通りへ向かって走り去る。

そして艦娘たちは、ぞろぞろと寺の横から共同墓地へと歩きだす。

今日参加している艦娘たちは、ほとんどが自前の無線機や地図システムを持っていて事前インプットされた私の母方の墓地を指して迷わず進んでいく。

お盆には不釣合いの艦娘たちの行列。かろうじて私が提督の服装であり若干名、セーラー服や軍服の艦娘が居るから何とか海軍らしいと分かる程度だ。

私は寛代と並んで艦娘たちの行列の最後尾から付いて行く。この異様な艦娘集団の最後尾なら、もし地元の退役軍人と出会ったとしても前回のよう何度か敬礼を受けなくて済みそうだ。

ただ家族連れが多い墓地の人たちは私たちを見て軒並み引いている。

でもそれもまた楽しかったりする。青葉さんは盛んにシャッター

を切っている。悪く言えばバカ殿の行列だな。

ふと寛代が私を見上げたので思わず言った。

「どうせ軍人なんて皆、バカ者だ」

「あ、それ賛成です！」

「そうじゃのう、我輩も否定はせぬぞ」

青葉さんと利根か。お前たちに同意されても嬉しくないな。

だいたい、お前たちこそ物好きの筆頭だな。

「え？ 何か言いました？」

ファインダーを覗きながら青葉さんが反応している。

「いや……」

そうこうしているうちに早くも墓前に着いてしまった。

「到着……ですね」

珍しく赤城さんが言う。

「日本の墓地、初めてデス」

「ちよつと、神聖な気持ちになりますね」

金剛と比叡はお互いに額の汗を拭き合っている。

私も思わず帽子を取る。ただでさえ狭い墓地に、この艦娘たちの密

度……ああ、暑苦しい！

さて日向が祥高さんと頷き合って当然の如くといった風に指示を

出し始める。

まずは墓参りの手順……掃除、献花、それから線香と、てきぱきと

指導をする。

艦娘たちは最初はぎこちない感じで、順番に線香を手向けている。

それでも結構、彼女たちは神妙に従っている。やはり、こういう伝

統行事には礼を持って接する気持ちはあるらしい。誰一人として嫌

がったり嫌悪感を出さない。

ちなみに祥高さんは当然だが、山城さんや龍田さんも墓参の手順は

知っているらしい。なるほど彼女たちに関しては違和感が無い。そ

ういえば青葉さんは知的に、そして利根も感覚的に墓参の礼儀を知っ

ているようだ。

私は妙に感心した。

(やっぱり、お前たちは日本の艦娘なのだな)

周りの墓参の人たちにはチラチラと私たちを見ている。何となく場を乱している感じもあって、ちよつと申し訳なかった。海軍のイメージが下がらなければ良いけど。

さすがに艦娘が12人も居ると時間が掛かる。ようやく私の順番が来る頃には、かなり汗をかいてしまった。

それでも私は線香を手向けて墓前でしゃがむと静かに手を合わせた。

ここは母方の先祖代々の墓だ。私のお婆ちゃんも入ってる。

「いつまで、かかるのじゃ?」

「シツ」

「悪いな利根……今終わるよ」

私が応えると「ひっ」という利根の短い叫びが聞こえた。まさか私が反応するとは思っていなかったらしい。お前も意外と真面目な性格だな。

さほど時間は掛けないつもりだったが墓前で手を合わせていると、いろんなことが走馬灯のように頭を駆け巡る。黙禱を捧げると、まるで何かに包まれるような妙な感覚になった。

その気配を感じたのだろうか? 艦娘たちも……いや、周りの人たちも急に静かになったようだ。

そうか……軍隊の指揮官の位置というのは、目に見えない世界までも統率する権限があるのだな。そして数分間、墓前では静かな時が流れた。

潮が満ちるような軽い充足感と共に私は、ゆっくり立ち上がった。まだ目は閉じていた。先祖と、この墓地と、そして境港全体から何かが伝わってくるような感覚が続く。

そして私は最後に墓前で一礼をした。

私は、ゆっくりと目を開けた。日差しが眩しい。

「終わったな」

何か、肩の荷が降りた感じがあった。

一通り終わって、さつさと振り向いた瞬間だった。

「お前も来てたのか？」

聞き覚えのある声……あれ？

「お母さん？」

そこには母親が立っていた。

……てことは？

「……」

その隣には、正真正銘、私の父親が居たのだ。

（あちゃー）

私は艦娘を12人も従えて面倒な状態なのだ。ちよつと焦る。

だが……と思いついた。今日は祥高さんという強い防壁があるのだ。

彼女が居るからだろう。

艦娘たちも余計な事を言わない感じだった。助かる。

第54話〈用意周到〉（改2・2）

「不思議なものだな、艦娘って」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第54話〈用意周到〉（改2・2）

お墓の前で母親が父親に口を開いた。

「ほら、前に話したが？ この娘たちが艦娘だがン……海軍の軍人さんたち」

彼女は方言交じりで艦娘を父親に紹介している。

「……」

父親は無言だ。ただそれは別に不機嫌なのではない。彼は基本的に寡黙な人だ。

だから父親が実はエースパイロットだったとか、いろいろな情報は本人からではなく母親や軍関係者から聞くことが多かった。

最近では彼に興味を持った青葉さんが勝手に調べて来るので、そこから知ることの方が多い。

母親は父に構わずキョロキョロと辺りを見回した。

「あらあ、ぽいチャンは今日は居らんだか？」

私は応える。

「ああ、あの娘は今日は留守番」

すると母親は微笑んだ。

「じゃ、生きてんだな？ 良かった……ああ、貴女も居（お）るだな
そう言いながら日向の手を握る。日向も少し微笑んで軽く会釈を返している。

その様子を見ながら青葉さんと利根が囁いていた。

「あれが元空軍エースの父上ですよ」

「物静かじゃが、やはり眼光は鋭いな……うん、分かるぞ」

「す、すごいですね」

五月雨も感心している。

私は、ちよつと慌てて母親に言った。

「えつと……もう、そろそろ行くからサ」

母親は応えた。

「ああ、そうだなあ。ここじゃ他の人にも迷惑だな」

つくづく夕立がこの場に居なくて良かったと思った。絶対に、この場が、もつと混乱していたに違いないから。

「では戻りましょう」

祥高さんの号令でゾロゾロと墓前を去る艦娘御一行。

(足が遅い！)

場が持たないな、と思いつつ私は最後尾でイライラしていた。

すると母親が近寄ってきた。

「なあ、今日は皆、休みだがあ？ ……後で家に寄れや」

「ええー！ いや、それは……」

意外な提案に驚く私。

しかし元々彼女たちを連れて行く予定はない。ここは何としても阻止しなければ。

ところが母親はさらに追い討ちを掛けてくる。

「その、お嬢さんたちも！ 今日は休みだがあ？」

「そうなんですよ、お母様！」

青葉さんが即答する。さすが記者……じゃなくて。

(やめろ青葉！) 心が叫ぶ。

「青葉も……いえ、私たちも今日は軍隊ではとっても貴重な、お休みなんです！」

祥高さんが止める間もなく青葉さんは母親の手を取って話し始めた。何を……

「そうじゃのう、地域住民との交流も我々の重要な任務と心得るのじゃ」

利根もニコニコして割って入る。

(まづい、まづい)

私が焦っていると、さらに加勢がきた。

「ええ！ それは本当ですか！」

「Oh！ ワンダフルね！」

こういうことには遠慮が無い金剛姉妹が加わる。もはや止められない。

艦娘たちが緩やかに母親を囲んだ。帰りかけていた隊列が一気に崩れる。

（そうか、敵は本能寺にあったか）

母親は自分より背の高い艦娘たちに取り囲まれてタジタジ……でもなかった。

ケラケラと大笑いしながら楽しそうだった。

（女性同士だから……かなあ）

一瞬にして蚊帳の外に追いやられた私と父親。

ふと目が合った。場が持たない私は父親に近寄って会釈をした。

腕を組んでいた彼は私を見ながら、おもむろに言った。

「お前も大変そうだな……」

「うん」

艦娘たちも父親と私に注目しているが彼は全く動じなかった。

「軍隊はな、そんなところだ。まあ頑張れ」

「ありがとう」

私は頷いた。

（そういえば何年ぶりだろうか？ 父子の会話って）

艦娘たちと打ち解けている母親の姿を見ながら私はふと思った。

考えてみれば美保鎮守府への着任が無ければ、地元に戻っていなかったかも知れない。当然、父親と言葉を交わすことも無かったかも……。

「不思議なものだな、艦娘って」

改めてそう感じた私は思わず呟いていた。

やがて艦娘たちとの会話にひと区切りを付けた母親は墓参道具を片付けながら私に声をかけた。

「じゃ、お母さんたちは先に帰つとるけんな、後から来いよ」

「うん」

私たちの方を向いて会釈をして立ち去る母親。金剛たちを筆頭に艦娘たちもニコニコして手を振っていた。

そして意外だったのは、父親もまた私たちに軽く敬礼をしたことだ。

「え？」

私は条件反射的に慌てて返礼をした。すると艦娘たちも軒並み敬礼を返していた。

それは私が初めて見た父親の『軍人らしい姿』だったかも知れない。同時にそれは彼が艦娘を兵士として認めているようにも感じられた。

私は、なぜだかとても嬉しくなった。そうか、部下を持つ指揮官とは、こういうものなのか。

「司令のお父様って、素敵な方ね」

これまた意外な事を言う龍田さん。

評価基準の厳しそうな彼女から、そういう台詞が出るということは父親もまた、艦娘に一目置かれる軍人の香りがするに違いない。

そこは軍人としては父親に、まだまだ遠く及ばない私なのだと思直に思えた。

そして、ここまでの流れが分からないまま戻ってきた美保の軍用トランクだった。

運転台から日向と言葉を交わしていた妖精ハルが言う。

「何だ？ 直ぐに帰らないのか」

「ああ、予定が変わった。運転を代わろう」

不思議そうな顔をしている妖精を懐にしまいながら、日向はテキパキと発車の準備を進める。

荷台側では祥高さんが軽く点呼をした後、次々と乗り込む艦娘たち。やっぱり周囲の墓参の人たちの注目を浴びているが、それは全く気にしていない彼女たち。強いな。

やがて祥高さんと無線でやり取りをした日向は私に報告をした。

「司令、点呼は問題なし。出発準備、完了です」

「よし、では実家へ向けて発車だ」

「了解」

敬礼と同時に私もトラックに乗り込んだ。そして再び走り出す。

「結局……実家へ向かうことになってしまったか」

私は呟いた。

(あまり広くない実家が艦娘で満杯になるぞ)

これから実家で起こり得る事態を勝手に想像して私は独りドキドキしていた。

日向はハンドルを握りながら教えもしないのにスムーズに実家の方角へと向かう。

(あれ?)

私が疑問に思っていると彼女は、それを察したように説明する。

「秘書官から『念の為に』とのことで司令の、ご実家を中心とした境港市の詳細な市街地図情報も頂いてました」

「あ、そうか」

私は、そう応えるしかなかった。

「敵が攻めてきたときの効率的な作戦立案のためだよ」

急に寛代が呟く。

「分かっているよ」

いや、本当は分かっていたいなかった。

(用意周到な秘書艦だ)

いや……秘書艦としては、そのくらい手を廻しても当然か。

そんなことを考えている間にトラックは実家へと到着した。家の前の道路は狭い。トラックだとギリギリだ。

(うわ、大丈夫かな? また近所迷惑じゃないかな)

しかし、さすが艦娘たちも軍人だ。狭い実家前の道路に乗り付けた途端、私の心配をよそに彼女たちは一分も掛からないうちに一斉に下車して点呼。そして混乱することなく実家の呼び鈴を押した。

母親が顔を出すと、秘書艦が言葉を交わして驚くほどスムーズに家の中へ入って行く。

(こういうときだけは規律正しいんだな)

私は感心するやら、呆れるやら。

「司令？」

「……あ、ああ」

日向に声をかけられた私は、ハツとした。

「そうだな、降りよう」

第55話〈侮れない艦娘〉（改2）

「艦娘に慣れない殿方は無理も無いのじゃ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第55話〈侮れない艦娘〉（改1・2）

私は日向と寛代と一緒に降車する。

軍用トラックは妖精に任せて一旦、鎮守府へと戻した。

私の袖を引きながら寛代がボソツと言う。

「司令の家、初めて入る」

「そうだな」

今回は母親の受け入れ体制が万全だ。

そのせいか、この前に夕立が来たときは実家の雰囲気からして全然違う。不思議なものだ。

すると日向が確認する。

「私たちも入って宜しいでしょうか？」

「ああ、そうだな」

私は自ら実家の玄関ドアを開けると日向と寛代を招き入れた。

「ただいま」

「お帰り」

奥から母の声。実家だから、これで間違っていないはずだ。

しかし艦娘たちが居ると妙に違和感がある。だからと言って尺時定規に『墓参部隊。到着した』なんて言えないよ。

実家の洋間に入ると艦娘たちが並んで座っていた。これも異様だ。

「へい、テートクウ。やっと到着したネ！」

開口一番、金剛。

「ああ」

……としか言えない。

艦娘たちが普通の家に勢ぞろいしている構図は威圧感タップリだ。改めて、こんな連中を招き入れた母親も肝が太いとしか言いようが無い。

その母親が顔を出した。

「もう夕方だから、ご飯でも食べていくか？」

「え？ でも準備が……」

「それなら、もうしてああけん、大丈夫だわ」

なんと母親は艦娘の人数分、夕食を準備していたようだ。

私が不思議そうな顔をしていると彼女は説明する。

「その祥高さんだっけ？」

「はい」

秘書艦が頷く。

母親も続ける。

「お前が部下を連れて訪問するかも知れないって電話くれてな。『ご無理なら遠慮します』って言うだけ。『良いよ来なさい』って答えただわ」

「え？」

私は絶句。

「別に、ええが？ たまには」

「うん……まあ」

母親もすごいが、やはり侮れないのは秘書艦だったか。

「お母様、お手伝いします」

「あ、私も」

「それじゃあ私もお」

秘書艦と北上、それに龍田さんが軒並み配膳の手伝いを立候補した。

なるほど戦艦や空母だと、ちよつと不器用そうだし。駆逐艦では人数が足りない……巡洋艦なら、適度に小回りが利いて配慮も行き届いているから適任だな。

「お前は座つちよれ」

母親に諭されて私は床の間の前に座る。

そこには順当に山城さんと金剛姉妹が居た。

「戦艦が上座か……」

「私は下座でも良いのですが」

山城さんが消え入るような声で呟く。

すると比叡が突っ込む。

「ダメです！ 偉いとか偉くないじゃなくて、物事には秩序というものが有るんですよ」

「そうネ、だからテートクはトコノマの前デス」

金剛も妙に和風に馴染んでいるな。

ふと気付くと日向は下座だ。

「あいつは良いのか？」

私の言葉に怪訝（げげん）そうな表情になる山城さん。

「航空戦艦には負けたくないの……」

（どういう理屈だ？）

ただ日向自身は平然として上下は気にしないようだった。

何となく彼女のほうが上手な気がした。

さつきから青葉さんがノンストロボで盛んにシャッターを切っている。

「おい、写真の取り扱いには注意しろよ」

「心得てますよ」

彼女も普段から鎮守府で写真を撮っているから問題ないと思うのだが、なぜか私の実家が写っていると写真が流出しないかと不安になるのだ。

そうこうしているうちに祥高さんたちはテーブルの上に次々と料理を運んでくる。母親も奮起したな……。

そういえば彼女は私が小さい頃から料理が得意だった。今日のメニューも、ほとんどが手作りだろう。

「これ手作りだよね」

「すごいわねえ」

北上や龍田さんも敏感に反応している。

……ていうか敏感だな、お前たちは。私は北上がサンドイッチを

作っていたことを思い出した。

ある程度料理が揃ったところで、全員が着席して母親もやってきた。

「あれ？ お父さんは？」

「恥ずかしいだつて」

エプロンをしたまま入って来た母親が言う。

「そうじゃな、艦娘に慣れない殿方は無理も無いのじゃ」

利根が妙に理解を示している。

「……じゃ食べるか」

私が言うのと直ぐに

『えっ』……という反応が艦娘たちの間から湧き上がる。

「なんだよ、それは」

すると珍しく祥高さんが全体を代表して意見を言う。

「司令、ここは乾杯を……ということですよ」

「なるほどね」

秘書艦に言われたら抵抗できない。

私は床の間の前で立ち上がると言った。

「えっと、今日は凶らずも墓参に加えて実家訪問となりました」

シンとなる洋間。

私はちよつと焦った。五月雨や日向、赤城が真面目なのは分かるとして、なんで金剛姉妹に青葉さん、利根までが真剣な表情でこつちを見ているんだ。

だが、それなりにまとめなければ司令としての名が廢る。

長過ぎないように、それでいてピリツとしたことを……と一瞬、考えていたら北上が突っ込んできた。

「緊張しなくて良いからさ、早く食べたいから簡潔にね」

「あ、ああ」

負けた、こいつには。だがお陰で場の緊張が解けて和やかになった。

「では簡潔に……実は私は最初、どうなるかと思った」

「何が？」

突っ込んで来る北上。

「その墓参が……いや、そもそも着任して君たちと出会った当初からだな」

『あぁー』と、一同頷く。

「日向や北上は面識があつたけどな。その次は青葉さんに救われた」

「ええ？ 別に助けてないですよ」

青葉さんが反応する。

「いや、そういう意味ではなくて」

ここで全員大爆笑。

「艦娘の部隊という状況に緊張していたんだ。もちろん比叡や金剛の明るさ、それに利根のストレートさ。山城さんや五月雨の純粹さ……」

ここで二人はうつむいて赤くなっている。

「そして要のように締めてくれる龍田さんに祥高さん」

「あらあ、やだ」

龍田さんはそう言いながらも微笑んでいる。

すると私の脇を突く者。

「ああ、お前もな。寛代……」

そこで私はグラスを手にした。艦娘たちもそれに倣う。

「艦娘と指揮官の距離、それはどうあるべきかと思っていた。だが今日実家に来て分かった。私は美保鎮守府を一つのファミリーにしたと思う。この墓参はその第一歩だろう」

「……で？」

また北上。

私は苦笑する。

「まあ、人前で話すのは得意じゃない。まとまらないが美保鎮守府の発展を願って乾杯と行こう」

その言葉を合図に全員が立ち上がる。

「では、乾杯」

『かんぱーい』

第56話〈大和撫子〉（新）

「でも航空機といえば日向だろうに？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第56話 〈大和撫子〉（新）

乾杯が終わると食事となった。艦娘たちは遠慮なく食事に飛びついている。

祥高さんが釘を刺す。

「皆さん、食事も帝国軍人として節度ある行動を心掛けて下さいね」

「はひ」

……頬を膨らませている赤城さんが応えると非常に説得力が無いな。

艦娘という少女の容姿を持っていても中身は軍人だ。

むしろ食することに旺盛な方が指揮官としても安心できる。

そんなことを思いつつ適当に食事をつついていると青葉さんが近寄ってきた。カラカラとカメラのフィルムを巻き取りながら彼女は言った。

「司令？ ボーつとしてますね。ひよつとして疲れちゃいましたか？」

私は苦笑した。

「いや最初は普通の家に艦娘が大勢居るって構図に違和感があったんだけどね。特に世間離れた服装とか被り物とか」

そう言いながら私は金剛姉妹や山城さんを見る。

片や金色（こんじき）のレーダー、もう一方はノツポの艦橋が頭に乗っている。

「でも暫くすると慣れて意外に、しっくり来るもんだなって思ってた」

私の言葉に彼女は微笑む。

「あはあ、青葉なんかは、ご覧の通りセーラー服ですけどね。だいたい巡洋艦までは割と普通の人間に近くて大人しい服装ですけど戦艦クラスになると皆さん派手ですからね」

「そうじゃ、艦娘もイロイロなのじゃ」

利根が割って入る。当然彼女は普通の軍服スタイルである。

「司令殿は勘違いしておるのじゃ。艦娘は全員、中身は純粋に大和撫子（やまとなでしこ）なのじゃ」

「なるほど」

さすが利根というべきだろう。彼女の説明は妙に腑に落ちた。

帰国子女の金剛だって名前も衣装も和風だから、もともと同化しやすいのだろう。

むしろ艦娘は一般とは相容れないという先入観を持った私の方が問題だった。だいたい艦娘を家族（ファミリー）として扱うと宣言しながら意識が足りない。

そこは猛省だな。

「あれ？」

食事が進むに連れて妙なものが出てきた。

私は配膳をする母親に聞いた。

「何でビール？」

「祥高さんに聞いたたら、構わないって」

「え？」

……そうか。艦娘たちは今回、墓参で気を遣ったのか知らないが皆、制服だった。だから勤務中だと勘違いしていたが、よく考えたら私も含めて全員、休暇扱いだった。

「アルコールはダメか？」

母親が念押しする。

「いや、全員休暇中だから」

「そうか？」

母親は微笑んだ。何でもアリになってきた。

「こんにちは」

「はい」

来客があつたようでも母親が玄関に出る。

そのうちに仏間へ入れ替わり立ち代わり人が来て拜んでいる。

「あれは？」

青葉さんが小声で聞いてくる。

「ウチは本家だからね。お盆になると仏壇に線香を上げに来る近所の人
が居るんだよ」

「なるほど……」

さすがに情報通の青葉さんも、お盆の風習を実際に見る機会は、ほとんど無かつたか。それでも写真を撮りに行かないのは彼女なりに礼をわきまえていると言えるだろう。

「しかし、うちの仏壇を参りに来た人は驚いただろうな。真つ昼間から女性が
大勢で宴会しているから」

私はグラスを片手に呟いた。苦笑する青葉さん。

私は続ける。

「でも艦娘も受け入れる懐の広さが、この町にはあるから大丈夫だ」

「そうなんですか？」

「ああ、ここは港町だからな。海に関わる者は誰でも受け入れる土地
や」

そう言いながら私は自分でハツとした。

「そうだな。私も境港の人間だ。もう堅苦しいのは止めよう」

そう思うと、急に気楽になった。

ふと祥高さんと目が合うと、彼女は微笑んでいた。

すると利根が聞いてくる。

「司令殿は、お酒は飲まぬのか？」

そう、私のグラスに入っているのは、お酒ではなく普通の麦茶だ。

「ああ、昔から飲まないね……ていうか、おいお前、顔が真っ赤だぞ。
大丈夫か？」

「案ずるな。吾輩は強いのだ」

「いや、そういう問題じゃないと思うが」

そう言いながら周りを見ると、比叡は早々に酔い潰れている。ただ

利根を筆頭に強い連中も居るらしい。

五月雨と寛代は最初から飲んでいない。まあ彼女たちは年齢的にも問題ないだろうが何故かホツとした。

「あれ?」

いつの間にか父親が末席に居た。母親に聞くと廊下で青葉さんに誘われたらしい。

「やるな」

最初は青葉さんにイロイロ、経歴などを聞かれたらしい。

そのうちに利根が加わり、そこに山城さんも合流。

少し時間が経って、その席を立った青葉さんに私は聞いた。

「何を話していたんだ?」

「当然、お父様がお得意な航空機のご教示を賜りましたよ」

「ああ、なるほど」

それで利根が来たのか。

「でも航空機といえば日向だろうに?」

私が疑問に思うと青葉さんが私に近づいて囁(ささや)くように言った。

「ホラ、山城さん日向さんに対抗していたでしょ?」

「あ?」

何だよ、それ?

「それに山城さん、渋い男性が嫌いじゃないみたいです」

「は?」

それは私の父親のことか? よく分からないな。

洋間は、お酒を飲まないグループ……私と祥高さんと寛代、それに五月雨に分かれていた。

比叡は既に轟沈し、龍田さんは金剛と上手に嗜(たしな)んでいる。

私はちよつと浮いている日向に声をかけた。

「日向……は飲めるよね?」

彼女は少し微笑みながら淡々と応える。

「いえ、今日は遠慮しておきます」

「生真面目ですねえ」

青葉さんが笑う。

「帰りは妖精さんが運転してくれますよ」

しかし日向は苦笑しながら続ける。

「ええ、でも不測の事態があるといけませんので」

彼女らしい選択だな。私は笑った。

「それで良いよ日向、気にするな」

「はい」

……休暇中でも職務を全うしようとするのか。さすが日向だな。

第57話〈龍田さんの想い〉(新)

「これからも、ここはいろんな事件が起こって……」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第57話 〈龍田さんの想い〉

ふと気づくと金剛(姉)も、早々に酔い潰れていた比叡を追うようにして轟沈。

その相手をしていた龍田さんも、それなりに飲んでいたはずだが、こちらはケロツとしていた。

……なんとなく分かるけど、ある意味、恐ろしいな。

ちよつと気になったので私は席を立てて彼女に近くに座った。

「大丈夫か? ……その」

こちらを見た龍田さんは直ぐに微笑んだ。

「あらあ司令……ううん大丈夫よ。気になさらないで」

彼女は傍らで寝入っている金剛の髪の毛を軽く撫でながら言う。

「金剛さんも長女で帰国子女……いろいろ重圧もあるから大変なの。

このまま寝かせてあげましょう」

さらりと言う彼女。

「いや、私が心配なのは」

……言いかけた私に龍田さんは指を立てて『シツ』という仕草をする。

「大丈夫よ。私は地上では最後まで残るタイプなの。でも海上では……」

そこまで言った彼女は、ちよつとだけ寂しそうな表情をした。

龍田さんは空になった容器を机に戻しながらホウツとため息をついた。お酒の匂いが辺りに漂う。アルコールと彼女自身のお香のよ

うな香りが独特の怪しさを醸（かも）し出している。

それでいて彼女の場合は、それが個性として昇華されているから不思議でもあった。

直ぐに龍田さんは明るい表情に戻った。

「お気になさらないで下さいな司令。艦娘の使命は例え旗艦が犠牲になっても作戦を全うすることですから」

「……」

しばらく宙を見詰めていた彼女はゆっくりと口を開いた。

「……私ね、今まで自分の延命とかには全く関心がなかったのよ。でも今はちよつと変わったの」

龍田さんは自分の傍で眠っている金剛姉妹を見ながら言った。

「司令は意識されていないでしょうけど、今の美保鎮守府にいます、何か大きなものが変わっていくような気がするの」

それから彼女は、秘書官と駆逐艦に視線を送った。

「……それは司令官と秘書官を中心として、少しずつね。着実に変わっていくわ」

「そうか？」

もちろん私には全く分からないことだ。

だが彼女は私を見て微笑んだ。その表情からは今までの妖艶さが消え、とても素直な彼女自身の自然な笑顔になっていた。

「徐々に分かってくるわ……これからも、ここはいろんな事件が起こって……でも、必ずみんなで力を合わせて最高の鎮守府になっていくから」

そこでちよつと間が空く。

「……私は今度こそ、それを最後まで見届けたいの」

「今度こそ？」

やはり、よく分からないが……

「まあ私としては司令官としての責務を全うすべく精誠を尽くすばかりだ」

「はい。よろしくお願いします」

彼女は微笑んだ。

龍田さんも何処となく秘書官にも似ている部分があるな。そう思
いながら私は軽く会釈をして席を立った。

(他の酒に強そうな連中という利根と山城さんか)

彼女たちを探したら、なぜか父親と航空機談義をしている二人を見
つけて驚いた。

(へえ)

一方の、お酒を飲まないグループ……祥高さんと寛代、五月雨は別
の場所にいた。

お酒を飲まないと手持ち無沙汰になるのか彼女たちは適宜、配膳を
手伝ったり下げたりしている。特に駆逐艦娘たちは何かをしているな
いと落ち着かないのだろう。こまごまと動いている。

そのお陰で、私の母親もかなり手が空いて北上や龍田さん、それに
時々青葉さんと楽しそうにお喋りをしている。艦娘たちに囲まれて
私の父も母も自然に艦娘たちと馴染んで、けっこう楽しそうにしてい
る。

その光景を見てると私自身せっかく故郷に着任したのだから実家
にも時々、顔くらい出さないと駄目だなと思った。

(あれ?)

「どうしたの? お母さん」

私は、こちらに来た母親に聞く。

彼女は艦娘を見ながら言った。

「彼女たち、明るいいし話題も豊富だな。普通の軍人さんとは思えん。
とっても楽しいわ……それに休みの日も何処も行かんっていうが?

「だったら時々うちに連れて来るだわ」

「え?」

「いったい何を言い出すのかと思った。」

「艦娘って艦船だあが? いまはまだ法律があるけん単独でウチげな
普通の家に来たらいけんだあも、お前が許可して複数で来れば、
ええってだあが?」

(通訳：艦娘は艦船だから今の法律では彼女たちが単独で一般家庭に
来るのは禁止だけど。責任者が許可した上で複数で訪問する場合は

作戦行動の一環として認められる)

「詳しいな、お母さん……」

(てか、こらっ青葉! ……なに入れ知恵してるんだ!)

だが時、既に遅し。この場にいる艦娘たちには、その案がすっかりインプットされてしまったようだ。

「テートクウ、それ良いねええ」

酔って轟沈していたはずの金剛が鼻息荒く浮上して絡んでくる。

「止める! 酒臭いつ」

「比叡もそれ、頂きます!」

余計なまで起きてきて、こっちも頭を寄せて……来るなって。

「お前の被り物は金剛より痛いんだ!」(ごりごり)

「痛ってえ!」

思わず絶叫。

「そうじゃぞ! それもお、指揮官の重要な任務じゃあ」

利根もフニヤフニヤしながら言う。

「勝手に決めるな! ……ってか利根っ。おい、顔真っ赤だぞ。大丈夫か?」

目が据わっている。怖いな。

「私も……そのアイデア、素敵だと思えます。ぜひ、ご一考を」

「ちよつと……赤城さんまで何を?」

(……って、うちのお櫃(ひつ)丸ごと抱えて言わないでくれよ!)

「楽しみだわ、来月の休暇。アタシも未消化の休日が、ずーっと、ずっとたまってのよ」

こっちも目が据わっているのに休む気満々な龍田さん。再びその妖艶さに拍車がかかっている。

「私も、お姉さまと一緒に……」

真顔の山城さん、怖いって。

第58話〈艦娘と浴衣〉（改2）

「まあ、お盆休暇だからな」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第58話〈艦娘と浴衣〉（改2）

「夕方から盆踊りがああけど、皆で行かイヤ？」

母親が、どんどん仕切ってくる。

艦娘たちも半分以上は酔いが回って既に出来上がっているのに、まだ何処かに連れ回すのか？

「盆踊り……」

なぜか山城さんがボソッと反応している。

「でも制服のまま踊るのも変だから」

私は敢えて否定してみた。

ただ内心では戦艦なら制服でもアリかな？　とも思ったのだが。すると母は言う。

「さすがに全員分の浴衣はないけど少しくらいならウチにも、ああで」

「ええ？　でも艦娘って結構背が高いから」

そこまで言ったとき寛代が私の袖を引く。

「え？　何だ」

彼女が指差した方向に大きなケースがあった。それが何であるかは知っていた。

だから私は勝ち誇ったように言った。

「あれにはジャージ（体操服）しか入ってないよ」

実は墓参の後は全員で鎮守府までマラソンで帰ってやろうか？

……という無謀な計画があった。

しかしそれは、いきなり実家訪問することになったから頓挫したの

だが。

(でも何で実家にケースを持ってきたんだ？ トラックから降ろせとか何も指示して無いぞ)

……って、なおも私の袖を引き続ける寛代。

「しつこいな、何だよ？」

ふと見ると五月雨がケースのふたを開けて調べている。

「あ、これやつぱり……そうだったんですね」

(何をニコニコしているんだ？)

「そこには何も入ってない……」

私が言いかけると利根が近寄って叫ぶように言った。

「おおー、これは浴衣じゃぞ！」

「ええ！」

私は驚いた。

(おかしい！　なんで、そんなものが入っているのだ？)

北上も近寄って浴衣を取り出しながら中身を確認している。

「へえ人数分、ありそうじゃん」

「司令、申し訳ございません。また命令違反を……」

素面(しらふ)の日向が私に話しかけてくる。

「は？」

何のことだ？

彼女は淡々とした表情で報告する。

「青葉さんに言われて二人で中身を入れ替えました」

私は脱力した。

(日向あ！　お前もか？)

その時ハツとした。

「そうかつ！　だから青葉さんが墓地で何度も母親を誘うようなこと言ったのか！」

私と目が合った彼女は慌てて逃げ出した。

私も思わず叫んだ。

「くらあー　青葉あ」

居間の入口まで逃げた彼女だったが、直ぐに半身だけ身を隠した彼

女は舌を出して笑っている。

「えへへ」

「えへへ……じゃないよ、まったく」

私は怒る気も失せて観念した。

「こうなったら仕方ないか」

その場は笑いに包まれた。

「やれやれ。まあ、お盆休暇だからな……」

艦娘というよりは女学生を相手にしている気分になってきた。

ちやうどそのとき遠くから太鼓の音が聞こえてきた。

「あれは何の音ですか？」

五月雨が聞く。

「あれはね、太鼓の音よ」

龍田さんは、やはり伝統的なことも詳しいようだ。

「……」

山城さんも少し表情が変わった。

ある程度の経験のある艦娘たちには、日本の伝統文化も馴染みがあるのだろう。

第59話〈艦娘の志〉（改2）

「志を持っている。まさに志士だ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第59話 〈艦娘の志〉（改2）

艦娘たちは、ワラワラと衣装ケースに群がる。

「へえ、意外と良いじゃん」

「人数分揃っていいそうですね」

「サイズもOK？」

「同じ艦種なら、ほぼ同じですよ」

そして彼女たちは色とりどりの浴衣を手にとって、はしゃいでいた。

（……やはり艦娘は少女なのだな）

つくづく、そう思えた。

しかし艦娘だけの鎮守府とはいえ、なぜ各自の人数分の浴衣が揃っているのだ？

謎だ。

ひよつとしてアレも装備なのか。それとも誰かが準備したのか。

まさか軍令部が揃えたわけじゃないよな……だいたい中央の役人は艦娘を単なる兵器としか見ていないから。

もしかしたら祥高さんが勝手に購買予算を通したのか？

……いや、呉の統括官の監査もあるから、それは難しいだろう。

詰まるどころ、よく分からないが浴衣も艦娘の装備品ということか。

そんなことをボンヤリと考えていたら事情を察した母親が再び場を仕切り始めた。

「ほらほら、男はあつち」

(そうか、艦娘たちは早速、浴衣に着替えるんだな)

『……』

急かされた父親と私は居間から追い出された。

着替える間、実家での居場所が無くなった私と父親は、しばらく実家前の道路で佇(たたず)んでいた。

「あれ？」

……見ると実家の周りの路地にも浴衣を着た人が多かった。

それ以前に、普段は閑散としている街全外が今日は、お祭りのためだろう。何となくか人通りが多い。

(ここは古い町だから、この戦時下でも伝統行事は、きっちりやるんだな)

しばらく無言だった私たちは着替えが長引いている間に少しずつ会話が始まっていた。

父親が言った。

「まさか艦娘の鎮守府が美保にあつたとはな」

私は応える。

「お父さんも艦娘は知っていたんだ」

彼は、こちらを見て言った。

「ああ、噂には聞いていたがな……ただ現役の頃は、まだ機密扱いだつた」

「ふーん」

そういえば私が兵学校へ行くために家を出るまでは、ほとんど父親と会話をすることも無かった。

だから、もし私が美保鎮守府に着任しなかったら、こんな機会もなかっただろう。

(艦娘の取り持つ不思議な縁か)

ふと、そんなことを思った。

父親は腕を組んで続ける。

「艦娘なんてな。無意味なシステムと思ったよ。だが、ちよつと考えが変わったな……良い娘たちじゃないか？」

「え？ ああ、まあ……でも女学生みたいだけどね」
私は返した。

すると父親は真顔になった。

「人間は外見だけで判断はできない……」

そう言いつつも、気恥ずかしいのかちよつと苦笑した。

「もつとも彼女たちは『艦娘』だかな」

……そういえば山城さんや利根と父親は、ずっと飛行機の話をしていたな。

彼は続ける。

「お前も直ぐに分かる日が来る。彼女たちは、この国を誰よりも愛している。それに何があつても純粋に国家を護り抜ける志だつて持っている。まさに彼女たちは現代の志士なのだ」

「そう？」

(かなり持ち上げたな、お父さん)

もちろん寛代や日向を見ていると純粋で一途なのは分かる。

父親は通行人を眺めながら言った。

「父さんは、もう退役組だ。だが、お前はまだまだ若い。それにあの娘たちは、もつと若いだろう。力を合わせて国のため世界平和の為に、しつかりやれ」

「うん」

父親は、だてに空軍エースだったわけじゃないんだなど、そのとき改めて思った。

(お父さん、ありがとう)

そのとき玄関から五月雨と寛代が勢い良く飛び出してきた。

五月雨は青い髪に、グリーン系のグラデーションの入った浴衣だ。

「し、司令官……見て下さい。は、恥ずかしいけど綺麗です、浴衣って」

確かに彼女の青い長髪と感じが似ていて、うまく調和している。

(そうか駆逐艦娘も浴衣を着ると急に日本人らしく見えるな)

五月雨は、はにかみながらも私たちの前で一回りして見せた。長い髪が意外にも軽くふわつと舞った。

『……』

私も父親も、そして通りを歩きかう人たちも注目する。

彼女は大人しい子だけど、やはり浴衣のインパクトは大きい。

五月雨は微笑んで立ち止まった。その仕草がまたぐつと来るな。

反対に赤い浴衣を着た艦娘が……「寛代か？」

すると彼女は立ち止まらずに私を狙って突進して来た。

「だから寛代、やめろって！」

せっかく可愛い着物姿なのに……おいおい！

それでも通りで、しつこくカンチョーしようとする寛代。

「この期に及んで下品だぞ！」

父親も腕を組んで苦笑している。

だが私は逃げ回りながら思った。これは彼女の照れ隠しなのかな

……と。

「ほら、お前も早、着替ええだ！」

母親が玄関から大声で叫んでいる。父親は早く行けと言うしぐさをした。

「やれやれ」

既に街は暗くなりつつあり太鼓の音が遠くから聞こえて来る。

「ああ、お盆だなあ」

夏の香りを感じながら、私は家に入った。

第60話〈平和なひと時〉（改2）

「まるで家族が増えたみたいだわ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第60話〈平和なひと時〉（改2）

奥で着替えを終えて出てきた私に居間に居た艦娘たちが注目する。

五月雨が呟く。

「そういえば制服以外の司令は初めて見るのです」

「いや、そんな大げさな」

私は頭をかいた。

制服だと指揮官という位置がハッキリするのだが、浴衣というラフな格好だと素（す）の自分が歩いてる感じになる。

もちろん家族の前なら別に何でもないので。

実際、私の両親は息子の浴衣姿を、とても喜んでるようだ。

ただ私としては部下でもある艦娘たちの前だと、この壁の無さが妙に気恥ずかしくなるのだ。

「司令、宜しいですかあ」

青葉がレンズを向けてくる。

（別に断る理由も無いか）

それでも私は、ちよつと緊張した。

「あ、ああ。でも控え目にな」

「了解です」

……とはいえ今宵、浴衣の主役といえ、やはり艦娘たちだ。

いつも過剰なほど個性的な面々が浴衣を着ると意外に大人しくなっている。それに雰囲気からすべてがピッタリマッチしているように感じるから不思議だ。

「ええなあ、まるで家族が増えたみたいだわ」

母の言葉にも実感がこもっている。

「不思議な存在だな、艦娘というものは」

父も感想を述べた。寡黙な彼にしては意外なことだ。

だが考えてみたら艦娘とは純粹なまでに、この国を護る防人（さきもり）なのだ。その志が日本古来の浴衣という伝統文化と相まって、いつそう輝くのだろう。

そういう意味では普段の私は艦娘たちを少々甘く見過ぎていたのかも知れない。そこは反省すべきか。

……ここでなぜか私は、あの中央から来た青年将校を連想した。

（何だろうね、あの御仁（ごじん）は）

私は内心、苦笑した。

やがて母親が艦娘たちに号令をかけた。

「軽くご飯を食べてから盆踊りに行くだけわ」

『はい』

食べ物とお酒で懐柔されたか母親には妙に従順になる艦娘たち。

つい先程まで一部、泥酔していた連中が気が付くと素面（しらふ）に戻っている。

（お前ら、どういう内臓しているんだ？）

やはり普通の人間とは違う。

絶対、艦娘たちはアマゾネス並みの強靱な身体（ボディ）なのだ。

しかし実家の居間に12人も艦娘。そして結構、背の高い子が多いから、この構図は壮観だ。鎮守府の食堂とは、また違った趣（おもむき）がある。

「そうか浴衣を着ているから緩く見えるのか」

思わず呟いた。

「寛代や五月雨は駆逐艦だから学生かな。そして赤城さんや金剛、利根は、さしずめ『お姉さん』か」

なぜか私の解釈に頷く艦娘たち。

「祥高さんや山城さん、それに龍田さんになると、もう『大人の女性』って感じだな（実際は若いけど）」

「ねえ、アタシは？」

私の言葉に北上が聞いてきた。

「そうだな……北上や青葉、比叡あたりは、ちよつと微妙だけど女子高生かな？」

「あはつ、嬉しいですよ！」

妙にノリが良い比叡だった。

そんな会話をしていると祥高さんが艦娘たちに『お小遣い』を支給し始めた。

私は聞いた。

「それは？」

「お小遣い……お祭りなら必要でしょうから」

「う、嬉しいですよ！」

五月雨が瞳をウルウルさせている。タダでさえ大きい彼女の瞳が更に大きく見える。

祥高さんは続けた。

「正確には給料ですが艦娘たちは普段ほとんど外出もしませんから生きていれば貯まる一方なので心配には及びませんが……」

と、ここまで話した彼女は少し『しまった』という表情をした。

そして祥高さんは私の両親に頭を下げた。

「すみません、あまり相応しくない話題でした」

しかし母親は平然として言った。

「ええけん、うちも軍人だ」

母親の笑顔に祥高さんもホツとしていた。その場はホワツとした雰囲気にも包まれた。

これは軍関係者でなければ分からないことだ。奇麗事ではなく常に生死に臨む者たちが共有する感覚だ。

すると今度は利根が聞いてきた。

「お盆とか踊りって何するのじゃ？」

「えつと……」

こいつは長身と広島弁だから浴衣を着ても妙に迫力があるな。すると隣の青葉さんが答える。

「亡くなった人たちを偲ぶために集って話したり食事したり踊ったり……イロイロやるんですよ」

「それなら艦娘も、お盆は出来るナ」
利根が納得している。

まあ確かに艦娘たちは日々戦いに明け暮れて、いつも生死と隣り合わせの生活だ。つまり盆踊りとも決して無縁ではない。

「なるほど、今日の墓参が妙に艦娘たちとマッチしていたのは、そういうことか？」

思わず呟く。

「Oh！ 踊りつてダンスのことデスね？」

金剛が悟ったように言う。

「お姉さま、ちよつと違います。盆踊りですから」

比叡がナイスフォローをする。

「どう違うネ？」

金剛の反論に今度は比叡が硬直している。

……まあ正直言つて彼女も本当の意味は分かってないのだろう。
すると日向が答える。

「櫓（やぐら）を中心に輪になって皆が一斉に踊るものだ」

さすが「武人」だけあって、よく知っているな。

「ああ、お姉さまも連れてくれば……」

山城さんは違う方向に逝ってしまいそうだが。

「なんだか、見てて飽き辛が」

母親がニコニコしながら艦娘の様子を見ている。まあ、チョツとズレているけど逆に新鮮な感覚だよな。艦娘のお盆つてのは。

今夜の盆踊りは駅前か近くの小学校、どっちでも良いらしい。母親は近所の手前もあるから小学校の方へ行くという。

私たちは部外者でも大丈夫そうな駅前の盆踊り会場へ向かうことにした。どちらも歩いて直ぐいける。

（でも、夜だから地図とか見なくて大丈夫かな？）

そう思っていたら艦娘たちが寛代を中心に集まっている。

「何しているのだ？」

私が聞くと祥高さんが応える。

「一時的に地図情報を共有するシステムがあるので、その準備です」
日向が補足する。

「本来は大淀のように旗艦クラスの艦娘でないと装備されていない仕様だが寛代は通信特務艦だから可能です」

「へえ」

そこに青葉。

「これも『改』で備わった共有システムなんですよ」

「なるほど、実戦でも便利そうだな」

すると龍田さんが微笑む。

「でもまさか『初陣』が盆踊りとはねえ」

その言葉に一同は笑った。なんだか平和なひと時だなと思った。

第61話〈浴衣娘〉(改2)

「フフ、夏ですし浴衣ですから」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第61話 〈浴衣娘〉(改2)

「盆踊り会場は市内各所にあるのですね」

日向が改めて確認してくる。

「ああ……」

別に作戦でも何でもないんだが、こういう細かいところが律儀な彼女らしい。

「では皆さん、宜しいですか?」

秘書艦が艦娘たちに確認をする。

- 一 地図があるとはいえ、あまり遠くへは行かないこと。
- 一 お小遣いはあるが、無駄遣いしないこと。
- 一 人間の男性に声をかけられても相手にしないで断るか逃げることに。

……いろいろ諸注意をしている。

なんだか、このノリはやっぱり女学生だな。さしずめ祥高さんは生活指導の先生になるか? それも妙に似合っている。

最後に彼女はまとめる。

「何よりも帝国海軍の兵士であることを決して忘れないよう。各自、心得て下さい」

『はい』

艦娘たちは敬礼をする。

この台詞には父親も私も感心していた。思わず私たちは顔を見合せた。

「良いものだな」

「うん」

祥高さんの締めは艦娘にはしっかりと効きそうだ。

母親は「お風呂に入ってから出かければ良かったけどねえ」と言っていた。気持ちは嬉しいけどお母さん、この人数でウチの風呂では無理でしょう。

でも改めて考えてみたら、ちよつと惜しい気持ちもあった。

(湯上りの艦娘(美人)か……)

ゾロゾロと玄関で草履に履き替えた艦娘たちは、皆が実家の玄関から表に出た。

祥高さんが改めて玄関前で軽く点呼を取った。それから駅前を往復するルートでは不必要にわき道に逸れないようにとか電探を持っている艦娘は、その電源を落とさないように、といった注意をしていた。

(艦娘の生活指導も大変だな)

私は思わず苦笑した。

今は夏の夕方だから空はまだ明るい。

ただ、この時間になると気温も下がって過ごし易くなる。

「司令は、駅前へ行かれますよね」

背後からボソツと聞いてきたのは日向。

「ああ、そのつもりだが」

別に他に行くところもないし。

「あの……差し支えなければ」

急にソワソワと目を逸らして恥ずかしそうな表情をする日向。

ドキツとした。ちよつと夕日を浴びた彼女の上半身が影になっている。

陰影があるうえに浴衣を着ているから普段の彼女とは、またガラリと印象が違う。

(今のところ、私に声をかけてきたのは日向だけだから……一種のデートか?)

と、妄想をしていたら、いきなり邪魔が入った。

「Oh、テートク！」

その声は金剛か。

「盆踊り私にも教えっ……」

「は？」

私が振り向いたときには彼女の姿が視界から消えていた。

「あれ？」

直ぐに視界の下の方から『シット』という声が聞こえた。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

比叡が来て金剛を助け起こした。

その状況を見た私は悟った。

（ははーん。これは草履が原因だ）

海外から来た金剛は浴衣だけでなく草履だって履いたこと無いだろう。

（しめた！ 今夜の金剛姉妹は低速だぞ！）

面倒なことになりそうだったら即逃亡だ。

「司令……」

ちよつと得意になっていた私は、そのひと言で思わず寒気がした。

思わず振り返る。

「ああ、山城さん」

彼女はウルウルとした瞳で訴えてくる。

「私も……一緒に宜しいでしょうか？」

「あ、ああ」

別に断る理由もない。日向、恨めしそうな顔をするなって。

しかし山城さんは金剛とは違って草履は履き慣れているな。

もつとも彼女の場合、仮に振り切ったとしても別の意味で怖い。後から出てきそうだ。

気付くと私たちの足元のほうから『チツ』という舌打ちが……早くも、混戦状態か？

そこで落ち着いた声がする。

「艦隊で……いえ、皆で行くのが楽しいですね。司令……」

「あれ？」

そこには、とても落ち着いた女性が立っていた。

「あれ？ ……どなたでしょうか」

「あら、嫌ですわ司令」

ちよつとムツとした表情をしたので、やつと分かった。

「赤城さんー」

(まさか……)

ポニーテールで浴衣を着ていると一瞬、分からなかった。

「いや近所の誰かかと思ったよ」

そんな私の視線に彼女は恥ずかしそうに言った。

「フフ、夏ですし浴衣ですから。ちよつと後ろで結んでみました」

そう言いながら後ろに手を当てている赤城さん。

(うん、正直、見違えました)

「それで、お櫃（ひつ）を抱えなければ最高だと思います」

つい口が滑った。

「あの、何か仰いましたか？」

あ、ちよつと彼女の顔が引きつった。

「いや、何も言っていない」

でも普段の戦闘とは違って街角での彼女は、さほどしつこく追撃して来ない。ホツとした。

「あらあ素敵。お姉さま」

近寄ってきた龍田さんも赤城さんを持ち上げた……いや、龍田さんも独特で妖艶な雰囲気です。

「ウフフ……浴衣って良いわねえ」

しかし長身で美人揃いの艦娘たちが実家の前に勢ぞろいする光景。これは、かなり人目を引く。

案の定、実家の前を通る人は、ほぼ全員が立ち止まったり振り返ったりしている。かなり注目の的だ。

「はい、せつかくだから撮りますよ」

青葉さんが数枚、撮影していた。

気のせいかわりの通行人は彼女たちが芸能人か何かと勘違いしているようにも思えた。

……頼む青葉さん、その写真を、後で焼き増ししてくれないかな？
そんな私の気持ちを察したのか、彼女は撮影後に私の方を向くとウ
インクしていた。

(えっと……それは、どっちのウインクかな?)

第62話〈艦娘の剛と柔〉（改2）

（何だかんだ言っても日本人は浴衣だな）

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第62話〈艦娘の剛と柔〉（改2）

『お母さん、行ってきまあす』

玄関先で母親に大声で挨拶をした美保の艦娘たちはゾロゾロと出発する。母親も嬉しそうに手を振っていた。

「あれ?」

さり気なく母の隣には父親まで出ていた。さすがに彼は手は振らずに腕を組んでいたが。

（まあ、良いか）

両親も嬉しいのだろうか? と思った。

まだ私は独身なのだが親から見れば自分たちの孫世代の艦娘もいるわけだ。やっぱり親の世代から見れば小さい女の子は可愛いのだろうか。

さて実家から境港の駅までは、のんびり歩いて20分も、かからないう。艦娘たちは実家から持ち出したのだろうか? 手に団扇（うちわ）を持って、ゆっくり扇ぎながら歩いている。

今回のように10人規模の艦娘たちが一斉に浴衣を着て歩く姿は他の鎮守府でも、めつたに拝めないことだ。盛んにシャッターを切る青葉さんの写真は艦娘の歴史に残るものかも知れない。

既に西の空は夕日で橙色に染まっている。町全体が紅くなる中で色とりどりの浴衣を着た艦娘たち。傾いた陽を浴びた彼女たちも薄っすらと紅く映える。

（何だかんだ言っても日本人は浴衣だな）

こればかりは譲れないと思える。

夏の夕空は明るい部分から徐々に色調が変化している。

細長い海峡である境水道と、その向こう側に連なる高尾山へと向かって橙(だいたい)色から徐々に青い色へ移ろい行く空と雲。その光景は艦娘たちと相まって清々しい。

(この空気感は、この地域独特のものだ。失いたくないな)

別に詩人でもなんでもない私にも、そう思わせる自然の調和だった。

青葉さんは美しい風景を背にした艦娘達の姿を盛んにシャッターを切っている。どうせ後で売りつけられるんだろうけど、それでも構わないと思わせる美しさだった。

五月雨と寛代は、さつきから舞い上がって走り回っている。

「おい、車道に出るなよ。轢かれるぞ」

思わず注意した。

「はい……すみません」

はにかむ五月雨。緑と青の浴衣姿で、ちよつとしおれている姿は、まるで小学生だ。

「……」

一方の寛淑は舌を出している。こっちは赤い浴衣で、全てが対照的だ。

私たちは水木しげるロードに入る路地まで来た。この辺りからは、もう屋台が立ち並び始めている。

「あれは何じゃ?」

「屋台ですね」

「お店ですか?」

「へえ、ワンダフォーね」

艦娘たちは、お祭りの雰囲気そのものに興味津々だ。

「だいたい、お祭りの屋台はボツタクリだから嫌いだが……」

「ボツタクリって何?」

「その可愛いお姉ちゃん、金魚すくいしない?」

私が呟く側から早くも五月雨と寛代は屋台の売り子に捕まってい

た。

「うふふ、この子達には間に合っているわよ」

「そうじゃ、この子等は雷のような魚（魚雷）も持って居（お）るしな」
直ぐに利根や龍田さんが適当にあしらいながら引き離してくれた。

「はあ？」

この二人にかかると縁日の売り子もタジタジだな。

そんな祭りの喧騒の中で私はフツと彼女たちから離れて、浴衣姿で散策する少女たちをボンヤリと眺めていた。

「なるほど」

艦娘とはいえ浴衣を着た彼女たちは屋台通りに自然に溶け込んでいた。

それは浴衣の効果なのか、それとも彼女たちが元々持っている『和』という気配なのか、いずれなのかは正直分からない。

ただ彼女たちを批判する輩（やから）がよく言う『艦娘は単なる機械』という表現は明らかに間違っていると感じる。

墓参にしても最初は違和感を感じたのだが、いざ現地へ赴いたときの彼女たちの現場に溶け込む雰囲気。

それは、うまく言葉にできないが意外なほど日本の伝統文化には馴染むのだ。あの奇抜な戦闘服ですら、そうあるべきと思わせるモノがある。

（不思議なものだ……艦娘か）

「テートク！ 遅いね」

場をわきまえない金剛の叫びが響いて思わず赤面する。おい街角で『テートク』はやめろって。

水木しげるロードから駅前へと入る大通りのは、お盆前に私たちが軍用車で敵襲を受けた通りだった。そこに面した民家には軒並みブルーシートが覆われていて、なぜか多少とも気が引けた。

そんな私の気配を察したのか青葉が言う。

「気になりますか？」

私は頷いた。

「……まあ、海軍の責任では、ないんだけどな」

「……」

フィルムを巻きながら彼女は苦笑していた。いつもは、おちやらけて居る彼女も意外に繊細な面があるよな。

西の空の日は、もうかなり暮れてきた。屋台の灯かりが黄色く輝き、艦娘たちのカラフルな浴衣と絶妙な調和を見せている。

始めのうちは一緒に行動するようなことを言っていた艦娘たちも気がつけば好き勝手に屋台やお店を覗いたり各々グループ化して散らばって行った。

「まあ、そんなもんだな」

私は呟く。

とはいえ私自身は背格好の小さい五月雨や寛代に変な連中が声をかけないか心配で保護者のようにくっついて動かざるを得ないし。

ふと見れば日向と利根は射的（しやてき）の屋台を荒らしている……当然、百発百中だから。

思わず声をかける。

「ダメだよ日向、お店の人を困らせたなら」

「いえ、やる時はやります」

ホントに日向は何をするのも生真面目だよな。まあ、そこがお前らしさだけだ。

「がはは、そうじゃのう。銃を構えると是が非でも当てたくなるのは癖じゃな」

腕をまくった利根も負けてはいない。

射的の景品を群がる現地の子供たちに気前よくあげている日向と利根。

ほのぼののすると言うか、そんな彼女たちの、おおらかな態度は市街戦で迷惑をかけた境港市民への、せめてもの償いを感じられた。

「何か、お前たちの姿を見てるとホツとするな」

私が呟くように言うとう日向がチラツとこちらを見て言った。

「はい、ここは司令の故郷ですから」

いや話をそっちに持って行かなくても良いんだけど。

「気遣いは嬉しいよ、ありがとう」

「はい……」

ちよつと恥ずかしそうな表情をした日向だった。

「そんなものかのう？」

利根には当然といった雰囲気だった。この辺のやり取りは彼女には疑問符が付くようだ。

この二人の剛と柔の対比もまた艦娘らしさだ。私には杓子定規でない性格の多様さもまた彼女たちの魅力に思えるのだった。

第63話〈喧騒と旧友〉(改2)

「もう、疲れて……はぐれるのが怖い」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第63話 〈喧騒と旧友〉(改2)

五月雨や寛代にくっついてると、とても盆踊りどころではない。でも、さすがに二人とも屋台には飽きたようだ。

五月雨が少し疲れたように聞いてきた。

「済みません司令。お盆って、お店以外にも、あるのですか？」

「ああ。盆踊りも広場でやってるよ」

「……」

寛代が、そっちへ行こうという感じで私の袖をグイグイと引っ張る。

「ああ、分かった。広場に行こうか」

五月雨も特に反対はしないようだ。

私が駅前の広場方面へ足を向けると二人とも左右から私の手を握って歩き出した。

(ははは、こりゃ、まるで親子だな)

そんなことを考えた。賑やかな屋台と、お盆の人ごみ。この中の誰もが私たちが実は軍人で、この二人が艦娘だなんて想像だにしないだろう。

向こうの屋台の前に背の高い女性が……と思ったら、山城さんだった。

「あれ、大丈夫か？」

「司令……、やっと……見つけました」

(うん、その言い方だと、十分に怖いな)

私は苦笑した。

彼女は、やや俯（うつむ）きながらボソボソと言う。

「もう人ごみは疲れました。もつと広いところへ行きたいです……」

「ああ、そりや丁度良かったよ。今から広場に行くから、一緒に来るか？」

「……はい」

屋台のランプの明かりと喧騒の中、妙な存在感がある山城さん。背が高いということもあるけど彼女独特のオーラがあつて、やはり目立つ。

そんな彼女は私が五月雨と寛代と、しっかりと両手をつないでいるのを見た。

「あの……すみません、司令」

「はい？」

思わず寒気がする。

「あの……私も連結してよろしいですか？」

「えつと」

意味が分からないが否定もできない。

「ああ、構わないが」

どうするのかと見ていると彼女は、そのまま私の背後に回って私の浴衣の帯をつかんだ。マジですか？

「もう疲れて……はぐれるのが怖い」

背後から蚊の鳴くような声で訴えるように言う。

（可哀想に）

同情はする。独りで佇んでいる山城さんを想像するだけでも怖いから……しっかりと掴つていれば良いか。

しかし帯に手をかけてついてくる女性って……どう見ても背後霊だ。

おまけに山城さん意外と長身だから、私の左右の小柄な五月雨や寛代と非常にアンバランスだ。きつと傍目にも実に奇妙な組み合わせになつてるに違いない。

かなり悪目立ちするんだが……地元で、この状況で出来れば知った

人間に出会わないことを祈るばかりだ。

……が。

「おう！久しぶり」

「！」

嫌だと思うと会うんだよなあ。

ゆつくり顔を上げると、そこには私と同様、小学生くらいの女の子を連れた旧友が立っていた！

「お、おう……」

私は生返事をする。

「なんだあ！ 帰ってたら声くらいかけろよ」

彼は、やたらと元気に話しかけてくる。

「あ、ああ……悪いな」

そいつの子供は私を警戒して少し後ろに下がっている……が、五月雨や寛代も同じく私の後ろに隠れるようにしている。

艦娘の二人はどう見ても私の「子供」に見えるよな。じゃ私の背後の山城さんって、いったい誰？ ……ってか。

旧友は自分の女の子を抱き上げて言う。

「おれ、実家の場所は、変わんないからサ。暇になったらいつでも来いよ！」

「あ、ああ……」

さつきから同じ返事しかしてない私だった。

「あ、お前の子供か？」

いちばん聞かれたくない所を突っ込まれる。

「えーっと」

私は返答に窮する。

そいつは私の『背後霊』も、すごく気になっているようだ。

山城さんに軽く会釈をしてボソボソと小声で聞いてくる。

「背後の人は、あれか？ 奥さん？」

「……」

ハイともイイエとも言い難い状況だ。

おまけに私の背後の山城さんがモゾモゾしている感じがするし。

ひよつとして聞き耳を立てているのか？

なんと応えたものかなあ……悩む。

「アンタ、ほら行くよー！」

急に人ごみの中から、そいつの奥さんらしき女性がやってきた。

(た、助かったぞっ！)

内心ほつとする私。

「おう……、あ、こいつ、ホラ、俺の幼馴染」

旧友が私を紹介する。その女性は軽く会釈をした。

私も会釈しながら彼女を観察した……言っちゃ悪いが艦娘よりも強そうな奥方サマだよな。

改めて私は、この艦娘達で良かったかな。

「じゃ、またな」

手を振りながら、旧友の家族は人ごみに消えていった。やれやれホツとした。

地元に着任したから今後も境港の街に出れば、こういうことは頻発するんだらうな。

しかし一人に出会おうと、そこから噂がドンドン広がるんだらう……ま、私は、ほとんど鎮守府に詰めているだろうから現実的には街中で出会おうってことも少ないだろうけど。

「司令……」

背後の山城さんが低く言葉を発した。耳元で？　ちよつと、鳥肌が立った……。

第64話〈盆踊り会場〉(改2)

「ちよつと、踊って良いですか?」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第64話〈盆踊り会場〉(改2)

「私……司令から、どう見えますか?」

……と、山城さんのドスの利いた低い声。

突然、何を言い出すかと思えば!

「……」

ゆつくりと振り返ると、私の至近距離に長身の彼女。

夜の屋台の灯に照らされた山城さんの意外に情熱的な瞳が揺れていた。

(こりや、ヤバイ)

こういう状況では、何と答えたら良いのか? 参るな。

夜のお祭り会場で、屋台が立ち並ぶ喧騒の中と言う微妙な状況が彼女を舞い上がらせているのだろうか?

「ねえ、何してるんですか? 早く行きましよう!」

焦る私を尻目に五月雨と寛代が私の両手をグイグイと引つ張る。

「あ、ちよつと待って!」

……このままだと、また山城さんを喧騒の中に置いてきぼりにしてしまう。私は慌てて二人を制止すると山城さんに向き直った。

「取り敢えず今は、お祭りの会場へ行こう……な?」

私は彼女に早く付いて来るように促した。

その言葉で、ハツとしたような山城さんは再び私の帯を持った。

だがその機械的な反応に、私はホツとするのだった。

私たちは再び盆踊りの会場を目指して人ごみの中を前進した。ま

るで艦隊行動である。

「奥さん……って」

私の背後では相変わらず凄みのある低音ボイスで墓場の亡者のように呟（つぶや）く山城さん。それは水木しげるロードの鬼太郎オブジェと相まって、もはや鳥肌モノだ。

しかし五月雨に寛代が気を利かせてくれたのかどうか？

正直分らないが彼女たちが引っ張ってくれて助かった。

やがて私たちは、ほどなく駅前広場に到着した。さっきの屋台通りに比べると意外と、こっちは空いていた。

広場の西側の駅に近い舞台の上では、和装で大柄の女性が民謡を歌っていた。

「あれは何の歌ですか？」

五月雨が不思議そうに聞いてくる。

「えっと、民謡」

「ミンヨウですか……」

そうか、艦娘には興味がなければ民謡なんて分からないよな。

さらに少し歩いていくと少し離れた広場中央にある櫓（やぐら）では、和太鼓の演奏が拍子を取っていた。

最近では盆踊りといえども町中が総出で踊るって感じではない。

まして、ここは駅前だ。地元の人と、こういうのが好きな観光客が半々くらい。あとは全体的にはスカスカな感じ。

でも改めて目を凝らしてみると暗闇に一際、目立つ女性たち……ああ、やっぱり。それは美保の艦娘たちだった。

浴衣を着た日向が上手に踊っている。それを手本にして利根や赤城さんが合わせて踊って、自然に踊りの輪に加わっていた。

別の場所には手馴れた感じで自然に踊っている祥高さんと龍田さんが居た。

その輪から、さらに外側には青葉さんが居て撮影に専念していた。その横では浴衣を着た北上が踊らずに淡々と何か話しかけている。

「この二人は、何処に居ても行動パターンが変わらないな」
思わず苦笑した。

さらに、その反対側の人の輪には比叡と金剛。この二人は長身でスタイルも抜群だから浴衣を着ても妙に目立つ。

特に金剛は『盆踊り』というよりは『ダンス』である。さすが英国からの帰国子女らしくクラシックバレエみたいな洗練された踊りだった。

「Hey! テートクウ」

暗くても索敵能力は高いぞ。正直、少々恥ずかしかったが……さすがは盆踊り会場はお祭りだ。意外に奇天烈なことをしても違和感がなかった。

「おうー!」

いつもの私なら返さないだろう、ややオーバーな反応をして大きく手を振った。

彼女は、ニツと笑って輪に戻った。

「ああ、お姉さま! 待って」

その隣の比叡は、もはや盆踊りなのかダンスなのか良く分からない状態だ。ありや和洋折衷的なタコ踊りっぽいグニャグニャ踊りだな。そんな金剛姉妹は結果的に浮き気味だったが……まあ、良いか。皆、楽しそうだ。

私は背後の山城さんを思い出した。彼女は大丈夫か?

……でもそれは杞憂(きゆう)だった。

彼女は踊っている艦娘や群集を見て急に、そわそわし始めていた。いつの間にか私の帯から手を離してモジモジしながら言った。

「あの司令、済みません。ちよつと踊って良いですか?」

「ああ。構わないよ」

彼女は軽く頭を下げるとウキウキしたような軽い足取りで輪に向かった。

(そうか山城さんも、こういう古風で伝統的なものが大好きなんだな……)

私は妙に納得した。

いつの間にか五月雨も浮き足立っていた。

彼女は踊りの輪の中に小学生の一群を見つけると「司令、私たちも

行きますので！」と言った。

「ああ」

別に引き止める気はない。

彼女は、やや引き気味な寛代の手を握ると半ば強引に行ってしまった。

(へえ、五月雨も、こういうのが好きなんだな)

これまた意外で新しい発見だった。

両の手と、背中の艦娘が『出撃』してくれたので私はようやく『解放』された。

「やれやれ」

大きいため息をつきながら両手を上に伸ばした。

それから私は広場の端まで行くとベンチに腰をかけた。

「やっぱり艦娘は伝統的なものに自然に馴染むんだな」

もともと私も浴衣だから開放感はあるのだが、改めて夏らしさを感じるのだった。

第65話〈星空とベンチ〉(改2)

「美保のテイトクも負けてないヨ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第65話 〈星空とベンチ〉(改2)

私は別に盆踊りを見ても血は騒がない。

(やれやれ、妙に緊張したな……つたく)

そう思いながら私は雑多なものから、ようやく解放された思いだった。

そして公園脇の歩道にある白いベンチに腰掛けた。

「ハア」

さすがにちよつと疲れた。

夜空を見上げると星が綺麗だ。都会とは違って地方の空は星の数が多い。改めて、ここは故郷の境港なんだと実感する。

(……そうだな。これは夜の大海原か、山奥で見る星空のようだ)

私はふと学生の頃に合宿で見た大山の星空を思い出した。

あの時も、まさに降り注ぐような星空だった。

「司令……」

突然の呼びかけに驚いた。

「えつと……日向か？」

私は照れ隠しのように反応した。

星空を見ながら考え事をしていた私の視界に突然、彼女の澄まし顔がカットインしてきたのだ。

「あの隣、よろしいですか？」

「ああ……」

ギツと音を立てて私の隣に座る彼女。

広場で踊った後らしく気だるい表情で、いつに無く艶（なまめ）かしい雰囲気だった。

（ゼツタイ日本女性（艦娘）は浴衣だ！）

そんな妄想染みた事を考えていたら、いきなり光るものがあつた。

「バシヤッ」

（フラッシュ……）

思うまもなく私は反射的に顔を押しさえて言った。

「おいおい青葉さん！ 芸能人のスクープでも何でもないからさあ」

ファインダーから目を離れた彼女はニタニタしながら言った。

「え？ あ、済みません。でも艦娘と司令官なら別にスキヤンダルにはなりませんから」

「そりや……、まあ」

ふと隣を見ると意外に日向は恥ずかしそうに俯き自分の手元を見てジツとしていた。

（航空戦艦にしては妙だな）

そう思いつつ私は青葉さんに答える。

「そのフラッシュは心臓に悪いぞ」

カメラを確認しながら彼女は言った。

「でも……良い絵が撮れましたよ」

「ああ……」

青葉さんの顔を見ながら私は言葉を呑んだ。

彼女の背後に、いつの間にか山城さんが亡者のように立ち尽くしていたのだ。

思わず鳥肌が立った。

私は改めて深呼吸をしてから問いかけた。

「ど、どうした？ 山城さん」

「今日はちよつと疲れました。司令……お隣、良いですか？」

ボソボソと呟くように答える山城さん。

「あ、ああ」

その言葉にホツとした私は少し席を空けた。

日向が私の方へにじり寄ると山城さんは彼女の外側に腰をかけた。

再びギシツと音を立てるベンチ。その分、私の身体が隣の日向に密着した。

「暑苦しくて済まないな」

私は、反射的に隣の彼女に声をかけた。

微妙に避けられるか？ ……と思っただけど。

「……いえ」

意外に大丈夫そうだ。

私は彼女の体の温もりを感じながら、そういえば、この夏は日向とも、いろいろあつたな、と思っていた。

「はあ」

ため息混じりに私の反対側に鎮座した山城さんが、ゆっくりと髪をかき上げた（ギシツ）。ちよつと大人の色気が……。

すると、このタイミングを量ったかのように降って湧いた金剛と比叡。

「oh！ テイトクは隅に置けないネ！」

「ホントです！」

どこかのデュエット姉妹か？ お前らは……しかし目立つよな、この二人は。

「ええ？ 何デスか？ 似合ってますか？」

私の思考を読み取ったかの如くに私たちの目の前で赤系統の浴衣を着た金剛が一回転をした。

「確かに……」

なかなか綺麗だ。

「え？ よく聞こえないよ！」

ワザとらしく耳に手を当てて笑う金剛。

「あ……」

と言いながら慌てて比叡もぎこちなく一回転した。

だが草履が引っかけたのか、ちよつとよろけた。直ぐに金剛に支えられて「えへっ」と舌を出す。

その光景を青葉が写真に撮っているから、この場は嫌でも目立つ。周りの通行人たちも思わず振り返っていた。

金剛が腰に手を当ててウインクをしながら、なおも私をからかう。「神戸のテイトクは色男だったけどネ。でも美保のテイトクも負けないヨ。もっと自信持つネ！」

「何の自信だよ？」

思わず反論する……ますます分からん。

ただ私の左右に戦艦級の艦娘が密着していると、さすがに暑苦しい。

かといって今すぐに私が動けば、せつかく座った二人に悪い気もする。

ちなみに私に密着している日向は引き締まった筋肉質。その向こうの山城さんは至近距離から見ると意外と、ふくよかな感じで。

……いかな、私は何を観察しているんだろうか？

そのとき、突然夜空にヒューと言う音を立てて花火が上がり始める。

公園で踊っていた人たちも、しばし踊りを止めて花火に見とれる。

櫓（やぐら）太鼓の音は花火に負けじと続いていた。

境港は島根半島が直ぐ近くにあるから花火の反響音も他の地域では聞くことの無い独特の残響音になる。

「ああ、これは小さい頃に良く聞いた花火の音だなあ……」

ふと懐かしい思いがした。

何となく隣から「そうですか？」という呟きが聞こえたような気がしたが花火の音にかき消された。

盆踊りも、いよいよクライマックスだ。

第66話〈因縁の戦い〉(改2)

「これは紛れもない、スクープでしょ？」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第66話 〈因縁の戦い〉(改2)

ひととき大きな花火がドドンと鳴った次の瞬間だった。

「きやあー」

山城さんが頭を抱えて縮み込んだ。なお隣の日向は平然としている。

そのうち大きな花火が連続すると山城さんは、やおら立ち上がって何を思ったのか私のところへ突進してきた。

(おいつ、頭の艦橋はどうするんだ?)

……と思う間もなく彼女は私の身体に思いつきり、しがみついていた。

山城さんは艦娘だから戦場では大きな音には慣れていいるだろうに。(ひよっとして、わざとなのか本気なのか……)

一瞬そう思った。

反対側の日向も同じようにしがみ付いてきそうな気配だったが……大丈夫か。

だが、そんな彼女も花火の轟音には何度かビクツとしたように身体を寄せてきた。

これも意外だった。つまり艦娘といえども聞き慣れていない花火のような不慣れな音には弱い……のか？

もし、そうなら艦娘の新たな弱点？ を発見をした思いだ。

すると近くに居た金剛も花火には驚いたようだった。

「Woo、何？ アレってまさか敵の新兵器デスか？」

直ぐに比叡がフォローする。

「……違います、お姉さま。確か花火っていうものですよ」

ピンクの浴衣の彼女は余裕顔で答える。意外に比叡が情報を持っていたのか。姉が居ると急にシツカリ者になるんだな。

「あああ、花火も良いわねえ」

当然、龍田さんも知っていたか。

「ロマンチック……」

祈るような格好をしたコレは赤城さん。

「あれは兵器に応用出来んのか？」

何を言い出すんだ利根め……まったく無粋なやつだ。

「凄いですね」

「……」

二人の駆逐艦も感動している。

その後ろの祥高さんや北上、青葉さんまで黙って見上げていた。会場全体がしばし花火見物になりそうだ。

気がつけば今夜の盆踊りに出撃した艦娘は全員が私たちのベンチの周りに集まっていた。

浴衣を着ていても長身で美人揃いだから、この田舎町で艦娘たちは目立つ。それは水木しげるロードのような観光スポットであっても例外ではない。

花火の最中でも周りを観察すると微妙に群集が、こちらをチラ見してるのが分かる。

(あ、私の旧友も向こうからチラチラと視線を向けているな)

「……ん？」

誰かが会釈したなと思ったら米子の陸軍の将校だった。私服だから一瞬、分からなかった。家族連れだから境港に官舎か自宅でもあるのかな？

艦娘たちは相変わらず花火に夢中で群集の視線は、まったく気にしていない。

だが……私は自分の身体にまわり付いている艦娘に声をかけた。

「山城さん、いい加減に、その手を離してくれないかなあ」

結構、強い力で握るから痛い。振り払うわけにも行かないし。

それに対抗しているのか知らないけど無言のまま反対側の日向も急に私の腕を掴んで来た。

(おい日向、お前のそれは確信犯的な対抗意識か?)

「あれ?」

私の声賭けを無視していた山城さん、さっきよりも力が入ってきたぞ。

(腕が……痛いつて!)

花火の音や振動が次第に大きくなり大会が盛り上がる。それに合わせるようにして二人の艦娘の握力が次第に加速している。

(この期に及んで、いったいどうした? 二人とも!)

次第に油汗が出てきた。おまけに二人とも人目をはばからずに堂々と腕を掴んでいる。

もはや周りからの自然も単なるチラ見から次第に好奇の目に変わりつつある……見ると私の旧友もニタニタしている。

さすがに祥高さんも異変に気づいたのか呆れたような視線を向けてきた。

(いや、見るだけじゃなくて、助けて下さいよ)

「バシッ」

フラッシュが光った。

「眩し! ……って、何撮っているんだあ、青葉さん!」

さすがに叫んだ。

「ええ? ……だつて司令、これは紛れもないスクープでしょ?」

「違うって! ……それにフラッシュなんか焚いたら、もう余計に目立つじゃないか!」

彼女はニタニタするだけ。

「タイトクウ、熱いネ!」

赤い浴衣の金剛も茶化す。

「これは、ち、違うぞ」

こんな事態になっているのに盛り上がる花火大会に乗じてか日向も山城さんも全然、手を離してくれない。

まさか酔ってるわけじゃないだろうに……いや雰囲気に酔ったともいえるか。

（あーあ）

もう諦めた。秘書艦が何も言わないんだから仕方ないか。

「航空戦艦、因縁の戦いじやのお」

（何を、悟ったような解説を入れてんだよ、利根！）

「あら、まあ」

「司令も、ほどほどにね」

「……」

龍田さんと北上、そして祥高さんは呆れている。一部、笑っているが……仕方ない、これも任務と思うか。

「司令……大変ですね」

五月雨が咳いている。

（すまん、五月雨。刺激が強すぎて）

寛代はニタニタしている。青葉の同類か？

だが私はふと五月雨の横に居る小さい子が目に付いた。小学生くらいなんだが妙に肌の色が白い……でも浴衣着ているし。近所の子供かな？

「五月雨、その子は？」

腕の痛みには耐えながら私は聞いた。

「さつき仲良くなりました」

五月雨は、その女の子を見ながらニコニコして答える。なんだか五月雨って保育士みたいだよな。

「ふーん」

その女の子は私と視線が合うとペコリとお辞儀をした。へえ行儀の良い子だな。

そして花火大会は最後の大仕掛けになる。まさに最高潮。ベンチも群集も盛り上る。私の腕も、ギチギチに痛む。

（頼むから二人とも私の腕は潰さないでくれよ！）

「航空戦艦の因縁か……」

私は苦笑した。

第67話〈まつりごと〉(改2)

「コノ子ガ、世話にナったな」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第67話〈まつりごと〉(改2)

境水道では最後の犬掛かりな仕掛け花火に点火され最高潮を迎えていた。立て看板のような大きな枠組に次々と花火が着火して次々と輝く。

「アレは何ですか?」

金剛の声に比叡が目を凝らす。

それは仕掛け花火の後に現れた電飾だった。

「えっと文字が『来年も会いましょう』……って書いてありますね」

「電飾……まるで観艦式みたいですね」

赤城さんが呟く。

「ああ……」

恐らくその情景を直ぐに連想したであろう青葉さんが相槌を打った。

花火会場からは自然に拍手が湧き起こった。

この戦時下で堂々と騒げる唯一の楽しみでもある夏祭りだ。それが、もうこれで終わってしまうのか……と思うと会場全体にも安堵したような気だるい脱力感が広がっていく。

(もし今が有事で無いとしても花火大会の終わりは、こんな感じか)

私は、そんなことを考えていた。

境港の夜空にも薄っすらと硝煙が広がって独特の余韻を残していた。

(出来れば平和な世の中で、この香りを浴びたいものだ)

ふとそう思った私だった……そんな日が、いつかは来るのだろうか？

見ると祭りの余韻に浸っているのは艦娘たちも同様らしい。

私の左右にいる山城さんも日向もボーっとしていた。

日本の文化と思いのほか親和性の良い彼女たち。私たちが感じる「和の文化」は艦娘にとっても心地良いに違いない。

そもそも彼女たちのお陰で我々人間は代理戦争のような状態で最前線から後方に下がることが出来たのだ。ただ世間一般には、そのことが、あまり認知されていない。

軍部と政府の方針で艦娘たちが最前線に出ていることは何十年も伏せられ未だ最前線では人間が深海棲艦と戦っていると信じられている。

いわゆる情報統制だ。

海外との物流だけでなく、まともな通信手段すら分断されたことを逆手に取って、日本を中心として世界各国が情報まで制限している。敵が直接上陸作戦に出てこない妙な習性を利用しているのだ。

それは為政者たちに取っては実に手軽な国家統制の方法と化していた。

結果的に、それが政治と科学の怠慢を生み軍事技術が先行する技術革新を遅らせていた。

人類は本来ならば、もっと文明や科学技術が進化すべきだったのに、ここ数十年の戦いで文明の発展が停滞しているとも言われている。

もちろん軍部でも意見は割れている。事実を公表すべきだという派閥と、そうでない派閥だ。現状は既得権も大きいためか現状維持派が強い。

私のような地方の下っ端指揮官では、どちらに組みするということはない。中央では海軍自体だけでなく陸軍や空軍との軋轢もあるというが少なくともこの山陰では、そういった争いも無く平和そのものだ。

この会場に居る艦娘たちも周りから海軍かどこかの軍人だろうと

思われているに違いない。

軍人は転属が多いから地方では周りと少し違った「香り」を感じさせる人が多いものだ。特に境港は港町だから、船乗りが多い。彼らと同じ雰囲気を艦娘たちも持っているのだ。

だから境港市民から彼女たちは少々あか抜けた若い女性たちと、それを束ねる指揮官という構図にしか見えないだろう。

ちよつと脱力した山城さんと日向から解放された私は周りを改めて観察する。

艦娘たちは美保に来て伸び伸びとしている。そんな彼女たちを見ていると、この美保鎮守府には何らかの意図があつて艦娘を意図的に寄せ編めているのではないか？ ふとそんな思いにもなる。

会場に祭りを締めくくる放送が流れ花火大会は無事に終わった。

周りを見ると気の早い人は帰り始めている。ただ広場では、まだ盆踊りを続けるようだ。

艦娘たちも一部に、まだ踊りたい面々もいるようだが……休暇は今日一日だ。そろそろ切り上げるべきだろう。

私はコレ幸いと立ち上がって号令した。

「さあ、もう帰ろうか？」

無意味な対立を続けていた二人の戦艦娘は我に返ったよう「ハッ」とした。

対抗意識を燃やすこと自体は軍人としては決して悪いことではない。

でもさすがに、お互いがバツの悪そうな顔をしている……そんな姿を見ると、こいつらも可愛いものだな。

山城さんに至っては今にも泣き出しそうな表情だ。そんなことから最初っから張り合わなければ良いんだ。こういう単純なところは艦娘らしい。日向も居心地の悪そうな表情をしている。

それでも彼女たちの顔を見てると少々可哀想になったので声をかけた。

「二人とも、ありがとう。今日は楽しかったよ」

社交辞令だけど、その一言で場が和んだ。

「コノ子ガ、世話にナったな」

そう話しかけてきた「母親」らしき人物は……浴衣を着てはいるが深海棲艦（大井・仮）じゃないか！

彼女は小さい子供を抱き上げると、そのまま立ち去ろうとしている。全員ただ呆気にとられるばかり。

だが私は敢えて彼女に声をかけた。

「ちよっと、待ってくれ」

ビクツとしたように立ち止まった彼女。何かを警戒するように、ゆっくりと振り返った。

「ナニカ？」

私は努めて明るく言った。

「安心しろ。お祭りだし今日は敢えてお前と争うつもりは無い。それに……その子もイイ子じゃないか？」

暗くて表情は判り辛い但她は少し警戒心が解けたように見えた。

「ソウダ。イイ子だろう」

よほど嬉しかったのだろうか？ 意外に笑っているように感じた。

その雰囲気は普通の人間……いや艦娘とも何ら変わらないように見えるから不思議だ。

急に北上がカットイン。

「お前、大井っち……なのか？」

「……」

その言葉に一瞬、緊張が走った。彼女は黙っていた。

第68話〈昨日の敵は今日の艦娘〉（改2）

「真実でも聞かぬ方が良いこともあるのじゃ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第68話 〈昨日の敵は今日の艦娘〉（改2）

急に北上がカットインした。

「大井つち……なのか？」

「……」

だが深海棲艦は黙っていた。敢えて、その問いには答えなかつもりだろうか。

ちよつと微妙な雰囲気になった。すると今度は金剛がカットインしてくる。

「昨日の敵は今日の艦娘ダヨ。一緒に写真、撮るネ？」

そういつて金剛は笑いながら半ば強引に彼女を誘い入れた。

「……そうだな」

私は応えた。

（金剛め、意外と気が利くじゃないか）

妹に似て無茶な言動が多い彼女だが、その場では金剛の提案が最良のものに思えた。

「よし集合だ」

私は金剛の気持ち嬉しかった。頭の固い指揮官だと、こういう状況では右往左往しそうだ。

その小さい子供はニコニコして愛想を振りまいている。龍田さんと赤城さんが『可愛い』と言いながら近寄っている。

お互い怖いもの知らずだが、それは不思議な光景だった。金剛の言う通り『昨日の敵は今日の友』なのだろうか。

（これも港町という懐の広さからの包容力か）

「あるいは艦娘たちの魔力かな？」

私は呟いて苦笑した。

「何か言いましたか？」

絶妙な突込みを入れてくる龍田さんの微笑が、ちよつと怖かった。

「いや」

ともかく、その深海棲艦の親子も一緒になって全員で記念写真を撮った。

本来は敵だ。お互い警戒すべき深海棲艦も、よく私たちに写真を撮らせてくれたな。

(ひよつとして高度な謀略か？ あるいは余裕なのか？)

もつとも艦娘も彼女も全員が浴衣だ。しかも夏の夜の薄暗い写真。

それに加えて艦娘以外は本当の深海棲艦の姿を誰も知らないのが現実だ。仮に、この写真が外部に流れたとしてもバレる事も無いだろう。一般大衆も普通の軍人も、戦場には出ていないのだから。

これは今夜、休暇を取った艦娘たちと深海棲艦だけの秘密だ。

(皮肉なものだ)

写真を撮った後、敵である彼女がふつと私に言った。

「才前トハ、戦イヅラクナル。私モ可能ナラ戦場を変エよう」

「そうか」

私は何となく返事をした。

だが、よく考えて疑問に思った。

(こいつの一存で実際に可能なことか？)

敵ではあるが、そんなことを勝手に決められるのか？

深海の連中は組織立ったようにも見える。だが以前こいつと話したとき、奴らは比較的、自由に闘っているようなことを言ってたな。

(敵の組織形態なんて我々には皆目、分からんことだ)

顔を上げると無表情の彼女と目が合った。だが物語のように敵と意思が通い合う……なんてことは無かった。

(やはり目の前の『彼女』は私の知っている艦娘では無いのか)

それは当然のことだが少し残念にも感じた。

(なぜ？)

果して彼女は何者なのか？ どちらが真実なのかは不明だ。そもそも縁も何も無い私たちに敵が親しい態度を取る事自体が不思議である。謎が多いからこそ『もしかして……』という想いになる。

「司令」

祥高さんが声をかけてきた。振り向くと母親がわざわざ、私たちを出迎えに来てくれたのだ。

母親は言った。

「お前たち、迷つりよらんかと思つてな」

「OH、お母様！」

金剛は迷うことなく母親の手を取って言った。

「写真、取りまシヨ！」

彼女は、いったんその場から散つた艦娘たちを大きな声で呼び集めた。ホントに良く通る声だ。

「青葉、プリーズ！」

「はい、はい」

「お母様はコツチへ」

私たちが改めて写真を撮ったときには既に、あの深海棲艦親子は姿が無かった。

でも母親は浴衣姿の艦娘たちと写真を撮って意外に嬉しそうだった。

「お父さんも来れば一緒に撮れただになあ」

母親の言葉に利根が反応する。

「エース殿は来られぬのか？」

『エース』と言う表現に一瞬、考えた母親は直ぐにそれが父親と理解したようだ。

頷いて利根に答える。

「お父さん、こういう人ごみが嫌でね」

「なるほど」

利根はその一言で、父親の人間像を把握したようだった。写真を撮った後いったん実家へ向かうことになった。

「あれ？ あの敵の人じゃない？」

母親は呟いた。見ると確かに人ごみに『彼女』が居た。

小さい深海棲艦は、やたら可愛い。あいつの実子かどうかは不明だが……まったく謎だらけだ。

でもその娘は私たちに気付くと最後まで愛想を振りまいた。

(出来れば、この子とは戦いたくないものだ)

しかし北上が、ちよつと落ち込んで見えるように見えた。すると深海棲艦が彼女に近寄り何か話をしていった。

(あれ？ 北上が笑顔に変わった)

祥高さんが聞いてくる。

「待ちましようか？」

「いや、北上も地図データは持っているだろう、私たちは戻ろう」

「はい」

人ごみから離れて立ち話をしている彼女たちを置いて駅前から実家へ向かって歩き始める艦娘たち。

やがて数分後には少し遅れて北上が走って戻って来た。

そんな北上に何か聞こうとした青葉さんだったが、それを止めたのは意外にも利根だ。

彼女は首を振って言った。

「真実でも聞かぬ方が良いこともあるのじゃ」

「あ……」

その言葉に青葉さんも苦笑していた。

私は感心した。

(利根……大人だね。見直したよ)

そして私は艦娘たちの最後尾から実家へと向かった。

歩きながら私は頭の中で総括する。

深海棲艦というサプライズはあったが、この盆踊りと花火大会の『作戦』も特に大きなトラブルも無く終わって良かった。

気付くと五月雨と寛代が私の両側から手をつないで一緒に帰ってくれていた。

駆逐艦娘の本当の年齢は、小学生よりも遥かに大きい。でも意外

と、この背格好の娘が居るだけでホッとする事も少くない。そういう面で駆逐艦娘は実に貴重だと思う。

「ありがとう」

私は五月雨に声をかけた。

すると彼女は答える。

「いえ、その何か手放しで帰ると心細い感じがするので……」

「……」

やっぱり可愛い。一方の寛代は黙っているが同じ気持ちだろう。

皆で、いったん実家へ戻った。その後で結局、近所の銭湯へ汗を流しに行く事になった。

もちろん鎮守府に戻れば立派な入渠施設はある。でも今日は別に戦闘したわけでもないから普通の銭湯でも良いだろう。

それに、たまには街にある普通のお風呂屋さんに行けば風情もある。

「石鹸は銭湯にもああだ（あるよ）」

母親も最初からそのつもりだったのか、ありったけのタオルを準備してくれていた。

「うん」

祥高さんが母親に聞いた。

「銭湯はここから近いのですか？」

母親は答える。

「うちの前を左に出て、大通りを右に行くと川があつて……」

説明をする母親を祥高さんが軽く手で制した。

見ると寛代が、いつの間にか地図で検索をして母親が言う銭湯を見つけ出し、通信機能のある艦娘たちに共有し始めていたのだ。

「へえ、便利なもんだな」

母親の理解も早かった。

艦娘たちは口々に言う。

「銭湯？　へえ、楽しみですですね」

「良いねえ、何年ぶりだろう」

その言葉に私は反応した。

「何だ？ 北上は経験があるのか？」

彼女は頷く。

「えっと、舞鶴には結構、銭湯がありましたよ」

「あ、そうだったな」

私もかつての軍港を思い出した。

北上は続ける。

「そう思うとね、境港も舞鶴と、似てなくも無いなって」

「そうだな……山もそばにあるしな」

もつとも舞鶴の方が、山は多いが。

私たちは再び実家を出て銭湯へ向かう。

今日はお祭りだったから銭湯も遅くまで営業しているようだ。祭りのお客もソコソコ入っていて、いつもより少し込んでいた。

入り口で時間を調整してから私たちも男女で分かれた。

でも唯一の男子である私は一人だから早く上がってしまう。風呂上りの私は、しばらく脱衣所で新聞を見ていた。

地元紙には特に変わった記事も無い。日本海での戦闘もすべて海軍が戦ったことになっている。艦娘のことは一切触れていない。

(まあ、これが現実だろう)

約束した時間に銭湯の前に出ると祥高さんが待っていた。

「すつかり遅くなってしまったね」

私が声をかけると彼女は言った。

「大淀さんからの通信で……渋滞は解消したのですが、リモコンでの深夜運転は、妖精さんではさすがに危ないのでは？ ということです」

「そうか……では日向に一人で鎮守府に向かって……」

言いかけて私は改めた。

「さすがに可愛そうだな、それは」

祥高さんも苦笑している。

「困ったな」

私は腕を組んで思案した。

第69話〈お袋の味〉改2

「お袋の味って、良いですね」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第69話 〈お袋の味〉(改2)

悩んでいる私を見た秘書艦が提案する。

「ご迷惑かとは存じますが、ご実家に泊めて頂くのは如何でしょうか？」

「……」

実は私にも、それは考えの一つにあつた。だが……正直、親には頼み難い。

ところが追い討ちをかけるように彼女は言う。

「司令が躊躇するお気持ちも分かりますが……お父様は元軍人ですし、お母様も若い頃は軍で働いていたと伺っています」

「……よく知っているな」

秘書艦だから私の素性くらいは調べているのだろう。それでもいきなり言われると驚く。

「そうじゃな、あの父上殿なら案外、承諾してくれそうじゃ」

突然、利根が割って入る。

「そうね、お母様も軍には理解がありそうだわ」

今度は龍田さんか。彼女が言うのと妙に説得力があるな。

「司令が言い難いようでしたら、艦娘から提案がありましたということとで私からご両親に申し上げても宜しいですが……」

赤城さんまで……何でお前たちは、そんなに押してくるんだ？

私が少し引いたのを見た彼女は長い髪を気にしながら苦笑した。

「いえ、慣れない路地でのトラックの運転は日向さんには大変そうですね、すし何より深夜ですから、ご近所に迷惑ではないかと思ひまして」
微笑んだ赤城さんの発言に私はハツとした。そうだ私は自分のことしか考えていなかった。だが彼女たちは私の家族だけでなく近所まで意識していたのか。

すると誰かが私の袖を軽く引く。見ると寛代だった。

「あ……」

意外だったのは彼女までも珍しく微笑んでいたことだ。思わず私は『負けた』と思った。

最前線から足が遠のいて久しい私は彼女たち艦娘の姿や態度に何か自分が大切なものを、いつの間にか失っていたのではないかと、という心地になった。

そんなやり取りをしているうちに私たちは実家へ着いた。

『ただいま』

艦娘たちが玄関で挨拶をするが夜だから声のトーンは皆、抑えている。

いつもは早々と寝てしまふ両親も、まだ起きていた。

「お帰り」

……何気ない母親の一言だったが、とても懐かしい響きだった。そうだな、人には帰る家があることが幸せなのだ。

もちろん艦娘にとつての鎮守府が母港ではあるが、それだけでは不十分だろう。時には彼女たちにも拙いながら私の実家で家庭の雰囲気を感じてもらおうのも悪く無いだろう。

「襖（ふすま）取ったけえな、居間と和室、広く使えるで」

「え？」

母親の言葉に私は、ちよつと意外な感じがした。私の両親が艦娘たちのために、わざわざ部屋を広くしてくれたようだ。

『失礼します』

浴衣を着た艦娘たちは、口々に挨拶をしながら居間や和室に入る。

しかし改めて見ると、お風呂上がりの艦娘たちが実家の居間や和室に、たくさん居るといふこの状況は、まるで観光地のホテルにしか見

えない。

そんな彼女たちは、とてもリラックスしていた。だが私は改めて両親に彼女たちの宿泊の件を、どうやって切り出そうかと悶々としていた。

私が葛藤して眉間にしわを寄せていると、お茶を準備しながら母親が言った。

「なんなら、家（うち）に泊まって行ってええぞ」「え？」

これは意外な提案。

助かったと思う反面、つい否定的な言葉が口をついて出る。

「気持ち嬉しいけど……こんなにくさん一度に泊めるのは……」

すると母親は返した。

「ええがん（良いじゃないか）？ 夏だけん布団も要らんが？ せに、

この娘たち軍人だが？ 野宿すうよか、ええが？」

「……まあ、それはそうだけど」

「父さん何も言わんよ。ああ見えて艦娘たち気に入っちゃよおけんな。せにウチは軍人の家系だが？ お盆に軍のお役に立てば先祖も喜ぶが？」

私は傍に居た祥高さんを見た。もちろん彼女は軽く頷いているし他の主要な艦娘たちも同様だった。

「分かった、有難う」

……そういうことで結局、泊まることで安着した。

ただ心配なのは彼女たちは、まだ夕食を食べてないことだ。店も閉まっているし……そう思っていたら母親が言う。

「盆で準備した食材がああけん、直ぐ作るが」

「え？」

躊躇する私をよそに、祥高さんが応える。

「済みません、お母様。私たちもお手伝いします」

祥高さんと龍田さん、それに山城さんが手伝って簡単な夕食を作り始めた。

「母親は偉大だな」

小さく呟いた私は改めて自分の父母の大きさを感じるのだった。懸案事項が落ち着いたところで私は改めて今のソファに腰をかけて周りを見た。

まあ赤城さんを除けば、あまり食べる娘も居ないようだし……既に床やソファでダウンしている艦娘が結構いる。

(この光景は軍隊というよりも学生の部活動の合宿のようだが) 思わず苦笑する私。

母親が押入れからタオルケットを出して艦娘たちにかけてくれた。なんだか、こういうのを見ても夜戦型かそうでないか垣間見えるようだ。

準備した夕食を居間の座卓に並べても結局、起きている私たちと赤城さんくらいしか食べなかった。

準備が終わって落ち着いた山城さんが利根と日向と一緒に父親を囲んでいる。

珍しいな……と思ったら航空機の運用について談義をしているらしい。しかも堅物の父親が嬉しそうに見える。

私は母親に「お父さん、嬉しそうだね」と声をかけた。

「なかなか、普段は話し相手が居らんけんな……」

「あ、そうか」

「そうだよな。」

実は父親はもともと地の人間ではない。確か九州のほうの出身なのだ。一方の母親は境港が地元だ。

こういう土地で、しかも軍人だったから父親には、この土地に親しい人が少ないのだろう。

「航空機とは、そういう運用も可能なのですか?」

「そうだな」

「へえ」

「日向は、まだ甘いのじゃ」

「利根には言われたくないわね」

「そこで笑いが起きていた。」

(父親の笑顔か……久しぶりに見るな)

まあ、若い子が相手で、なおかつ酒の勢いもある。それに自分が培った航空機の伝統を受け継ぐ若い世代が身近に居た、ということ嬉んでいるのだろう。

私は台所に居る母親に、さりげなく聞いてみた。

「お父さんって空軍のエースだったの？」

彼女は少し間を置いてから答えた。

「空軍でトップ争いしちよつたらしいがな……出世と実力は比例せんって良く言っちよるよ。人の操縦は難しいって」

「ふーん」

「それ分かります……」

「え？」

祥高さんが割って入ってきた。

「実は私にも姉妹艦が居るので……彼女たちも人間関係では苦勞しているとか」

「へえ、それは初耳だ。詳しく聞きたいな……」

そのとき祥高さんが受電した。

「失礼します」

彼女はサツと窓際へ移動した。

それを見た母親が言った。

「良い副官だが？ 良かったな」

「え？ ……ああ」

母親でも分かるか。確かに祥高さんは出来る艦娘だな。

やがて彼女が戻ってきて報告をする。

「司令、大淀さんから指令室は霞を補佐に付け、交代で仮眠しながら任務継続で宜しいでしょうか？ とのことです」

「霞？ ……あ、あの気の強い艦娘だな」

私の言葉に彼女は苦笑した。

「祥高さん『それで頼む』と返信を……」

「はーん」

私は続ける。

「あと……」

「はい？」

「いつも、ありがとうと二人に伝えてくれ」

一瞬、驚いたような表情の彼女だったが直ぐに敬礼をした。

「畏まりました！」

祥高さんも、傍に居た母親も笑顔になった。

実は私自身が一番ホツとしていたのだ。何か、ここに来てようやく美保鎮守府が一つになりつつあるのかな？ ……と感じたから。

赤城さんは、ずっと一人で黙々と食べていた。

だが突然、彼女が俯（うつむ）いて肩を震わせ始める。

「おい、調子悪いのか？」

思わず声をかけて近づいた私。

一瞬、緊迫。

だが赤城さんは、涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げた。

「ウツウツ、お袋の味って……良いですね」

「えっ？ ……あ、まあ、そうだね」

一同、爆笑。実家の居間は和やかになった。

しかし私は思った。

……赤城さん、君には母親はおろか姉妹艦すら居ないんだよな。

それなのに鎮守府ではいつも「お姉さん」的な立場が多い。本人も責任感が強いし。結構、無理してるよな赤城さん。

僅かな休暇で小さな実家では大して御もてなしも出来ないが……

少しでも「お袋の味」を堪能してくれ。

「では、私もご馳走になります」

祥高さんも、微笑みながら席に着いた。龍田さんも、それに続いた。

「ああ……」

各人、各様だな。

今宵は久し振りに平和な夜になったようだ。きっと先祖も喜んで
いることだろう。

第70話〈日向乱心〉(改2)

「でも、この鎮守府で司令と出会えて……」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第70話〈日向乱心〉(改2)

向こうで父親と話をしていた利根が少しニタニタして、こちらにやってきた。

「何だ？」

彼女は意味ありげに笑う。

「父上殿が航空機の件でお呼びじゃ？」

「何だろうと思いつつ私は応接間へ。」

しかし酔っているとはいえ、山城さんや日向、それに利根までを相手にするのは父親も大したものだ。噂では撃墜王だったから同時に多数を相手にするのも得意なのだろうか？ ……と妙に感心したりする。

「おう、来たか」

父親は日向に目配せをした。

急に畏(かしこ)まったように日向が向き直る。

「なんだ？」

私の問い掛けは無視し畳にベツタリ頭を擦り付け、お辞儀をする彼女。

「おい、何をいきなり三つ指ついてんだ？」

何だか芝居じみているが、いくら指揮官と艦娘とはいえ、そんなことをされると焦る。

そんな妙な雰囲気の中、おもむろに顔を上げた彼女は言った。

「司令！ お父様とお話をして気付きました。ここ最近の自分勝手な振る舞いを日向は心より反省しております」

「突然何を言い出す？ ……航空機の話じゃないのか」

彼女の目が据わっている気もする。こいつ酔っているな？

だが彼女は焦点の定まらない空ろな目をしながら続ける。

「花火大会のベンチで山城様と張り合い、分不相応な自らに汗顔の思いです！」

「はあ……」

何だ、やっぱり自分では状況が分かってなかったのか？

しかし酔っているとはいえ山城さんを『様』付けとは……日向の卑屈な態度には苦笑せざるを得ない。気のせいか当の山城さんまで、ほくそ笑んでいるようだ。

なおも彼女は続ける。

「自分の浅はかさには誠に猛省しております。本日は、お父様に多々諭して頂きまして日向は感謝、至極で御座います！」

普段は物静かな日向つて、こんな饒舌だったか？

「なんで、そういう流れになるんだよ？」

私も呆れてきた。おまけに言葉遣いがチョツと変だぞ。

「この鎮守府で司令と出会えて……」

ついに日向が静止した。

今まで、ずっと喋っていた彼女が黙ったから、その反動で起きていた周りの艦娘たち全員が振り返る。

彼女らは直ぐ状況を把握したよう思わず固唾を呑んで……つて、なんで、そこで全員がタメてるんだ？

いや利根や青葉さんはニタニタしている。お前らなあ……。

「司令と出会えて……（ウルウル）」

だんだん涙声になる日向。

（おい！ 涙を溜めるなって！）

私は冷や汗が出てきた。

（クッククク……）

こらあつ！ 利根と山城さんまで……君たち何を笑ってんだ？

「よ・よ・」

日向は既に表情がこわばって舌が回らない。……というかアル
コールの影響もあるのだろう。顔が赤い。

(ウツクツクツ)

だから、お父さんまで……笑っちゃダメだよ！ 日向が可哀想だ。
「よかったです」

最後の部分の台詞をボソツと言った日向は、突然真っ赤になった。
それを見て仰け反ったのは私だけだ。

「お父上に伺いました！」

なおも日向は急に顔を上げる。

ビツクリ……ていうか、お前、まだ止まらないのか？

「理想的な軍隊は、上官と部下が渾然一体となる、まさに一蓮托生。
従って日向も司令と共に粉骨碎身、永久に戦い抜く所存です！」

赤い顔して目が据わっていた日向、想像を絶する勢いだ。

……だがそろそろ限界だろ？ ついに顔を覆って黙ってしまった。

(やつぱり)

艦娘が不慣れな事を、するもんじやない。興奮して更に酔いが回っ
たことだろ。

ニヤニヤしたお父さん！ 日向に難しい言葉を吹き込むんじやな
い！

すると、それまでニタニタしていた利根が日向の肩に手を回して言
う。

「もお！ 今宵は日向殿も熱いのじゃ……がああつハツはあ」

もはや私は呆れ果てた。

(お前らバカか?)

真っ赤な顔をした利根め、限界を超えて飲みすぎだって！

だが父親も笑っていた。

隣の山城さんも意外と余裕の笑顔だった。いや逆に怖い気もする
が。

だいたい全員が相当量の、お酒が入っている。盛り上がり方が尋常
ではない。それでも普段は、ほとんど笑わない父親が、こんなに楽し

そんな顔をしている姿は初めてだ。

そう思うと、お盆くらいは、これもアリかな？

だが、そこで止まらなかった。

「So れワあ、聞き捨てなりませえン！」

(グリグリ！)

「あいつ痛ア！」

金剛が思いつきり頭を押し付けて来た……てか、

「何でいきなり目を覚ます？」

口を尖らす彼女。

「金剛ちゃんモお、参戦しちやおつかナ」

「……し、しなくていいって」

「ハッ！」

異様な気配に振り返ると比叡が真っ青な顔で上半身起こしていた。

「おお……お姉さま」

比叡の手が空しく宙を舞っている。

今にも泣き出しそうだ。お前ら姉妹はスイッチで繋がっているのか？

でも、普段見られない艦娘たちの羽目を外した姿に……実は祥高さんも含めて皆、楽しそうだった。

見上げると、うちの神棚も輝いて見えた。

いや神様は苦笑しているかな？ ……きつと。

第71話 ヘイツシヨール・ケンメー〈改2〉

「そういうお前が、私は大好きだ」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第71話 ヘイツシヨール・ケンメー〈改2〉

その後、実家では艦娘と私で何がどうなっていたのか？ ……ゴメン、正直覚えていない。

普段から、お酒を飲まない私は誓っても良い。決して、酔い潰れたわけじゃない。でも……気付いたら、いつの間にか深夜になっていた。

「えつと……」

顔を上げた私。

居間の時計を見ると、02:20。要するに午前二時だ。

上半身を起こす。

「痛たた……」

妙に全身がだるい。筋肉痛と言うよりも何だろうか？ 緊張が解けた後の倦怠感みたいだ。

自分が板の間に横になって居ることを確認した。周りを見ると、多くの艦娘が昨夜の状況を保ったまま「轟沈」したようだ。

山城さんは机に突っ伏しているし、利根は……ほとんど浴衣が肌蹴っているな、危ない奴。

取り敢えず私自身は変な状態になっていなかったことに安堵する。

「こんな心配……普通の軍隊なら有り得ないよな」

そんな自分に苦笑した。

母親は当然、自室で寝ているだろう。祥高さんと日向は、和室に敷かれた布団で休んでいるようだ。

(いちいち確認するのも憚(はばか)られるので想像だ)

取り敢えずザツと全員の無事を確認した私はトイレに用を足しに行く。

そして戻ると台所の机に誰かが居るのに気付いた。

「…………お父さん？」

私の言葉に彼は顔を上げた。久しぶりに父親をまともに見た気がする。

「寛代？」

そう、父親の向かい側には駆逐艦の寛代が居た。

思わず私は言った。

「お前、寝なくて大丈夫なのか？」

すると父親が言う。

「あの秘書艦に言われて、もう一人の艦娘と交代で、徹夜で警戒するそうだ」

寛代も無言で頷く。

「そうか…………」

さすが祥高さんだ。だが実家に居ても彼女たちは軍隊なのだから当然か。改めて納得する。

私もテーブルに腰をかけた。

「この子じゃ、話し相手にならないよね」

だが父親は微笑んだ。

「いや…………頷いてくれるだけでも十分だ。それに、この子の反応を見て、お前も鎮守府で、しっかりやっている事が分かったから」

「…………」

私は面映い気持ちだった。

グラスを傾けて父親は言った。

「今日は楽しかったよ。いつかは艦娘たちと話をしたいと思っていたんだ」

「へえ」

それは意外な。

「お前も、いつの間にか大きくなったんだな」

私に視線は合わずに彼は言った。その言葉は私の内面のことを指すのだろうかと思像した。

「お前が艦娘部隊の指揮官……こうなるのも運命なのだろうな」意味深なことを、ぼそつと呟く父親。

その言葉に深い背景があることに気付くのは、ずっと後になってからのことだ。そのときの私には敢えて父親に突っ込んで聞く余裕は無かった。

私は二人に言った。

「じゃ、休ませて貰うね」

「ああ……そうしろ。この子は3時に交代するそうだ」
「うん」

私は和室の端に空いていた畳の上で軽くタオルケットを羽織って横になる。近くを見ると……北上と日向が寝息を立てていた。

業務（軍務）での関係しかない男女が同じ部屋で寝るなんて普通は有り得ないことだ。もっとも艦娘は厳密には人間ではないのだから女性（異性）ではない。

だが私は、こういう状況でも不思議と艦娘たちに変な感情意識は抱かなかった。それは異性と言うより同じ志を持つ同志に近い。人間で言えば兄弟姉妹という関係だろう。

そんなことを考えていたら、意識が遠退いていく。

『司令』

ふつと艦娘の声が出たようだ。いや、これは夢だろうか？

『司令、ずっとお守りします』

その声は日向のようでも、秘書艦のようでもあった。

（きつと夢だな）

何となく私が横になったことを認識している艦娘が数名、居るような気がした。その姿勢に私は『忠誠』という言葉を連想していた。気が付いたら、もう朝だ。

癖という物は恐ろしいもので、いつも起床する05:30には自然に眼が覚めた。実家だから、もっと寝ていたい気持ちもあったが……

そうだ、今日は艦娘が居るんだ。そう思うと私は上体を起こした。

台所の方から炊事をする音が響く。見ると既に秘書艦の祥高さんと日向は起きていた。

そして母親の後ろ姿もあつた……二人の艦娘は母親の家事の手伝いをしていらしい。

私の周りでは、その二人の艦娘以外は全員寝ているようだ。

ただ、そうやって安心して寝ていられる艦娘たちの緩んだ雰囲気には何故か逆にホツとするのだった。

(私の実家も一種の『母港』だよな)

そんなことを思いながら立ち上がって自分の帯を締め直す。

ゆつくりと和室にある座卓に腰を降ろした。それに気付いた日向が声をかけてくる。

「おはようございます司令。すぐ、お茶を入れます」

「ああ」

昨夜、あれだけバカやつても押さえるところは、きっちりするんだな。私は彼女の芯の強さに改めて感心した。それは彼女の隣に立っている祥高さんも同様だろう。

結局こういう日常の些細な部分から指揮官は兵士たちの任務遂行の信頼度を量るのだ……と兵学校で聞いたような覚えがある。

艦娘といえども軍人に違いは無い。それは一種のサムライ……あるいは志士というべきか。

(サムライか)

そういえば、この二人は艦娘の中でも特に真っ直ぐだな。

今後、美保鎮守府は、この二人を基軸に進んでいくのかも知れない……いや大淀さんも思い出した。すると三人か。

「あ……お早うございますう」

のそのそと北上が起きてきた。

「おは……」

思わず絶句した私は目を見張った。彼女の頭(髪の毛)は爆発している。そういえば髪も結んでいないから一瞬、別人かと思った。

しかも帯が緩んでいるらしくユルユルの浴衣は、彼女自身の肩を見

せている。気だるそうに座卓の私の対面に座った北上。浴衣の帯を締め直しながら頭をボリボリかいている。寝起きでまだ緩んだ口元からは……ヨダレか。

「おいジュルって……お前、女学生か？」

つい思ったことが口から出た。

「ええ？ 別にいい」

この屈託の無さも彼女らしい。舞鶴の頃から変わらないな。

「まあ良い」

私は呆れながら言う。でも、こういう態度が許せるのは彼女との付き合いが長い証拠でもある。

北上は、おもむろに話し出す。

「あの深海棲艦さあ、昨日の夜、私の所に来てさ、言ったんだ。『サイドイツチ美味しかった』って。アタシが昔よく作っていた頃のまんまの味だって……」

「昔……」

私は軽く絶句した。それじゃ、やっぱりあの敵は？

そんな北上は窓の外を見た。

「嬉しかった」

涙は見せなかったが心では泣いているのだろう。そうか……こいつも、いざとなったら信頼できる志士の一人かもな。

日向が私と北上の、お茶を持ってきた。

「ありがとう」

「あ、どうも」

北上も頭を下げている。

お茶を置いた日向は何故か、お盆を抱えたまま座卓の横で中腰のまま静止。

「ん？」

……お茶をすすりながら私も止まる。

彼女は、ちよつと思ひ詰めた目になった。

「司令……昨晩は大変、失礼なことを申し上げたような気がするのですが……」

「なんだ？ 覚えていないのか」

私は、何気なくそう言った。

その反応に、ちよつと狼狽の色を見せる日向。

「すると、やはり？」

私は否定して答えた。

「いや、別にお前からは何も聞いてないよ」

……昨夜は相当飲まされていたんだろう。その善し悪しはともかく酒の席は無礼講だ。

それでも彼女は、まだ納得いかない様子で、お盆を抱えたまま硬直している。

(こんなところまでも一途なんだな、この娘は)

私は湯飲みを机に置いて改めて言った。

「お前は、お前らしく常に全力で一生懸命に前進し続けてくれれば良い。そういうお前が、私は大好きだから」

「……あ」

「へ？」

ほぼ同時に妙な反応をする日向と北上。

(あ、しまった！)

……最後の一言は言い過ぎだな。

案の定、彼女はまた真っ赤になった。

「失礼します」

ちよつとフラフラしながら立ち上って、そのまま台所へ戻っていく

日向。

(ごめん。からかったつもりは無いから)

「それよりも……」

私は振り返る。

(青葉や金剛は聞いてないよな?)

向こうからは寢息のみ。人が動く気配は無い……大丈夫そうだ。

ホツとした。

「……でもさあ」

北上が割って入る。

「艦娘は、みんな一生懸命。一蓮托生ってね……それで良いんだよね？ 司令」

「ああ」

意外に、この子には何を聞かれても大丈夫なんだ。

私が安堵して、応えるや否や背後から声だ。

「Oh！ それネっ、私もイツシヨ！ ケンメーフンコツ何か、やるネー！」

（グリグリ）

「あ痛あ！」

やっぱり金剛は覚醒してきたか。もっともタイミングはズレたので日向への私の一言は聞かれずに済んだらしい。

（助かった）

「お・お・お姉さまはあ」

寝ぼけ眼（まなこ）の比叡も、しっかり覚醒してきた。この二人は放って置いても一蓮托生姉妹だな。

金剛に擦り付けられた電探のヒリヒリを感じながら思わず微笑む私だった。

第72話〈艦娘よ永久に：終結〉（改2）

「ご両親に、敬礼！」

マイ「艦これ」「みほ2ん」

第72話 〈艦娘よ永久に：終結〉（改2）

「おはよう」

「おはよう御座います」

その後、別に起床ラッパもない。

各自が勝手に起き上がって、それぞれに朝食を食べ始める。

私も実家と言うこともあって油断しているが祥高さんも同様なのか……お互い指摘もしない。

（まあ、休暇だからな）

そう思うと結局ユルユルになる。

それでも秘書艦である祥高さんと性格的に素面（しらふ）なら生真面目な日向はキチンとしていた。あとは、それなりか。

強いて言えば今回の駆逐艦たちも大人しいから静かだな。

祥高さんが報告する。

「司令、08:30には実家の前に妖精さんがトラックを着けるそうです」

「分かった」

各自が朝食をとった後、08:15には各班ごとに点呼を取った。

今回実家に持ち込んだものは例の浴衣の箱くらいで私たちは特に荷物も持っていない。

艦娘たちは、いつもの制服に着替えると私の両親に挨拶の言葉を交わしていた。

「お世話になりました」

母親も応える。

「ああ、また暇があつたら来うだわ」

「はい」

（『はい』じゃないよ……つたく）

私は内心、苦笑していた。

祥高さんが確認をした後、私に目配せをした。

「よろしいですか？」

「ああ、出発だ」

艦娘たちも祥高さんの指示で動き始めた。

彼女たちは軽く敬礼をしながら屋外へと向かう。母親は笑顔で、父親は敬礼をしながら居間から見送っていた。

外に出ると今日も快晴だ。空が青くて清しい。そして既に狭い路地には、めい一杯トラックが入っていた。

今回は特例でエンジンは、いったん切った。何しろ道が狭いし住宅街だ。そして日向が軽く車体の点検をしている。

それ以外の艦娘たちは屋外で一列に並ぶ。近所の人は何事かと見ている。

一番最後に家を出た私は玄関を振り返る。父親と母親が出て来た。

私は改めて両親に敬礼をした。

「言つて参ります」

母親は軽く頷く。父親は敬礼をした。

それから旭日を浴びて整列している艦娘たちの前で祥高さんが全体に号令をかける。

「ご両親に、敬礼！」

一同は敬礼をした。艦娘といえども規律正しい。

昨晚、あんなに羽目を外した連中だとは思えないが、こういう時の、けじめはしっかりしている。

そんな軍隊の儀礼と言うものは人の心に感銘を与えるものだ。

実際、両親だけでなく私たちの様子を見ていた近所の人たちから自然に拍手が沸き起こった。

「おおもったいないう」

「シツ」

利根と青葉か。

……しかし現実には地元への期待を背負っているという自覚を地域住民と直に接し肌で感じることは、隊員にはとても重要で必要なことだ。艦娘たちの間にも自然に誇り高い雰囲気醸成されていく。

「イイねえ」

「はい、お姉様」

「各自、乗車！」

号令とともに私と寛代、それに日向は運転台に。あとは後部へと素早く乗り込む。そして日向がエンジンをかける。

外では、まだ万歳が続いていた。別に出征するわけでは無いが、ある意味これは私たち美保鎮守府の新しい出陣なのだろう。

肩に妖精さんを乗せた日向が報告する。

「司令、すべて異常なしです」

「よし、出せ」

「はい、出発します」

日向と妖精さんの敬礼とともにトラックは滑るように走り出した。手袋をした私は窓から両親に敬礼をする。父親もまた敬礼をし母親は手を振っていた。

トラックが実家の前を通り過ぎると後部からは艦娘たちが両親や近所の人たちに手を振っていた。周りの人たちも一斉に手を振っている。

「今後は、お盆だけじゃなくて……もつと何度も実家に来るべきかな？」

私が呟くように言うのと日向も妖精さんも頷いていた。

それは個人的に、というよりも美保鎮守府として公的にもつと境港地域とは交流すべきだ。それが地元への貢献になるだろう。

やがてトラックは大通りに出た。

私は日向に言った。

「どこかで大淀さんたちにも、お土産を買って帰らないとな……」
すると寛代が私を小突く。

「何だ？」

見ると、彼女は既にお土産を持っていた。

「は？」

それを見ていた日向が笑う。

「祥高さんが、既に準備していました。あとお母様からも」

それを聞いて私は『女性はさすがだな』と思うのだった。

幹線道路を走ってトラックは美保鎮守府正面玄関に到着した。

鳳翔さんと大淀さん、それに第六駆逐隊と島風たちが出迎えてくれた……単なる休暇なのに。

「全員降車、整列！」

祥高さんが停車と同時に大声で号令をかけた。

休暇メンバーは整列して点呼終了。

続いて私は大淀さんから報告を受ける。

「司令、昨日から今朝にかけて異常はありませんでした」

「ご苦労だった」

私は、そのまま艦娘たちに命令する。

「よし。解散」

バラバラと散らばる艦娘たち。

大淀さんに付いて来た霞は相変わらず無愛想であった。

私は彼女に声をかける。

「霞も、ご苦労だったな」

（ふん）

……といった感じで視線をそらした彼女だったが意外と嬉しそうだった。この娘もこの先、成長していくのだろうな。

その他、大淀さんから細かい引継ぎを受けた祥高さん。いくつかの項目を確認して頷いていたが直ぐに私に近寄る。

「どうした？」

「緊急ではありませんが艦隊司令部からの直接指令があります」

それは珍しいな。

「内容は？」

「はい……今週の水曜日、つまり明後日より他の鎮守府と艦隊模擬戦をするように……との指示です」

「模擬戦？」

私は考えた。

(わざわざ美保鎮守府に指示すると言うことは普通の艦隊ではない) つまり艦娘相手だろうということは推測できた。

私は答えた。

「分かった」

詳細は執務室で聞こうと思ったが直ぐに大淀さんが付け加える。

「司令、実はその場所が……」

私は立ち止まった。

「場所？ 国内じゃないのか」

「はい……海外なのです」

「は？」

一瞬、耳を疑った。

「海外？」

「はい。最近、設営された海外の前線基地ということで……そこで実験も兼ねてと」

そういう彼女も困惑した表情だった。

「実験か……」

美保と同規模の基地が海外に？

そのとき、ある情報が浮かんだ。

「そういえば量産モデルという噂を聞いたことがあるが……まさか」
呟いた私は直ぐに応えた。

「分かった。詳細はまた後で確認する」

祥高さんと大淀さんに敬礼をした私は執務室へ上がった。

直ぐに秘書艦が全体に指示を出した。

「提督が着任いたしました。これより艦隊の指揮に入ります」

美保鎮守府の新しい一日が、こうして始まった。

この後、今回休暇を取ったメンバーが中心となって海外遠征隊が組織されるのだが……その話は、またの機会に譲ろう。

「美保鎮守府：第二部」 終結。

「みほさん」EX回（第三部）：序章へと続く。